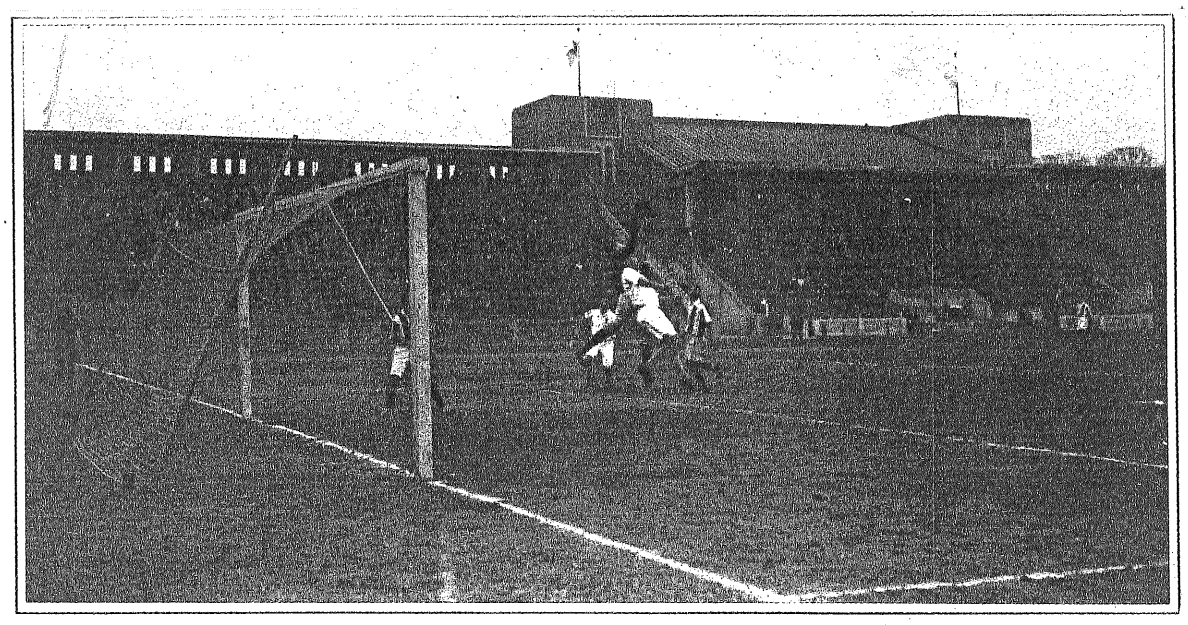
東大 6 − 3 早大（12月15日.神宮競技場）

S5−1−1

東京帝大對早大のサツカー試合は十二月十五日明治神宮外苑競技場で擧行、六對三で帝大の勝となつ、寫眞は帝大ゴールインの刹那

Tokyo Imperials beat Waseda 6 to 3 in a soccer game at Meiji Shrine December 15 and win the Asahi trophy. Photo taken at moment Imperials make goal.

S5-1-1



早大對東大のサツカー試合の一場景　　Waseda-Tokyo Imperial soccer game.

東大サツカー又復全勝す

リーグ最終戦に早大を破る

井　染　道　夫

東京カレヂ●リーグ第一部の最後の試合は、十二月十五日明治神宮外苑競技場で行はれた。今シーズン四戰四勝、向ふ所敵なき獨歩の强みを示しつゝある帝大に對して、早大は二勝一敗一引分の順位からいつて、二位を得らるゝか、三位に依然たるかの岐路に立つてゐるだけ歩は悪い。けれ共早稻田スピリツトに培はれたこのテイームには、他の追從を許さぬ傳統的の粘り强さがある。從つて試合の興味は、早大が如何にして帝大をなやますか、帝大は如何にして之を料理するかにかけられて居り、觀衆も今シーズン初めての多數でスタンドは滿員の有樣だつたのみならず婦人の來觀者が目立つて多くなつたことは球界の爲に嬉ばしい傾向である。

◇

午後二時半、レフエリー結城君の力强いホイスルの響によつて戰の幕は下された。ラインス●マンは濱田、島田の兩君。青山側に陣を布いた早大。千駄ケ谷側に位置した帝大。風は相當の疾さを以つて青山側へと吹き附ける。フイールドのコンデイシヨンは濕潤で辷る事甚だしい。

早大バトスに勝つたらキツク●オフを取るか、風上にサイドするだらう、また帝大はキツク●オフを取つたなら風上の利を放棄せねばなるまい。と考へるのが當然。然るに早大は風下にサイドを占めて帝大のキツク●オフである。如何なる作戰？、早大はこのシーズン中、試合毎にそのメンバーを變へ、常に異つた奇兵を以て成功して來たゞけに、何等かの魂膽がなければなるまい。ちよつと之は面白いぞと一部分の者は考へたに違ひない。或る者は獨特の粘りで前半を死守して、後半帝大の缺陷を衝いて出る作戰がなつたのだとも評す。又或る者は早大自滅の因は此處に發するともいつたらう。事實早大は風下にサイドを取つたことが最初に先づ敗を招く一因を構成してしまつたものだと思はれる。

キツク●オフを得た帝大の進出は、先づ左側から行はれたが、早大R●H宮部のキツクで一變され、一分スロー●インに依るフリー●キツクを早大得たが帝大の好守を拔く能はず、四分同じ反則のフリー●キツクを帝大に與へ、帝大のF●W線は美しきばかりの連絡をセンター●スリーによつて採り、五分C●H竹内のロング●シユートはゴールの右側へと飛び、早大のG●K本田よくこれを返したが、帝大R●I篠島のシユートはゴールの左ポストに當つて彈き返る所を、L●W春山機敏のチヤーヂに、本田捨身のセーヴも及ばず、先づ一點は帝大の先取する處となつた。早大の攻擊はすぐに奪はれて、帝大の壓迫は或はコーナー●キツクに或はフリー●キツクと、チヤンスを作るも入らず。

◇

九分、帝大R●Hのハンドによるフリー●キツクを得た早大は、L●H高師の好蹴に元氣附き、C●H杉村の直線的のチヤーヂ●ボール奏効して、ゴール前の混戰となり、L●W淺井プツシユして1—1の同點となる。その直後キツク●オフに出た帝大はW●Fを利したセンター●スリーのパスによる獨特の明敏なF●W線の壓迫で早大が陣を立て直す隙も與へず、C●F手島シユートして得點する。

十五分帝大右に得たコーナー●キツクからR●W、R●I、R●Hとパスし C●F手島の捌き出した球をR●W高山シユートし、球は低くゴールの左前方に飛ぶをL●W春山のチヤーヂ再び奏効して3—1となる。その後早大は壓迫に出たが、この日の早大H●B線は大事を取り過ぎて後方に在り、F●W線との連絡はカツトせられ易きのみならず、スピーデイーな帝大H●B線に對して早大F●W線は完全にマークせられ、百も承知の拔く可き穴がどうしても拔けないため、H●B、F●Bに名をなさしめてしまつた。ために十六分左に得たC●Kも得るところなく、二十三分C●F工藤がドリブルに出て造つた早大として最も作戰的な機會も水泡に歸してしまつた。一方帝大は二十七分L●W春山好蹴を放つてG●K本田が辛くも返した球を春山巧みに收めて得點。更に三十八分L●W春山直球を放つをG●K本田見事に之れを外したがC●F手島之れを拾ひ倒れざまのシユートは低くゴールを割つて5—1のスコアとなる。

三十九分、猛襲を浴びて居た早大G●K本田の活躍はすさまじく、勇敢にもペナルテイ●エリアの外れまでも飛び出してセーヴした球を、早大のL●H高師良く拾つて單身ドリブルして中央線を過ぎて好送球すれば、L●W熊井シユートし球がG●K奥野の手に捕へられた瞬間に早大F●W線の一齊チヤーヂとなつてL●I横村プツシユして一點を報いた。斯くして後も帝大壓迫裡に5—2でハーフ●タイム。

◇

この日の早大は、對慶應戰に起用して超人的活躍を示した本田をG●Kに再び据ゑ、加ふるに井出と吉澤のバツクは、日に依り別人の觀こそあれ早大の堅城を守るには、G●Kとの連絡申分なき迄に備へたのだ。F●B線にはリーグの華ともいふ可き帝大F●W線の攻擊に備ふる可く杉村、宮部を位置せしめ、加ふるにチヤンス●メーカーでありゴール●ゲツターの高師をL●Hに置いてR●W高山の攻擊を第一線に防がんとした。これは圖に當つて帝大は高山を副に置いてL●W春山を外側にひかへしめた作戰を以て終始左からの攻擊を加へるほかなかつた。

帝大のG●KとF●Bとの連絡は豫想外によく、缺陷ともいふべきF●B線の破端を露はさずに、守るよりも攻むるに力を注ぎ、特に岸山、船岡の奮鬪は見るべきものがあつた。

前にも述べたが風上に位置して球を流しては進む帝大に對しては餘りに味方の守備を過信し過ぎたかの觀ある早大は、左に高師、右に井出、本田のG●K三段の戰陣の防禦は確かこそあれ互に研究し合つてをり、且つは名うての帝大のF●W線と後陣のH●B線とさゝふるには餘りに早くも破綻した。

◇

後半早大は得意の粘りと風上を利して疲勞に力衰へた帝大に對し、壓迫を續けた。風は幾分衰へたがF●W線とH●B線の連絡もよく、早大の猛襲始まれりと思はれたが、ガタリとスピードは落ち帝大もまた球に左右せられ出した。

しかし十五分に至つて依然帝大は作戰を代へ右から進出して、前半餘力を養つて置いたR●Wの活躍が始められた。斯くて廿二分帝大R●W高山の好蹴ゴールの右隅をねらつたロング●シユートであつたが惜しくもバーに當つて彈ね返り、L●W春山が飛び込み樣シユートしたが高きに失してしまふ。二十四分L●W春山の送球を受けたR●W高山絶好のシユートを送ればG●K本田良く返球したがまたもダツシユした高山に一點を擧げられてしまふ。早大は三十分R●W高橋の好送球はゴール左前に落ちたが入らず三十七分壓迫から捌き出した球をL●W熊井中央線近くからドリブルに出で、船岡のタツクルを見事に外ずして、L●I高師にパスし、高師のシユートは低直球となつて鮮かな一點を擧げ、6—3。その後も帝大の壓迫裡にこの試合は閉ぢられたのであつた。

前半戰に思はぬ後陣の壞亂なく順調にH●B線の活躍を思ふ存分に攻防に使ふことが出來たとしたら早大の得點は更に加つても居たらう。また驚異的實力の所有者帝大の黄金時代は去つたとはいひ條、この試合振りから見れば圓熟のため凄みはないが、老巧なプレヤーの實において、關八州に君臨する王城の基礎は何時の時に動く可きか……の感を起さしむる。

東京學生蹴球戰

第二部の外は終了す

山　田　午　郎

昭和四年蹴球東京カレヂ●リーグ戰は第二部を除いて終了を告げた。第一部は本シーズンも東大全勝の快記錄を殘して覇權を掌握し、第三部は成城高校が加盟以來停滯する所なくトントン拍子で第二部に編入される事になり、第四部は國學院大學が優勝して次シーズンは第三部に返り咲くことになつた。

第一部の農大は第二部に逆戻り、第三部では商船か外語の中この悲運に遭ふことになつてゐる。

◇

第二部は法政と一高との試合が殘されて一高は今のところ首位を占めてゐるが、最後の一戰を法政に奪はれることゝもなれば更めて優勝戰を行はねばならぬことになる、なほ前シーズン第三部において優勝し、第二部に復歸した青山學院は不運またも第三部の試練を課されてしまつた。

前シーズンの成績によつての動きは結局還元といふものに過ぎない、强いものが依然强く弱いものは未だに擡頭の機會がない。何となく各チームの力が固定して來てゐるやうに見受けられる、斯かる中に第一部東大の嶄然頭角をあらはしてゐるのと成城高校の躍進はこのシーズン精彩を放つてゐるものだ。

◇

この程度では幾シーズンを重ねても各チームの力が固定してしまつてゐるから斯界のレベルは沈滯してゐるとより見られない。震天動地、斯界の革命的强チームは生れぬものか。

本年東京に開かれる極東大會に宿敵である中華代表チームをも一蹴し去る程の强チームを出現させたいと吾人は切望して止まぬ。本シーズン東京カレヂ●リーグ戰を顧みれば、凡ては歸すべきに歸した波瀾のない平凡なシーズンであつた、これでは當分震天動地の革命的强チームも望んで得られないか。

S5-1-1

來る五月下旬東京に於て開催せらるる

第九回極東選手權競技大會に

必勝を期する我が代表的諸選手の抱負

第九回極東選手權競技大會は來る五月東京において開催される。過ぐる大正二年極東オリムピック大會なる名稱の下に、同競技會が創始せられて以來こゝに十八年、その間我が國で行はれたのは大正六年の第三回、同十二年の第六回の兩度で、今年がその三回目である事は世人周知の如くである。今年比、民兩國が如何なる陣容をもつて來朝するかはもとより知るべくもないが、從來の例から見て恐らくは兩國とも、五十名以上百名に近い(或はそれ以上の)代表選手を擁して來ることゝ思はれる。矢張今年の競技界を通じて最大の行事たるはいふまでもない。しかして既往八回の戰績は比律賓四勝、中華民國一勝、日本三勝で、我が國は來るべき第九回大會に勝つて漸く比律賓と同率に漕ぎつけ得るといふ位置にある。近來我が競技界の向上を說いて、目標を極東より世界に移せと論ずる人もあるが、それも勿論よし、しかし極東に第一位を占むることの方が、より先決問題ではあるまいか。況して今回は主催國の面目としても、兩國の代表チームを壓倒的に擊破して、光榮ある大正天皇賜盃を維持せねばならぬ責任がある。月日のたつのは速い、五月といへばすぐ目の前といつてもよい。この責任ある大競技會に對して、我が國各方面の戰備は遺憾なく整へられつつあるだらうか、又各競技關係者の自信は……抱負は……？新年に際し、年頭の辭にかへて、各代表的選手諸君の今次極東大會に對する意見をこゝに掲載させて頂く事とした。

先づ極東の覇者たれ

【蹴　　球】

關西學院蹴球部　後藤　靭雄

幾多の年月にわたる奮戰と苦鬪とに洗練されて、漸くにして今日の地位を築き上げ、萬國フツトボール・フエデレーションにも加盟して、將に國際的新活躍の時機に入らんとする機運に立ち至つた事は、吾等蹴球界の一員として眞に祝福し慶賀にたへぬ次第である。

しかもその國際的進出のフアースト・ステツプとして、極東大會が本年我國において開催されるといふ事は、誠に願つてもない幸福で、萬國の覇を爭ふまへに、その基本條件として「先づ極東の覇者たれ」と私はいひたい。

——◇——

過去數回にわたる極東大會において我國代表の殘した記錄はあまりにも慘めである。僅かに先年の上海における大會において、漸くにして比軍には勝つたけれども、依然として支軍の下位を甘んじて受けねばならなかつた。

それにつけて想ひ起すのは我等の關西學院チームが、かつて上海に遠征を試みた時、蹴球競技の參考書をあさつたけれども、一册として發見する事が出來なかつた更に選手に對して

「君達は如何にして練習するか」といふ問を發した、彼等は唯單に

「グラウンドに出て球を蹴るのだ」と答へた。

「連絡の練習等は如何してするのだ」と問へば

「球を蹴つてをりさへすればそれで十分だ」

「總てのチームがさうだらうか」

「皆さうだ」と。

その後會つた多くの選手に同じ問を發して見たが、殘念乍ら彼等の答は最初の返事を、繰りかへすと同樣であつた。その時我等はこれなら大丈夫だ。こゝ二、三年すればきつと彼等を破つて見せる。吾等は最早彼等より學ぶ何物もない。寧ろ彼等に敎へてもよい立場にあるものと確信したものであつた。

傳へ聞くところに依れば、今まで極東大會において支軍を代表した香港のチームは、本年彼等の內紛のために勢力が二分され、その結果選手も二チームに分れ、今では曾ては同一チームであつたものが、各々のチームにおいて勢力爭ひをしてゐるといふことだ。また最近本邦在住の某中華民國の運動通も「今度の極東大會には、多分上海のチームが代表して來るだらう。香港チームは勢力を二分され、その上に今までの選手は年をとつて往年の元氣がないから駄目だらう」と語つてゐた

——◇——

これらの風聞の眞僞のほどは判らぬが、斯る報道は誤傳としても吾等は精神的に決して彼等にひけはない。更に技術方面においても、最早彼等を征服すべき時機に到達してゐると思ふ。この上は一日も早く蹴球協會として、日本代表選手のメンバーを決定され、代表選手をして、嚴格なる指導と監督の下に奮勵努力せしめ、我國蹴球界の宿望たりし國際的進出の第一歩として、この極東大會において第一位を占めんことを切望するものである。

S5-1-1

一月の主なる競技豫定

サ　ツ　カ　ー

東京、京都兩帝大主催の第七回全國高等學校蹴球大會は一日から五日間東京帝大駒場球場で擧行、

大毎主催、第十二回全國中等學校サツカー大會は三日から五日間阪神甲子園南運動場で擧行。

S5-1-15

好技に魅せられた四人の對話

東京帝大對關學蹴球戰所感

F・Wの東大とバツクに強い關學

千　野　生

十二月二十五日、東京帝大對關西學院蹴球戰の直後。三對二の接戰好技に魅せられた群衆の波の中から『高山！』とか『齋藤！』とかの感奮私語が聞える。數分後夕陽に長い尾を引いて四つの影が神宮外苑の歩道を行く。

A　觀衆八千その妙技に醉ふか先づ近來の大試合さ。

B　兩方とも少し堅くなつてゐたよ。

C　齋藤のゴールは本田以上だ實に巧い。

D　高山級のF・Wが四五人欲しいなア、申分のないプレーヤーだぜ。

B　信濃町だ！、何うしよう。

D　歸るのは惜しい、何處かで話さうか。

A　座談會とでもいふのか？乃公は忙しくて今日は駄目だ。

C　歩談會の方が蹴球らしいな。

四つの影は廻れ右して繪畫館の方へ向ふ、影は亂れて手や足が踊る。シウトだ！タツクルだ！。快笑、嘆聲、歩談は果しなく續く。

OUT LINE

D　固くなつて實力が出てゐないと思ふね。

C　慾をいへば限りがないよ。

B　東大の調子が出てゐないのは事實さ、少くとも對慶、明、早戰當時の好調は出てゐなかつたからなア。

A　もつと得點すべきだね。

C　關學得意の長蹴もああ消極的に戰つては駄目だよ。

D　もつと積極的に動いたら面白かつたになア。

A　さうだ、東西システムの相違を遺憾なく發揮したゲームを望んだんだがね。

D　門脇の不出場は關學としては大きいね、バツクの不安、後藤の後退、消極的戰法、是卽ち敗因さ。

B　ウン、あんなにH・B線が後退してはF・Wは孤立だからなア。

B　ウイングへのパスは大抵カツトされてゐたよ。

A　まアH・Bの不振、いや策を誤つたやうな氣がするね。

C　あのバツクとキーパーなら、安心して行けさうなものだがなア。

D　東大ハーフが自由に活躍し得たのもそこさ。

A　ロングパス・システムのチームには有りがちのことだが、關學のF・WとH・B間には餘りに大きな穴があつた。

D　東大のハーフはよくやつたね、勝因の一つさ。

FOR WARD

【東大】春山、若林、手島、篠島、高山。

【關學】島、東浦、檀野、堺井、岩田。

A　關學のF・Wにはフオーメーションらしいものがなかつた。

C　あゝ孤立してバツクのフオローがなくてはね。

B　スピードとあの正確なシウトを生かして見たかつたよ。

D　あの調子ぢやロングパス・システムのF・Wでもない。

C　球のストツプに一考を要する一體に球が離れ過ぎるね。

A　大きな處がある、もつと微妙なフツト・ワークが欲しい。

D　一體にシステムが單純だと思ふ。F・Wプレイに變化がないのもそれだ。

C　然しよくチヤンスを摑んで正確なシウトをする。

B　ウイングが後退して中へ這入り過ぎてゐた、インナーが前方にゐる、關東には見られないフオーメーションさ。

A　センター・スリーで押し切つて、兩ウイングにシウトさせた方がいいんぢやないかなア。

C　センター・スリーが兩翼へ捌く機會が早過ぎる、尤もこれにはウイングのポジションも一考を要するが。

B　さうだ、もつとセンター・スリーのショートパスで突進した方が有効だらう。

A　ハーフの後退から、センター・ハーフ得意の大きなウイング・パスも見られなかつたね、尤もサイド・ハーフはデフエンス・オンリーだから止むを得ないがね。

D　帝大のF・Wは一見技巧を弄し過ぎるやうに見えるね。

B　ゴール前等特にパスが多過ぎるよ。

A　あれだけのチヤンスがあつたらもつと得點していゝ譯さ。

C　僕はさう考へない、F・Wプレイが複雜化してゐるんぢやないか知ら、成程無駄も多いが、單純なものではない、從つて合理的な得點が多い譯さ。

B　一理あるね、さう善意に解釋しておかう。

C　何れにしても揃つてゐるよ。

B　好いF・Wだなア。

HALF BACK

【東大】大町、竹内、野澤。

【關學】守屋、後藤、石井。

B　關學のハーフ・プレイには見るべきものがなかつた。

C　好漢後藤は後退し過ぎて活躍してゐない。

A　一體にモーションが大きいね

C　サイドなんかデフエンス・オンリーだよ、然しこれがシステムかも知れぬ。

B　兎に角そのF・Wとの間には大きなギヤツプがある。ちつともF・Wにフオローしてゐない。

D　混戰にはバツクメンが重複してゐたね。

C　インナーをさけてハーフ線を前進させることを望むね。

A　東大のハーフはだんだん完成しつゝあるね。

B　兩サイドの堅實頑强さには敬服するよ。C・Hは氣が弱さうだ、殊に後半が弱い。

C　H・B線のコンビネーションは現在東大のみに見られる處さ

B　C・Hに地力が出來て、兩サイドを動かし得たら强いH・B線になる。

D　今日は東大ハーフの活躍が特に目ざましかつた。

C　豫想通りハーフの活躍如何で勝敗が半ば以上決つたね。

FULL BACK GOAL KEEPER

【東大】船岡、岸山（F・B）阿部（G・K）

【關學】高橋、安部（F・B）齋藤（G・K）

A　一體に關西のバツクは關東より强いやうだね。

B　キツクがいゝ、殊に關學のバツクなんか、キーパーとのトライアングルは全く鐵桶の防禦線だよ。

C　ジヤンプも利くし、果斷なプレイは氣持ちがいゝ。

C　慾をいへばハーフに球をフイードして堅實に攻擊のチヤンスを與へることも考へたいね。

B　東大のやうなF・W線に當つて、そのプレイはますます完成すると思ふね。

C　實際さうだ、東西對抗の意義もそこにあるのさ、東西の兩システム乃至プレイの實驗的交換さ。

D　東大岸山のプレイは目立つね相變らず巧いものだ。

A　然しF・B線としては未完成の處が多い、パートナーがないね。

D　キーパーにも人がないから、バツク・トライアングルが出來てゐない。

B　B・Fは出過ぎたね、走力もない樣だ。

D　大分右サイドからチヤンスを與へてゐたからね。

C　僕はさうは思はぬ、東大のバツクに向つては、中央を拔く方が容易なやうに思ふ。

A　兩サイドのカバーが早く、岸山がよく戻るからだらう。

B　兎に角東大にはバツクが難所だね、從つて岸山はF・Wの誰よりも東大の至寶といふことになる。

A　關學のキーパーには、日本一の折紙をつけてもよからう。

B　よくやつたなア。三對二の善戰も實際彼の力だよ。

C　第一果斷で體がよく利く、難がないね。

D　東大のG・Kは先づ未完成だらう

A　瑕疵はしてゐないよ。

CONCLUSION

A　全體として、東大F・Wはもつと得點すべきだ。あれだけのチヤンスで、僅か三點とは…。

C　でも、關學のG・Kの妙技に大部防がれてゐるからね。

B　それぢや、いはゆる東大F・Wの科學的複雜化（？）のシステムも今一段の進歩を要する譯か。

C　無論だらう。

D　東大にしたらこれまであれだけのバツク・ラインには出くはしてゐないからね。

A　東西對抗の意義こゝにありか。

C　カツプやトロフイーの爭奪は勿論、東西對抗の眞の目的ぢやなからう。

A　しやべつてゐるうちにモウ千駄ヶ谷だ！乃公は失敬する。

D　また緩くり話さう、失敬！

四つの影は南北に分れた。接戰の跡、神宮グラウンドの白線は入陽と共に消えて行く。（終り）

※右ページへつづく

東京帝大對關西學院のサッカー爭覇試合、東大のゴールイン

The game in wh'ch the Tokyo Imperial U team beary nosed out Kwansei Gakuin for the soccer championship of Japan.

S5-1-15

全國インターカレヂ●サツカーの最後の覇權を關西學院チームと爭つて遂に榮冠を贏ち得た東京帝大サツカーチーム

The Tokyo Imperial team that defeated Kwansei Gakuin for the intercollegiate soccer championship of Japan after a hard fight.

※左ページからつづく

戰後に思ひ浮んだ事

關西學院蹴球部主將　**後藤　勒雄**

敗將は兵を語らず、殊にゲーム中の、兩軍戰法の長所或は短所云云については、そのゲームに參與してゐた私よりも、傍觀された方方の方が遙かによく御承知の事と存じます故之を省きまして、唯漫然と頭に浮んだ事を述べさして頂く事に致します。

◇

數年來の兩リーグ間の懸案で有り、又我國蹴球界の多年の宿望で有つた、この兩カレツヂ●リーグ決勝戰が、蹴球協會の絶大なる盡力により、兩リーク間に了解成つて、蹴球協會主催の下に、無事且つ盛大に第一回を終へることが出來たのは、勝負は兎も角も吾々カレツヂ●リーグの一員として、また蹴球界の一員として眞に萬謝の感に堪へない次第であります。さて戰績は既に御承知の如く、3—2のスコアーで東大の優勝に歸したのですが、戰ひ終つて直ぐピンと頭に來たことは次の二、三でありました。

第一は『關西カレツヂ●リーグに對して、責任を果し得なかつた事を濟まなく思つた事』次に『吾々が今やつた、こんなゲームが關東關西のナンバーワンの決勝戰、即ち事實上の全日本のナンバー●ワン決定戰なのか？と、何となく心細く感じたこと』でした。勿論之は兩軍共餘りに責任が重大過ぎて固くなつた爲に、あんなまずいゲームになつたのでせうが……。然し先に明治神宮大會において我學院が優勝し、全日本選手權を得た時にも、これと同じ樣な思ひがしました。そしてこの位の程度の强さが、本當に日本のナンバー●ワンとしての資格あるテームの强さなのだらうかとさへ疑はざるを得なかつたのです。

◇

第三には『以上のやうなことを思ひつゝ、本年我が國で行はれる極東大會のことが思ひ出されたこと』です。前號の本誌にも書いたやうに、過去において我が國代表の殘した記錄は餘りにも慘めであつた。然し再昨年上海におけるこの大會で、初めての比軍に勝つてやつと第二位に昇ることが出來たのです。從つて本年は、比軍には絶對に敗けられないのみならず、今一歩進んで、是非支軍を一蹴し、極東の覇權を握らなければならぬのです。殊に本年はホーム●グラウンドにおいて戰ふのだから、全くまたとない絶好のチヤンスだといへませう。

然るに幸にしてこれ等の二ビツグ●ゲームに出場し得た私は、どうしても早く何とかせねば、このままでは（即ちこれ等のゲームに出場した有力なテームをミツクスせねば）本年もどうやら覇權を比支何れかに奪はれはしまいかと危ぶまれてならないのです。

今は唯（前號のことをまた繰返へすやうだが）一日も早く蹴球協會が日本代表選手を決定されて、嚴格なる監督と善き指導のもとに奮鬪努力せしめられて、この絶好のチヤンスを逃さぬ樣に、御盡力下さらんことを切望する次第であります。

◇

さて、この東西リーグ決勝戰において、私が學び得た最も大いなるものは、如何なる大試合に臨んでも、徒らにその責任の重大なることに捉はれず、各自が各自の持場に對してベストを盡すを以て足るといふことであります。即ちブレーヤーが責任の重大さを感ずべき時機は、決して試合が始まつてからでは無くして、各自が日常の練習においてこれを痛感し、以て奮勵努力することが最も必要なのです。そしていよいよ試合に臨んだ時には、出來得る限りのびのびと戰はなければならぬのです。

極東大會を前にして近く選定さるべき我代表選手諸君よ、全日本の名譽を擔つて立つ、この重大なる責任は、諸君の日々の練習の中に在ることを忘れ給はず、彌が上にも努力せられんことを希望します。

最後にこの東西カレツヂ●リーグ對抗戰が、將來名實共に我國蹴球界のトップを進み、益々盛大に且つ蹴球界に絶大たる効果を齎らさんことを願ふものであります。

S5-1-15

写真説明＝東京帝大対関西学院大学のサッカー試合

S5-1-15

THE ASAHI SPORTS

アサヒスポーツ

The Japanese Twice-a-Month Illustrated Record of Athletics

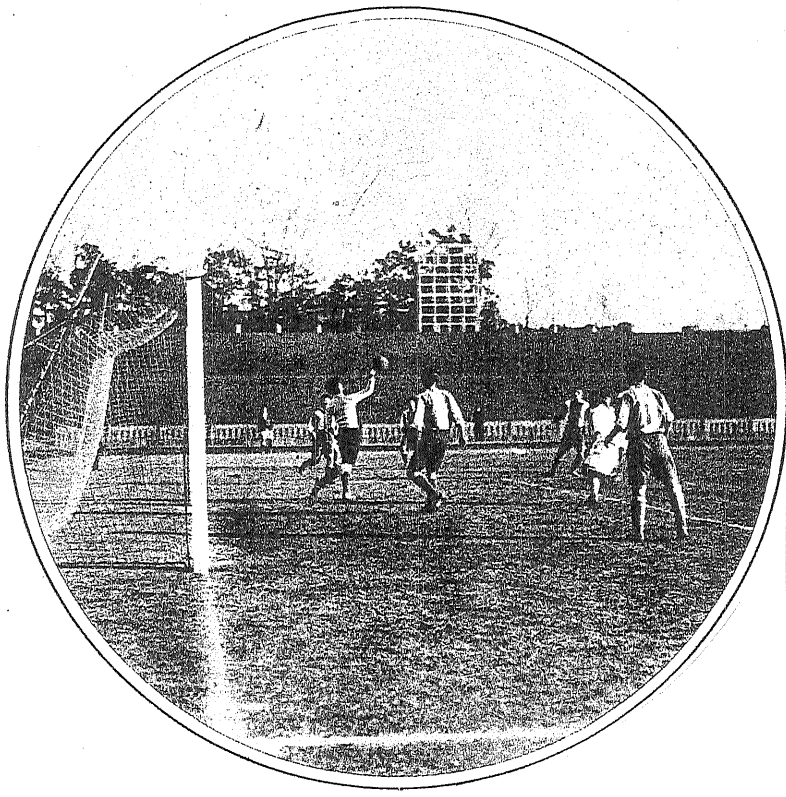
新春蹴球號

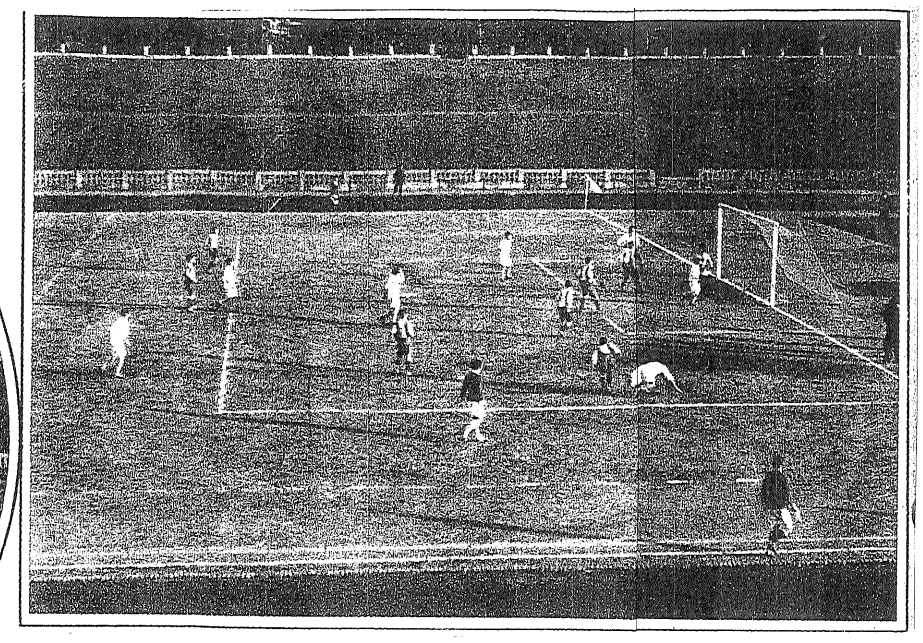
第八卷第二號　一月十五日號　Jan. 15th. 1930

大正十二年三月十五日第三種郵便物認可
昭和五年一月十四日印刷納本

朝日新聞社發行

昭和五年一月十五日發行
毎月二回(一日、十五日)發行





東西カレヂリーグの優勝者東京帝大對關西學院の爭覇試合は十二月二十五日明治神宮競技場で擧行、三對二で關西學院が惜敗した、寫眞左は關學ゴールキーパー齋藤君の活躍、右が試合の大觀

大毎主催の全國中等學校蹴球大會サッカー部の優勝試合、廣島師範對神戸一中のゲームは七日甲子園競技場で擧行、三對零で神戸一中の勝に歸した寫眞(上)神戸一中の應援(右)優勝した一中チーム

Top-Left : Kwansei Gakuin goalkeeper doing good work in the game between Tokyo Imperial, Kwanto victors, and Kwansei Gakuin, Kwansai victors, for the championship in the collegiate soccer league. Top-Right : General view at the Tokyo Imperial-Kwansei Gakuin game. Center : An exciting moment in the game between the Hiroshima Normals and the Kōbe First Middles in the All-Japan Intermediate School games. Oval : Victorious Kobe First Middles.

S5-1-15

サツカー・チーム一瞥

岩野次郎

大毎主催第十二回全國中等學校蹴球大會サツカーの部は一月三日から甲子園蹴球グラウンドで開催された。その九代表校テイームに就いて少しく盲評を下して見たいと思ふ。間違つてゐたら悪からず。

◇

熊本第二師範　は第一回戰に神戸一中と2—1の大接戰を演じて惜敗し、涙をのんで遠く九州に引きあげたテイームである。あの水溜りの中では本當の實力を發揮出來なかつたと思ふが、むしろ熊本二師に取つては神戸一中とあの大接戰をやつて惜敗したといふ强さを認められ、九州にもこの强テイームありと九州健兒の意氣を示したのはうれしかつた。グラウンド・コンデイションがよければスコアの開きがもつと大きくなつたことは事實と思ふ。熊本二師にはシュートの確實な人がフオアワードにゐない。そして前衛は皆技術においてはどんぐり揃ひでバツクメンより遙かに落ちる。對神戸一中戰前半22分にフリーキツクを得て押し込んだ一點が前衛の甲子園へ來た仕事の全部だ。バツクメンはよく頑張つた。R・Fなどはよく防いだ。特にG・Kは美技續出で、本大會のピカイチといつてもよい後半にあれだけ壓迫されて二點で喰ひとめたのはG・Kの奮闘のお蔭である。全體にキビキビしたテイームで、ランニングが早く、また身を挺してのタツクルは、事毎に成功してゐて、神戸一中前衛のコンビネイションを破つてゐたのは、熊本二師の凄味であつた。キツクも中川氏の訓練よく、相當よく當つてゐた。

ハーフは防ぐためのハーフで攻撃には少しも前衛にフオローしてゐない樣だつた。あれでは前衛も攻めるに困難だ。聞けば今年は卒業する者も僅少の由、うんと前衛を强くして來年は又一段の意氣を示して、九州代表怖るべしといふ感じを濃厚にせしめてほしい。

京都師範　は荒削りのテイームだといふ感じがする。どこといつて强味のある所はない。練習不足試合不足だ。附中の若少でありながら氣持よい體のこなしに依るフット・ワークに比較して、只無意識に敵を追ふ京師バツクメンは氣の毒な感じがした。先づフオアワードとハーフのコンビネイションは皆無だ。故に攻撃力が半減してしまつてゐる。附中のショートパス網に翻弄されてヂリヂリ壓迫され、ボールに丁度ミートする樣なダツシュなく、たゞスライデングをやつてゐるのみ、フルとハーフも連絡なく、奮闘する割合に防禦出來ない。攻め方、防ぎ方が型にはまつてゐて變化なく、應變の判斷がおそい。各線のコンビネイションをもつと合理的に研究されんことを望む。個人的技術も見劣りする所が多い、即ちストツプが大きく、ランニングもおそい、パスのしかたもおそい、インステツプ・キツクも悪い。しかし最後まで堂々と健闘した男らしさは立派だつた。

◇

函館商業　が案外强かつたのは熊本第二師範が豫期を裏切り健闘したのと共に、今年度の大會の大きな收穫の一つだと思ふ。テイーム全體はどことなく元氣ないやうで、押しのきく所がある。モーションが大きくて機敏に動く割合に、味方のチヤンスをそのまゝ敵のチヤンスに利用された樣なことが幾度もあつた。全體が少し堅くなつてゐた爲、前後の連絡が當を得てゐないで、市岡の前衛に單身ドリブルを許したこともある。攻撃にもパスが不確實で是にミートするのが骨だ。故に敏活に進めず、敵のH・B線を破つたと思つたらF・Bに蹴返へされ、H・CやH・Bは相當活躍してゐたが、フルバツクがいつも下り過ぎてゐる爲H・B線とF・B線の中間に敵のフオアワードがゐて、强くもない市岡の前衛をして攻め易い樣に導いた點は一考を要すると思ふ。フオアワードの進み方にもつとウイングを使ひ、センタースリーのシュートをもつと正確にする樣にしたら、市岡には敗れなかつたと思ふ。

靈知一師　は二、三年前と少しも變らぬ强さで、しかも一定の型にはまつた戰法を使ふテイームである。昨年神戸一中には優勝戰で敗れ、今度は負けられぬ試合だけに見物人の期待も大きかつた。結果は3對2の大接戰で又も神戸一中に勝をゆづつてしまつたのは口惜しかつたらうと思ふ。併し試合振りでは一寸神戸一中に見劣りする。ハーフ、フルはよくきいてゐたが、フオアワードがバツクメンに比較して弱い。C・Fの大野君は光つてゐたが、兩ウイングはランニング遲く又ボールが來ても完全にマスター出來ず、パスが至つて悪い。あれでは大野君を中心にセンター・スリーのパスで攻撃する戰法が或は成功したかも知れない。弱いウイングへいつもボールを出して神戸一中のハーフに完全に壓倒されてゐた所は考へが足らない。ハーフはパスが深すぎてフオアワードは完全にキヤツチ出來ず、徒らに敵のバツクメンの强い蹴返しにあつてゐた。フルバツクはよく頑張つたが、位置が悪く、神戸一中大谷、右近のウイングズはフリーにセンターパスをしてゐたことは、三點も取られた原因だ。神戸一中のフオアワードは、センタースリーのショートパスで進んで、敵のバツクメンを釣つて大きくウイングにボールを出して攻め寄る戰法なのだから、H・Bに當らして、F・Bは兩ウイングをもつとしつかり防ぐべきであつたらうと思ふ。全體的に必らずボールを一度ストツプして後にパスする缺點を持つてゐる。シュートの時も同じで止めてシュートしようとする時に神戸一中の機敏なダツシュにチヤンスを逃してゐた。パスの不正確と、持ちすぎることが敗因かも知れない。それから風上に陣した際の戰法を考へてゐない。もつと追風を利用してスピードのある攻め方をすべきだ。また風下に陣した時にもボールを上げて却つて自分の方に落ちて來て苦戰してゐたがこれも考へねばなるまい。

◇

富山師範　は本大會で一番見劣りがしたやうだ。個人的技術においても、基礎練習が出來てをらず、ミスキツク多く、只走り廻つてボールを何處かに當てればよいといふやり方に見えた。あれで昨秋神宮競技に行つたテイームとは思へない。コンビネイションといふやうなことは全然考へに入れてゐない樣な氣がする。雪國で練習不足、試合なれしない點は同情するが、少なくとも一地方代表テイームはもつと强くなつて來て貰ひたい。廣師が兩ウイングをよく使つて攻め入つたが是に對する防禦はH・B線、F・B線各々別々だ。この二線の連絡が缺けてゐたG・Kも敏活性に乏しくまたボールの方向が分つてないらしい。ゴロのボールは特に弱いやうだ。フオアワードは撃攻力乏しく、H・B線を離れすぎて前進出來ずたゞ氣持ばかりあせつてゐた。ストツプは大きく、出足はおそく、パスは後すぎりる、キツクが不確實で却つて敵に乘ぜられてゐた。フルのポジションが悪かつた。

市岡中學　熱と意氣に富んでゐた。然しその個人の持つ技術、特にフット・ワークについては練習及び試合のチヤンスに恵まれてゐるに拘らず見劣りのするのはどうしたことか。たゞ意氣だけではいけない、たゞ熱だけでは戰法が古い。試合を巧妙にリードするのは優れたフット・ワークによるものだ。パス及びストツピングに難があるために折角のチヤンスを逃してゐて活氣なく見えた。フオアワードに比較すればバツクメンはよくデイフエンスを保つてゐた。函館商業は決して市岡中學より見劣りするテイームではない。只遠來の故に始めからあせり氣味で、落つきある市岡のバツクメンは防ぎよかつたため函館に得點を許さなかつただけだ。前半1—0の接戰の如き全く市岡も强くないと思はしめた。又對神戸一中戰にはF・B線、H・B線の懸命のデイフエンスはよく神戸一中の猛襲をも防いで只の一點だけで喰ひ止め得たのである。攻撃には弱いテイームである。無駄なキツクが多い。そしてパスがあつても是にミートするダツシュが遲く攻撃に凄味なく敏活を缺いでゐる。神戸一中戰には全然消極的戰法に出て防禦を第一にしてゐた。案外男らしくないテイームだと思つた。それはH・B線が全然バツクしてしまつて、逆襲に轉じてフオアワードが攻撃を開始しても敵のフオアワード線が下らなかつたら味方のフオアワードにフオローして前進しないハーフだつた。故に神戸一中は初めから總攻撃で、防禦に勢力を使ふ必要なく、攻撃又攻撃と懸命であつた。只點の開きの少いのは、壓迫し續けてゐてボールに大きくバツクして市岡の防禦網を散らして侵入することを考へなかつた所に依るものだ。バツクメンの奥田、錦はフルバツクとしてはよくきいてゐた。ハーフのキツクはF・Wにとどかず途中カツトされてゐた。フオアワードはコンビネイションなく、殊にF・Cは船君は若少の身故に中心がなく、最後の決定をやるシユーターがなく、凄味は少しもなかつた。時々逆襲で三船、山藤らで攻め入つたが他が續かず無爲に終つた。兩ウイングのおそいランニングでは駄目だ。

◇

東京高師附屬中學　は、本大會唯一の身體のこなしの輕快な氣持よいプレー振りを見せ、大鰐揃ひの京都師範を輕く10—1の大スコアで破り准決勝に出たのであつた。附屬中學は由來フット・ワークの巧妙で名をなし、戰法も隨分進んだ中學生離れしたスマートさを持つてゐるテイームである。准決勝に廣島師範に敗れた原因は、先づ第一のフオアワードのコンビネイションに調子が出てゐなかつた事、勿論是はあまりあせりすぎた結果だが、次にハーフとフルとの間に守備力の薄い所があつたこと、G・Kの臨機の處置が適當でなかつた事だ。敵に許した三點目等はコーナ・キツクに出してしまつてもよかつたのだ。非常にもろい所がある樣に思はれた。フオアワードでは、新宮、小野田は光つてゐたが、兩ウイング、殊に西川は當りが悪く、敵を恐れてすぐボールを離して殆んどセンター・スリーのショートパスで進むの止むない場合が多かつた。所がセンター・スリーはボールをあまりマスターしすぎて進まず、タツクルされてゐた。小野田の右ウイングに輕く引きかけるパスは功を奏してゐた。ハーフは主將山川一人で頑張り、花井柴田は京師の時の當りを見せなかつた。山川の健鬪賞すべきものがある、フルバツクは萩原が時々ミスキツクをしてゐたが大崎は强く大體二人共よく戰つた。ゴール・キーパーは一寸落ちる感がある。對廣師戰の敗因は要するに、前半風下にあり二點リードされてゐせりすぎたこと。キビキビした廣師テイームに一寸怖れをなしてゐたためF・W線、H・B線のコンビネイションがうまく行かず、また逆襲に際してフオアワードの誰れもバツク出來なかつたことによる。

廣島師範　はキビキビした充實したテイームであつた、富山師範を5—0は當然のことだつた。廣島師範の特徴はキツクが正確なこと、C・H藤川が强い事、バツクメンのデイフエンスが完全であることだ。プレー上手な東京高師附屬中學には或は技術的に見劣りする點はあるかも知れぬが、H・B線とF・B線のコンビネイションは實に堅固であつた。前半風上に陣を布き追風を利用して二點リードして精神的に附屬には敗けない決定的意氣を作つてしまつたことが附屬を破つた勝因だ。そのために附屬はあせり氣味で却つて附屬のコンビネイションが亂れてゐた。後半附中に二點むくいられたのはH・B、F・Bが下つて全然守備の隊形になつてゐたから、逆襲に移ることが困難であつたからだ。後半22分附中大崎のミスを豐島ドリブル・シュートに進み、附中G・K中野のハンブルを浮田が中に輕くパスして豐島が決定的ポイントを得たことは大功であつた。實に幸運に恵まれた日であつたが。決勝戰神戸一中戰には全部が下り氣味で、攻撃に何ら威力なく絶えず壓迫され勝ちだつたことは優勝戰として淋しかつた。戰法を誤つてゐた感がある。もつと攻撃的に出た方が好調だつたと思ふ。神一中の若少のハーフに完全にカツトされたことは一考を要す。C・F迫田はうまいが持ちすぎる、もつとウイングを使つた方がよい。

◇

神戸一中　の優勝はテイームが强いからだ、强いとは十一人が全部相當鍛練された粒揃ひであることだ。F・W線も强シユーター揃ひだ、特にショートパスでセンター・スリーで進み、大きく右より左へロング・パスして敵のバツクメンを破る、そして五人揃つてダツシュし、すかさずシュートに移る所は垢抜けしてゐる。H・B線も强い、年少小橋君の健闘を賞したい。C・Hの別所君もよくあたつてゐたが、北中君のねばりも仲仲强い。F・Bは主將山本君がよく似た加藤君と、二人のオツサンでがつしり守つてゐる。G・Kは一寸弱いところがある、熊本第二師範に一點リードされたのも、G・Kの出方がおそかつたからだ。第一回戰には調子が出ず、あの泥濘で得意のショートパスの方向、强さを考慮しなかつた爲に苦戰したのだ。また靈知一師には實に眞劍なプレーをやつてゐたが、F・Bの頑丈でもろいところのあること、G・Kの引き込みすぎてゐたことに依り二點取られたのだ。對市岡戰には敵が全然消極的防禦戰に出てゐることを考へて、あんなにいつも壓迫してゐないで、大きくバツクパスして進む樣にしたらもつと開きを大きくしたらうと思ふ。廣師には精神的に壓倒してゐた。熊本第二師範との時より數等輕快な巧妙なプレー振りを示してゐた。

大毎主催の全國中等學校蹴球大會サツカー部神戸一中と廣島師範の決勝試合
Final game of the Daimai's All-Japan intermediate soccer meet.

S5-2-15

第八回極東大會に比島チームを破つた當時のWMWサッカーチーム
The W. M. W. soccor team that defeated the philippine team in the Eighth Far Eastern Championship Games.

極東大會の蹴球に勝つには

如何なるチームを代表とすべきか

鈴木重義

第八回極東大會を期限界として我が國の蹴球は異常な進歩を遂げた。蹴球の發達は極東大會と離れては考へられない。先づ第三回が東京芝浦に開かれるや、東京高師が推薦されて出場し慘敗したが、兎に角これにより蹴球技の實際を知り、その興味を味ひ、一階段をなしてゐる。次に出場したのは第五回上海の大會であつて、馬部平太氏が肝煎りでピックアップ・チームを編成し、當時關東の猛者連を全部集めて遠征、善闘はしたが三戰三敗して歸朝した。この大會にて、各個人のプレーよりも連絡の重要を認め、歸京後大にこれを鼓吹し、いはく「パス」、いはく「トライアンブル・パス」、いはく「コンビネーション」と、出來ぬながら連絡の緊要を强調して、攻擊にも防禦にも一大變革を來した。

第六回大會が大阪で行はれるや大阪サッカー倶樂部が出場したがこれまた三敗した。この大會後ビレマ人チョウデイン氏がショウト・パス・システムの如何なるものかをコーチし、これに從つてデフエンスにもまた一大變革を來したが、專ら關東地方に擴まつて、關西には擴まらず、關西は從來のロング・パス・システムに依り、進歩して來てゐる。

第七回の大會には斷然强いチームを作成して、ショウト・パス・システムを入れて比支に對せんと試みたが、不幸豫選に敗れて關西サッカーが出場したが、これまた失敗に終つた。

第八回大會が上海で行れはた時には關東の早大W・M・Wが最も新しい戰法を以てこれに對し、初めて比軍に勝ち、第二位となり、蹴球史上それこそ一時代を劃したかと感を深くした。この刺戟を受けて大學專門學校も擡頭し來り、各々科學的の研究によつて、益々正しいフツトボールに向つてゐる現狀である。

第九回の大會は餘す處幾何もなく、我が蹴球史上かなりの重大性と、興味に富んでゐる。

システムが大切

從來鎬を削つて第一位を爭つてゐる支比兩軍も日本の進出に依つて、相當脅威を感じ、之に對する準備に怠りなからうと思はれる。

即ち比軍は萬難を排しても從來の位置を恢復せんとし、又支那はあくまで第一位を保持すべく油斷なき努力を續けるであらう。

我々は如何にして之に對すべきか。第八回にかち得た第二位は、飽くまで失つてはならない。更に支那を破る事によつて、東洋の覇を完全に唱へ、世界の舞台に向つて、進むべきが我が蹴球の途であり、目的である。この意味において昭和五年は我が蹴球界の興廢にも關する意義深き年である。

さて前上海での極東大會の若き經驗よりして、此度の代表チーム選出に關して自分は次の樣な條件を持つチームを望むものである。これがまた我が蹴球の將來進むべき途でもあらうと確信してゐる。

第一にシステムを持つチームでなければならぬ、システムなきチームは羅針盤なき船の如く、行く處を知らず、論ずるに足らざる處である。

第二にそのシステムたるや、科學的といはうか、普遍的といはうか、何といはうか、兎に角、或る特殊な相手に對してのみ通用するシステムではなく、如何たる强いチームに對しても適用されるシステムを持つたチームであることが必要である。

試合を見てゐると、蹴球だけではなく如何なる勝負事でもさうであるが、下手に對しては實に强い者がある。一方に下手に對しては左程强くはないが、上手に對しても相當强いものがある。之は定石を知る知らざるによる場合が多い。と同樣なことが又蹴球にもいへる樣である。

山氣の禁物

俗に「やまけ」の多いチームを見受ける。これが又よくあたつて奇勝を博してゐるチームもある。が、中には「山けけ」だけで外にまとまつたシステムを持たぬチームを見うける。換言すれば、かかるチームは相手のミスを待つて勝つといふシステムともいへる。斯くの如くチームは少し强いチームに對する時は無力となる場合が多い。かゝるチームは如何に內地的に强くとも、代表として奬むべきではない。現在の日本としては未だ定石を研究する餘地が十分ある。

更に普遍的な科學的なシステムを、換言すれば、完全なコンビネーションといへよう。從來のいはゆるパスは、ショウト・パスにしろ、ロング・パスにしろ、それは個々その場その場に限られて、更に先きの事を考へに入れない事が多かつた。極論すれば、その場限りの苦しまぎれのパスによつて試合が連續されてをつて、一つのパスのあとがどうなるかそれさへ知らずにパスしてゐる。定石を知らざる所以である。

更に攻擊より見れば、如何に相手が强からうが、上手だらうが、文句なしに得點する方法が考へられるだらう。といふ意味は、相手の何等のミスなしに得點される方法が考へ出される。その定法を究むべきではないか。この意味の攻擊は、單にフオワードのみに依つては得られない。ハーフ・バック。フル・バックを、更にゴール・キーパーも攻擊の要素として考へねばならぬだらう。

更に防禦の方面からいつても、各個人的の强さは勿論必要ではあるが、各人の强さ巧みさに依つては、弱者に對する時はいゝが、同等乃至上のものに對する時は、到底滿足の結果は得られない、必ずや一定の法を以て、二人よりは三人、三人よりは五人と、相手の攻擊を封ずる事が、絕對的に必要である。

底力あるチーム

更に團體としてのネバリのあるチームでなければならぬ。いはゆる頑張りのきくチームである事が必要である。出る場所が場所であり、相手が相手だ、外の蹴技はさて置いても此の蹴球だけには優勝せんとする支那である。之を相手とする時、チームとしてネバリのないものは、無資格である。如何に苦戰しても堂々と對戰し、落着きをもつて進むだけの、チームの團結力と餘裕と底力とがほしい。

このネバリと底力とは何といつても、正しいコーチの下に相當の期間練習でたゝき上げたものであることが必要である。

これを要するに十一人のメンバーが、ある一つの法の下に一團となつて動く强さを發揮し、飽くまで鬪志滿々たるチームを望むものである。

次に體格の堂々たると同時に、走力を相當持つものを希望する。國內的においても然りだが、殊に對外的となる時には、この二つは越すべからざる優越である。この一つが劣る時には、之に對するシステムについてもかなりの苦心を要し、相手が一に對して二の努力がいる。殊にバックメンにおいて然りである。

次に各人が完全にフツトボールについての理解「眞實にわかつた」ものが必要で、あくまでコーポレーションの心を知つたものでなければならない。我儘もいゝ、我意の强いものも賴母しい。だがほんとうにわかつた我意であつて貰ひたい。

更に年齡よりいへば、蹴球の年齡からいつても、若いプレーヤーは心細く、出來れば、國際的ゲームは海千山千の方が望ましい。

國內的にはヅウヅウしい位の人が、存外に國際的に活躍するのを痛感する。この意味において神經質的な、また氣の弱いプレーヤーは不適當と考へる。

更に體格的走力においてのハンデキヤツプを、頑張り或はネバリ或は相手が一の時、二を出してなほ餘裕ある耐久力の養成によつて補ふことが必要であらう。

以上の樣な素質は勿論技術において相當洗練された事を前提としての論であつて、技の巧と、特に落着のある正確さが十分にあつて欲しい。

一コーチに任せよ

支那及び比の現狀を見るに、兩國ともその進歩の見るべきものは餘りなく舊體依然たる感があるやうだ。支那は個人的において强さを十分持ち、いきほひその作戰とする處は個人的となり、システムとしての强さはさほどに感ぜぬ。その點に行けば、却つて比島に强さを感じる。支那に對するに個人的な技術を以て對せんとせば必ず敗る。支那に勝たんとせばシステムによつてするより外道なきかと思はれる。要は頭にある比軍との對戰においては、已に前回において一蹴してある關係上、比較的精神的に樂である。永い歷史を覆すは難しい。だが一度破れば容易である。この點において十分自信をもてる。

さてこゝまで考へる時、今度の大會に如何なるチームを選出すべきか、現在のチームをそのまま出すには、いづれを見ても少しづゝの不足不滿を感ずる。もしピック・アツプしてチームを編成するとせば、最もよき監督者と、コーチとを先づ選び、これをして一チームを編成させてはどうか。勿論コーチは一定のシステムに本づき、そのシステムに會ふメンバーを選びこのコーチの下に鍛へさせるのである。

從來の樣に只巧い人をあつめてチームを編成することはピック・イツプ・チームの性質に反する。もし數人の合議で嚴選させるとしても全然一コーチに一任すべきであらう。

S 5 - 2 - 15

我が蹴球界の飛躍

山田午郎

蹴球界における昭和四年度シーズンを顧みて、これを一言にして盡すとすれば、それは未曾有の收獲を得た年であつたといへる。この收穫を以て來る五月の交、東京に開かれる第九回極東選手權大會に臨む蹴球界は遠征の不利もなし頗る心强いものである。

この偉大な收穫を目して、十四年振りに東京に開かれる極東選手權大會を控へての準備的行動がこれをもたらしたやうに見てゐる向もあるが、これは謬見ではあるまいか。この收穫は決してかく單的に見る事は出來ない。寧ろこの原因として擧げるならば、蹴球競技の競技價値が一般的に認識されて自然それに伴うて異常の躍進を遂げた結果と見た方がよい。

この躍進は他競技の如く外面的にパッと目立つてはゐないが、內面的に見る時量においてまた質において驚異的の記錄を殘しつゝある。單に量の方面から見て躍進の文字を使ふ事は決して不當ではないほどに普遍化してゐる。このシーズンはまさに量と質において目覺しい進出を遂げ、蹴球史上に燦然たるものがあると謂へる。この輝やかしいシーズンを送るにあたり斯界を顧みて私見を述べる。

量における增加

蹴球は競技の本質が、他に比して堅實なる一歩を要求してゐると共に、競技の對象たる球は寧ろ空間よりも地上にある場合が多い。ラグビー・フットボールを球の動きから立體的空間的に見るならば蹴球は平面的のもので目立ちはしない。けれどもこの池に石を投じてその波紋の廣がるが如き普及に實に素晴らしい。

私は關西方面の見聞が狹いから例を東京にとると、市內とその外に散在する二十大學のうち十八大學には蹴球部が確立してゐる。また高校七のうち二校が未設でその他專門學校は十四校中十二校に蹴球部があつて、これを通計するならば四十一校に對し、未設が僅々七といふ比率にして一割七分强といふ有樣である。かく蹴球は競技中絕對のものであるといつてもよいほどに隆盛を極めてゐる。將來を卜するに決して至難の業ではない。恐らく關西の中心京阪神に於て求める比率もこれを越すことはなからう。或は京阪神の方が東京を中心とするこれを凌駕する隆盛であるかも知れぬ。

斯く蹴球は今日において學校を單位として普及しつゝあるから、自然チームの在在は學校の數に比例して普及してゐると謂へる。この結果は當然に斯界を二大區分してゐる。曰く關東、曰く關西と。關東は京濱を根城として多數のチームを擁し、關西は京阪神を中心として數多のチームが存在する。そしてその力量は勿論この二大中心地において優れ、しかして地方に向つて波紋を投げかけてゐる。これは決して今日の狀勢とのみ言へぬ吾が國に蹴球が移植されてからの過程で、將來においてもこの二大潮流は覆し得ないであらう。

質に於ても進步

野球などにおいても長いことこの傾向をそのまゝに殘してゐるではないか。これを更に地方的分布として見るならば、北は函館、札幌、仙台等の中心地あり、中部に名古屋と岐阜、北陸に富山、中國に廣島あり、四國に松山、九州に熊本等あつて何れもその地方の中心をなしてゐる。けれどもこれ等の細胞は決して現在において前述の二大中心地を凌ぐ力量を持ち合せない狀態に置かれてゐるのは、野球選手の動きなどと同樣に、地方において盛名を謳はれるほどの選手は、多くこの二大中心地に吸收されつゝあるからである。

事實上の例に求めても、全日本選手權大會において、極東競技大會のわが代表において、この二大中心地外のチームは全く稀である。

それは今日斯界に飛躍してゐる東京帝大の陣容を窺つても判るであらう。廣島に勇名を馳せた野澤手島を迎へたこのシーズンは、依然黃金時代を確保してゐる。これらは學制の然らしめるところでもあるが、有名選手はこの二大中心地に向つて吸ひ込まれてゆく。殘された地方の小細胞はもつて推知する事が出來るであらう、斯かる一因あり、また一面において數多チームの存在は、試練の機會を多く與へ、且つ强い刺戟を間斷なく放射してゐる。この間に伍してゆく、二大中心地の圈內にあるチームのその力量の向上は首肯し得る所のものである。

また量は質を支配する。本シーズンの各地球界の一般的增量は、自然のうちに良質に導いて行く。この點關東などは特に目立つものがあつたやうに思ふ。

かゝる增量と良質に向つての收穫は、大中心地において著るしいものであるが、やはり地方の小細胞を誘導することを忘れてはならぬ。結局はこれが現在の基礎である事において然りである。

走力を重視せよ

このシーズンは著るしい普遍化の跡を眺め得た。そして今日のこの狀勢はシーズン毎に一段と素晴らしいものがあるであらうことは累進的に示したチームの增加、蹴球部の創立に見て確信出來る。この普遍化である量の問題はこの邊でとゞめ、質についてこのシーズンを顧みることにしたい。質といへば編成されたチームの內容である、この內容を分つば個々の體力また技術、競技精神などを包含することになるが、一般の傾向は體力を根據とせずに、技術にのみ走つてはゐはしないかの懸念を抱かしめる。何回か斯界に叫ばれた指針であるが、體力に應じた走力を測つて、然る後に技術に入るの捷經であることが今日なほ等閑視されてゐるのを見ないでもないし、聞かせられてもゐる。總ての競技は走力を根幹としてゐるが、蹴球は特に一層この走力の必要を感じさせる。C・Hがそのゲームに忠實であるとするならば、九十分のゲームにおいては優に十キロ以上は走るといはれてゐる。しかもこの走力は相手に對してスピードに劣弱なものでは、何等の價値もないことを附け加へて置く。二十キロ、三十キロの耐久力あつてもスピードが劣るとすれば競技上無價値となるわけだ。この耐久力にプラス相手を凌ぐ走力でなければならない然るに一般の試合を通じて見る事であるが、前半に强く後半に捨てるやうな選手が相當ある。これは試合に臨んでの亢奮とか、努力作用とかから、自然體力……その耐久力の消耗を來す結果からでもあるかも知れないが、一般に走力の訓練を缺いでゐることに因してゐるのは否めない。試みに走力の練習について尋ねるならば、十中の九まで實施せぬと答ふるであらう狀態である。陸上競技のスプリンターがスタートの練習五十、また百、二百と練習を積み、時に四キロ五キロと距離をのばすことからも思ひあたるものがあらう。またわが庭球界の大先輩であり至寶である熊谷選手は、每週二回くらゐ三、四マイル走つて補助運動としたといふてはたいか。

眞の鬪志を養へ

蹴球は球の操作と走力と蹴力から構成されてゐるのに、この一を缺いで大選手の完成をどうして求め得やうか。今日は殆んどその練習のスケヂュールに球の操作と蹴力を達するものの他にないと言つてもよい。走力の洗練、それは遂にこのシーズンも見られずに終つた。勿論この反面ににおいて球の操作、蹴力等は頗る合理的の練習が積まれた跡を見る事が出來る。實に無駄のない練習が一般チームに積まれてゐるといへる。かく巧緻的になつた一弊害として、ゲームの急速なる展開を期す大まかなものがなくなつて自然氣力が缺けて來てゐる。又競技形式から見れば從來行はれたロングパスシステムは三、四年前にその缺點とする所を列擧されて、こゝにこのシステムは一蹴されて現在は多くショウトパス・システムを採られてゐるが、ロングパスにしてもショウトパスにしても、一長一短を存してゐる。各チームはこの各々の長所を拾つて中間システムを編まんと腐心してゐるが、それは今日全く過渡期であつて達成されてゐないといへる。この點の技巧にのみ心膽を碎き、又結合を期しての統制に心奪はれてか敵を目前にしての戰鬪意識が薄らいでゐる事實をゲームの上に見る。氣魂も蹴球競技の一構成素であることを力說したい。この盛んな氣魂は決して亂暴を意味するものではない。然るにこの旺盛な戰鬪意識がゲームのエキサイトするにつれ猛烈をを加へて、亂暴となつて關係者間に相當の問題を釀した例もある。斯かる存在は唾棄すべきであるが、罪を惡んでも總べてを排すべきではなからう。この善後處置はやはりスポーツマン・シップによつて解決するより他にないとしても、このシーズンにおける忌はしい突發事であつた。意氣それは決して亂暴ではない。對立抗爭による旺盛なる氣魄で、それを行爲にまで延長すべきものではない。

要するに實を概觀するならば未だ殘されてゐる問題は相當あるが、量の增大にも劣らぬ躍進の徑路を劃然と殘してゐる。

實權は大學級へ

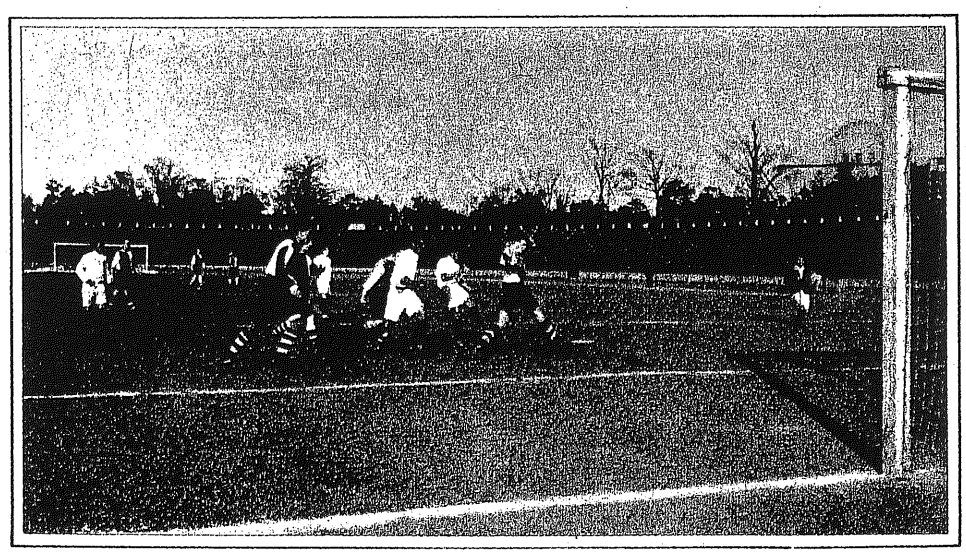
蹴球は東京高師にスタートして、更に地方十等學校に普及、實力も勿論この邊にあつたが、最近四、五シーズンの中にこの實力なるものは大學級に移つた。これはこのシーズンにおいてその感を一層深くせしめた。それは第五回明治神宮體育大會を併せて行はれた、昭和四年度全日本選手權の移る所に見ても瞭然たるものがある。關西の重鎭關西學院チームが後藤主將に率ゐられて東上し、覇權を西に持ち去つた一事に見ても、東京カレヂ・リーグに四シーズン君臨した東京帝大に對して、中等學校級が一指も染め得ないといふ事實に見てもわかるが、各種の條件から考察すれば、この歸趨は當然そのものである。今日の一般的施設等から見て、倶樂部チームの擡頭は後幾シーズンかの後になるであらうが、この擡頭のない限り現狀は永續されると見るが至當である。

又このシーズンにおいて相當有力な意見となつたものであるが、昭和四年度の全日本選手權大會は、その內容において全國的でなかつたといふ事實と、斯界のナンバー・ワンを決定するに他の一般の强チームの參加がなかつたといふ事によつて、その覇權の輕重を云爲するのは輕率の限りではなからうか。といふのは關西學院の掌中に全日本の覇權は一度握られて、この決定後三旬後にして關東の雄東京帝大のため覇者關西學院は敗北してしまつた。それが何で覇權の輕重に言及出來やうか。東西カレッヂ・リーグのナンバー・ワン東京帝大と關西學院の對抗戰が行はれた事は關東西のレベルを均等のものとして切磋琢磨するにはこの上もない機會を作つて斯界に異常のセンセイションを起したが、この結果と前者とはその本質において異るものがある。これはやはり分離して解釋すべきものであらうと思ふ。

何れにしても實力は全く大學級チームに握られる事になつた。然し未だ中等學校チームと殆ど遜色なき大學級チームがある事は警めとして附け加へて置かう。

東西覇者の決戰

前シーズンからの懸案であつた斯界の二大中心地において爭覇のカレヂ・リーグ戰の第一位チームを對抗させる一戰はこのシーズンにおいて實現した。關西學院が關西において全勝し、東京帝大は依然王座をシッカリ保つてこの晴れの一戰に臨んだ。わが國蹴球界空前の人氣を集めたのも道理で、華々しく開戰されたが、關西學院に利あらず第一回の覇權は關東東京帝大の得る所となつた。勝つべく東京帝大は整備したチームで、全國四百有餘のチームありと雖も恐らく今日ではこのチームを征服し得るものはあるまい。この一戰關西學院のアタリは惡かつた殊にC・H後藤などは、アタリの惡い所へ狂奔して徒勞に終つた方が多かつた。が東京帝大も決してよいアタリは見せてはゐない。かゝる大試合の場合においてはやはり老巧選手の活躍が光るものである。東京帝大の岸山、大町など千軍萬馬の間を幾往來した强者が千鈞の



全關東OB對全外人のサッカー試合
Soccer game between the All-Kwanto O. B. team and a team of foreigners.

※ 右ページへつづく

※ 左ページからつづく

S5-2-15

試合を行つてゆく。試合度數は貴いものであるのをこの一戰を見て感じた人が多かつたやうである。

この覇權を目がけて關東西の對立はよい意味において峻烈となり互に力强い向上の一歩を刻んでゆくことは斯界の爲め慶賀に堪へない。

斯かる對立の中に一方蹴球の小學校方面における進出も目覺しい關西においては御影蹴球團主催の大會がこの二月九日から三日間行はれる。關東においては東京蹴球團主催のものが秋季において行はれてゐるが、關西方はこの兒童蹴球の東西對抗を目論んでゐるのも意義のあることで、これは去秋から着々準備を進められてゐるから次シーズンあたりに實現されるであらう。これと共に中等學校のそれも計畫されてゆくべきであらうやはり斯界の二大中心地と目さるる關東西の間に斯かる企圖があつて、相寄り相通じて初めて地方の小細胞におよぼす効果が大となるものであることを信ずるものである。

極東大會近づく

中華民國に報復の日は近づきつつある。大正六年の芝浦、大正十年の上海、大正十二年の大阪、大正十四年のマニラ、昭和二年の上海とそれは何れも中華民國に對しての屈辱の球史を綴つてきたものである。また比律賓に對しても前記昭和二年に初めて報復したといふに至つては、極東競技大會に臨むにあまりにも心細い球史である前回の上海、前々回のマニラ遠征に際しては、わが遠征軍を起すに經費のやり繰り都合から、競技道を辨へぬ無謀なものは、勝味のないと見られる蹴球、籠球、排球の遠征を見合せて、その費用を勝味のある競技に廻してその派遣選手の數を增せともいつたほどである當否はこゝに贅言を要しないが、實に嘆めな球史が殘されてはゐる然し假令敗殘の記錄ではあつても出場した選手の膏血と涙に彫られてゐるもので、それは實に貴いものである。從來の力、それはかく敗るべく餘儀ない程のものであつたのは事實で、決して天災もなければ人爲的の畫策など祕められてはゐない。然し逐次その力は進歩を示しつゝあつたことはその經過によつて知られる。今日においてわが一流チームを以て對立せしめたならば優るとも劣らぬ域に達してゐるであらう。それはこのシーズンの實際に照して思考出來る所の香しい事實である。

五月二十五日午後三時から、明治神宮外苑競技場において對比律賓、同二十九日午後三時から對中華民國と日割は決定したが、さてわが代表チームはいづれであらうか。大日本蹴球協會は、前シーズンの終ると共に深謀をめぐらして比、華兩軍をホーム・グラウンドに邀擊せんとして手ぬかりのない準備を進めんとしてゐる、その結果代表チームの選定に關しては何等具體的の發表を見てゐない。

結局選拔チームか

まる四月シーズン・オフとなると共にこのシーズンにおける各チームの成績と全日本選手權大會の戰績などを考慮して……といふ程度で詳細なものが發表されてゐない。けれ共從來以上の强チームをそのまゝ採るか、また新たに編成して比華二軍を邀擊するは明瞭なる事實である。今日にして公表されない限りは、從來の形式を採らぬ（選選を行ふといふ形式で從來試みられてゐたもの）事はわかり切つてゐる、といつて最强チームを目論んでは唯一のチームも採らないであらうと推察される。ピック・アップは年來論議された所のものであるが、甘く行けばこれに越した事はない。過去においても代表チームの確定後その缺を補うてピック・アップとも解釋されるものは試みられたが、やはり情實が纏綿して完全なるピック・アップではなかつた。極言すればお座なりのものであつたと言へる。この點から見ても勝てないのは當然である。今回の大會に臨むには、合宿の費用も大日本體育協會に對して請求し、容れられる所となつてゐるから、多少の異論を排してもピック・アップを敢行して合宿練習すれば、未だかつて見ない强チームが完成されるであらうと信ぜられる。

然らばこのシーズンの成績から見て（是は個人的に見て）如何なる人々がこの選に入るであらうか。

衆目の見る所一致した選手、いはゆる定評のある人々は相當の數にのぼつてゐる。然し假令ピック・アップされるにしても學生選手を主體とするから、學年末に際しての事だけに、問題はチと五月蠅くなつてくるから、やはりある骨子を求めて編成されるに至るであらうと想像は出來る。このシーズンのゲームを通じて見るに、個人の技術などは全く五十步百步の差を見出す位にまで伯仲の間に置かれて來たやうに考へられる。とすればチーム編成はコンビネーション第一でなければならぬ。先づこの條件の下においてピック・アップされるのが今日の場合必要であるとは斷言出來る。體力、技術の點から見ればピック・アップされる人々は次記の如く擧げ得るであらうが、五十步、百步の所で代表チームとしての融和合が求め得られなければ、その實効を期し得ないわけでその點が極東選手權大會のわが準備委員の間において愼重に考究されてゐる所である。

（F・W）春山（東大）若林（東大）手島（東大）加茂下（京大）篠島（東大）高山（東大）市橋（慶大）結城（慶大）淺井（早大）橿野（關學）（H・B）大町（東大）竹腰（東大）（O・B）竹內（東大）野澤（東大）西村（京大）奥谷（明大）杉村（早大）師（早大）住（法大）角谷（法大）後藤（關學）（F・B）岸山（東大）近藤（東大）井出（早大）高橋（關學）

（G・K）齋藤（關學）本田（早大）藤田（農大）

等候補者と數へられ衆目の意見一致するであらうが、この先の人選がコンビネーション第一から考へて難しくなつて來るにしても、一旦してF・W線の攻擊力の偉大は想像されるが、バック・プレイの進境に多少劣りを見せる今日において、その守備力の向上は腐心を要する所である。

然しいづれにしても生み出されるチーム、それは從來の代表チームより確かに心强いものであることは信じられる。それに一ケ月近くの合宿練習、ホーム・グラウンドの利から考へて、比律賓は勿論のこと華軍の蹴破はこの五月に於て實現されるのではあるまいか。

S5-2-15

全關東OB對全外人團のサッカー試合は、一月二十五日神宮競技場で擧行、三對二で全關東OBの勝となつた、寫眞は外人側の壓迫

General view at the soccor game between the All-Kwanto O. B. team and a team of foreigners at Meiji Shrine Jan. 25.

全関東OB 3-2 全外人団（1月25日、神宮競技場）

S5-3-1

東西對抗O•B蹴球試合

三對二の接戰で關東チーム勝つ

吉　保　秀　文

初めての試合で、各人各樣の豫想を持つてゐた。F•W線は關西幾分强くH•B線は關東斷然優り F•B線は甲乙なくキーパーは關西に勝味があるとせられた。スコーアも三對二で勝つか或は敗るゝといふ豫想が適中して、カレッジリーグ對抗蹴球戰の三對二のスコアーと相等しくしたのも奇であつた。

◇

關東が竹腰をH•Cに下げて、チームの統制と配合に努めたことは自然あらゆる意味から關東軍に有利に働き、セレクト•チームにあつては特にその効果を大ならしむるものがある。然らばこれに對して關西軍はチームの統制とその人の配置の跡が見えたであらう？或はいふ、フオワードに人あり、バツクにその人ありと。然しながら二者より出ることは結局においてスピーディーなゲームに、咄嗟的ヒントを與へる上に不利を招くものである。關東關西軍共に無意識にこの結果となつたものとすれば、關東に比して關西の不運といはなければならない。一方關西軍はホーム•グラウンドの地の利に惠まれ、且つ阪神倶樂部リーグ戰最中のために、體力の持續といふことは特に有利であるとしても、これがためO•B戰として練習試合並にメンバーの隔意なき諒解といふ點において果して成算があつたであらうか。

關東はO•B戰に幾分早くより備へたに反し、關西はそのチームの成立が遲れたために大なるハンデイキヤツプとなつたのではなからうか、以上述べた事を前提として當日のプレーを眺めて見たいゲームは終始緊張したシーソー•ゲームで勝敗は最後まで逆睹するを許さなかつた。八分に關東一點取れば、十六分に關西酬い、二十分に關東得れば、三分後に關西再びタイに返し、兩軍互に相攻め相守り、六十二分に關東のL•H濱田のパスをF•C竹內が決定的一點を得て終つてゐる。

◇

全部の球の動きを見るに、最初二十分頃までは五分五分の戰ひで以後ハーフ•タイムまでは關西幾分優勢。後半十分關西稍々押し、六十二分關東に得點を許して後五分間程關東を壓迫したが、七十分頃より兩軍互に押し互に退き最後の十分は關西が守勢に終つてゐる

關西軍としては最初の十分より十七分ごろに一點をリードすべきではなかつただらうか。何れにせよ、前半最少限度一點リードすべきコンデイシヨンに在りながら二對二に終つたといふことは、關西軍としては大なる違算で士氣の上に影響があつた。後半の疲勞も一つに茲に存したのではなからうか

この日は惠まれない雨風だつた眼鏡を掛けたプレーヤーは關東L•I鈴木、關西R•W山口、R•H眞殿L•F兼田の四君である。雨にグラスを打たれて一入プレーに苦しんだやうに見受けた。

最初の點を許したL•F兼田君のミス•キツクも當日の天候に禍ひされたのである。平素自信のある同君のキツクを省みて、この日の最初のキツクがこの災ひとなつたことと、R•W山口君のスタートが惡く相對する者は現役同樣なL•H濱田君の頑張りがあつたにせよ、晴天の日の同君を知るものとして、特に後半のチヤンスが作れなかつたことには同情の念が起る。

L•I鈴木、R•H眞殿君にせよ平素通りやれなかつたことは事實である。雨と眼鏡の關係は自分もその苦痛を曾つて味はつたのだから、雨の日のメムバーといふことには他のプレーヤーより幾分不利あることは免れない。

◇

この日の勝敗を決したものは兩軍のH•B線の動きであつた。關東竹腰君を中軸に、兩翼に元氣者のL•H濱田R•H大畠君を配したH•B線で、フイードに强くドローに早く、よくF•W線とF•B線とを連絡してゐた。二點目の點はL•F兼田君の强蹴のためにせよ、兼田君をかく强蹴せしめたものは關東H•B線のフイードの賜であつた。特にH•C竹腰君がフイードして、殆んどF•W線の近くまで進出し、左右に輕く球をミートしてパスすると共に、ドローには相續くスライディング•タツクを用ひて、F•B線をして容易にキツクせしめたことである。關東のF•B線强からずと信ずる關西のF•Wが、これを容易に破り得ず、破るもC•Kとなつて防がれたのはH•B線のドロー早き賜であつた。

一方關西のH•B線を形成するL•H小原、C•H宮地、R•H眞殿君は、關東のダツシュを恐れてか、常にデイフエンス•ラインを形成し、後退して殆んどF•B線に近づき、反つてF•B線の守備地域を狹めると共に、F•W線への間隔大に過ぎて攻擊的機能を失する結果となり、或は味方の最後のバツク線を亂して、キーパー渡邊君の活躍の道を阻んだやうに思はれる。特に後半十分頃、關西が關東ゴール前に壓迫する時、L•H小原君のフイード足らず、この一角より破れてR•W本間君の快走となり、六十二分關東の最後の點となつたが、あの邊合デイフエンスに苦しみ、關東のキツクはのびたいのだから、思ひ切つてフイードして、得點の機會を有利に用ふべきである。關西のH•B線のフオローの足らなかつたことは、關西軍をして積極的に得點の道を失つて居た、H•C宮地君が大膽にフオワードすれば關西バツクスの陣形も幾分變化して戰へたであらう。

◇

F•W線は兩軍とも目立つたプレーを見受けなかつた。關東のF•C竹內L•I鈴木君と、關西のF•C播磨L•I玉井君の間にボールが多く集り、關東には之れにH•C竹腰君が加つた差異が表れた。

兩軍ともビツグ•ゲームに拘らずF•Wウイングの活躍が見えなかつたのは何だか物足りなさを覺えた。R•W山口君が後半疲勞して動けずL•W高橋君がオーバー•ドリブリングにパスの時機を失して、受くるものを苦しめ終りに雨に打たれて疲勞のためかポジション•チエーンジを失したことは、餘りに體力の濫用である。關西はチヤンス•メーカーとして兩翼に期待する所大なるものがあつたのに、この兩君の十分働けなかつたことは關西軍としては打擊であつた。

然らば關東軍は如何、R•W本間君は走力に自信を有するだけ、そのダツシュは物凄きも、パスにコントロールを失し後半脚を幾分傷めてか十分動き得なかつた。L•W伊藤君は凄くはなくともL•I鈴木君を有利に動かして居たことは、反面成功したのかも知れない。

R•I高田R•I野島君が何故かドリブルのボールがバウンドして、パスせんとする所をタツクルに遭つて居たのは面白く感じた、關東のR•I野島君は、或は之をバツク•パスしてフイードせるH•B線に委せたのに、關西のR•I高田君はバツク•パスしようにもH•B線のフオローなく、F•C播磨君にパスせんとしてインターセプトせられてゐた。

關西のF•C播磨(前半L•I)L•I玉井(前半F•C)君はあくまで强引に、タツクルされれば之をタツクルして强氣に進んでゐた。この强引に進むF•Wを助くるシューターがあれば、關東のF•B線を破つて關西の勝利となつたかも知れない。要は最初のアレーンジメントの問題かも知れない。この點からR•I高田君の活躍が願はしかつた。

一方關東のF•C竹內、L•I鈴木君の連絡よくL•I鈴木君の時宜を得た巧味のあるプレーと、ダツシュに早いF•C竹內君のプレーとは關東のチヤンスを作つてゐた。

關西がセンター•スリーで進まんとしてL•H濱田君の頑張と、H•C竹腰君の左に强くR•W山口君が平素の如く活躍出來ず、爲に自然にレフト•スリーに變じたに比して、關東はあくまでセンター•スリーで最後まで押して來たことは精神的に非常なる差を見出し得る。關西軍は一方に偏して一方的攻擊となり關東のH•B線を利用するセンター•スリーのフオーメーシヨンは球の移動スムースにして、ゴールを襲ふ結果となつてあらはれたのである。

◇

最後に約言して見たい。關西のH•B線のアレーンジメントは餘りにデイフエンスに過ぎ、有力なF•W線の援助とならなかつたこと、並にそのパスは多くロツプシヨツトのパスになり、これを受くるF•Wプレヤーをしてスピーディーな進出を阻んでゐた、殊に當日のF•W線のライト•サイドの活躍を期待出來なかつたことがこの結果となつたのである。

關東は合理的にバツク•パスを常に用ひて身體の疲勞をセーヴして、定石通りに攻めてチヤンスを確實にせんとしたやうである。この日兩軍の得點を見るに、シュートでゴールに成功してゐない。多くはプツシュで極めてゐる。關西としては斷然H•C宮地君をフオワードせしめ、確實なジヤツジメントを持てるR•F有井君をH•B線に入れしめ、L•F兼田君の强蹴を利すると共に、G•K渡邊君の活躍範圍を平素以上に擴めたならば或は得點を增したかも知れない。

雨の日は球のウエイトが增してキツクが延びないとすれば、以上のアレーンジメントも必要であり、センター•スリーを活用してゴール前にボールを集めることが成功の第一歩である。關東はこれがフオーメーシヨンに成功し、關西はこれを試みて失敗した點がこの日兩チームの勝敗の分岐點をなしたものといひたい。

さきに東西學生兩リーグ•ナンバーワンの決勝あり、今こゝに又東西O•Bチームの會戰があつた。相異れるプレーを背景に持つ兩地域の代表チームの接觸は、我が蹴球界をして更にその發展を助長すると共に、之が斯技の研鑽考究の刺戟と、之が鑑賞の機會とを與へるものである。稿を終るに當つて特にこの試合を通じて感じたことは、O•B戰に參加した人も將來メンバーたる人も、單なる體力に據るプレーを捨てゝ、オール•メンバーズの心よりの協調と圓熟したプレーとを結局した眞の蹴球のチーム•プレーの結實を一日も早く實現するやう努力せられんことを祈つて止まない。

東西OBサツカー試合の一シーン、關東F•Wのヘツドせんとするを關西兼子が潰しに出掛けんとするところ
A scene at the Kwanto—Kwansai O. B. game.

關東中等學校蹴球大會

傳統を破つて府立五中優勝す

山　口　勲　郎

東京蹴球團主催、東京朝日新聞社後援の、第十二回關東中等學校蹴球大會は、參加二十三チームで一月十九日から飛んで二十五、二十六日、二月に入つて一日、二日の五日間、第三回戰までは東京郊外上井草競技場で行つた。

そして准決勝と決勝を二月九日明治神宮外苑競技場で擧行した。そして四回連勝の青山師範が、准決勝で東京府立五中に敗れてしまつたのは、番狂はせといふよりも五中が優れてゐたからであつた。一方期待された成城高校(尋)も埼玉師範に敗れて、決勝戰は五中と埼玉師範の間に行はれ、四對一で五中が覇を稱へてしまつた。六日間にわたる戰績をたどつて座談會を開いて見た。かなり深刻な意見も出たが、それはその儘にしてある。これも蹴球界に精進する參加各チーム將來のため何かの暗示ともならうと思つてゐる。

第一回戰

A『本大會最初の參加で、しかもこの大會の劈頭戰を承つた關東學院は、鬪志滿々たるものがあつたが試合馴れがしてゐない』

B『やはり新興チームの通有性ではなからうか、府立一商などもそんな感じが强い、然し關東學院や府立一商などは、古い歷史を持つてゐながらパツとしないチームに比べれば、將來有望だ』

C『成城中學は昔に比べると、まるで見違へるやうなチームになつてしまつた……實に惜しいものだ』

B『それは一シーズン對外的の刺戟を受けなかつたのが大きな原因だらう』

※ 右ページへつづく

※ 左ページからつづく

A『東京高校(尋)はモツと強いチームになつてよささうだが、粘りが足らないやうだ。しかし技はホントに綺麗なものだ』

C『府立二中は刺戟のない處に在るせゐか、日常の練習も不十分らしい、それから見ると北海道なども惠まれない所に育つてゐるチームだが、昨秋の高師の大會から見ると、進境が目立つてゐると思ふ』

B『曉星に負けてゐてもあの熱心さは買つてやるが、少し亂暴だ、あの點は少しも早く矯正して欲しい』

A『第一回戰の最後だが、神奈川師範はどうも巧味といふものがない』

B『そりや矢張り舊套を脱しないからで、つまりシステムに全く新味がないんだ。そしてプレーヤーは連鎖のない單獨プレイ(これを悪くいへばスタンド・プレイだ)に走る傾向が際立つて見える。だからチームとしての强味、巧味などが見えない……どうも師範チームに見受ける一般的の悪傾向のやうだ』

A『第一回戰に番狂はせといつたやうなものはなかつただらうか』

B『大體順當のやうだ。然し底力のあるチームが幾つかある、巧味のあるのがある、これ等が洗練されたら次シーズンは立派なものになるだらう』

A『第二回戰について話さう』

第二回戰

C『赤坂中學は不戰一勝で、第二回戰に出たんだ』

B『統制のないチームのやうだ、核心といふものが見當らない。これもグラウンドのない所に原因があるのぢやないか。それからチームを背負つて立つといふ傑物がないのも原因だらう。明治學院中學もこの仲間だ』

A『明治學院中は本大會の古顔だが、强いと思つたことはない。矢張りこれもグラウンドがなくて斯う何時までも祟られてゐるんだ、氣の毒なものだ。然しモツと目鼻はつけられると思ふな』

C『明治學院中などは、先輩も多いし名選手も出てゐるんだから大いに指導も受け後援もしてもらつたらよからう、さうすればキツト目鼻もつくよ』

A『茨城師範と青山師範は、前二回の大會で決勝戰に顔合せしてゐるが今年は早くも第二回戰で顔合せしてしまつた』

B『茨城師範は一氣呵成か猪突主義の一手で、青山師範を粉碎しようとしたらしい』

C『二回連敗のあとだけに止むを得ぬ珍手だらう』

A『連容は前シーズンとさして變りはないらしいが、見ると進境といふものが認められない、買ふなら意氣だけだ』

C『各ラインが整備を缺いてゐた敗因の大なるものだ』

B『亂暴な所がある、前の大會よりも悪くなつてゐる』

A『土地には水高などの立派な强チームがあるから、その練習なども見て指導も受ければ、立派な體力を持つてゐるから、數段强いチームとなるだらうと思ふがどうだらう』

C『環境は强い影響を與へるんだからな、茨城師範のためにはそれが一番いいだらう』

B『府立蘭藝か……あのチームは練習不足で整球力がない、キツキングなど隨分ムラがある』

C『然し一昨年の大會から見ると巧くはなつてゐると思ふな』

A『あのチームとしてはさうだらう、然し漫然と蹴つてゐる、蹴放してゐると言つた方があたるかも知れない、眞正直で球が轉げて來るから蹴る、何だか仕末の悪い爆彈でも扱つてゐるやうに、自分の方に置けば危險千萬と云つたやうに扱つてゐる、そこが問題だと思ふ』

B『これ等チームに機智と言ふものを授けてやりたい、さうすれば現在の技術でもモツと强味が出て來ると思ふ。水海道中學などもこの機智が働いたら曉星中學とはモツとモツと善鬪してゐたと思ふ』

A『上手を求める事は出來なかつたかも知れないが、正しいと言ふか……立派なプレイをしてゐる、これで進めて行きたいと思ふ』

B『美點?これを失はずに鬪志をモウ一段と强めて行つて欲しい』

C『同感だ。第一回戰敗退の府立一商、東京高校(尋)などもこの點を强調してはと思ふた』

B『目白中學は惜しいことをした、前半1--0とリードして斷然埼師を抑へてゐたのに……』

C『後半の頑張りが薄い』

A『明るい感じのするチームだがどうもプレイを樂しんで球に對しては責任を持つてゐないといふ感じのするところがある。個個のこの缺點が頑張りとか執着といふものをなくして行きやしないか』

C『そんな處も見える、然しゲームは埼玉師範よりは巧い』

B『東亞か、主將の熱心はチームをよく纏めてゐるが、好いトレーナーが得られないのか、基礎的技術が完成されてゐない所があると思ふ』

A『秋には曉星を破つてるんだ、もつともあのころの曉星は新編成で惱んでゐる最中だつたが』

C『然し眞摯になつた。マア前途の曙光を見出したといふチームだから、これからの頑張りで强くもなるな』

B『曉星は往時の强味(これは頑張りとか頑强とかいふものだ)とは打つて變つて、本格的の强味といふやうなものが見えるやうになつて來た。』

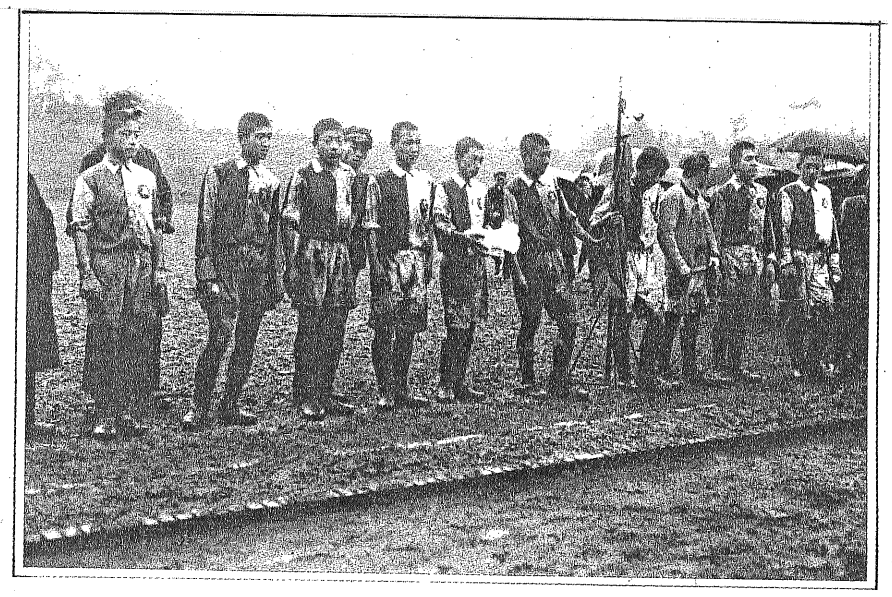
A『よいフツト・ワークを持つてゐるな!!それにどのラインもむらがなくうまいそして攻守ともに厚味が十分ある。結局試合運がなくて負けたやうに思ふ目白とともに惜しかつた』

第三回戰

C『珍らしい雪だ、三寸は積んでゐた。一昨年大會の決勝の日と同じやうに、東京では大雪だつた、第三回戰は實力が出せないで敗れたチームもあると思ふがどうだらう』

A『浦和中學は相手の府立五中に對してそんなに遜色があるとは思はない』

B『さうだ、しかしこの勝敗を決したものにこんな原因がありやしないか、浦和は優れた技術にあまり信頼し過ぎて、コンデイションの不利をさほど問題にしてゐない、これに對して府立五中は始めから悪コンデイションに處するに妥當の策を用ひた。この差異があつて浦和中は破綻を招き、勝敗を分つてしまつたと思ふ』



關東中等學校蹴球大會に中學チームとして初めて優勝した府立五中エレブソ
Tokyo prefectural Fifth Middle School football team, winners of the Kwanto intermediate school tournament.

A『キツク・オフと共に球の操作が全然異つてゐた、問題はそこにあつたといひ得るだらう』

C『對立八中は青山師範に對して體力が著しく見劣りがする。恐らく府立八中は本大會參加チーム中で體力體格は最下位といふところだ』

B『この體格の點だけでも勝敗は既に決してゐる』

A『それから府立二中や粕壁中などの素朴なチームを破つた時と同じやうな態度といふか…(戰法といふ方があたつてゐよう)戰法で臨んだのは老獪なチームに對する適切なものではないと思ふ。體力を缺き體格が劣つても、やはり玉碎主義で、先づ相手の統制を破るの策でスタートしなければならなかつたと思ふ』

C『マア、選手制度を認めない校規なんださうだから、チームの編成も容易ではないらしい。第三回戰まで顔出しする事が出來て本望だらう、殊に相手は定評あるチームだ』

A『然しモツと伸びて行くチームだと思ふ』

B『日大二中の力量は、確かに相手の埼玉師範を凌いでゐた』

A『埼玉師範が幸運に勝つて、日大二中は不運に敗退したといつても決して過言でないと思ふな』

C『が、このチームにゴール・ゲツターのないといふのは、唯一の缺點だと思ふ』

B『最近著しい進境を示してゐる中の一つだ、これは一般も認めてゐる。全體が非常に熱心だ、殊に部長さんは試合には必ず附いて歩いて個々の批評を試みてゐる、段々强くなつて行くだらう。玉に瑕のゴール・ゲツターの問題も追々解決するだらう』

A『部長とか先輩の熱心な援助か……それは中等程度の學校には頗る有効なものなんだ。部長は附いて歩かれて邪魔のやうだが相當氣强くなるらしい。東大の末廣部長の熱心は東大が强いからでない、矢張り部長の熱心が東大を今日あらしめる立派な原因だと思ふ。部長はその練習にも顔を出す位でなくちや何にもならない、青山師範などはこの點一考を要する所だ』

B『熱心な人がゐないでは、練習にも實が入らんし、統制も容易ぢやないからな』

C『日大二中は選手の熱心もあるし、部長の身を打ち込んだ熱心もあるから、總べての點において確かに進歩が早い、試合前半が終ると駈け出して行つて、部長を取圍んで話し合つてゐる情景は何ともいへない美しいものだ』

A『競技とは別だが服裝に眞摯な態度を缺いてゐるといけのがあつたやうだ、主將會議の時注意してあるのだから、何とかシツカリしてもらひ度いと思ふな』

B『成城高(尋)と栃木師範は、無得點でしかも延長戰、そして抽籤で勝敗が決定したが、栃木はこの日の不利な泥濘のコンデイションのため、幸運に持ちこたへたともいへやう』

C『さうも見られるな、一刀兩斷的に行くのは有利のやうに見えて有効ではないと思ふ』

B『然しキツキングなどは參加チーム中光つてゐる方だ』

A『小技をモツと欲しいと思ふた』

C『システムは師範チームの共通性だが、何となく古いといふ感じを持たせてゐる、そして器用さといふものが全然ない。しかしこのチームなど洗練されたら恐ろしいものだ。だからモツとモツと新味を永めて進んでもらひたいと思ふ』

B『とにかくこの試合程悲愴な感を持たせたのはない』

A『抽籤で勝敗の決定した時栃木のとつた態度!あれは實に立派なもので美しいものであつた、見てゐた自分等がホロリとさせられたからな』

准決勝戰

A『最終日が寒雨襲來で好取組もフイになつてしまつた、悪球場それは前の雪の日よりも甚だしいものだつた。折角の神宮競技場でもどうにもならない』

B『青山師範と府立五中の試合、これは決勝戰と見てもよいといふ豫想は多かつた、確かにその通りだ』

C『青山は强いチームとはいへるが、これも猪突主義の域を脱しない、そして猪突主義が最後まで續かないではないか、だから合理的に一歩一歩押して來るチームに對ては、自然に墓穴を掘つてゆくんだ』

B『遮二無二ゆくのは一昔前のシステムで、今日のまゝで進むとすればこれも蹴球界に取り殘されてゆく仲間だ』

A『チームにムラがある、それに統制がない、ゲーム中僚友を威壓するやうな言動がある、これは大いに慎しむべき事だ、あんな事ではこの大試合に臨んで、打つて一丸として進む事は出來やしないと思ふ』

B『技術から見ても大マカだ、パツシングなど盲者パスに近い』

C『ゲームの上に階級制度の嚴格な所が露はれて大事なコンビネーションを紊してゐる、師範チームのこれも缺點だ。それは技術に對する自負もあらうが、こんなところはチーム・ゲームとして沈思熟考すべきだ』

B『師範チームは底力のあるのを武器としてゐるのだが、このチームは體力の按配がうまく行かず、後半ベタベタといふ方だ』

A『球史から見ても、學校の位置關係からいつても、狹くとも球場を持つてゐてまづ東京附近には惠まれたチームである。これらの點からいつても蹴球界の尖端を進む覺悟があつてよいと思ふ』

B『成城高(尋)は最近擡頭したチームだ、それも熱心な練習から來てゐるからだと思ふ』

A『曉星は東大型の感があつて、この成城は慶應型といふ感を抱かせる』

C『そんな感じもするな、技術の卓越してゐるのは認めるが、弄球の缺點は見逃せないと思ふ』

B『F・W線は鑑型にはまつたといふ嫌ひはないか』

C『ないでもない、これが獨創を生まなくなつて、チヤンスを凡逸するといふことにもなつて來る』

A『球場の狀態がよかつたら、埼師を一蹴してゐると思ふ、しかし全體の氣分からいつて、優勝するのも遠い將來ではないと思

C『ないでもない、これが獨創を生まなくなつて、チヤンスを凡逸するといふことにもなつて來る』

A『球場の狀態がよかつたら、埼師を一蹴してゐると思ふ、しかし全體の氣分からいつて、優勝するのも遠い將來ではないと思ふ』

決勝試合

B『埼玉師範は目白中、日大二中成城高(尋)に對して辛勝々々で通つて來た』『然し辛勝の裏にはやはり決勝に殘るだけ勝利に導くある力が潛んでゐる』

C『コンデイションに應じて體力を巧みに使つて來てゐる、それが潜んでゐる力といふのか』

A『決勝戰に臨むに、相手の五中の眞價といふものを研究してゐなかつたのが敗因と見られる』

B『作戰の跡などはチツとも見られなかつた』

C『極論すれば無策無謀ともいへる』

B『その他の缺點は青山師範と殆んど同じやうなものだ』

C『決勝戰に殘る位のチームだから、各方面の洗練を特に望んで置きたい』

B『萬一の僥倖をたのんでドリブリングを悪用してゐた場合が非常に多かつた、矯正の必要がある』

A『勝つた五中は、矢張り優勝するだけあつて堂々たるものだ』

B『他の參加チームに比較すれば全く非の打ち所がない』

C『鬪志もよく燃えてゐた』

B『F・W線はデリケートに動いてゐた』

A『それだからモーションも敏活なものだ。そして無駄が少しもない』

C『清楚な感じがする。それでゐてポイントを決するための强引さは見上げたものだ』

A『H・B線の强味が、チーム全體の强味といふのは、このチームにおいて見られると思ふ』

B『H・B線の送球は正確だ』

C『勿論F・W線のよい動きもある』

B『このチームは完全なマークと抜け目のないフオロウがあると思ふ』

A『大會としては常にレギユラースで行くべきだらうと思ふな、そりや意見のある所だらうが……』

C『然し蹴球部として、明日の大計を樹てる上に五中のとつて來た相手による編成も一法であるかも知れないと思ふ』

C『矢張り五中は關東中等學校蹴球界のナンバーワンとして推すに躊躇はしない』

C『大毎の關東豫選の時の附中よりがつちりしてゐると思ふ』

A『今日の意氣で、將來も推し通してもらひたいな』

C『校友の熱心な應援……他にもあるにはあるが、あの熱心も與つて力があると思ふ』

B『H・B線に、粘り强い、特に目立つた選手がゐたらう。倦まず撓まずといふ所で、例へて見れば牛のやうな强味の選手が……』

A『アンナ選手が一人ゐると隨分引立てられて、頑張りといふものが自然出て來るものだ』

B『五中の優勝は實に堂々たるものであつた。』

C『これで次の大會が一層興味あるものとなつて來るだらう』

A『このシーズンの大會もこれが納めだ。この大會の花形選手は次のシーズンは大學級の選手入りとするんだが、直ぐ使へるのが隨分ゐるからな』

B『參加チームの中で、チームに變動のないのはないさうだ。その中で一番變動の少いのは只一人の青山師範ださうだ、然し變動といふものは中等學校ではさほど影響はないらしい。古い選手を集めて試合ずれの仕切つた選手の集りは、試合に臨んで咄嗟に熱が出ない、熱が出ても大體において不足だ、そして勝味のない試合をする。高校大會のやうに、中等學校も熟で行くべきものだらう、變動があつて新鋭を加へ、新しい意氣を求めて進んだ方が强いと思ふ』

C『確かにその通りだ。古武者の集りはあまりに現智的で、それが結局は退嬰的となるんだ、そして燃えるやうな意氣に押し切られるのが當然さ』

A『棄權といふのがなくて結構だ數を多く集めると盛大たやうに思はれるが、ボツボツ棄權があるのは氣持が悪い。先づこの大會は數において誇るほどではないが、粒揃ひであつて棄權のないのは滿足出來る』

S5-3-1

関東OB 3-2 関西OB（2月9日. 甲子園南運動場）

（上）第一回東西ＯＢサッカー競技は二月九日甲子園南運動場で擧行三對二で關西惜敗した、寫眞は前半關西のポスト前の熱戰（左）同試合に出た兩チーム

Top: An exciting moment before the Kwansai goal in the Kwanto O. B. — Kwansai O. B. game. Left: The two teams.

東京朝日後援の第十二回關東中等學校蹴球大會の決勝試合は埼玉師範と府立五中の間に行はれ府立五中は本大會開始以來中學チームとして最初の覇を稱へた（上）その決勝戰（左）優勝旗を受けてゐる五中チーム主將

Top: Final game of the Kwanto intermediate soccer series, Saitama Normals vs. Tokyo Prefectural Fifth Middles. Left: Captain of the Fifth Middles receiving the victor's banner.

S5－3－15

重き使命を感じて

最善を期する蹴球チーム

竹　腰　重　丸

我が國の蹴球界が今回の極東大會に對して如何に備ふべきかに關しては、一部の者の間では前大會の直後から熱心に討議せられ又研究せられてゐた。公開の席上で問題となつた記錄を尋ぬれば、昭和三年三月三十日、同四月一日の蹴球研究會（蹴球協會主催）の席上でも、ピック・アップの可否が論議せられてゐるのを見る。それ故に代表テイーム選定の準備は前大會の直後から進められてゐたといひ得やう。それが具體的な色彩を帶びて來たのは、昨年の七月十七日の理事會以來であり、神宮競技に際しての全國理事會には全國各支部から意見を持寄つて隔意なき討議を行ひ、その後この問題は專ら準備委員會で取扱はれた。その結果は今シーズンの成績に鑑みて、次の十九名が選手候補者として選出せられた。

阿部鵬二、市橋時藏、井出多米夫、大町篤、岸山義夫、近藤台五郎、後藤靱雄、齋藤才三、篠島秀雄、杉村正三郎、高山忠雄、竹內悌三、竹腰重丸、手島志郎、西村清、野澤正雄、春山泰雄、本田長康、若林竹雄。

豫選廢止の利點

以上十九名、いづれも東京、關西兩カレヂ・リーグの關係者である。其理由は、現狀に於ては大學テイームの持つ組織的連絡の强さが遙に他を拔いてゐることと、今回は個人的素質技術の强さにおいては、必ずしも民國、比律賓に勝り得ないと考へられ、自然組織の持つ强さが著しく必要とせられて居るからである。代表選手候補者は、廣く全日本にわたつて探求せられたのであつて、個人的强さにおいては、選定せられた者と對等の力を持つ者が他にも多く見出され、その點我等は非常に心强く感ずるのであるが、上述の技術上の制限の爲に、準備委員會は前記の十九名を候補者として決定したのである。

從來の代表テイームは國內の豫選を經て決定せられたのであるがそれは幾度かの經驗によつて、必ずしも最善の方法でない事が一般的に認められ、今回は無豫選で決定せられたのである。それは一面において蹴球協會の英斷であるとともに、それが可能であつたのは他面において最善のテイームを最善の狀態の下に大會に送り度いといふ熱望が、全國的に徹底した事を示すものであらう。選ばれた者はすべて我蹴球界の最尖端に立ち得るものではあるが、個個人的な能力について見ても、大會までに是非共矯正されなければならぬ缺陷と、補足を必要とする不滿足とを見出すのである。若しも今後に豫選が行はれるのであつたならば兎角全體の組織に急となり勝で、基礎不十分なために矛盾を來し、焦慮を生じて十分な組織を持ち得ないが、又は不滿足な基礎の上に組織せられることゝなつて、最大の能力を發揮し得ぬ虞れがあるが、今から大會までを目標とした場合は、その危險は著しく減殺せられ、また激しい練習も思ひ切つて出來、良好な身體的條件の下に大會に臨む事が出來やうと思ふ。一方無豫選の場合は刺戟が少く、練習を缺きはしないかと思ふ人もあるだらうが、我等は使命の重大さを痛切に感じてゐるものであつて、この點に關しては我々は十分な責任を持つ事を誓ひ得ると思ふ。また技術的に見て現狀においては練習的な試合相手の問題には豫選の有無は殆んど關聯を持たないであらう。

そして候補者中、東京在住の者は、既に二月中に一遍三回、團體としての練習を積んだ。それは主として個人の向上を目標としてされた。現在は殆んど全部の者が學年試驗中である爲、合同の練習は中止してゐる。

三月二十五日からは、關西の人人も上京して、五月末の大會開始まで續けて練習するのであるが、その間に二回、合計約四十日間の合宿練習を行つて大會に備へる豫定である。合宿は大に期待せられる、それは技術上の問題を研究するにも多くの機會を與へ、また精神的にもお互の結合を緊密にすることと確信するからである。

比華の長所短所

民國、比律賓共に未だ代表テイームは決定してゐないやうである。從つて今回如何なる陣容を以て來征するかは不明であるが、前二回の代表テイームを振り返つて考察するのも、何等かの參考となりはしないかと思はれる。

マニラの大會では民國、比律賓が決勝戰で合ひ、民國テイームは連續して覇權を持つてゐる强味はあるが、それと我が代表テイームとの結果が二對零であつたに對し比律賓は四對零で日本勝つてゐた事、又比島テイームは素晴らしく整然たる連絡が稱讃の的となつてゐる等で接戰を豫想されたが、而も結果は五對一で民國が壓倒的に勝つたのである、そしてその當時の比律賓テイームは一英人のコーチを受けたとかで、いはゆる"Combination-play"といふ點から見れば、或は民國テイームに勝るものがあつたかと思ふ。民國テイームはこれに反して、個人的强さの比律賓テイームは一英人のコーチを受けたとかで、いはゆる"Combination-play"といふ點から見れば、或は民國テイームに勝るものがあつたかと思ふ。民國テイームはこれに反して、個人的强さを可なり目立つ程用ひてゐたが、全體としては、守勢に在る時にはC・H、攻擊においてはL・I李氏の動き方を中心とするまとまりを持つてゐた。殊に攻擊における李氏の活躍は超人的で、他のメムバーは彼の動きに引きずられる樣な感があつた。少くとも支那の攻擊はいはゆる何々システムの型に入つたものではなくて、李氏の個人技を中心としての組織であつた。しかもその試合におけるテイーム・ワークは、民國テイームの方が遙かに强靭であつたのであつて……基礎的技術に民國テイームが秀れてゐた事もあるが……その點は大いに考慮を要する事柄でなければならぬ。いはゆるシステムとは、各人の行動の規範となるべき技術的組織に過ぎないものであつて、それに捉はれた場合は妻味を失ふ虞れがある。勝敗の岐れがすべてそれによつて居たとは考へられないが、暗形約であつたにせよ、その時の民國テイームは一つの纏まりを持ち、各人の行動に活氣があつたのに比して、比律賓テイームには何となく精氣が缺けてゐた事が、その勝敗に重大な關係を持つてゐた事と考へられる。

比軍の陣容如何

また前回の上海の大會においては、比律賓代表テイームには技術には殆ど何等の見るべきものを持つてゐなかつた。その前のマニラの大會で見たコンビネーション・プレーを主眼とした整然たるテイーム・ワークは影を沒し、個人的な强さをも持つてゐなかつた。その後聞くところによればマニラの大會に出場したテイームは、メムバー中二、三を除くほか大部分は殘つてゐて、比律賓にあるテイーム中では矢張り嶄然頭角をあらはしてゐるテイームであつたが、上海大會の一ケ月ばかり前に、瓜哇に興行的な遠征をした爲に、プロフエッショナルと認められて、出場出來なかつたのであるといふ。比律賓の一選手は、そのテイームが來れば民國に勝つ事が出來るのだがと惜しんでゐた。たゞ我々が不思議に思ふのは、何故にそのテイームの持つ長所が一般に擴まらないのかであつて、その點に比律賓蹴球界の弱點が潛んでゐる。今年の大會に、マニラにおける大會出場テイームの傳統を受けたテイームが出場するか、または上海の大會出場テイームの樣な組織的な强さを持たないが鬪志すぐれたテイームが出場するかは、頗る興味を以て見られるところである。

民國テイームは上海の大會にもマニラの大會に出場したテイームのメムバーを六人持つてゐた。しかしてクラブは同じく南華クラブであつた。マニラの大會で中心となつてゐた李氏はマネヂヤーとなり、R・Iがその後を受けてL・Iとなつてゐた。それと共にテイーム・ワークは個人を中心に求めず、協同動作に基礎を置く樣になつてゐた樣である。しかしてその攻擊の强靭さは、前回に比して、必ずしもすぐれてゐたとは考へられないが、一個人に支障を生じたために完全に全體が破壞される虞れは……マニラでのF・Wブレイは、もし李氏が働けなくなつた場合は、完全に破壞されたであらう……無くなつてゐたと思はれる。

華軍戰法の變化

しかしてテイーム全體としても以前に比してH・Bの機能が著しく重要性を增して來てゐたやうであつた。殊に攻守におけるL・Hの活躍は、今もなほ燒き付けられた樣に强い印象となつて殘つてゐる。更に當時においては、協同動作がその前に比して多く行はれる樣になつたとはいへ、なほ各個人の强味が非常に多く用ひられてゐたが、それとても全體の動きの調和を破るほどではなかつた。今回も南華テイームが出場するか否かは目下の處不明であるが、同テイームが出場するとしても、同テイームは一層「協同」に向つて進んでゐるであらうと想像せられる。なほ南華クラブ以外にも强テイームは多々あり、上海には各大學出身者から成るクラブがあつて、それは上海のリーグ（在上海の各國人テイーム四十以上あり）で一、二位を爭ひ、それが昨春英國へ遠征したといふ噂がある。それ故南華クラブが代表となると考へる事もまた南華クラブの特色を以て、民國テイーム全體が持つ特色であると考へる事も不合理であるが、蹴球が一般に著しく興味を持たれ、國技とも稱せらるる程である爲に、選手の肉體的素質が良好である、球によく慣れてゐる事は一般に認められる處である。それ以外に組織の持つ强さといふものが考へられるとすれば、その組織の持つ强さは必ずしも傑出してゐるとは考へられない。然しながら彼等の個人としての守備範圍の廣さやシューティングに當つての時機の判斷、球の强さとその方向の正確さは、特長として非常な强味となつてゐる樣である。シューティングの動作も可なり速くなつてをりまたますます速くなりつゝあるであらう。

我等の進むべき道

我等は常に極東大會に對して練習して來たものであつて、この際特に新しい方法を考へる必要はない。上海の大會においては、なほ未だ基礎的力の弱さが大きい障害となつたが、今回はそれはあまり問題とするほどのものではないであらう。前回は守備よりもむしろ攻擊に缺陷があつた。即ち攻擊に速力なく、一パスによつて外され

第七回極東選手權競技大會の蹴球試合に優勝した中華チーム
The Chinese soccer team, winners at the Seventh Far Eastern Championship Games.

※ 右ページへつづく

※左ページからつづく

た相手が、ゴールに達する迄には再び防禦に參加するだけの時間を與へ、基礎の技術、シューティングの力の弱さに制約せられて、變化の多い組織を持ち得なかつたために、ゆつくり攻めて効果を擧げる餘裕も持ち得なかつた。其處に焦慮を生じて、球を得ても忽ち奪ひかへさるゝ事が往々にあり、守備者を奔命に疲れさせた傾向があつた。なほその他にもかなりの缺陷があつたのであるが、それらは過去の三シーズンに、可なり滿足出來るほど矯正せられてゐるやうである。そして基礎技術の進歩の結果、全體としての組織には可なり見るべきものを持つやうになつてゐる。我々の現在なすべき仕事は、今シーズンに各テイームが示したものの長所を生かし且その不足を補はれたテイームを形成することであらう。しかして標準として、少くも今シーズン東大が持つた組織的な連絡による強さは、是非持たなければならないと思はれるが、それと共に個人の特長を生かし、機械化を避けて妻味を出す事に心掛けなければ、我等はマニラの大會における比律賓テイームの轍を踏む虞れがあると考へられる。それは我等候補者の共同の責任であらう。候補者は我等の進むべき道に各自の意見を持つてゐると思はれるが、十分な協同研究によつて正しい道を見出し得るであらう。それによつて初めて我々はテイームの方針の全き解決を得、且又コーチ專門家の得られない缺陷を補ひ得るであらうと思はれる。それによつて我々の行動に統一を缺く事は恐らくは起らないであらう。我々はテイームにとつて最善なりと認められた方針に對して飽まで忠實で、熱心に實行する事には互に全的な信頼を持つ者であり、その熱心な研究は必ず一致點を見出すであらう事を確信するからである。我々は基礎的な個人的强さにおいて、必ずしも民國に對してすぐれてゐると考へる事は出來ないかも知れないが、協同動作に必要な技術においては、むしろ優越するものを持つてゐはしないかと考へられるのである。それ故に我々が攻擊にも守備にも十一人が一體となるだけの組織に向つて進み、それに個人的なダッシュと、フォーメーションによる鋭さ等を加味したならば、かなり明るい希望を懷いて大會に臨み得るのではなからうか。それの實行には體力を要する事は勿論であり、技術的な完成のためにも可なり激しい練習を積む必要があらう。

比華兩軍に望む

民國テイームと比律賓テイームとは、殆ど毎回試合場において紛擾を起してゐる。それは實に些細なことから起るやうであるが、極東大會全部に對しても暗影を投げるものであらうし、また我々蹴球に進むものに取つては苦々しいことである。雙方が非常な熱心さを以て覇權を目指してゐるのは、我等も等しく喜びとするところであるが、紛擾を起すことは絶對に排斥したいと思ふ。マニラでは、民國の選手がフアウルされたのをレフエリーが認めなかつたのを、民國選手が怒つてその比律賓選手と口論したゝめに起り、また上海では比律賓選手が手でブッシュしたことに、レフエリーがペナルティ・キックを與へたのを比選手が不滿としたゝめに紛擾が起つたと記憶するが、今回の大會以後はそれが根絶されるやう望んでやまない。その點に關してレフエリーには權威と責任とを持つて戴き度いし、また協會はそれに對して十分の用意をして置く必要があらうと思ふ。民國と比律賓との紛擾が、今回の大會を期として後を斷つ樣になることは、恐らくは日本のすべての蹴球愛好者の願望であらうと思ふ。

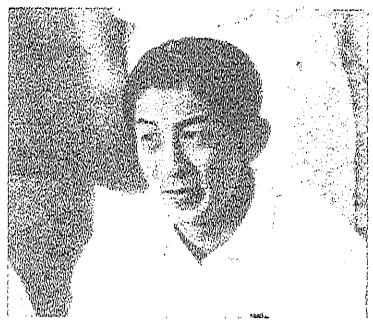
大會まで殘す處三ケ月足らずである。我等はも早多くを說くよりも、むしろすべてを實行に移すべき時期に立ち至つてゐる。それにも拘らず些か愚見を述べたのは、現在我々の辿りつゝあるコースを表明して、三百を超す我國內蹴球團體及び蹴球愛好者諸氏の一層力强い支持の下に進み度いからに外ならぬ。そして我等は我等の使命の重大さを感じて、飽までも堂々と民國及び比律賓テイームを擊破する決心を以て進むものである。

（三月六日記）

S5－3－15

蹴球界の變化を想ふ

東京帝大蹴球部　岸山義夫



色々なスポ[illegible]をその主體として盛になつてゐる以上、學生生活から離れるといふ事は自然スポーツから本意なくも縁遠くなる事を意味し、且又社會の狀態もさうならざるを得ない有樣である。とにかくスポーツマンにとつては大きな變化の時である。

▷　◁

この時に當つて學生選手生活の總決算として、過去における自分の歩みを思ふならば、種々な感情の交錯した複雜な氣持になるのを免れない。がその自分の歩みを通じて一貫して强く感ずるのは、何といつても蹴球そのものゝ明らかな發達であり進歩である。それを思ふ時大きな喜びは、今この時に當つての自分の唯一の慰めである。然し單純なプレイに終始してゐたころの蹴球も、またその時代のものとして貴い思ひ出である。十一人の者の各一部分には或る程度のまとまりはあつたとしても、チーム全體としてこの結合はなく、F・Wが奔命に疲れて居てもF・Bは後の方に突つ立つて、失業者のやうにボカンとしてゐたのも其の頃である。比較して見るならば實に見違へる發達したものである。巧緻なフット・ウアーク、更にチーム全體の有機的結合が强く叫ばれ蹴球は益々複雜化しようとしてゐる。其處に非常な努力と困難を伴ふだけに、また別の面白味を有してゐる。その愉快な蹴球も最早今までの樣な緊張した試合はする機會が無いであらうと思ふと殘念であり一抹の悲哀を感ずる。

▷　◁

常將軍といはれ、黃金時代と呼ばれた東京帝大チームにあてずつとプレイすることが出來たのは、自分にとつてこの上ない幸福なことであつたと喜んである。そしてその成果の蔭には如何なる苦しみが伴つてゐるにもせよ、それはこれから先き常に快い懷想を與へて與れると信じてゐる。

今までの數多くの試合の中で、今なほ强く印象に殘つてゐるのは、自分のポジションがF・Bであり、假令その多の原因は他にあつたとしても自分の失策が直接相手方の得點に影響する處大である爲、責任上ぞうも負けた試合である。殘念だつたのはこの前の極東大會の關東豫選のW・M・Wとの試合であつた。タイムアップ前二、三分までは、一對零でリードしてゐながら一點入れられ、延長戰の結果二對一で負けて了つた。この時は少し策を弄し過ぎた傾向があつたがW・M・Wが遂に日本代表となりフイリツピンを破つて最初の勝利を得たのは大きな刺戟として喜びに堪へなかつた。そして再び機會は巡つて來た。この五月に東京で開かれる極東大會こそ、日本にとつては最も有利な條件のもとにおかれた機會である、未だ得ない大きな收穫の時を空しく逃して悔いを殘さぬやうにしたいものである。

▷　◁

—昨年の上海遠征も外に現れた結果は慘敗に過ぎなかつたけれど、東洋一と誇る彼等の本場に近いプレイを見て、それが自分等の考へた揚句に求めてゐたものと全然合致してゐることを知り、大きな自信を持つて歸り、その後その完成に努力を續けて來たのである。

最も新しい記憶の中に、昨年十二月二十五日、對關學の東西對抗試合がある。最初であつただけに兩方共に少しく固くなり關東關西の特色あるプレイを十分に表して試合する事が出來ず、圓滑味を缺いであたがとにかく近來稀な好試合として愉快なものであつた。

斯く懷想の絲を手繰つて來れば限りが無いが、死兒の齡を數へるよりもこれから更に更に發達して行くべき蹴球界の爲に其の將來を祝福し健全なる進歩を祈るものである。

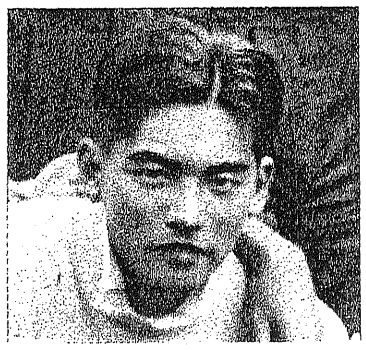
S5-4-15

學窓を去るに臨んで

各大學卒業選手の感想

O・B選手も熱を持て

關西學院蹴球部　齋藤　才三



あらゆる運動競技において、學生時代には自己の全力をその試合に又練習に傾注し、又そのマッチを通じての勝負に多大の感激を味ふ事が出來るものである。

私も關西學院の蹴球選手生活を通じて、母校を背景として或ひは勝利の快感にひたり、或ひは敗殘の涙にむせんだ事は數度ではなかつた。

即ち「母校の名譽のために」といふ言葉は、われわれ若き學生選手たるものの上に如何に貴い言葉であつたらうかこの意味において學生選手生活とお別れせねばならぬ事は、私にとつて非常に淋しい或物足りなさを感ぜしむる一面、新たにO・Bの一員として蹴球そのものを樂しむことが出來、倶樂部を背景として蹴球界のために幾分なりとも貢獻を成すべく努力の出來ることを心から喜んでゐる

▷　◁

この時に當つて私のO・Bプレーヤーとしての態度といつたやうなものを考へて見るも、また意義のないことではなからうと考へる。

さて私の中學及び學院時代を通じて對O・B倶樂部の試合におい、常に或る不快と不滿を抱かざるを得なかつた事を思ひ起すのである。

これは一に日本のO・Bプレーヤーが現役選手を輕視し、自分よりおとつたものとして取扱つたための樣で、また一面彼等が學生プレーヤーに比して學校といふ樣な背景即ち對立的意識を持たないために陷りやすい、戰鬪意志の不足と、その試合をあまりにも遊戯視し勝負を無視したためではなかつたらうか。

その證據には、これ等O・B軍に比して同じO・B軍でも神戸外人チームとの試合においては、レフェリーの態度はさて置き、常に勝つた時もまた負けた時も、或る氣持ちのよい滿足を持ち得たからである。

對外人といへば、絶えず外人對日本人といふ立場において試合をなさねばならなかつたこともあらう。併しお互に蹴球そのもののために全力を盡して闘ふことが出來たからであると私は信じてゐる。

▷　◁

又O・B倶樂部チームは學校チームにおける如く、所屬チーム全團が或る一つの統一された氣分になり得なければならないと思ふ。O・B倶樂部も過去における如く個々の集りでなく、或る統一された蹴球機關であり、その上各人の技術の進展、體育の向上のために利用さるべきものだと考へる。

從つて日曜、祭日の休暇は勿論、寸暇をも利用してあのなつかしき球に接すべきである。

かの蹴球王國英國の國際ラグビー・ゲーム、即ちイングランド、スコツトランド、及びアイルランド、ウエールス等のゲームにおける、現役選手を凌ぐO・B選手の涙ぐましき活躍を思ひ起す時、日本のO・B選手も寸暇を利しての練習と、絶えざる研鑽とにより、より以上のプレー上の生命を保ち、常に斯界の尖端に立ちて、現役選手を鞭撻すべきであると考へる。

この意味において、私も貧弱ながら一O・Bプレーヤーとして、今後事情の許す限りグラウンドに出て、グラウンドの蟲であり、またボールを追ふ蟲でありたいと切望してゐる。

第二のコースへ

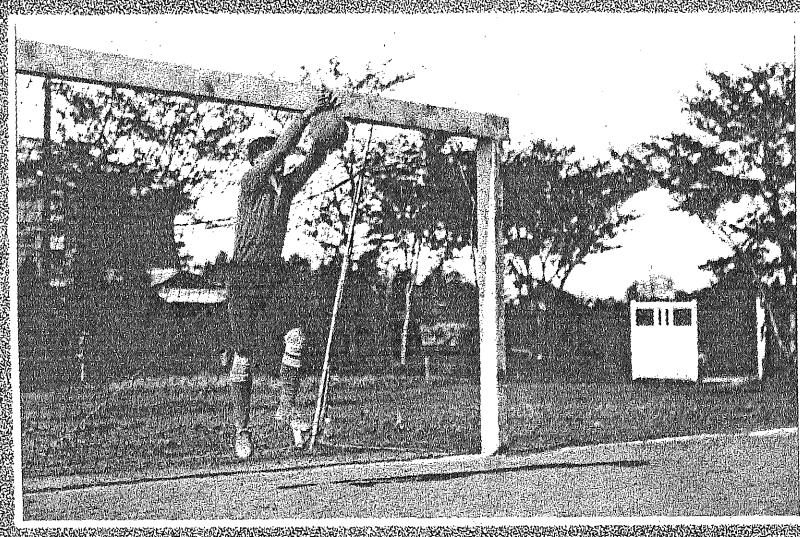
關西學院蹴球部　後藤　靭雄

いよいよ卒業といふ事になつて、出來得るならば一生涯でもやつてゐたいとさへ思ふ樣な、あの實に愉快たつた學生選手生活からも、たうとう無理やりに引離されて了ひました。これがために喜ばしきはずの卒業も私には寧ろ哀愁の思ひで一ぱいであります。これは餘りにも生意地無しのいふ樣な事かも知れない。何故ならば眞の人生ともいふべきコースは今から始まるのであるから。だが然し吾々學生スポーツマンに取つては、この學生選手生活なるものが如何に愉快なもので有り、又それによつて吾々は如何に多くのものを得ただらうかといふ樣な事を考へるならば、此の學生選手生活なるものは吾々の人生の中最も重大なる一コースとして、忘れ難いものである事を信ずるのであります。今此のコースを終へて、今度新たに實社會といふ次のコースに移らんとしてゐるのであります。この時に當つて學生生活の數々の思ひ出を回想するのもあながち無意味な事ではなからうと思ひます。

◇

とは又大げさな前置れで有りますが内容は過去四年間の學生生活における思ひ出の二、三を書くのみに留めます。さて書き出す前に今一つ御斷りして置かねばならぬ事は、學生時代の思ひ出と申しましても、蹴球をやつてゐた關係上、從つて蹴球に關するものばかりを書く事に致します。

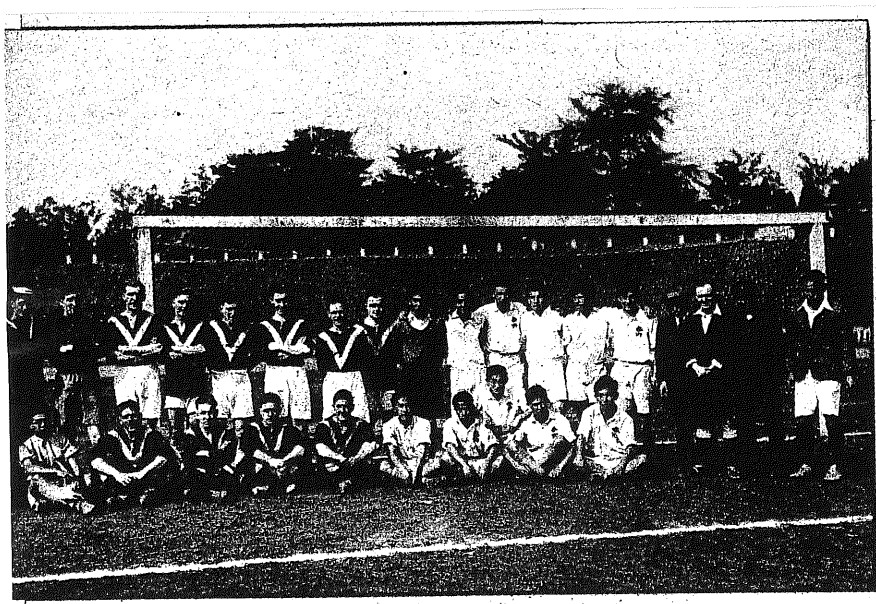
最も氣持の良かつたゲーム……これは上海遠征の時の對交通大學戰であつた。不幸二對零で敗れたが、終始あんな愉快なゲームをした事は無かつた。なほ當日のレフェリーは有名な李惠堂氏だつたが、流石は李氏、彼のレフェリー振りには感服した。



極東大會蹴球代表候補チームは目下石神井グラウンドに合宿第一期練習を行つてゐる寫眞（上左）タックリングの練習（上右）コンビネーションの練習(中左)ゴールキーパー齋藤君のセービング(中右)バックスのタックリング(下)代表候補者チーム

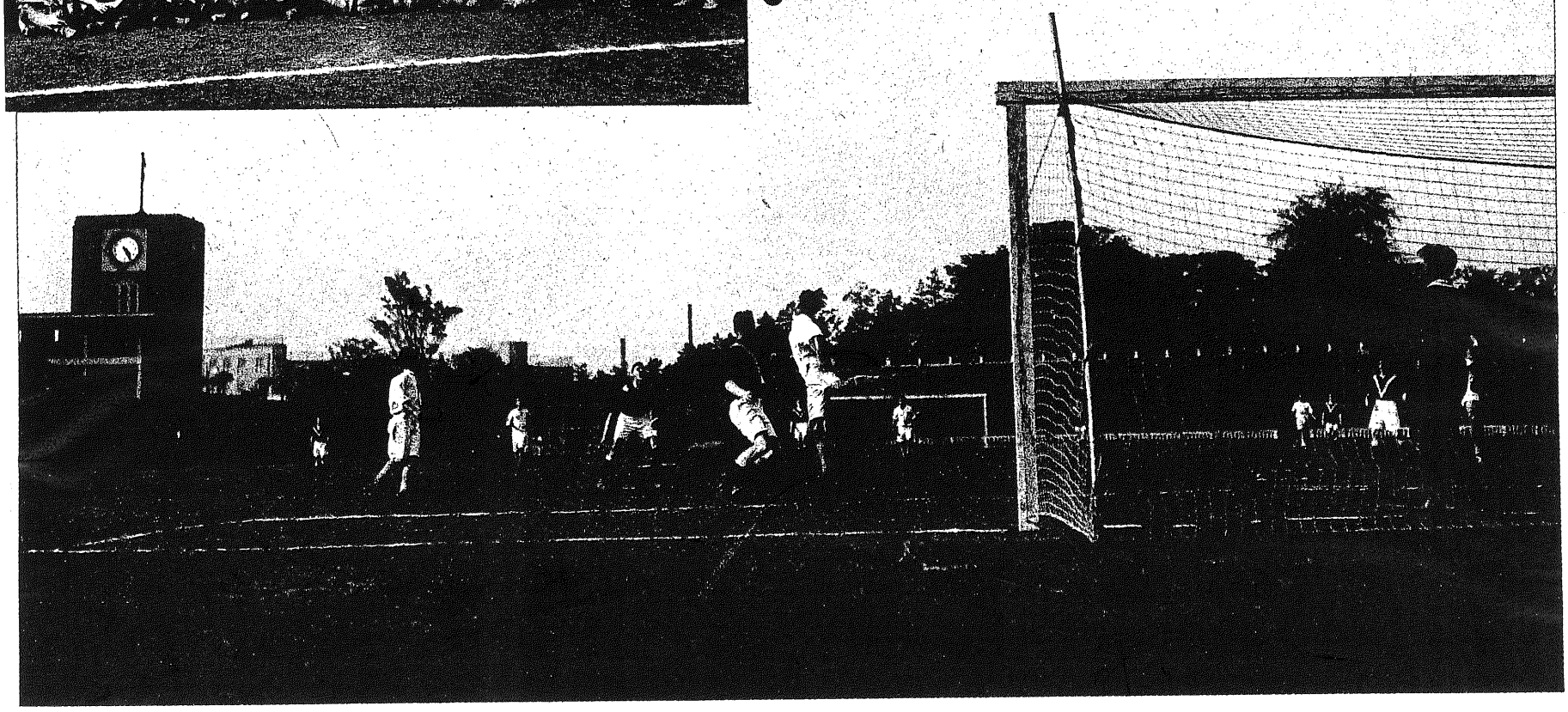
The soccer team that will represent Japan at the Far Eastern Championship Games is now practising at Shakushii. Top-Left: Tackling practice Top-Right: Combination practice. Center-Left: Saito, keeping goal. Center-Right: Backs practising tacklion. Bottom: The team.

S5-5-1

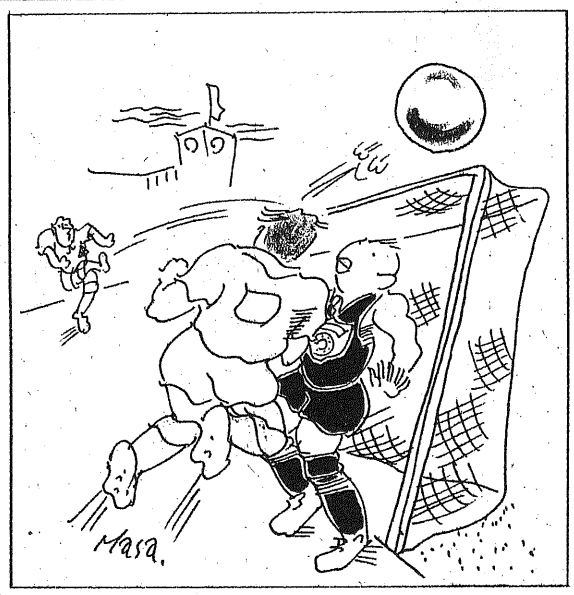


極東大會蹴球代表候補チームと英艦コーンウオール號乘組員の蹴球試合は四月十八日神宮競技場で擧行一對零で日本チームの勝となつた寫眞（下は英艦側FWの强襲と(左)兩軍選手

General view of the soccer game between a team from the H. B. M. S. Cornwall and the Japanese team that will play in the Far Eastern Championship Games, at Meiji Shrine, April 18. Left: The two teams.



S5-6-10



固いあたま　　三宅當也

日華蹴球の後半四十二分、日本左タッチ・ライン近くでフリー・キックを得たが、篠島のヘッディング強くゴールを越えてしまつてダー。スタンドから少し頭が固すぎたね」。

比島なほ鋭鋒をむけ十六分R・Iウガルテ(兄)のシュートした時G・K齋藤足をすべらし、辛くもクリアして餘勢で前に倒れC・Fパチエコ果敢のチャージとなる。齋藤は倒れたまゝ辛くも危地を脱した。

引續き比島攻勢にあり、十八分日本のペナルティ・エリアに近くフリー・キックをとつてから猛襲して日本の守備を攪亂したが R・H野澤の一蹴は守勢を轉じて攻勢に移してしまつた。このフリー・キックはやはり小策を弄するよりもゴール・シュートすべきではなかつたか。

◇

二十二分、日本は本田のフイードしたのをL・W春山からゴールに近く出せば、C・F手島強剛球で襲つたが、G・Kサントスの美技に止み、左のコーナー・キックは無爲となる。この直後比島はC・Hメデイナからウガルテ(弟)ウガルテ(兄)と好連絡に進めて行つたが、L・F竹内の快技これを潰し比島右のコーナー・キックあつたが無爲。續いてC・Fパチエコやや高目のシュートをしたが、G・K齋藤よくクリアす。中央に一進一退して二十八分比島はC・Hメデイナの出した球を右隅に近くとつたR・Wウガルテ(弟)強蹴してゴールを襲ひ、C・Fパチエコ物凄いチャージを試みたがG・K齋藤よく粘つてゴールを許さず。

日本は三十分市瀬ドリヴルを強行し、H・B線を潜入して深く出ればC・Hメデイナ、R・Fペレッに挟撃のタックルを食つて止みこの直後R・H野澤強蹴してゴールを襲つたが惜しい所でアウトとなる。日本のH・B線が直球でゴール・シュートするのは比島にとつて餘程の脅威であるらしい。比島は三十一分逆襲の後右にコーナー・キックを二回連取して、第二球は好蹴となりR・Iウガルテ兄ゴール右寄りでとつてシュートしたが僅かの所で外れた。この場合何も強蹴するの要はない、サイド・キックで曲球とした方が得點の可能性は多かつたらうと、敵ながら惜しまれた。

◇

日本は三十三分C・H竹腰強い直球を呈せばG・Kサントス見事に潰し、先づ危地をのがれた。(日本は本田傷いて退き後藤L・Hに出で、井出入つてR・Fとなる)

三十八分比島は右のコーナー・キックをとり、ウガルテ(弟)好蹴して日本のゴールに近く落つる時C・H竹腰の強いヂャムプは進出密集した比島F・Wよりか早くヘッディングして潰し、之で日本進出比島をそのサイドに追し込んだ末四十一分L・I市橋、C・F手島の好連絡は、比島H・B線を潜り抜け、F・B線も巧みに抜いて左寄りから市瀬シュートして得點を加へ、7—2と開いてしまつた。尙日本は強襲したがG・Kサントスの妙技よくこれを封じ、以後比島には全く機會なく日本は初めて心地のよい勝を制した。比島のルーズなシステムと、日本の鋭利な攻撃とがこの結果をもたらすのは餘りにも當然なものと言へる。

中華 5 比律賓 0

(比島)		(中華)
モンフオルト	FW	葉
マルチネツツ		孫
パチエロ		戴
ウガルテ(兄)		陳(家)
ウガルテ(弟)		曹
メデイナ	HB	陳(鎭)
モロ		黃
ヘレデイア		梁
ヴイラレアル	FB	李(寧)
アエサ		李(天)
サントス	GK	周
2	CK	7
10	FK	11
14	GK	17

從來本大會において比華對戰の時は試合中に喧嘩を演ずることが珍しくはなかつた。今回は大會前の三國會議の際に種々注意を促した結果かまた双方の自制心が培はれて來たためか何等問題なく終つたことは實に有難いことであつた

【前半】華3—0比

比島は開始直後鋭い攻撃を開始したが鋭い攻撃もゴール近くなつての決定力は案外鋭さを持つてゐない。つまりゴール・ゲッターがないのだ。

然し六分C・Hモロの送球から得た機會に、主將であるL・Iマルチネツツの猛蹴がゴール左側をスレスレにアウトして了つたのは惜しい。十一分中華はL・F李(寧)の長蹴を、R・I陳(家)巧みなトスで送りL・I孫強蹴すればG・Kサントスよいモーションを見せたがフアンブルしてゴールインとなり中華先づ一點を先取。

十三分L・Iマルチネツツのパスをウガルテ(弟)とつて好蹴を放つたが、中華のG・K周賢言は昭和三年一月交通大學チーム來朝の際このフイールドでも經驗を積んではゐる立派なキーパーで得點とならず。

十七分ごろから中華のフオーメイションも確立して一進一退の接戰となり兩軍ゴール直前に迫ること度々であるが後陣必死の奮鬪で入らず。中華は廿七分比島サイドにフリー・キックを得たが無爲、つゞいて左にコーナー・キックをとつて華の好蹴はゴール右前に出で、もつれた中から轉げ出た球をR・W曹の見事なセンターにC・F戴ブッシュしてゴールイン。更に卅二分右から攻めてR・H梁のフイードしたのをR・W曹逸したがフオロウしたR・I陳(家)とつてゴールを陷れ一點を加ふ。

【後半】華2—0比

比島はL・Wモンフオルト退きパチエコL・Wとなりメンデツ入つてC・F、L・Hモロ退きガルシヤ入つて陣容を更新す。開始直後中華は左にコーナー・キックを得たが無爲。比島はL・Iマルチネツツ右側に球を寄せて、G・K周が飛び出したあとの無人のゴールに臨んだが凡蹴して止む。比島は焦つて度々迎へる機會を自ら潰した。十分、十三分の機會も、十五分L・Wパチエコのパスで好位にあつたC・Fメンデツの場合もみなそれである。

一方中華もオフ・サイドを平氣でやつて、これも機會を自ら破壞してゐた。十六分、十七分の場合などみなそれである。

この頃から比島は戰法をかへて頻りにチャージ・ボールを出して僥倖作戰をとり出したが、F・W線のモーション鈍り中華後陣の快走に効果は更にあがらない。(二十四分中華はL・I陳(家)退き、陳(光)入る)、二十五分中華は俄然積極的に攻撃に入りR・W曹の送球をC・F戴強蹴してゴールを襲ひG・Kの落した隙にL・I葉プッシュで得點、更に廿六分R・W曹から出た球をR・I孫好蹴して中華5—0とリードす。(中華は卅一分葉退き馮入る)。兩軍に疲勞の色見え勝敗は自づと明瞭になつたので幾分ダレ氣味となり、四十三分比島は中華のペナルティ・エリアに近くフリー・キックを得、ヴイラレアル好蹴したがG・K周の美技で止み以後凡戰をつゞけて比島は零敗を喫した。

日本 3 中華 3

二十九日午後三時、千駄ヶ谷側に陣した中華のキック・オフで開始。この一戰の豫想はまづ五分と五分、日本がゴールを先取すれば勝利を得ること決して困難でなく萬一中華に一、二點得られても、必ず何とかなるだらう、今度といふ今度はその儘で引込むことはないからといふので、今までにかうした強い氣持で本大會に臨んだことは全くなかつた。

果然豫想はあやまたず日本は堂堂と優勢を持しゲームを進め試合は正に六分と四分であつた。異なものではあるがゴール・キック日本の十六に對し中華の二十九は、日本が常に積極的に出て攻勢を保つてゐたことを立證するに足るものである。

【前半】日1—1華

中華は先蹴で直ぐH・B線を拔かうとしたが、C・H竹腰巧みにとつて日本進出、こゝで兩軍は暫らくタッチに粘つて機をうかがふこの時に中華L・H陳(鎭)のキックで球は日本の左側に出る。この球は中華の頼みとするR・W曹に渡つたが、曹があせつたのに乘じL・H本田直ぐ奪ふ。次で球を若林とつてロング・パスしたがアウト。四分ごろL・I若林、L・W春山の好連絡でこの試合最初のショットを春山試みたが、中華よく守つてから試合は本筋に入つた。

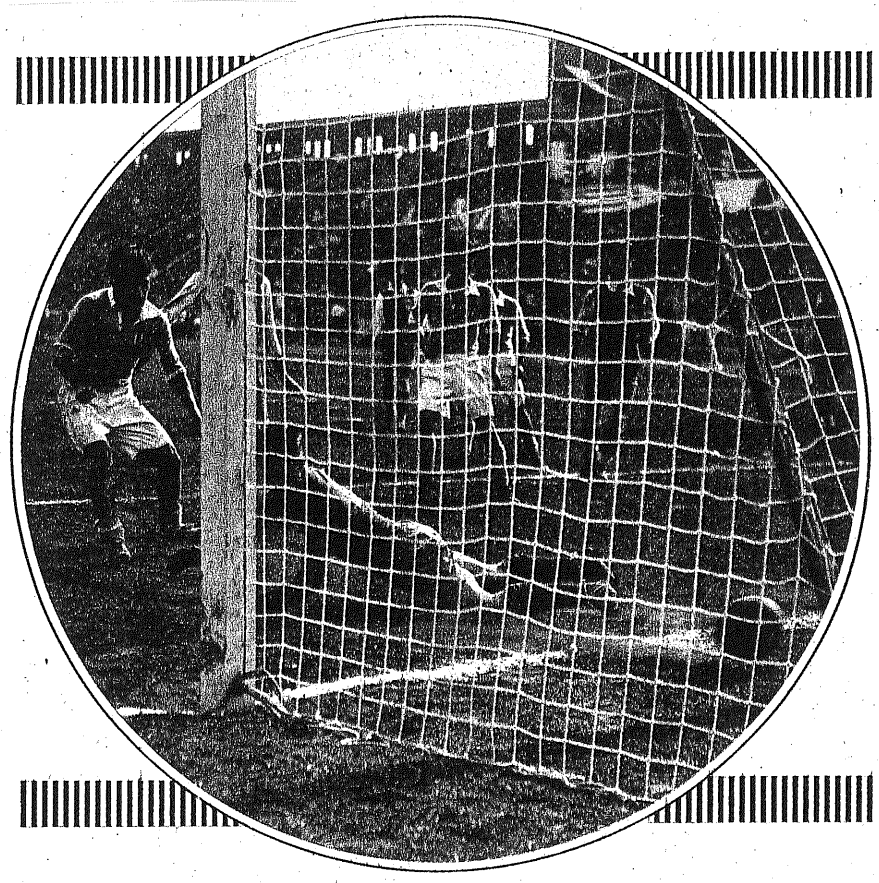
中華はロングで急展開を期したが、効果なく、球は日本方に多い五分本田からのフイードを受けた春山はセンターし、左にコーナー・キックとなつて竹腰シュートしたがG・K周の好捕となる。

八分L・W春山の長送球をR・I篠島左にさばき、C・F手島潜つてとり、サイドにあてゝゴールを襲つたがアウトとなる。中華に顏りにR・W曹を先頭として攻撃陣を進めようとするが、日本の好守と曹の凡失で中華は有効な攻撃の機會を迎へぬ中に二十分を過し

(日本)			(中華)
春山	林	FW	陳(光)
若林	島		孫
手島	島		戴
篠島	山		東(家)
高山			曹
本田	腰	HB	陳(鎭)
竹腰	澤		黃
野澤			梁
竹内	内	FB	李(寧)
後藤	藤		李(天)
齋藤		GK	周
	7	CK	3
	13	FK	4
	16	GK	29
	1	PK	0

てしまつた。日本はこの間十分、十五分に機會があつたが無爲。十八分中華のサイドにフリー・キックを得後藤好直球を放つたが右にカーヴしてアウト。十九分、ゴール十四、五ヤード前から若林シュートしたが球速なく周の好捕となつて止む。二十三分中華又もR・W曹にチャンスを作らせんとして突進するを、L・F竹内果敢なタックリングでこれを前送すれば、L・W春山とつて左側から出でゴールに近く捌けば、C・F手島快蹴して堂々と日本は一點を先取した。

その直後中華は猛然と逆襲したが後陣よくこの危機を外す、中華尙も強襲するが、H・B線のバック早くこれを潰して機會を與へず廿七分手島はH・B線を潜り抜けF・B線も破つてG・K周の飛び出したゴール全面の隙を見て破らんとした刹那、F・Bの急追走にあつて手島轉び機會を逸する。(中華は陳(家)傷つき葉入つてL・Iとなり孫R・Iにまはる)。廿九分日本は左にコーナー・キックを連取して猛襲を浴せたが中華辛くも支へて盛返し、卅二分R・W曹強剛球を放つて日本のゴールを脅かし、齋藤が止めた時L・I孫チャージして日本危機と思はれたが密集して辛くものがれ、中華は、なほ好機を得たがオフサイドで自ら潰し去る。三十四分ごろから中央線を挾んで接戰を續け、三十八分R・W高山見事なタッチ・プレイで進みL・H陳(鎭)の強襲を避けてセンターした球は風を食つて僅かに流され、C・H黃之を奪つて直球で拔けばR・I孫うけてG・F戴にパスし、戴ゴール眞正面から躍進、L・F竹内タックルを試みたが、二度目には彈き飛ばされて轉倒した隙にゴール一ヤード前からブッシュ、G・K齋藤もかうなつてはその妙技を揮ふの餘地はない。中華は日本に比して數少いチャンスであるが、獨特のフット・ワークと巧智のプレイを平然として行ふからゴール前は確かに日本よりも強い、以後兩軍ともよく攻めよく守つて同點のまゝハーフタイム。



二十九日に行はれた日華蹴球戰の光景
Japan-China football game, May 29.

※左ページからつづく

※右ページへつづく

S5-6-10　第9回 極東競技選手権大会

蹴球選手權競技

日華各一勝一引分、比島二敗

山田午郎

我蹴球チームが大正六年の芝浦大會に初めて參加してから十三年を閲し、邦土に比、華の兩軍を迎ふることこゝに三度、何ごとも三度目の譬へに洩れず、見事に比島を一蹴し强剛中華と引分けて、たとへその選手權の決定を見なかつたとはいへ、やがて日本の蹴球界が極東の覇を成すべき端緒を立派につかんだ。もとよりこの小成に安んずべきではないが、既往十三年の長い長い忍苦の斯界を想ふとき、萬感交々、そゞろに目がしらの熱くなるのを覺ゆるもの、ひとり筆者のみではあるまい。

日本7比律賓2

【比】		【日】
モンフオルド	FW	春山
マルチネツツ	FW	若林
パチエコ	FW	手島
ウガルテ	FW	篠島
ウガルテ(弟)	FW	高山
モロ	HB	本田
メディナ	HB	竹腰
ヘレエデイア	HB	野澤
ルイス	FB	竹内
ベレツ	FB	後藤
サントス	GK	齋藤

4	FK	8
8	CK	10
22	GK	9

日本對比島の試合は、試合開始の直前に猛烈な驟雨に見舞はれ、定刻三時を過ぐる廿分あまり、漸く小降りになるのを待つて開始された。豪雨一過、フイールドに埃は立たないが、放り出されたバナナの皮を踏み付けたときの樣に激しくすべるのでコンデイシヨンは頗る悪い。たゞ風のないのが拾ひものだといふ程度で兩軍の苦戰が思はれる。トスに勝つた日本は原宿側をとり、比島は千駄ケ谷側をとつてパチエコがキツクオフした。

【前半】日5—2比

一分まづR・I篠島は比島のゴール直前にパスし、G・F手島、L・I若林、L・W青山と斜に一線を描いて進出したが、比島のR・Fペレツ辛くもこれをカツトして最初の危機を脱した。然し日本は比島サイドから一歩も退かず攻め立てて三分右にコーナー・キツクをとり、高山好蹴してチヤンスと思はれたが、比島のL・Fルイスに外され次で比島進出せんとするを、日本は進出してゐたR・H野澤がとつて强蹴を放つたが比島のゴール破れず、更に二回試みたが遂に遮られて止む。比島これから頽勢を挽回し、マルチネツツを核心として左側から進出し、六分左にコーナーキツクを得、モンフオルトのトウキツクはよく伸びてゴール前を過ぎたが、好位にあつたR・Iウガルテ(兄)がこれを好ヘツデングで高くゴール前に出せば密集の中にあつたC・Fパチエコ受けてゴール前左に寄せて猛直球を放つて一點を先取した。日本のフオーメイシヨンは確かに整備してゐなかつた。又比島は故意かそれとも過ちか、オフサイドを平氣でしてゐた。

比島は勢込んで猛襲を浴せる。八分中央線を越えて日本のサイドにあつたR・Hヘレエデイアの鮮かなヘツデングを皮切りに球は地上を離れ。日比入り亂れてヘツデングを應酬すること數回。比島側は長身と强いバネを使つたジヤムプによく頸筋を用ひたヘツデングは光つて見えた。そのうちにヘレエデイアの發達した球は。R・Wウガルテ弟にわたる。冴えた技は見せないがウガルテ弟は堅實なプレイヤーである。本田の追走タツクルの試みも効なく高目の球でR・Iのウガルテ(兄)に出されてしまつた。ウガルテ(弟)はヘツデングでゴール前に捌く。日本はF・Bの竹内、後藤と球を追つてカツトせんとしたが無駄に終り、C・H竹腰のバツクも一瞬の差で間に合はず、C・Fパチエコはゴール斜右前から曲球性の球でゴールを衝いた。G・K齋藤はモーションを起したが、辷る地面に足を奪はれて全く施すに術なく、右側一杭位を距てゝゴールを破られてしまつた。2—0の開きは大きい。觀覽席は啞然として聲もない。

◇

しかし十分に至つてR・W高山は比島ゴール前に捌くを不利と見てか竹腰に送り、更に本田に出された球はマークを外してゐたL・I若林とつてR・Fペレツのタツクルを避けてゴールに迫り强蹴して左隅を破る。此直後比島はR・Hヘレエデイアの送球を中央に寄つてゐたウガルテ(兄)とつて快蹴したがゴールの左上角を彈いて返る。日本は竹腰これを取つて攻勢に移し壓迫を重ねて、十三分R・W高山タツチに添うてドリヴルしL・Hモロの强襲を巧みに外し、深く出し過ぎたと思はれたがよく返すをL・I若林受けて栗鼠の如くに比島後陣の間を縫うて出で、ゴール直前からシユートしてこゝに同點となる。

日本の巧みなショウト・パスは比島の比較的脆いデフエンスの前に實に偉力を示してゐる。比島はこの頃から完全なるマークを期して頻りに動くが日本の快走快技好聯絡には全く手の下しやうもない。日本のフオーメイシヨンは完備した。これに一際目立つ優れたコンビネーシヨンに優劣の差は明瞭となつた。日本の攻撃は鋭角的に而もスピーデイとなつて來た。比島は自然吊られてゲームは急速な展開を見せるやうになつた。

十五分にも日本に好機があり比島益々窮境に喘ぐ。十六分手島の捌いた球を若林とつて强球を放つ球は地上を縫うてゴール直前に到つた時G・Kサントスはセーヴせんとして辷り、體を前に倒し一旦彈いたが、球はゴール直前を轉々してゐる。手島は比島後陣のバツクせんとする間を潜り拔けて躍り込み、篠島もこれに續いて比島のゴールは全く壞亂し、G・Kサントス轉倒したまゝ球を捌かんとする間にL・F焦つてミス・キツクし、味方のゴールを破つて日本は3—2とリードした。比島L・Fのミス・キツクはなくとも、手島篠島の時を移さぬ適時進出はゴールを當然收めてゐた筈である。

◇

十八分L・H本田の送球を春山左隅に寄せてゴール前に直球性の球で送り、F・W線一齊にチヤージしたがG・K果敢のセーヴはよくこの危地から脱した。比島この頃から頻りにロング・パスを以て前進し、中央邊に双方入亂れて大接戰となる、日本は竹腰の率ゐるH・B線がよく活躍し、比島はL・Hメデイナ快走、しかも敏速に立ち廻つて日本のR・H野澤の堅實なプレイと一騎打するあたり實に見事なものであつた。

然るに二十二分、日本はそのサイドに進出してゐた比島を野澤の一蹴で排し、中央線邊でとつた若林すかさずドリヴルで强襲に出で比島の左前十四、五碼邊から强蹴すれば、G・Kサントス體を左にかはす間もなくゴールインとなつて日本は4—2と差を作る。比島逆襲するがF・B後藤、竹内の死もの狂ひの奮鬪はよく比島の機會を潰し、廿五分日本は左右にコーナー・キツクをとつて猛襲したが比島のバツクス善戰して進出、又も中央線を挾んで接戰を續けた末日本は卅二分竹腰が中央線近くで巧みに捌いた球を若林ゴール前に送れば、少し無理と思はれた手島は比島の後陣を强引に潜り拔け、クリーン・シユートして更に一點を加へて5—2、日本の勝利を決定的のものとしてしまつた。

これ迄雙方の作つたチヤンスは殆んど同數位であつたが、ゴールの決定力は日本が遙かに優れてこの差を生じたといふ事も出來る。比島はその後一時意氣昂らなかつたが三十四分漸く中央を破つて日本のゴール直前に迫つたが日本後陣の追走急なるために凡蹴して終る三十九分日本は手島のシユートした時篠島チヤージしたが僅かに遲れてG・Kサントスのノツクする所となつたが高山とつて左に捌くを若林前進してとり直球で襲つたがサントス幸運の守備となつて遂に止む。つゞいて日本は高山、野澤とわたつた球を若林ゴール左直前でシユートしたが惜しい所で外れ、四十二分比島R・Hの逸球を拾つて若林ドリヴルに出で左側からゴールに寄せて行つたがこれ迄ミスの多かつたルイス好タツクルしてこれを潰し、日本は更に手島篠島と續いてゴール・シユートしたが、比島は密集してゴールをカヴアしてのがれハーフタイムとなる。

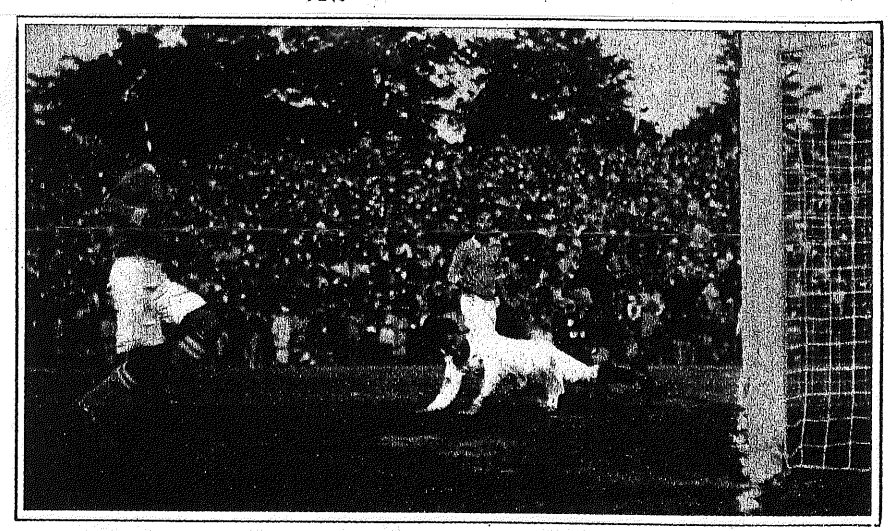
【後半】日2—0比

後半に入つた。然し勝負は前半既に決したと言へる。比島が如何なる策を算しやうともこの頽勢をどうして挽回することが出來よう然し比島は決してゲームを捨てなかつた。貴い競技精神が見られて嬉しかつた。

六分日本は芝生スタンド側にF・Kを得てから竹腰、篠島とわたる時、比島ゴール前密集となつてL・Fルイスはタツクルを損じてミス・キツクし、C・F手島先づチヤージし、つゞいて篠島も飛び込んでゴールイン。

比島のデフエンスは矢張り脆い不振の比島も八分にはR・Wウガルテ(弟)長蹴してゴールを襲つたが僅かの差でゴール・アウトとなる。斯く比島は時に散發的のシヨツトを放つのみとなつたが、スピードある猛襲を時々敢行する。(十四分日本は若林退いて市瀬入る)。十五分R・Wウガルテ(弟)のゴール直前送球でF・W線一齊の進擊などそれだ。この時日本はL・Fよく危機を外して事なきを得たが

※右ページへつづく



二十五日に行はれた日比蹴球戰の光景
Japan-Philippines football game, May 25.

S5－6－10

中華民國は強い

比律賓蹴球監督　カルウオ氏談

比島としては比較的良いテイームをもつてきたはずだつたが雨のあとでグラウンドの濕つてゐたことがショート・パスを得意とする比島に敗因をつくつてしまつた。日本テイームはテイーム・ワークにおいてわがテイーム・ワークより遙に勝つてゐた、が個人的技術に於ては7—2といふスコアが示したほどに違つてゐなかつた。しかし日本のフル・バツクが兩方ともそろつてゐたので幾度か好機會を得ながらその都度蹴り返へされてしまつた。

◇

中華選手は僕の眼でみてさすがに幾多の大ゲームに經驗を積む大テイームであつた。尤もテイーム・ワークでは日本テイームに劣つてゐたと思はれるが、個人的技術において三國テイーム中斷然光つてゐた。日本の前衛が持つてきた球はゴール前でパスしてゐる間にこちらで十分防禦陣をつくる餘裕がのこされてゐたが、中華テイームときた日には何ら防禦の餘裕も與へず ポンポン蹴り込んで來られたのには大いに弱らされた。

◇

日華テイームを比較してみるとゴール・キーパーは伯仲、フルバツクは日本勝り、ハーフは中華テイーム・ワークは日本、個人技は中華が斷然光つてゐた。こんどの日華優勝戰は 戰前私は二對一で中華の勝ちか二對二で引分になるだらうと想像してゐたが、大體豫想通り大接戰の後引分けにをはつた。

【後半】日2—2華

日本は一分本田の出したチヤージ・ボールから左にコーナー・キツクをとり、春山の好蹴に前出してゐたC・H竹腰ヘツデングでゴールを襲つたが高くアウトとなる日本は矢繼早にまくし立てるので中華の陣容は整はない。三分中華のサイドにフリー・キツクを得本田の好蹴で中華の後陣亂れた際野澤ゴール・シュートしたがアウト。更に四分後退してゐたR・I篠島から出た球は前出して好位置に在つたC・F手島とつたがL・F李(寧)に襲はれて空し。攻擊の機會を得られず惱ノ でゐた中華は五分初めてR・W曹に球が出で一波瀾起すかと思はれたが、C・H竹腰の美技で外し、七分中華はL・I葉とL・W陳(光)好連絡で敢進、G・K齋藤の飛び出た隙に陳シュートしたが竹内のゴール・カバーで中華絶好の機會を逸する。十一分日本は篠島、高山とパスし、高山ゴール斜横から强シュートすれば中華のG・K周轉つて防ぎ、そこへ篠島、手島が後先を爭ふチヤージをした時L・F李(寧)これに應ぜんとしてバツクしたがンブルしてゴールを許したかも知れない、稀に見る物凄い强直球であつた。二十四分中華の右隅にフリー・キツクを得高山のキツクは奏効ししなかつたが、この直後L・H本田フイードドレL・W春山强直球でゴールをねらつたが惜しくもバアを彈いて返へる。

中華は優れたフツト・ワークを持つてゐてもH・B線とF・B線は我がショウト・パスの戰法に惡戰してゐる。二十八分L・H本田のパスをL・W春山受けたが、中華はR・H梁とR・H李(天)と並進し、挾擊せんとするので春山は本田にバツク・パスした、本田はとつて蹴を牽制せんとする、實に放膽なプレイである、中華は敢て寄り附かうとしない。本田は機を見てチヤージ・ボールを出せば、手島ゴール右前にあつて逸し中華のL・F李(寧)が蹴返すのを竹腰ヘツデングで前送すれば、高山もヘツデングを試みてゴール前に落し高山自ら之をチヤージし、つゞいてR・I篠島突進ブツシュしてゴールを收め日本三度目のリードとなる。(中華は李寧退き馮代る)

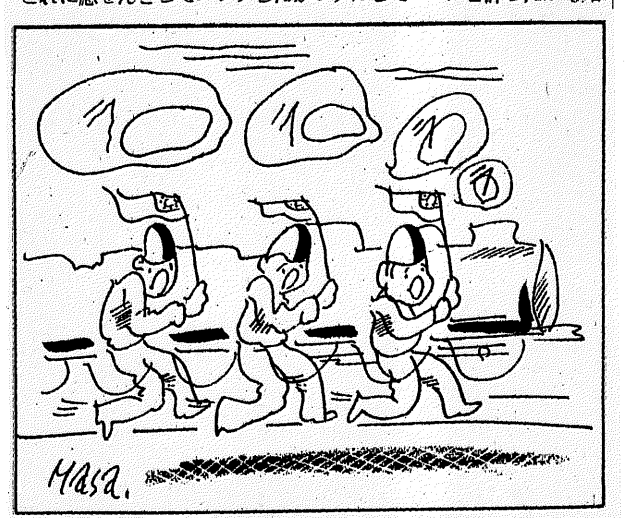
三十四分中華はG・K齋藤をおびき出すの機會を作り、日本は密集守備で辛くも逃れたが、その時亂れた陣形を立て直す間もないうちに、L・W葉とC・F戴の好連絡で日本の後陣を衝き一度はR・F後藤返したが、C・F戴再びとつてゴール正面からシュートして得點し、三度同點となる。

中華は三十九分、日本は四十分四十二分とゴール近くに寄せたが無爲、四十四分R・I孫が日本のゴール前で捌く時、R・F後藤タツクルを試みたが効なく日本は危地に陷り、中華はこの好機を逸すまいとして狼狽し却つて凡蹴に止み、更に中華は右にコーナー・キツクを得たがC・H竹腰の果敢な好プレイに壞されて終り、竹腰のキツクがまさに中央線を越えんとする時タイム・アツプとなる。

スコアは3—3の同點、覇權は次回まで保留となつた。この歩のある試合に勝を制し得なかつたので日本選手は殘念がつてゐるが、遙かに中華を凌ぐ力を持つてゐることは誰もが認めた所である。

筆を擱くにあたり、多大の犧牲をはらつて日本蹴球界のために精進された選手諸君と鈴木監督の勞を多とし、この劃期的の業績を殘されたことに對し深甚の敬意を表する。

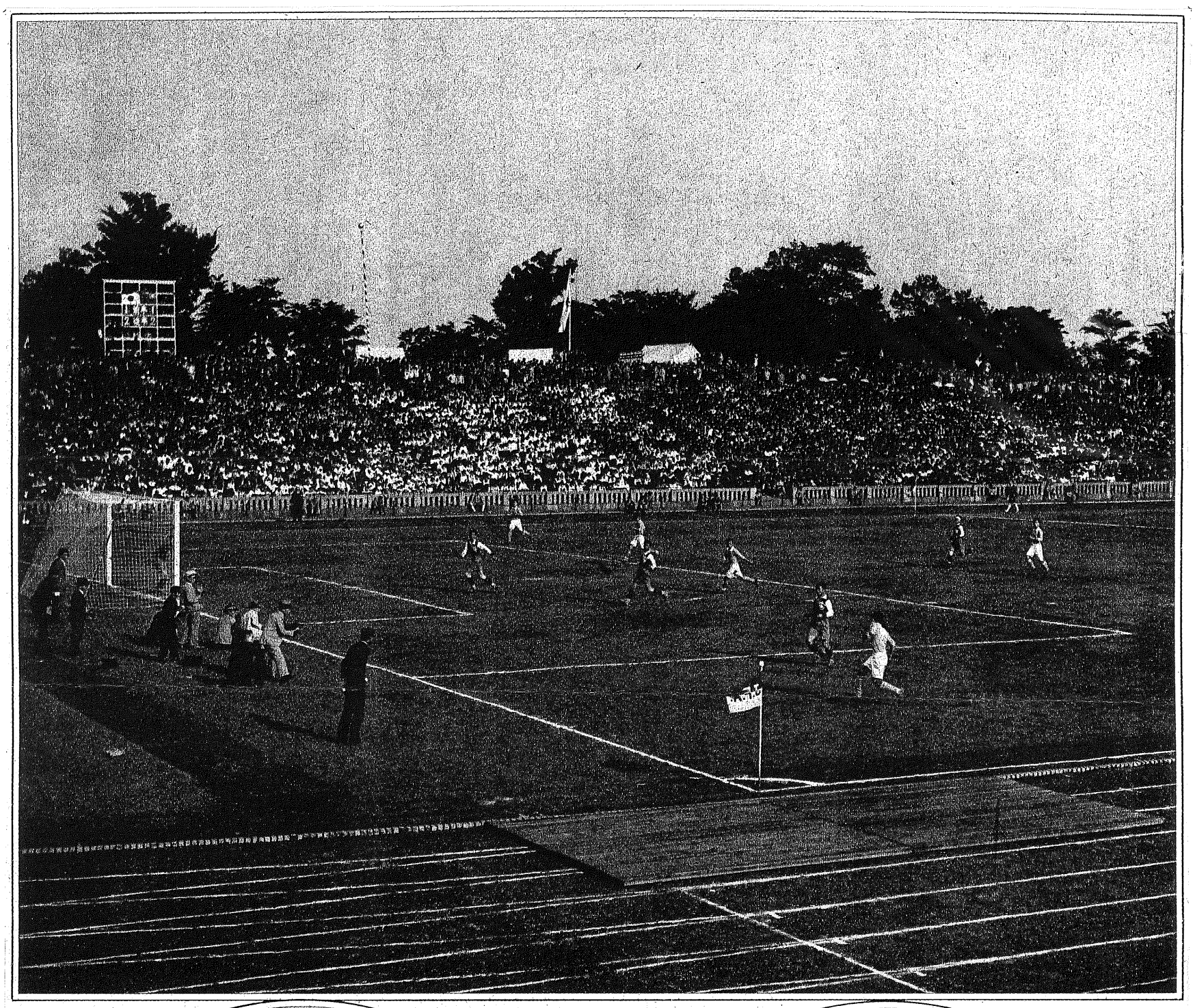
※左ページからつづく

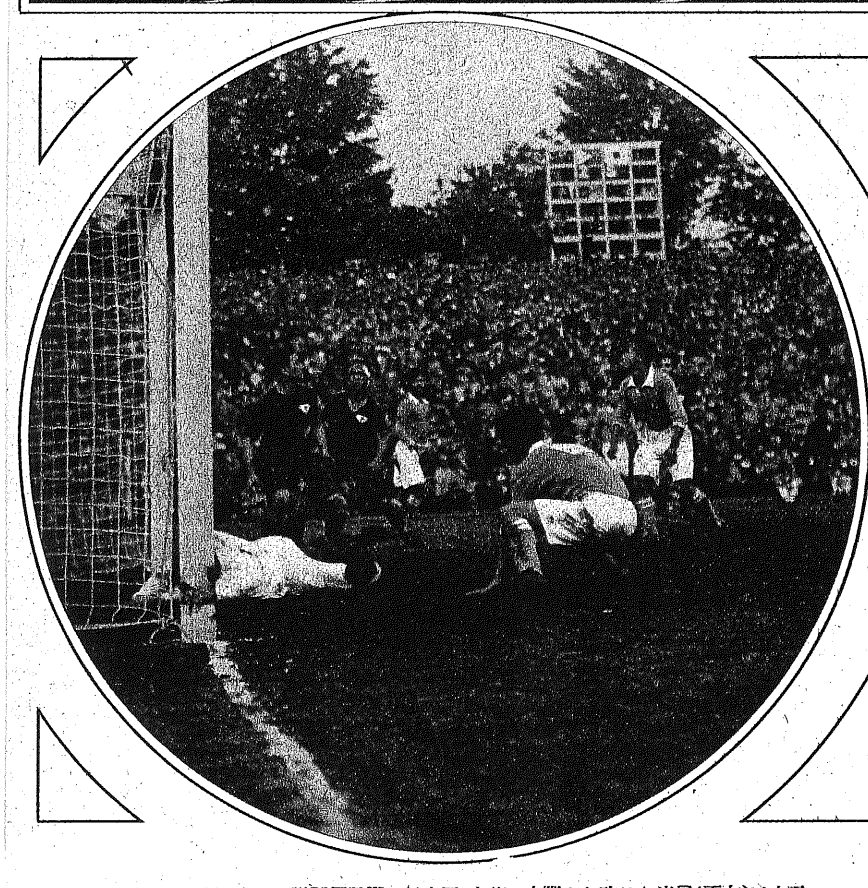


チヤンフー　　三嗜當也

大會名物中華應援歌の中の「ラ、ラ、ラ、ラ、チヤンフー、チヤンフー」といふのは、丁度汽車が走り出した時の感じでやるのだと中華應援團長の説明、なるほどよく似てゐる。

S5-6-10　第9回極東競技大会





(上圖)日本對中華の蹴球優勝戰に日本軍、中華の右隅より攻めた光景(下左)二十五日に行はれた日比蹴球試合の光景(下右)二十七日に行はれた比華蹴球試合の光景

Top: Japan attacking from China's right corner in the final game. Bottom-Left: Japan-Philippines game, May 25. Bottom-Right: China-Philippines game, May 27.

S5-6-15

同人隨筆

滿點の構へ

山田午郎

ウツカリしてゐる間に御難の順番は到頭めぐつて來た。嚙みしめて味の出るやうなものを物する柄でもない、と言つても同人の端しくれであつて見れば拒む理由は何處にもない。一日延ばし二日延ばして僅かに自分を慰めては來るうちに、放り出す事の出來ぬ瀬戸際に追ひつめられてしまつた。何とかせねばならん此處まで來れば否應なしだ。空ツポの頭を絞つて見ても出て來るものは何もない。そこで止をむ得ず自分の恥ざらしをやつて逃げる事に決心した。

—◇—

今度の極東大會においてわが蹴球代表チームは一般から其の活躍を非常に期待された。事實これは內容の充實した立派なもので、日本にとつては未曾有の代表チームであるといふからこの期待も生まれたのだが、大會第二日の二十五日アツサリ捲つてしまふ筈の對比戰が開始されるや、日本の調子の出ぬ中に比島は早くも一點又一點。十分と經たぬ間に二點をリードされてしまつた。この二點のために勝利の望みが斷たれてしまつたといふわけではないが、私たちはアツサリ捲つてしまふと豫言した手前、一時は茫然自失してしまつた。

然しこの比島の優勢もホンの束の間、强者は物の見事に形勢を逆轉せしめて、堂々と快勝を博して愈よ二十九日の對華戰となつた。何とはなしに勝つ豫感がして胸がワクワク躍る。それでもこの前の對比戰の一件が頭にコビリ付いてゐるので、勝利の豫斷を下す度胸が失せ、結局五分と五分に踏んでしまつた、斯して極東の覇王を以て任ずる中華軍も、オドオドした姿で晴の競技場の芝生の上にポカリ置かれたボールを、「？」で凝視せねばならぬ時が來た。

さて私の云はんとする恥ざらしの問題はこれからだ。然しそれは頗る單的のものなんだ。

—◇—

正確な報道といふ任務を持つ手前、正しい描寫を企て先づ適當な座を占めて、任務の前の戰鬪準備なるものを終了した。そしてこの一戰を公平な立場から眺めようと決心をして、開始遲しと待つ間は無難で、任務の前の「構へ」は正に滿點といふ所であつた。

申し分のない球場の好條件の下に、三時二分中華のキツク・オフで日華試合の火蓋が切られた。刻々っつる戰局は日本に有利に展開して行く。强聚を誇る中華は日本の打ち込む鋭い切さきを辛うじて支へてゐるに過ぎない。モウ一歩、モウ一と押しといふ、日本にとつてはそれこそ言語に絶する快戰が續けられて行くではないか。若き血に躍る選手ならずとも心の躍るを制止し切れないで、前のコンクリート壁を幾度蹴飛ばした事か、壓迫又壓迫で左にコーナー・キツクを得て、春山君の好蹴したのを竹腰君とつてレユートした時、球はゴールをカバアした中華バツクスの間を援けて巨彈の如く飛んでゆく。「シメタツ」と心に叫んだその時球は、G・K周賢言の掌中に完全に收められてしまつた。

—◇—

試合開始後五分を過きてゐる。この時、同僚のK君から呼び掛けられた。そして「この試合に日本が勝てば大阪では號外を出すといふ電話があつたから簡單な經過を刻刻に……」と耳打ちされた。俄然むさぼつた五分間の享樂は一朝にして叩き壞され、職業意識が息を吹き返した。この陶醉の崇りは遂にやつて來た。慌てゝこの過ぎ去つた五分間の經過を辿らうとする中にも、試合は曲折波瀾の過程を殘して進んで行く。それで焦燥と困惑がこんがらがつてゐるため、鉛筆の走りは鈍く、知り切つてる漢字が容易に浮んで來ない、こんな事で正しい描寫が出來やうか實に何とも言はれぬもどかしさであつた。こんな經驗をしたのはこれが初めてだ。だから試合が終つて書き散らした原稿紙をまとめる時に、自分で判讀に苦しんだ文字が幾十、幾箇所にあつたか知れない。結果は遂は滿點の「構へ」を台無しにしてしまつた。任務の前に任務を忘れ、冷靜を失した自分を恥しく思ふが、稀有の大試合を滿喫し得ない悲哀を卿たぬわけにもゆかぬ。職業意識と斯うした悲哀は依然交錯してゐるが、現在の自分はやはり職業をほして斯かる大試合も觀賞せねばならないんだ。勿論それはこの試合の前からよく承知してゐたのだが。

＝次は星山芝太郎＝

極東大會蹴球の印象

滿たされざりし我蹴球界の蹶起を促す

竹腰重丸

日本蹴球界全體の多大の期待と熱誠日間の合宿練習は、その激しさに於て溢るゝ支持の下に我等は第九回極東大會を迎へた。我等に對する期待、支持が如何に強大であつたかはとても筆紙には盡し得られないものである。事實我等は、大會に對する準備を始めて以來、又全練習期間及び大會を通じて觸るゝもの孰れもから「共に闘ふ」意氣組を感得出來たのであつた。若しも我等が對比、對華の二試合において平常に倍する闘志を表はし得たと見うるならばそれは夫等の十一人以外の共に闘ふ人々の闘志が凝結した爲にほかならないであらう。

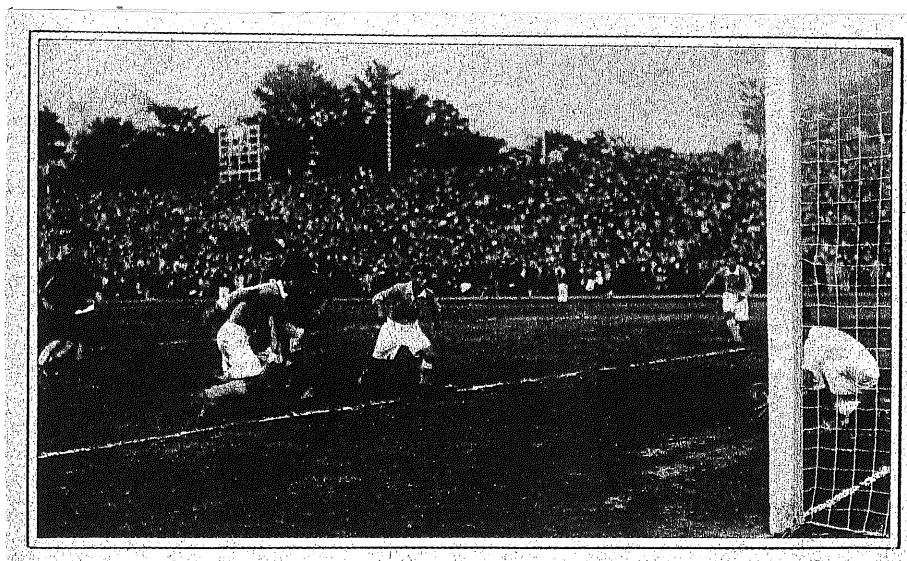
明後年ロスアンゼルスに開かるる「萬國大會へわが蹴球テイームを送れ」との事は上海の大會以後、躍進的に向上しつゝあつた我蹴球界の齊しく懷いてゐた希望であつた。しかも極東大會における我等の過去の歴史を顧みればそれを熱望しつつもその公表を差し控へざるを得ない狀態にあつたといふことが出來よう。夫故に「萬國大會へ」の素地を今回の極東大會においてつくることが我等に課せられた歴史的使命であつた。その重大な歴史的使命を負ふものなればこそ筆舌に盡し得ないほどの熱烈な全國的後援が與へられたのだと確信して疑はない。我々はこの光榮ある使命を凝視しつゝ又背後に一團となつて我々を押し進める蹴球同好者の後援を感じつゝ目的に向つて進んだ。無豫選の利益も十分に生かすべく努力した。第一期の石神井に於ける二十五日間の合宿練習は、その激しさに於て自分の經驗によれば高校時代の夏季練習以上のものであつた。恐らくすべての者にとつても過去の經驗に稀な激しい練習であつた事と思はれる。

◇

それが體力の增進に果して幾何の効果を與へたかは知る事が出來ないが全體の強味を增す上には可なり有益であつたと確信する。練習方法を「科學的に」やることとは必ずしも一致せず、或は逆方向の練習であつたかも知れないが、それを經過する事は體力とは離れた精神的な強味を加へる所以であると考られたからである。激しい試合になれゝばなれる程如何なる難苦にも耐へ得る精神的強味が必要である。今回は華、比に對して我等が劣勢である事を豫想してはゐなかつたけれども得點を先んぜられた場合或は甚だ優秀な一個人を相手とした場合を想定すればメンバーが孰れも國內においては優勢な試合の經驗のみを積け、且練習を科學的に、合理的にと進めて來た者のみがあつたためにその體力增進といふ點から考へれば必ずしも最良の、合理的な方法ではないと考へられる激しい練習が必要であつた。思ひ切つてそれが出來たのは全く無豫選の賜物である。只我々の記憶に永久に殘るであらう傷ましい事實は戰友岸山が過勞のために病を得たことである。合宿練習開始に先だつて愼重な健康診斷を受けたにも拘はらずこの結果を生じたことに對して

※ 右ページへつづく

S5-6-15



極東大會第二日に行はれた日比蹴球試合の光景

Japan-Philippines association football game on the second day of the Far Eastern Championship Games.

は大きい責任を感ずると共に、「せめて試合後に病氣になつたのであつたら慰められるのだが」といふ本人の心事に對しても必勝を誓はざるを得なかつた。岸山に代つた竹内はL・Bとしては二週間練習したに過ぎずF・B間およびF・BとG・Kとの間の連絡に多少の懸念はあつたが兎も角も「與へられた條件の下においては我等は最善を盡した」と感ずる一種の安心に似た氣持で準、比を選べることが出來たのである。

◇

今回の比律賓テイームは近年稀な强テイームであると傳へられてゐた。昨回の大會に際して島内豫選に優勝しながらハワイに遠征したために失格して出場し得なかつた者八名を擁し（内二名は前々回出場者）上海の大會出場二名を持ち彼等自身も上海で日本に敗れたことなど問題にしてゐないやうな口吻を洩らしてゐた。然るに實際には、前回のテイームに比して、メムバーが不揃ひでないこと、ショートパスを幾分加味してゐること以外には殆ど進歩の跡を示してゐなかつた。攻擊について見ても、球を得れば直ちにF・Wの一人に送り、それを受けたF・Wラインは走力のみを賴りとして、ゴールに速く迫ることのみを目的として突進する以外の方法を知らなかつたやうである。從ってH・B、F・B、の攪護も不十分で根强い攻擊や變化の多い攻擊は見るべくもなかつた。防禦も全くこれに對蹠するもので頗る幼稚なものであり個人的な强さにおいてもL・Hが多少巧味ある攻守振りを示した以外には頗る貧弱であつた。全體として見れば、その强さは兎に角としてテイーム・ワーク進歩の過程からいへば同テイームは我國の一流テイームが三或は四シーズン前に經過した過程に在るものだと考へられる。彼等の對中華試合において今回何等の問題も起らなかつたのは非常に喜ばしい事であつたが試合前に既に「蹴球は中華の國技だから——」等洩らすものがありその闘志を疑はざるを得なかつたのは比島從來の歴史から考へて不思議とせざるを得なかつた。たゞコンデイシヨンについては氣候の影響を最も多く受け、且對日の試合が雨後に行はれ甚しく疲勞してそれが疾復出來ない時に中華と對戰しなければならなかつたのは最も同情さるべきものであつたといひ得る。

◇

中華テイームは從來と異り香港、上海兩テイームの聯合であつた。單獨テイームでない事が果して好結果を得てゐたのであるか否かは不明であるが彼等としては傳統の誇りを守るべく最善を期したことであらう。來征の船上における某氏の揚言によつても彼等が可なり確乎たる自信を持つてゐることが窺はれた、そのC・H、L・W、L・Wは前々回の大會以來引き續いて、又R・Wは前回からの出場者であつたが前三者は上海のときに比して圓熟した感じは受けたが既に凄味は失はれてゐるやうに見受けられた。前回の大會においては過去の大會經驗者は非常な威力を發揮してゐたが今回はそれ程にも感ぜられず擧ろ代るべき選手のゐないのが不思議とされる程度のものであつた。テイーム全體の强さにおいても前回と大差ないものではなかつたらうか。而して若し幾何か强さを增してゐたとしてもそれはテイーム・ワークの進歩によつてではなくて、各個人の力の充實によつてであつたと見るのが妥當であらう。彼等の個人的技術は球慣れによつて優秀であり體格がすぐれてゐるために技に力がある。彼等の基礎技術を以てすれば我々のテイームより高い組織的構成を持つてゐてよいはずであるにも拘はらず必ずしもさう考へられないのは我々の不思議とする所である。彼等の持つ技術、先づ攻擊についていへば、我々の鋭さ以上の鋭さを出しても脆くはならないのであらうし、又兩ウイングのセンターリングは可なりミートさせることを考へ得るものであり F・W のレシーテイングの能力は大きいのであるからあれ程進むことに焦慮せず落ちついて攻めて變化を多くすることを考へても効果を上げ得るのではないかと考へられる。また後陣の守備に必要な走力、フイードの能力も十分であるから攻擊をF・Wにあれ程依賴せずもつとF・W を有利な狀態に置いてフイードすることを考へ得られるのではなからうか。守備においてF・Wは可なり守備に參加してはゐたが全體の組織立つた守備網は見ることが出來なかつた、とはいへ彼等は決して弱くはなかつた。F・WはF・Wのみでも可なり威力ある攻擊力を持つてゐ後陣の個人としての守備範圍は廣く、脆弱な守備ではなかつた。たゞ全體としての學ぶべき組織立つた攻守を見出し得なかつたといふに止まる。

◇

我テイームについては多くいふ必要を認めない。それは昨シーズンを清算したものに過ぎず無駄なパスを排して技術にも氣持にも端的な力の强味を幾何か加へたものであつた。何等目新しいものはなかつたと思はれるが、積極的にオフサイド・ルールを活用する英艦コーンウオール號と對戰の經驗によつて、オフサイドを利用しての守備に多少の進歩があつたかと考へられる。そしてそれは全體を統合する（假りに縱の連絡統一を統合すると呼ぶ）上に可なりの効果を擧げたかと思はれる。全體をまとめる方針として先づ攻勢に組織する事を考へ加之メムバーの移動があつた爲に防禦は粘り强い防禦までには進み得ずF・BとG・Kとの連絡が十分でなかつたゝめG・Kの活躍は可なり阻害せられたのではなかつたかと考へられる。然しながら組織の點においては比、華の孰れに比しても進んだものを持つてゐたと確信する。連絡と統合とが考へられてゐた故にこそ比、華兩テイームは恐らく持つてゐないであらうと想像せられる「最後の寄せにかゝる線の想定」が出來、それを持つてゐた爲に變化を考慮して落付いて球を持つ事が出來、從つてまた攻守に厚味を加へる餘裕を持ち得たのであると考へられる。

對中華三對三の結果が果して現在の日本の實力を十分に發揮し得たものであるか否かはこれを冷靜な第三者の批判にまつ外はない。我々は萬國大會への基礎を固めなければならない重大な歴史的な使命を痛感するものであるが故に、對中華の試合には今一歩を進めて置きたかつた。

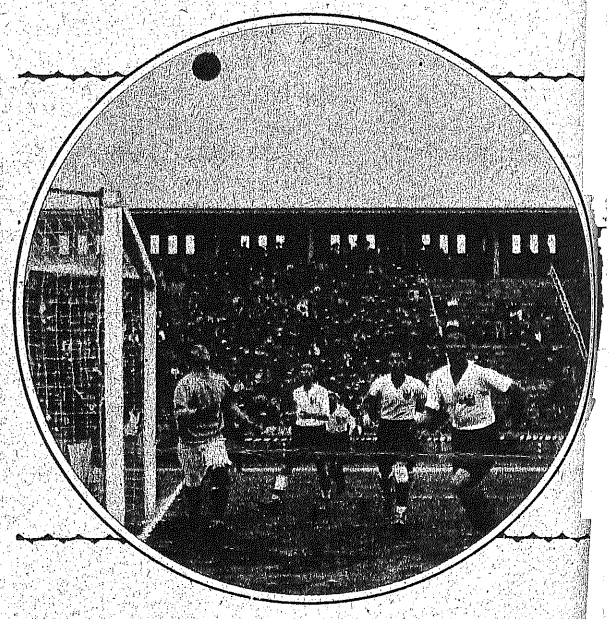
◇

今後我蹴球界が如何なる道を進むべきかは重大な問題であるが、現在我々が切實に必要を感ずるのは個人の素質を向上させる爲の補助運動の研究である。敏活な行動と力强さとを兼有するためには根本的に體格を改良する必要があるのではないかと考へられるがその手段としては補助運動を研究するよりほかに道がないのではないかと思はれる。走力の養成以外に、繩飛びハードリング及び數種の徒手體操以外にはあまり補助運動は行はれてゐないが、それ等を練習の重要な一部分として加へると共にそれ以外の新しいものを攻究する必要があらう。しかして補助運動は今後蹴球を始める人にとつては我我に必要であるよりも遙かに重要な意義を持つものであると確信する。

基礎技術についても一層の洗練と力强さが要望せられる。最も身近な例をとつてもパスする前の技巧及びパスした後の動作についても練習の餘地は十分に殘されて居る。基礎技術は全體の構成を制約するものであり現在よりも進んだ組織的構成を望むならば、現在に於ては一段の基礎技術の進歩が必要だと信ずる。

境遇の支配を受くる事が大きいとは云へ、我々は早く老朽する事が如何に我蹴球の進歩を遲延させて來たことか、それ故に今回の出場者の多くは今後も精進を續けるであらう。二年後の萬國大會に我國からも蹴球テイームを送り得るやうになれば非常な幸福であるが若しも今回の出場者がそのテイームに一人も必要のないまでに我蹴球界が進歩し得たとすればその幸は我々一同にとつても我代表を送り得る事よりも遙かに大きい喜びでなければならぬ。

（昭五、六、七）

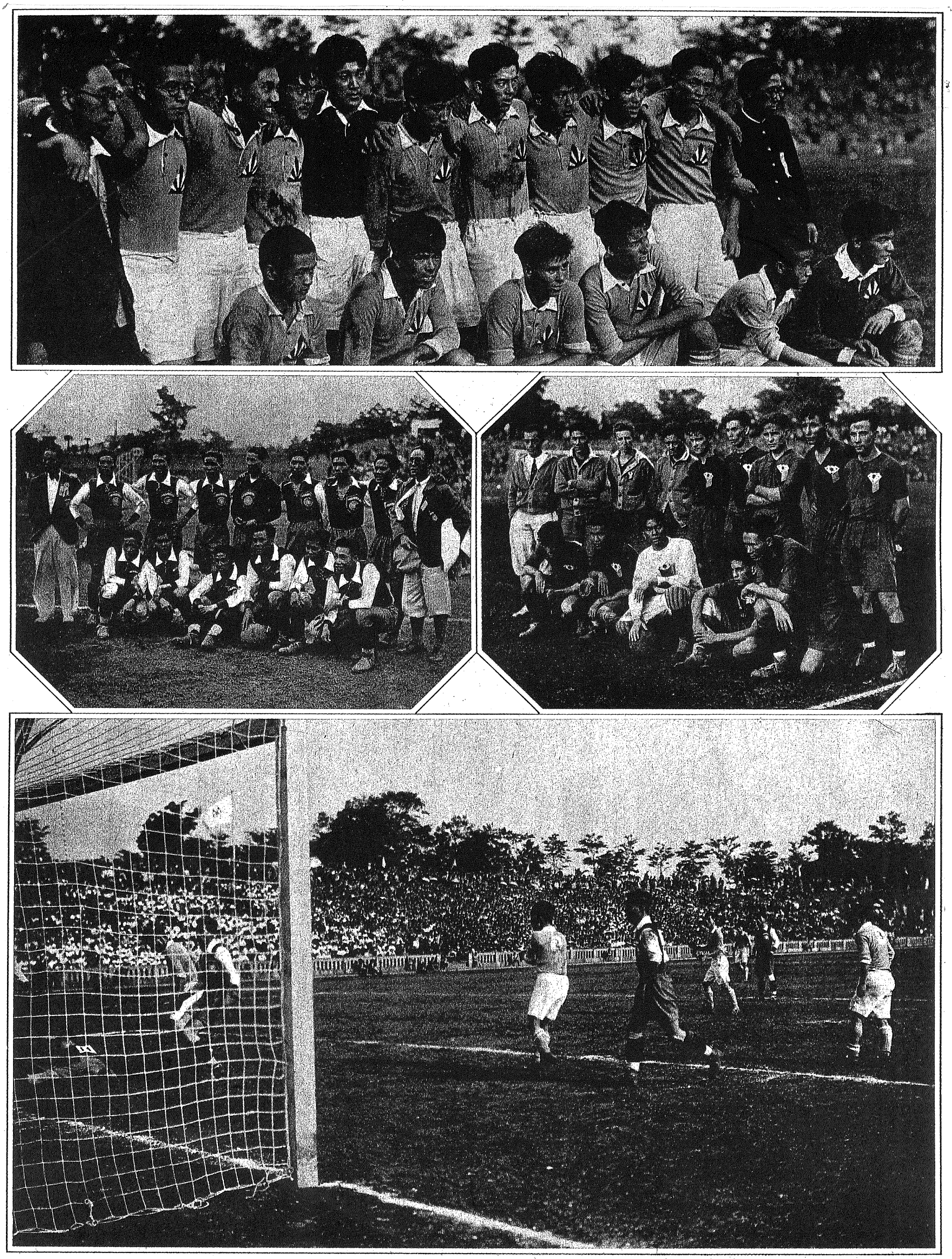


極東大會第四日に行はれた比華蹴球試合の光景

Philippines-China association football game on the second day of the Far Eastern Championship Games.

※左ページからつづく

S5-6-10　第9回 極東競技大会



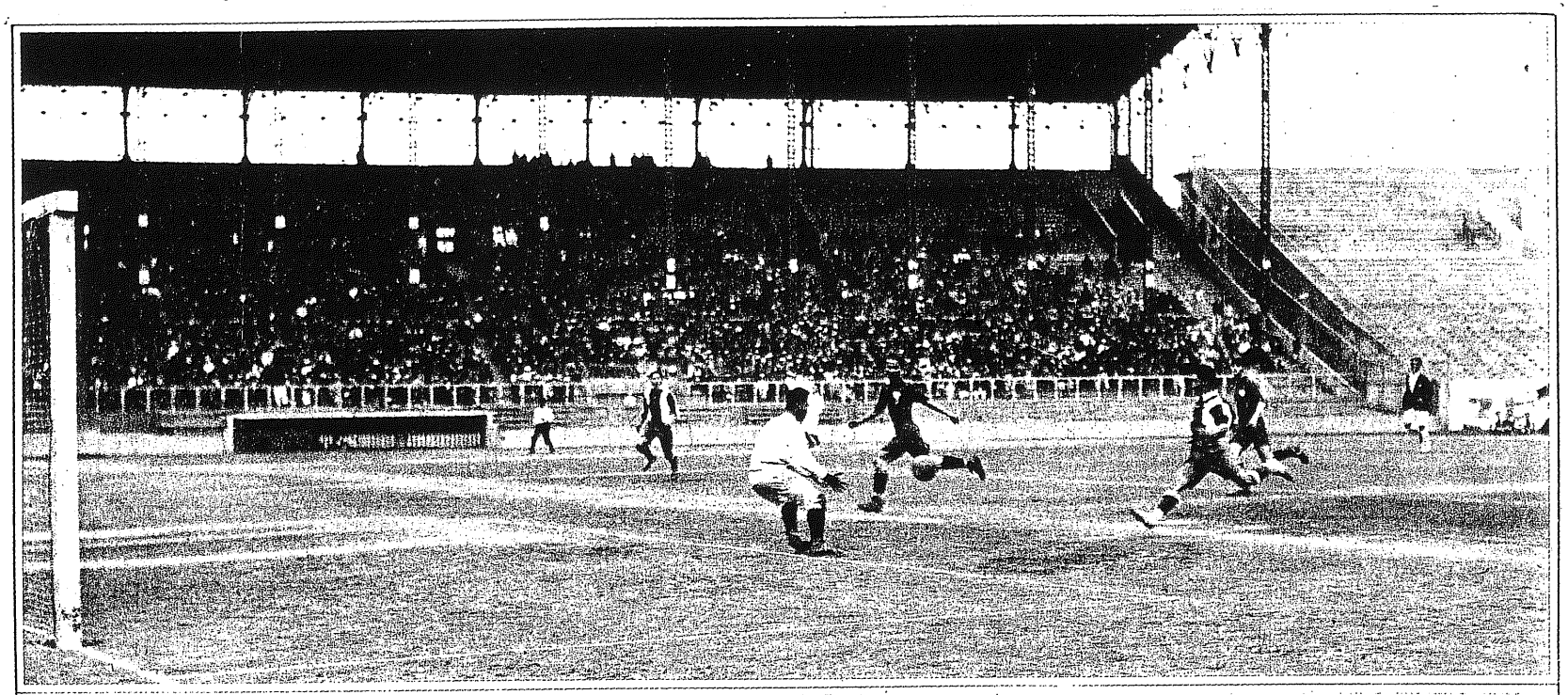
蹴球　(上圖)好成績をあげた日本チーム(中左)中華民國チーム(中左)ヒリツピン・チーム(下圖)日華蹴球優勝戰に於て日本第三點を入れた刹那

Association Football. Top: Japan. Center-Left: China. Center-Right: Philippines. Bottom: Japan making her third point in her final game with China, May 29.

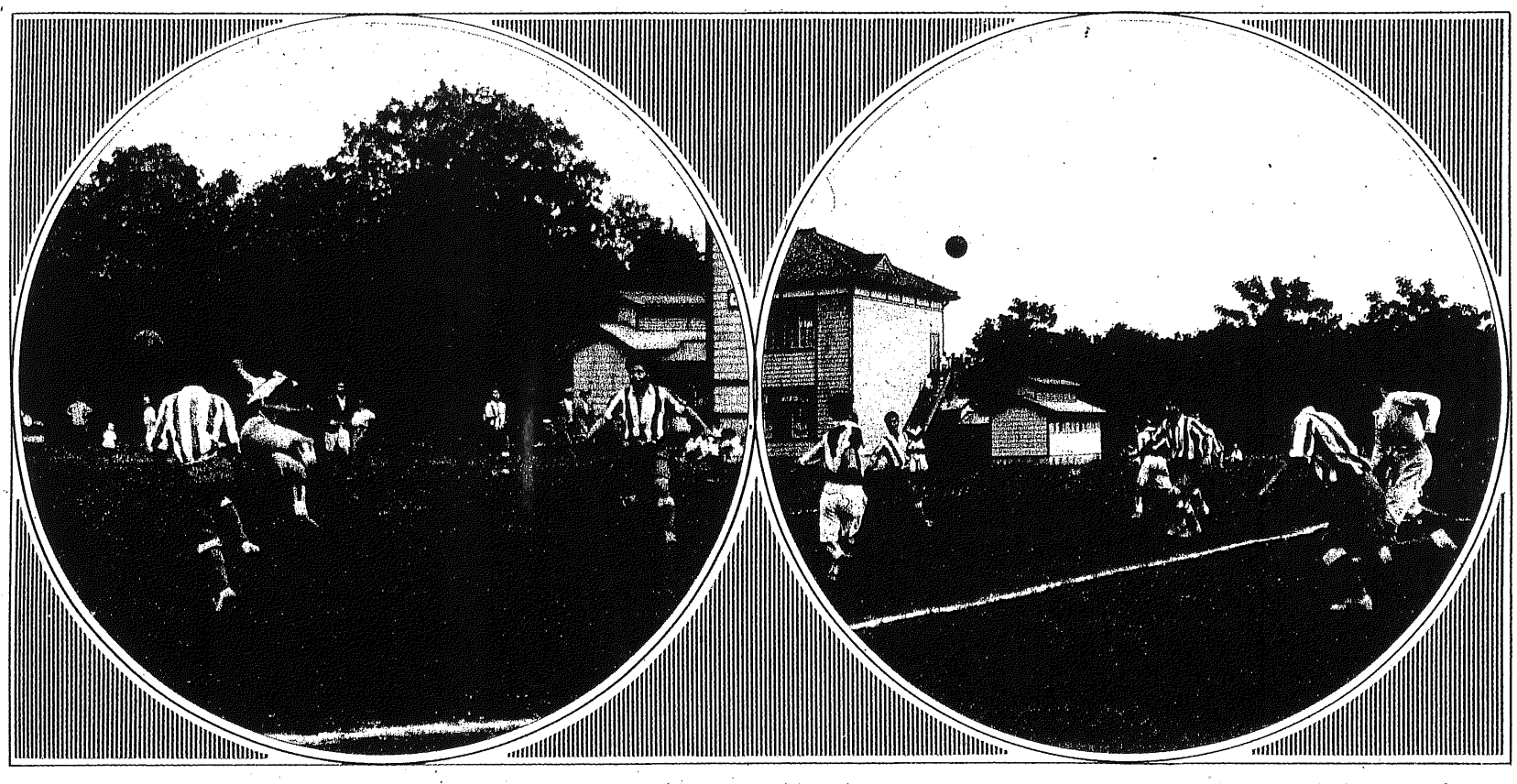
S5-6-15

(上圖)六月一日甲子園で行つた關西學院對比島蹴球戰、關學の强キックを比島ゴールキーパー巧みにとめる(下圖)五月三十一日甲子園で行つた京都帝大對比島蹴球戰

Top: Philippines goal keeper stopping a strong kick in the Kwansei Gakuin-Philippines association football game at Koshien June 1. Bottom: Kyoto U-Philippines association football game at Koshien, May 31.



S5·7·1



關西大學對明治大學の蹴球戰は六月二十日東京目白商業グラウンドで行はれ三對零で關大勝つ、寫眞は何れもその試合光景

Two views of the Kwansai U－Meiji U association football game at the Mejiro Commercial School, Tokyo, June 20, which resulted in a 3 to victory for Kwansai U.

S5－7－15

健闘した關大蹴球チーム

東都における試合印象

山　田　午　郎

蹴球の眞髓と妙技を公開した第九回極東選手權競技大會の直後關西大學は入京して東都の一流チームと戈を交へる事になつた。シーズン・オフでもあり、又極東大會による滿喫の後ではこの入京も一般に刺戟を與へなかつた。殊に十四日擧行した第一戰の東大L・B（第二軍ともいふべきもの）との試合振りを見ては入京早々であるとしても球場の全條件を知悉し得ないにしても、あまりに醜い一戰に終始してしまつた。これで關西大學の入京は興味も期待も全然潰されてしまつた。然し以後の對慶早、明、法の四試合は本格的のものでその力量を遺憾なく發揮して結局二勝三敗の記錄を殘して退京したのは先づ惡くはない成績といへよう。

◇

シーズン・オフの遠征については種々議論が存する。然し今日の如く地理的に統制されたカレヂ・リーグの大多數的集團はシーズン中の遠征を不可能ならしめてゐる狀態においては止むを得ないし又新學年早々ではチームの編成上などからかかる時期を選ばしめてしまふ結果となる。そしてどのチームも秩序ある練習を積んでゐないから圓熟といふものがない。それに關西大學の東都遠征日割なるものはチト無謀の譏なしとはしない。數量と期間を無視したこの日割は前述の結果を當然ならしめた。やはりこの日割は質と期間を重點として決定すべきものであつたやうに思ふのは內情を知らぬものゝ等しくいはんとする所であらう。理想論は暫く措いて、以下試合を通じての感想を述べて見ようと。

◇

關西大學チームは主將三谷を中心として氣分のマトマリはあるが試合に際しては綱氣に乏しい憾みがある。ただこの中に鬪志滿々たるものはLI津田、HBの右左をよくこなす戸川、RF奈良位のものであつた。そして結局これ等の人達が今度の遠征には重きをなしてゐた。又技術的には未だしの感が深い。FW線でもLI津田が强引のドリヴリングが比較的光つて時にチャンス・メイカーとして有効な場面を點出してゐた。インナーとしては相當なものではあるが巧緻的でないのを遺憾とするが將來あるからこの點の補足は容易なものであらう。この津田に配するにLW吉森にモウ一段の技巧があつたならば津田の活躍は更に一段の有効さが加はつたらう。兎に角兩翼は非常に劣つてゐる。この左翼に對して右翼はインナーに田中が入つても森井が代つても多少の劣弱を感じた。左右の均衡がとれてゐない所に老將のCF和泉、位置を失し又制球力に往時の敏捷と正確を缺いて機會を自潰する事多く、關西大學の攻擊力を無或力のものとしてゐた。これは努力如何に依つてシーズンまでに如何樣にもなし得るものではあるが。

◇

これに引換へHB線は三谷がCHとなつても山野がCHとなつても戸川を加へたHB線は守備的に優れたものであるが攻擊的には未だ不足の點が多い。やはり老巧味のある所で三谷がCHとしてHB線を統率した方がより强く攻擊的にも出られるやうに思ふ。このHB線の後を承けてFB線は長島の弱點を奈良よく補つて相當な陣を布いてゐるし、GK森もFB線とよい結合の下に守備を固くしてゐる。然し森はその特長とする明敏果敢のプレイを調子に乘つてし却つて災とするとがないでもない。

◇

粗雜ではあるがかゝる個人的の缺點と全體的の缺點はこの遠征を機として矯正さるべきものと思はれるが全體的のものとして特に目立つものゝ幾つかを列擧して見よう。難をいふならば手を多く使ふことである。卽ちプッシングである。更にこのプッシングが甚だしくなつてホールデングとも見らるべきものがあるのは意識的に依る結果とは考へられないが目立つだけに特に一言加へて置きたい。尙スロー・インに際しての規則違反も考へる要がある。この外に戰法としてFW線HB線との間に動く球は不合理なものが多い。それはHB線の出す球はFW線の技巧を無視した只球は前方にといふ古い攻擊法に過ぎない。

◇

この結果はLI津田がHB線を無視するといふやうな活動領域の擴大を生んでゐる。一例ではあるが相互にかうした過重を生んで何時か破綻を生ずる結果を見せるのは拙い。なほ守備上に一例を求めるならば常に攻擊を意識して進出の機會を覗つてゐるのはよいがその結果として相手のFW線をフリーにして置くためにゴール近くに寄せられては互ひに重なり合つて自ら混亂に陷つてゐる。以上遠征の効果の參考資料ともなるものあらば敢て禿筆の幸甚である。

◇

この際に關西大學を相手とした東都の帝、慶、明、早、法について一瞥して見たい。帝大はLBで生島、赤松、林等の新進があり鈴木の如き名手を擁してはゐるがこのシーズン第一線に起用されるかどうか不明だから慶應に移る。慶應はFW線において相當活躍した豐田の退いた事によつてFBであつた岩崎がFW線に出で主將結城がLWとなる事によつてそのFW線は新味を加へ相當期待したが練習不足の無より有は生じないでしまつた。どうも現狀では更生の何物も求められない。決して3—1のスコアで敗れ去るべき顏觸れではないが。

◇

明大はFW線に新人を擢用したが鈍重なプレイに終始してしまつた。然も慶應と共にホーム・グラウンドに邀擊してのこの結果はすべての條件において劣つてゐたといふより外にない。

早大は多士濟々で當日になりLWに西川か眞山を起用するかと採擇に腐心する位であつて一般に更生の氣が張つてゐるのは1—0の辛勝であつても來るべきシーズンに大きな期待がかけられる。

最後の試合を承つた法政はRW吉田の引退と肇をCHに廻し從來のGK西川がRIとなつたのでチームには大變動があつた。然し關西大學の弱點をよく提へて勝を制したのは明大の凡戰等に較べれば大殊勳である。全體的にこれらのチームはシーズン・オフである故か練習不足の所があまりあからさまに見えた。このシーズン・オフにおける關西大學の入京はそれ自身の効果ばかりでなく、東都チームにも相當の響きを與へたのは有難い。

東都遠征雜感

關大蹴球部員

今回私共がその微力をも考へず東京遠征を敢行したのはその試合において東大始め諸强チームの長所を習ひ又一方には自分の力といふものを知りたいからであつた。始めの計畫は六大學全部とする心算であつたが都合上立敎大學と相見える事の出來なかつた事を遺憾に思ふ。

◇

勿論他の五大學との試合において習ふべき澤山のものを得た、特にホワードにおいて著い教示と感奮とを受けた。今憶ひ出すまゝをいへば東大のヘッディング及びパスの正確、ハーフとの連絡の巧妙さ、各プレイヤーの身體のこなしが盛く良く動いて終始むらなく試合を續けたことは感心した兎角無理のないその攻擊振りにさすがはと首肯させられた。慶應早大は練習不足とは雖も個人的に強味を見せ、明治は滿々たる鬪志に強味を現してゐた樣に思ふ。

◇

ハーフラインは總體において連絡が非常に良く攻擊の主力をなし且後退の非常に速いのは我々の大に學ぶべき處であらう例へば早大のハーフの如き質にがつちりしたものであつた。フルバックでは早大及び法政のフルバックのデフェンスが良いと思つた。

◇

總體に戰法上の相異からか、各人にショートキック多く且キックがゆるい樣に思ふ、ハーフのパスにしてもホワードのシュートにしても速球が少ない樣に見た、此の點反つて慣れない我々にとつては防禦に苦しかつた。

東大、慶應、早大、明大、法政各チーム共非常に氣持ちよく試合を續けそれによつて我等の得た收穫が頗る大であつた事を嬉しく思ふと共にこの收穫をより以上生かす爲に種種の點に考慮を加へ以て秋期リーグに備へたい。

最後に東京の諸チームがレーズンオフにも不拘心良く私共の爲に試合して下さつた事を心から感謝したいと思ふ。

（寫眞は關大久保田主將）

S5－10－15

シーズンの劈頭を飾つた

全國中等學校蹴球大會

一部は附中に二部は青師が制覇

文理大蹴球部　小　笠　原　延

シーズンの劈頭を飾る我が部主催の全國中等學校ア式蹴球大會は第一部(中學、商、工業)三十四校第二部(師範)六校の參加を得て八月三十、三十一、九月六、七、十三、十四の六日間に亘つて花々しく開催された。

本大會が年を逐うて參加校の數を增して行く事は、蹴球技普及の現れとも云ふべく誠に喜ばしいことゝ思ふ。そして又本年度大會の各試合を見る時昨年に比して、著しくその戰法なり個人技の上に進歩を示して來たことは明らかであつて、このことは將に極東蹴球界の王座にたゝんとし、驕ては世界的に進出するであらう此の我が國の蹴球界であれば、蓋しかくあらねばならぬ事ではあるがこの事象を眼のあたりにみては當然とはいひ乍ら自ら快心に堪へない。

以下兩部に亘つての試合感想を摘記して見よう

第　一　部

第一回戰は水戸中、名古屋商が棄權したゝめ試合は全部第二回戰から行はれた。都合上第二回戰、三回戰と順を追つて思ひついたことを記してゆかう。

第一部の試合を見ると第二部の試合、つまり師範チームの試合と大變趣が違ふやうに思ふ。中學チームは一般に小技に巧みでキビキビしてゐるが師範チームは概して動きも大きく技もあらい。所がさうした中學チームの中で、湘南中と戰つた今市中は確かにその堂々たる體格からして何處か師範チームに類似したプレー振りを持つてゐた。技巧と戰法に洗練された湘南にかゝつてはもろくも四對〇で敗れたが、今少し基本練習をやりそして又確とした攻擊法を會得したなら堂々たるチームになると思ふ。ストツプが馬鹿に大きくて爲に自分のボールとして確實につかむ事が出來ず多くはみすみす敵に與へてゐた。唯幸ひにも素晴らしい體力をもつてゐるのでそれがため漸く保つてゐたものゝ終ひには、東奔西走徒らに敵に奪はれては追つかけ廻つてゐる中遂に疲れて仕舞つた。攻擊はまづかつたが守備は相當確りしてゐた。L・F吉野などはキツクも利くしよく危機を外してゐた。

◇

延長戰の皮切りをやり、そして遂に抽籤にまで至つた府立園藝對藤岡中學戰は暑い午頃行はれた。

戰法、技術の上に格別見るべき點は無かつたが、長時間の試合にひるまず頑張つた、双方の意氣は旺んなものであつた。

延長戰をやつたのに關東學院中學部と松山中との試合がある。關學中は技術において松山に優れ松山は元氣さにおいて關學中に勝つてゐた。そして試合は互角であつたが延長戰に入つて松山中は二點をせしめられ遂に四對二で敗れた。これは元氣と技で兩者の力が釣り合つてゐる場合遂には元氣でもてゝゐた方が技に勝れた方に降參する一つの例だと思ふ。元氣は長時間保てるものではない。

府立八中と靜岡中學戰は一對零で八中に凱歌があがつた。スコアから見ればクロスゲームらしく如何にも危い勝利の樣に考へられるが事實は八中にとつてちつとも危くはない試合であつた。靜中は守備のチームで、攻擊のチームではなかつた。即ち第一ハーフは全くフオワードラインへのフオローを忘れてゐた。これでは前衛線の攻擊力は半減する。ましてフオワード線は聯絡を缺いてゐたから八中は得點される心配は少なかつたであらう。

たゞフルバツクとハーフとに堅固な守備の陣を布かれてなかなかに得點出來なかつたのが苦心であつたと察する。八中は決して得點率の低いチームでは無かつたのであつて靜中の守備がかたかつたのである。

東京高等學校尋常科と成城高等學校尋常科とは不思議に第二回戰でめぐり合つた。この兩者は體軀から、プレイ振り、戰法に至る迄相似たチームであり、技倆も伯仲してゐる。やゝ東高尋が實力に於て優れてゐた。二對一のスコアは正直に實力の差を示してゐるものと云へやう。

第三回戰に入つてからは、技倆もたがひに接近して來て好試合が多かつた。府立園藝と湘南中との試合は十五對零と云ふ大スコアであつたが、實際の戰況はこのスコアの示す程のものでは無かつた。

湘南は好機至らば殆ど悉く之をとらへるに比して園藝は絶好のチヤンスを迎へても、前衛に一人のゴールゲツターさへ無いために生じた開きである。園藝のCHは無類の頑張りを示してゐたがフイーディングに就ては今少し考へねばなるまい。そして又餘り動き過ぎて却つて味方の守備を亂したかの觀があつた樣に思ふ。

目白中を七對一で破つた横濱二中と成城中を十三對二で破つた浦中との對戰は氣持のよい試合であつた。結果は四對一で浦和が涙をのんだが、RIの役目をあんな若小な者に委ねてゐては敗れるのは當然であらう。正選手では無いのかも知らないが、餘りに小漢であるために殆んど働くことが出來ず從つて浦中はF・W・Lを四人で形成してゐたと同然であつた。苦闘を氣の毒に思ふ。

府立一商と神奈川工業は何處といつて特徴の無い相似たチームであつた。實力においては神奈川工業がやゝ勝つてゐたがキツクオフ後七、八分ごろ、府一商のRWにあつけない得點をされてからはあせり氣味になつて、度々の機會を迎へながら容易に得點出來なかつた。漸く同點になつてからはどちらも馬力を上げて戰つたが、兩軍ともF・W・Lに得點者がゐないため互に押したり、押されたりしてをる中にタイム・アツプ。延長戰をやつてたうとう抽籤するに至つたが兩方とも氣の毒なほど疲れて仕舞つた。得點率の低いチームは悲慘である。（本郷中校庭における試合は多く見なかつたゝめ記し得ぬことを遺憾とする。）

◇

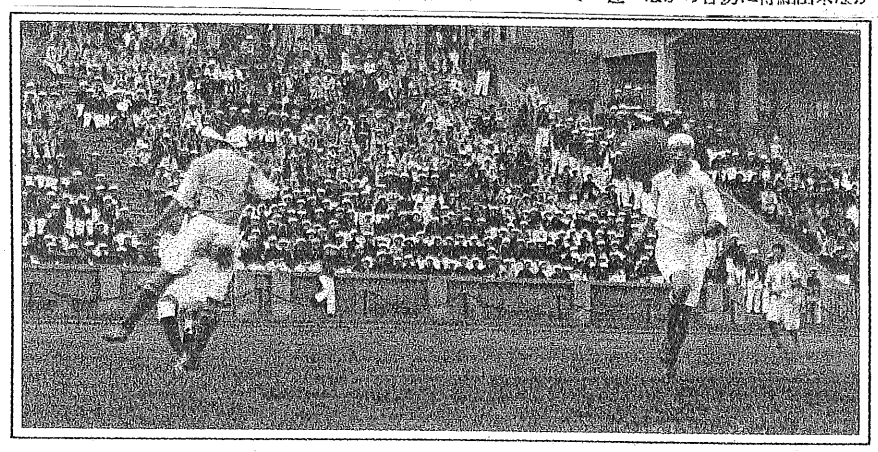
第四回戰である所の、府立五中と神奈川工業との試合は意外にも零對零のまゝ延長戰に入つた。十三對零、六對零の戰績で進んで來た五中と、前日府一商と戰つて抽籤して上つて來た神奈川工業との試合としては不思議である。

これは五中にとつては、神奈工を輕く見て、あつさり退けてやらうとかゝつたのが禍したので、神奈工の方から云へば、初めから勝味少きを自覺して棄て身になつて望んだのがきいたのだと云ふことが出來ると思ふ。十分の延長時間中二點を得るだけの優越ある五中であらば或は他に考ふることがあつたのかも知れぬが。附屬中と横濱三中戰では附中悠々壓迫して三中は手も出ぬといつた有樣だつた。然し强敵を向ふにまはして四對零に喰ひ止め得たことは多少の慰めであらう。

だが然し防いでばかりゐないでもつと積極的に戰つたなら、RWなど駿足をもつてゐたのでもあるし零敗の憂目は免れ得たであらうと思ふ。ハーフなどは殆どHLを越えて進出し、F・W・Lを援助してゐるのを見受けられなかつた。

◇

准決勝戰に入つて興味はますますわいた。一方を代表して決勝に望むものは附屬中學であらうとは殆ど誰にも豫想されてゐたことであつたが、今一方を代表するものが五中であるか湘南であるかは何人にも一寸豫想が出來なかつた。



全國中等學校蹴球大會第一部決勝戰湘南中對東京高師附屬中
Final game in the first division between the Shonan Middles and the middle school attached to the Tokyo Higher Normal.

※ 右ページへつづく

S5－10－15

九月二十三日より三日間九大球場で行はれた九州、京城兩帝大蹴球戰に勝つた京城帝大チーム

Left: Keijo U association football team, victors over Kyushu U in a series of games played on the latter's field September 23, 24 and 25. Right:

S5-10-15

※ 左ページからつづく

湘南中は、今市を四對零、府立園藝を十五對零、横二中を五對零でそれぞれ退けた素晴らしい戰績を殘して來たチームであり、府立五中は、獨協中を十三對零で、日大二中を六對零で破つたまではよかつたが、第四回戰で神奈川工業チームと餘り香しくないゲームをしたチームである。

兩軍果して一週間の中に如何なる祕策をめぐらしたか。試合前既に重苦しい空氣が場内に漲つた。

キツクオフのホイツスルが響くや忽ち白熱戰となつた。應援團も觀衆も接戰に熱狂して場内騷然、審笛の音も聞きとれぬ程である。

零對零のまゝ前半戰を終つたが後半に入つては一層の白熱戰となつて見る人の血を湧かした。十分過ぎた頃湘南一點を先取して意氣を昂げ、更に十三分頃RHのレフト側への絶好の送球をLIヘツディングして得點した。これで勝負は決したと思はれたが、五中奮起して間もなく一點を返し愈よ興味は增された。タイムアツプ後二三分といふ頃五中RWの蹴つたコーナーキツクはゴールの右前に落ちて絶好のチヤーヂボールとなり、これをLW沖へツディングして柱近くに落ち遂におし込んで仕舞つた。かくして延長戰となつたが、五中がこの機をとらへて外さなかつたことは稱讃に價する。延長戰に入つて五中は二點を湘南にゆるして惜敗した。誠に惜敗だと思ふ。

◇

少しく兩チームに就いてかんがへて見ると、GK及びFBは双方先づ互角で、HBは五中に、FWは湘南に强味があつたと思ふ。五中のFWは一方にかたよつてゐるつまりCFから右にしか利かないしたがつてHBのパスも、FW間のパスも、多くは右側へ集められたやうだつたが、斯樣に主力を片方に寄せるのは何うかと思はれる。湘南は安心してその方だけ守つてゐたから湘南のRHは悠々とボールを持ち出して、好きな方へ蹴つてゐた。五中FWはよく攻めるけれども、何處か鋭さを缺いでゐると評した人もあつたが、半身不隨の形をなしてゐる以上これは仕方の無いことで、勢力が或る程度まで左右つり合つてゐなくては有効な仕事は出來まいと思ふ。LW沖なんか、敵のバツクのマークをさけるため測線にそうて動いてゐたが、あの體格としては當然とらざることを得ぬ策か。實際彼のプレー振りは可憐であつた。

湘南のHBは見ばえのするプレーはしなかつたが、拔けめが無かつた。進出後退の時機を誤らず、さうしてまた反對側への送球をよくやつた。殊にRHはLWへしばしば絶好の送球をした。得點の素は多く彼が造つたといへる。FWは何處とて目立つてゐなかつたが五人がよく揃つてゴール前に攻めより、ボールは反對側へとさばいて或はヘツディングし、或はブツシユして巧に得點を重ねた。ゴール前に持ち進んだボールを決して粗末に扱はぬFWだと思ふ。

湘南、五中戰はこれ位にして附屬中對府立八中戰を見て感じた事を簡單に記さう。

八中はよく戰ひ、これ迄の何のチームよりも附中を苦しめたけれども結局實力の差は如何とも出來なかつた。前半戰を無事におし通し最後迄頑張て僅か二點しか與へなかつたのは大出來であらう。だが附中は翌日のために力をセーブした傾向もあつて實際は今少し得點の開きが出來たかも知れない。それは後半廿三分ころ附中LI小野田がかるくFB二人を拔いて得點しただけのことからしても考へられることゝ思ふ。

◇

決勝戰は十四日午後二時から神宮球場において開始された。前日强豪五中を一蹴して意氣あがる湘南中と、數年來連勝して來た附中の對戰である。好調に勢づいてゐる湘南中と連勝の名を傷けまいとするものとのこの對戰は自然意氣と意氣の戰ひとなつた。

豫想通り、初めから大接戰を演じたがたうとう三對一で湘南中惜敗した。湘南はあゝした廣い、そしてローンの球場に不慣れであつた、これは確かに敗因の一。それから前日あれだけの苦戰をしてゐるものが、比較的樂な試合をしてゐる附中に比して餘計に疲勞してゐたことも一の敗因だらう。

附中はあゝしたローンの球場には經驗をもつてゐた。尙神宮球場の樣な廣い球場では、何のポジションと云つて强い所も無いが、全體として纏つての强いチームよりも、總體的にも勿論强いが、中に個人的に拔き出て强い選手がまじつてゐると云ふチームの方がより有利であると思ふ。斯ういふ見地からしても附中は好都合であつた若し普通のグラウンドであつたら或はもつと危い試合をせねばならなかつたであらう。もう一度此の兩雄を戰はせて見度い氣がする。

何といつても附中は實力を備へてゐる上にも好運に惠まれたチームであつた。附中軍の手から榮冠を奪ふもの將來果して何れのチームであらうか。興味はたゞこの點にのみ殘されてゐる。

第二部

第二部は參加校六校で第一回戰は埼玉師對茨木師戰、青山師對豐島師戰の二つである。埼玉と茨木は好取組であらうと豫想されてゐたが茨城は脆くも四對零で敗れ去つた。茨城は初めから試合を輕視してかゝつてゐた傾向がある。早く言へば勝つても負けても何うでもいゝと言つた風で、いゝ意味に解すればスポーツを樂しむともとれるか知れぬが苟しくも勝利を目安にすべき大會に望むものとしては餘り感心した態度ではあるまい。

それからこのチームは臨機應變のプレーが出來なかつた。守備や攻擊の要領などただ知つてゐるといふだけで應用が利かぬ。

青山對豐島戰は、第一部の湘南對五中戰、湘南對附屬中戰と共に大會中の白眉ともいふべき大試合であつた。青山にとつて豐島は一昨年怨みをのんだチームである、（昨年は青師准決勝に敗けて豐島と相見ゆる機會を失つた。）戈を交へぬ中から凄慘な氣に滿ちてゐた。

試合は果然白熱化した。兩軍意氣と力、凡そ持ち合はすものの全部を傾倒して戰つたこの試合こそ眞の試合であつたといひ度ひ。意氣の無い試合は如何に美技を續出するも物足りなさを感じる。結果は人々の豫想を裏切り青山の勝利に歸したが、考へて見るところ豐島は初めから精神の緊張度において青山に負けてはゐなかつたか。復讐心に燃えて物凄いまでに張り切つた青山に對して豐島はちと氣を浮かしてゐた感があつたことはみる者の意識したところ。戰端が開かれるや忽ち緊密な聯絡でもつて押し迫つて來た青山の攻擊の意外の鋭さに氣付いた時既に豐島は受身になり始めてゐた。

こゝにおいて明らかに敗因はきざしてゐたといへる。一對一とせまつたかと思へば二對一と離され二對一が三對一と遠くなつて漸く三對二に追ひつけたと思つたら、また四對二と遠ざけられて行つた邊りは何處までも最初の氣分の弛みの祟りではあるまいか。

初めからあせり通しの豐島は遂に自己の本領を發揮するに至らずじまひに終つた。豐島の好漢小山CFも徒らにあせつては、遂にウイングを使ふことさへ忘れてゐた。兎に角平素の豐島の面影は薄れて攻擊、守備ともに青山にはひけ目で、GK木内までも時々適宜の處置を誤つてゐた。それにしても豐島方には諦められぬ涙があつた。

第二回戰青山對埼玉の試合は一對零のクロスゲームであつたが、應援團に騷がれて賑やかだつた附屬中對八中戰の後であつたせいか何處となく靜かな試合だつた。

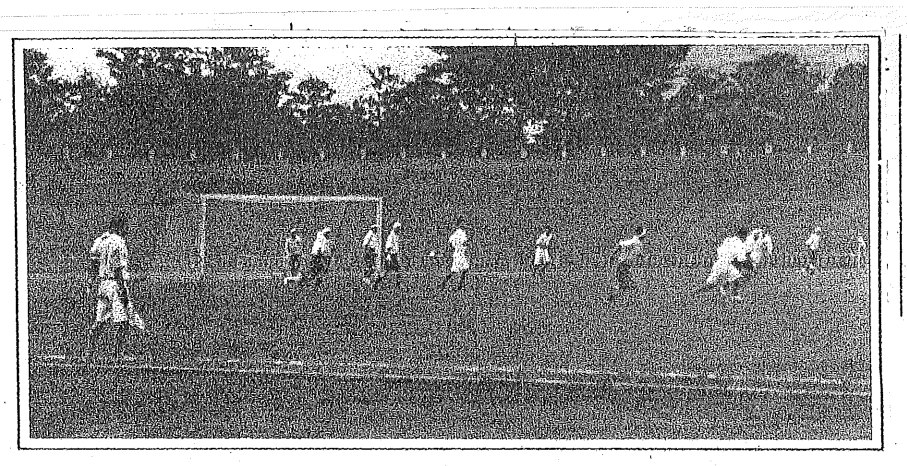
青山も何故か對豐島戰の時のやうな元氣を見せなかつた。埼玉のFWは、果敢なCFを中心にうごきが素早い。CFはドツヂングに巧みであるが、少しく持ち過ぎる奇襲に妙を得てゐる埼玉には却つて青山よりも決定的なチヤンスが多かつたがよくよく勝運に見放されてゐたと見えて、遂に無得點に終つた。

前半の初めころ、青山ゴールの右ポストに當つてはねかへつたRIの强襲や、後半の終りころCFがFBを拔いて持ち出したボールは何う考へても惜しい。

◇

栃木師が棄權したゝめ戰はずして優勝戰にのぞみ得た神奈川師は青山と對戰すべく弱過ぎた。まだ基本練習も出來てゐない。全然壓迫されて殆どグラウンドの半分で試合してゐた。時々FWが進出しても守備に疲れてかHBはこれに追從せず從つてF•W•LとH•B•Lの間は遠くあいてしまひ、そこへもれ出る球は難なく青山の手に入つてすぐ壓迫に移られて仕舞ふのだつた。

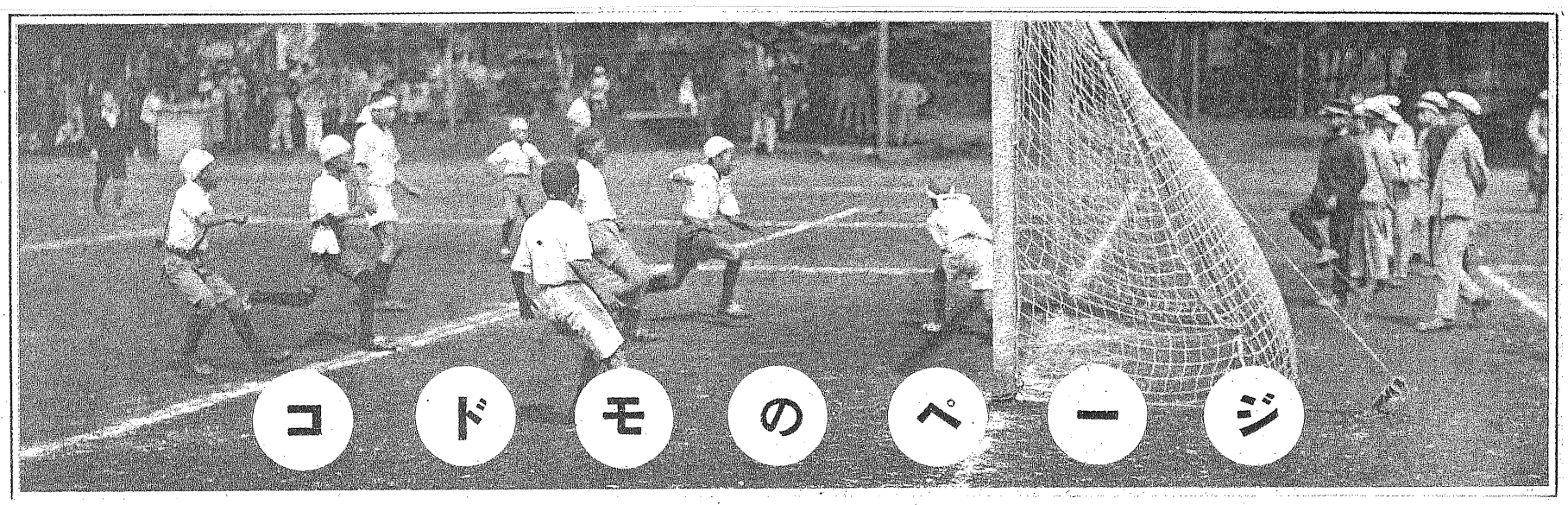
湘南と同樣ローンに慣れてゐないせいもあつただらうが八對一は當然の開きであらう。青山のFWは左右平衡してゐて、確實に正攻法で進んで行く。兩インナーが强くてよくその隣りのプレーヤーを働かせてゐた。CHも强く、FB、GKも頑丈な守備陣を布いてゐた。一ケ年雌伏の甲斐あつて優勝の榮譽はかくて彼等の頭上に輝いたのである。



全國中等學校蹴球大會第二部決勝戰青山師對神奈川師

Final game in the second division between the Aoyama Normals and the Kanagawa Normals at the All-Japan intermediate school association football tournament.

S5-11-1



關東小學生蹴球大會優勝戰に豐島師範附屬チームの最後の一點

The Teshima Normal Primaries winning their last point in the final game of the Kwanto interprimary school soccer tournament.

蹴球競技の手ほどき

三宅生

皆さんたちのお友達の中でベースボールや陸上競技、水泳、テニスなどの運動競技を知らない人は少ないでせうが蹴球を御存知ない方がまだ澤山におありでせう、この蹴球はベースボールなどと同じやうに、勿論外國から傳はつて來たものですが、今では中等學校程度以上の學校でやつてゐないところは殆んどないといつていゝくらゐ盛んに行はれてゐます。

小學校ではまだそれほどまでに盛んに行はれてをりませんが、然し最近街の中でブルドツグのやうな大きな頑丈な靴をはいて通學してゐる子供たちをボツボツ見受けるやうになりました、それ等少年を見ると何れも色黑々と見るからに如何にも健やかさうです。

——◇——

蹴球はウインタースポーツといつてもともと冬に行はれるものですが、わが國では暑い時も寒い時もかまはず年中行はれてゐます、しかし何といつても秋から冬へかけてのこれからの時候が一番適した時期です。このごろ東京や神戸邊で學童の蹴球大會が行はれるやうになりましたが、今後年とゝもにこれら少年の間に盛んなることは疑ひありません、その蹴球を見たいとか、やつて見たいと思ふ少年諸君のために簡單に解說することゝします。

——◇——

「あんな大きな靴でボールを蹴り合つてゐると、蹴られたりして危くはないでせうか」こんな質問をよく聞きます、事實やつたことのない人達はさう考へるのも無理はありませんがやつて見ると心配するほど危い競技ではなく、また蹴られるやうなことなど殆んどありません。

試合の勝敗は競技場の一番後方の陣地の眞中に幅約十五呎高さ約七尺程の門が立てられてあります相手方のこの門の中へボールを蹴り込めば得點となるので、その門をゴールポストといつてゐます。

——◇——

さて試合は敵味方十一人宛の選手で行はれるのですが一番前方にある人をフオワードといひその次の三人をハーフ・バツク、その後方の二人をフル・バツク、一番後方でゴールを守つてゐる人をゴールキーパーといひます。

フオワードは敵のゴールへボールを入れる役目をつとめ次のハーフ・バツクはフオワードの攻擊を助けると同時に防禦の役目をもつてゐます、フル・バツクとゴールキーパーは相手方にボールを入れられないやうにゴールを守らねばならないのです。

——◇——

試合が開始されて中央線から敵陣地に攻め入る場合味方の者からボールがパスされた時その前方に敵のプレイヤーが一人よりゐない時はオフサイドといつて反則となり、フリー・キツクといつて自由に蹴り返へす權利が相手方に與へられます、その他試合中度々行はれる反則はボールに手でふれてはいけないことです、たゞゴールキーパーだけはボールを手で扱つてもよいことになつてゐます。

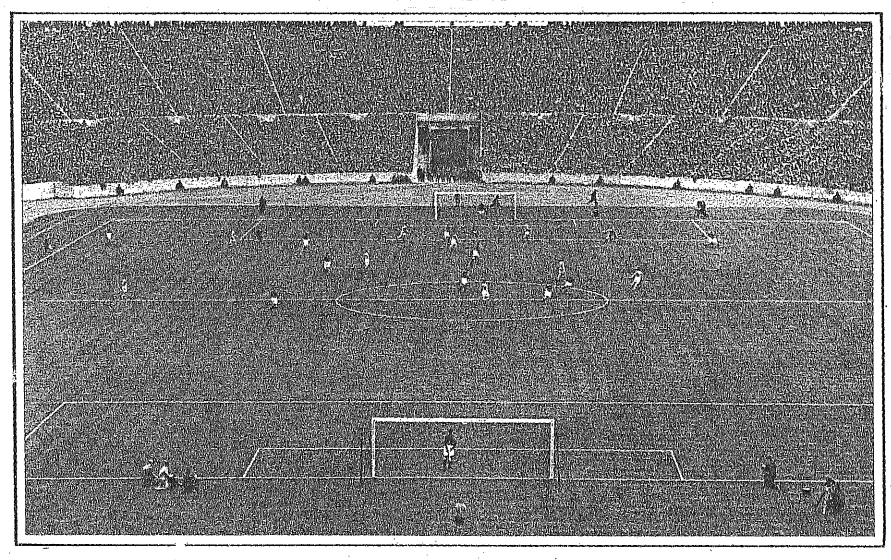
——◇——

蹴球をやり始めて間のない人を見てゐますとボールが不意に腹か頭のところにでも飛んで來ると、知らず識らずのうちに手でボールを受け止めたりしますが、上手な人になりますと決してそんなことはありません、もしボールに手をふれたならば矢張り反則となり前にいつたやうなフリー・キツクが相手方に與へられることになつてゐます、今一つの反則はわざと敵を押し退けたりまたは蹴つたりした時です、そんな亂暴な行爲が度重なりますとその選手は審判員によつて退場を命ぜられる事になつてゐます。手を使ふことの出來ない不自由さ、敵味方入亂れてボールを蹴り合ふときなど可なり危いことがありますが、お互ひに正々堂々と飽くまでも規則に從つて競技するところに蹴球の面白味があり、味方同士巧みに連絡をとつて敵陣地に攻め入る痛快さに至つては何物にもたとへることが出來ません。

ヘツデイングしてゐるところ

この寫眞はゴールキツクをしたところで身體全部の均衡が申し分なく整つて立派な蹴り方をしてゐます

ゴールキーパーがゴールキツクの球を必死に受けとめてゐるところ



蹴球場の全景です一番手前の白い線をゴールラインといひその線の上に立つてゐる白い門がゴールポスト、グラウンドの中央の線がハーフラインです

S5-11-1

東京蹴球カレッヂリーグ第一部の序幕戰である早大對文理大の試合は十月十九日東京高校で行はれた寫眞は早大FW強襲して文理大を苦しめるところ

Waseda forwards rushing the Bunri goal in the first Section A game of the Tokyo intercollegiate association football league between Waseda and Bunri at the Tokyo High School October 19.

S5-11-15

アサヒ・スポーツ

丸善のウエールス號

大日本蹴球協会公認指定球

昭和六年度
大毎主催
第十二回 全國中等學校蹴球大會
使用球 ウエールス號

我が蹴球界の最高權威たる全國中等學校蹴球大會に、丸善のフットボールが國産品として最初の使用球とされて以來毎回豫選、優勝大會を通じて統一的使用の榮光を浴して居ります。來る第十二回の大會もウエールス號が使用球として公認決定されウエールス號は最高の標準試用球となり我が蹴球界の王座を占むるに至りました。

HAPPY HIT TRADE MARK

運動用品はアナタの最も近くの運動具店で丸善印をお求めください

丸善運動具部

(10分の6に縮小)

S5-12-1

東京カレッヂ蹴球リーグの帝大對文理大戰、帝大第三點を入る
Imperials making their third point in their game with Bunri U in the Tokyo collegiate soccer league series.

酣戰裡に置かれてゐる

東京カレヂ蹴球リーグ戰

第二部に蹟落した文理大

山田　午郎

去る十月十一日にシーズンの幕を開いた東京蹴球カレヂリーグ戰の昭和五年度において特筆大書しなければならないのは何といつても文理大の崩壞であらう。早、慶帝の三强に敗れたとはいへ相當善戰してゐたので殘る一高戰に一縷の望みをかけたのであつたが前半の力闘も遂に報いられず後半に入つて潰れ、遂にこのシーズンを最後として第二部に陷落の憂き目を見るに至つたことに對し、斯界に大なるセンセイションを捲き起したのも當然である。

嘗てはリーグの覇業を成して聲威逼きものがあつたが、昭和三年度シーズンから人材乏しく、そのチーム編成の上に懊惱を續けてこの終末を見るに至つては誰かその末路を悼まずに居られやう。榮枯は常ならずとはいへ、餘りにも悲慘な出來事ではある。

◇

文大はその第一戰とする對早大戰において幾度か廻つて來たチャンスを縱の連絡を失してゐたゝめに自潰してしまつた。

それにこのチームの最大缺陷とするフットワークの鈍重が災してこの試合を喪ひ、更に對慶大戰にも頭腦的の失策打續いて勝味ある試合を逸したのは焦躁に祟られた結果であらうか。

斯くて捨身の一手を以て帝大と相對し力闘効を奏して前半1—1頗る形勢有利であつたが常に守備の最善と思惟してかHB線を後退せしめてFB線の活動地域を縮小しGKの視界を遮斷して最も不利な守備陣を布いてしまつたのは帝大攻撃線の健闘を賞するよりも寧ろ文大守備布陣の愚を認めぬわけにはゆかぬ。

要するにこの三戰を通じて文大を見るにHB線の運用があまりにも消極的であつたことがFW線にゴールゲッターの乏しいといふよりも直接の敗因と認められる。

かくて不安と焦躁の中に文大は最終戰とする對一高戰を迎へたが最初の好調は後半五六分ころスピードある一高の攻撃線によつて破壞されて攻守は全く地をかへ、敗色をたゝへて不利な戰陣を布き辛くも同點に漕ぎつけたが亢奮の結果は只でさへ鈍いフットワークに守備陣を自ら亂して結局4—2でこの一戰も喪ひ、四戰四敗の記錄の前に三シーズン占めた第一部の霸から除かれて茲に初めて第二部に蹟落することになつた。

◇

この文大の不遇に引かへて、本シーズン第一部に復活した一高は昭和三年度シーズンにおいて文大と同樣の悲境に沈倫したものであつたがこのシーズンは最も好調にあつて對慶の一戰を失つたが早大をウッチャリ對文大戰を物して帝大の牙城に一矢を放たん勢を示してゐる。

復活早々この戰績は第二部に苦辛したその賜物とも見られるが特にそのFW線がシーズンの深み行くにつれ覇氣を傾へてその實力を遺憾なく發揮し得たからであらう。斯かる新興の一高あれば悲慘な文大あり豫期に反して不振に終つた慶大がある。

慶大は對文大、對一高と引續いてシーズン前半を巧みに抑へてしまつたが傷ける主將結城の不振と起用し得ぬ所に不安と焦躁を釀しそのたのみとするHB線に傷者を出し前シーズン病者續出して不振に終つたと同樣の徑路をたどるの不遇に置かれて對帝大戰を逸し、更に前シーズンの恨みを晴らすべく精進した効は更になく對早大戰には對等の試合をしながら不運の穴を衝かれて早大に返り討ちとなるなど、未だに慶大には勝利を謳歌するシーズンは來ない。

殊に對早大戰においてはCH大崎の好調あつてHB線を巧みに率ゐる所あつたが大前を欠いては假令新人江守の活躍があつたにしても施すに術なしといふ所であつた。

殊にFW線における市橋、長坂松丸のセンター・スリーは快闘をつゞけたが終りに近く幾度かあつたチャンスも疲勞に祟られてフォロウするを得ずして互に逸してゐたのは前半リードすべきを逆に早大のリードとなつた爲め得點を急いで前半から後半同點とするの間あまり躍起となつて精力を徒費してしまつた結果からであらう、二勝二敗の勝率五割ではこのシーズンに絶大の期待をかけた慶大としてはあきらめ切れぬものがあらう。

◇

この慶大に多少の不安を感じながら對峙し好漢本田の强引なプレイに依つて最後の二分に勝敗を決した早大は新人を多數擁して新味ある陣容を布き文大を一蹴したがこれは文大の拙戰に勝を制した位のもので、新味はあつても老巧はなく對一高戰にはその粘り强さに依つて覆されてしまつた。

然しこれが却つて對慶戰に手ぬかりない戰備を整へさしたのではなからうか。尤も新人眞山の活躍と阿部の殊勳を忘却する事は出來ないが、本田、高師が斷くFW線プレイヤーとして板について來た事實も見逃す事は出來ない。更に洗滌されるものであるならば斯界の羽星帝大も晏如たるを許されないものがあるといふも過言ではなからう。

◇

四シーズン斷乎として覇權を確保しこのシーズンも覇權をその掌中に收めんとする帝大は前シーズンに比して苦戰の中に文大を破り帝大危しと叫ばしめたが對慶大戰には斷く好調にかへつてこれを征服してしまつた。しかしこの一戰に慶大が最然の陣容を以つて臨むを得たなら果してこの征服が成つたかを疑はしむるものなしとはしない。

そのFW線は快速で攻撃力の豐富を見せてゐる。殊にCF手島の傷めた足首は快癒の望みなしとされてゐるが、對慶大戰に示したそのプレイは依然物凄く十分その眞祿を發揮してゐるし、新進三宅に押しの不足はあつても巧妙さを止めて帝大攻撃線の一員として堂々たるものがあり、新しく主將に就任した若林の技は圓熟期に入つてゐるが、篠島に沈滯の感あるはFW線の變革から來てゐるものだらうか。

◇

この帝大とめぐつて一高、早大が控へ早大は慶大に勝つて頗る氣をよくし、獅子奮迅の勢を以て帝大の牙城に一矢を放たんとすれば一高又返り咲いた所で復活の意氣を示さんとしてゐる、殊にこの二チームは意氣に生きて粘り强い特長をもつてゐるものである丈けに帝大は結合の點に未完成の文大、輕快で帝大と殆んど同型の戰法に生きる慶大と異るこの二强は帝大にとつて相當の苦い相手ではなからうか。殊に早大に敗れる事ともならば四シーズンの輝く歴史に汚點を印す事となり、改めて爭覇の一戰を必要とするから油斷は成らぬ。

◇

第一部の覇權は帝大かと豫想されてゐる時第二部の覇權は早くも農大と決定してしまつた。前シーズン一勝四敗の記錄を殘して第二部陷落となつた農大はこのシーズン當初頗る調子よくスタートしたが端なくも東京高校に慘敗して前途をあやぶましむるものあつたが、東京高校は第二部の新鋭成城高校に一敗するに及んで農大の優勝は有利に導かれ、東京高校が法政と引分けの結果はもつれ出した第二部の覇權を即座に解決してしまつた。復活の實力あつたは勿論だが漁夫の利といへばいはれもしよう。農大は結局東京高校、成城高校、法政大學の三者がシーズン後半に入るに及んで三巴となつた結果であることを農大は忘れずに精進せねばなるまい。

氣の毒だは東京高校と成城高校だが明るい氣分を持つ兩チーム、氣を腐らすことなく捲土重成を次シーズンに期すべきである。

新興チームはたゆみなき研鑽と練磨の効を示してゐるが政法の沈滯、明藥の放逸は東京高校、成城高校の潑剌味を掬す要があらう。第二部の宿將商大は全敗して第三部に落ちるのを免れまい。

第二部の覇權をめぐつて興味をつないだのは第一部のそれよりも一面生氣の溢れてゐる所にあつたがそれは今日解決してこのシーズンのリーグ戰は第一部の帝大をめぐる早大、一高の活躍と第三部の爭覇にかゝつてゐる。立大は既にその試合を完了して三勝一引分一敗で工大の三勝一敗國大の二勝一敗から縺れ出す覇權獲得の夢に醉ふ起つか轉げるかの瀬戸際に立つてゐる。

工大が對國大戰に勝利を占めるならば工大は立大の描く夢を破る事ともなるが國大の勝利に歸するとすると殘る對商船戰に勝味ありと傳へられる國大が第二部に進出するの結果とも成るのでこのところ非常に興味がかゝる。日齒の野望は工大、國大に叩きつぶされ商船は立大と引分けてはゐるが工大に敗れて三戰を殘してゐるから覇權と緣は遠い。青學は不振つゞきでこのシーズンも四戰四敗の不成績、これは第四部に置かるゝを免れない事になつてゐるのは氣の毒である。第四部は優勝の呼び聲高かつた日大、慈大は案外な成績を殘し成蹊の活躍など特に目立つが優勝は中大のものと見られてゐる（十一月二十三日記）

関学大 3-0 関大（11月16日.甲子園）

S5-12-1

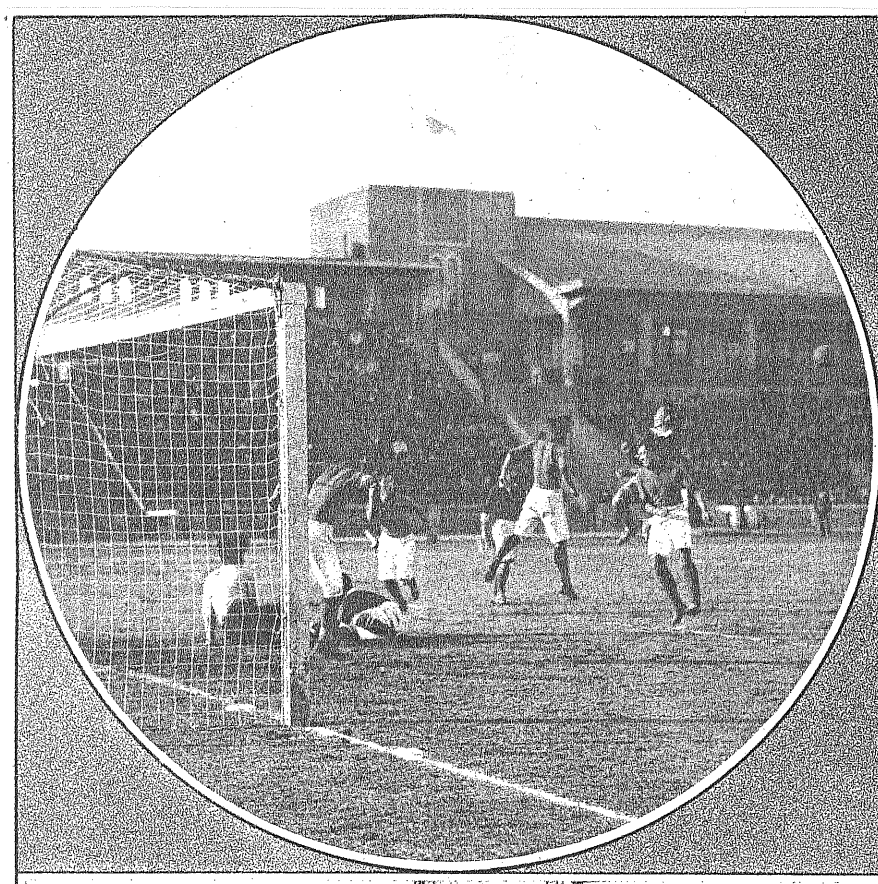
（上圖）十一月十六日甲子園で行はれた關西學院對關西大學蹴球戰において關學が關大陣に攻め入つたところ、3對0で關學勝つ（下圖）同日同所で行はれた京都帝大對神戸商大蹴球戰において京大のFWが神商のゴールを脅すところ、9對0で京大勝つ

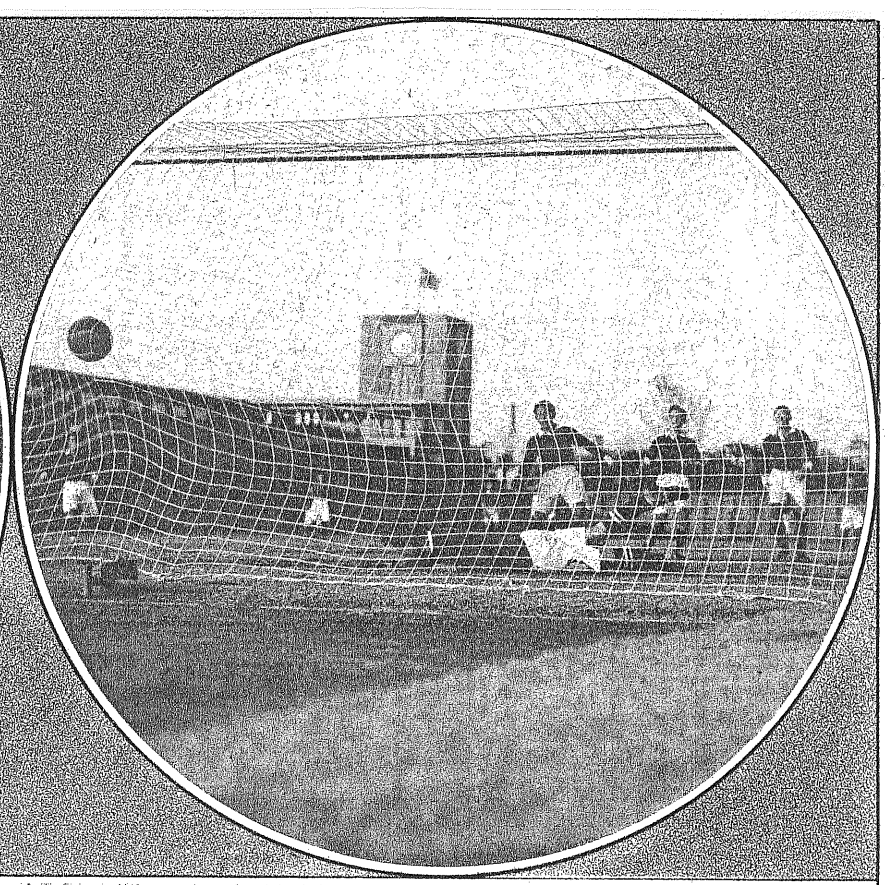
Top: Kwansei Gakuin taking the offensive in an association football game with Kwansai U, Koshien, November 16. Bottom: Kyoto Imperials launching an attack in front of Kobe Commercial U's goal in an association football game at Koshien, November 16.

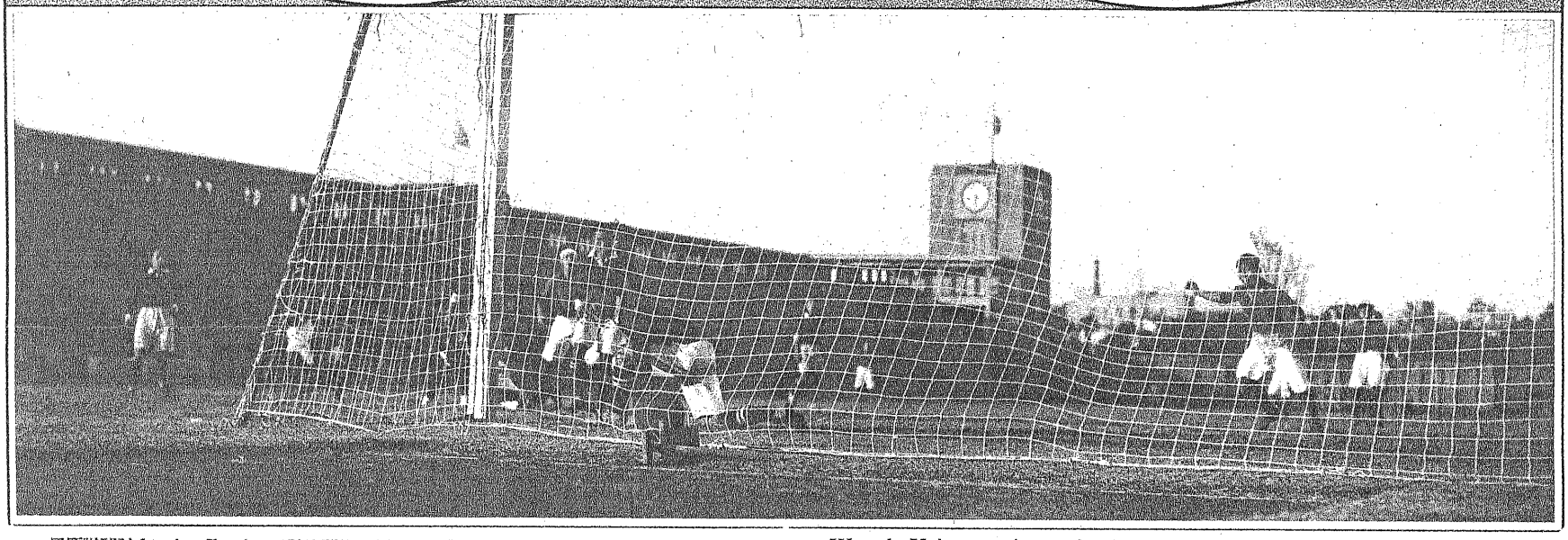
京大 9-0 神戸高大（11月16日.甲子園）

S5-12-15

早大 4－3 慶大（11月22日. 神宮競技場）







早慶蹴球試合は十一月二十二日神宮球場で擧行、混戰の後4對3で早大勝つ(上左)早大の强襲にあふたがフルバックのヘッディングで慶應危機を逃がる(上右)慶應は長坂君のシュートで2對2の同點とする(下圖)慶應は松丸君のシュートで3對2にリードする

Waseda-Keio association football game, Meiji Shrine, November 22, won by Waseda 4 to 3. Top-Left: Keio escapes from a pinch through fullback's heading. Top-Right: A shoot by Nagasaka (Keio) ties the score at 2 to 2. Bottom: A shoot by Matsumura gives Keio the lead, 3 to 2.

京都帝大對關西學院の蹴球試合は十一月三十日甲子園で擧行され1對1の大接戰で引分けとなつた寫眞は關學がコーナー・キックを得てゴール前に巧に送球したが得點を逃がしたところ

Kyoto Imperial-Kwansei Gakuin association football game, Koshien, November 30, resulting in a tie. Photo shows field when Kwansei Gakuin places the ball squarely before the goal on a corner kick but fails to score.

京大 1－1 關学大（11月30日. 甲子園）

S5-12-15

東京學生蹴球リーグ戦に

帝大五年ぶりの敗衂

波瀾を捲き起した早帝の試合

不滿を感じたチームプレイ

濱田　諭吉

昭和五年十一月三十日は我國蹴球史において記憶さるべき日だつた。

この日連續四ケ年リーグの覇權を確保して讓らず、蹴球界に大きな足跡を印して來た帝大が、去る二十二日の慶應との白熱戰に幸運な勝利を奪つて以來意氣大いに揚がり帝大との一戰を目指して只管精進して來た早大の爲に惜しくも敗北の涙を呑んだ日である。

筆者は今年二月一日甲府聯隊に入營以來僅かに極東大會を觀るを得たのみ、久しく大試合から遠ざかつてゐたことゝて當日の朝除隊するや直ちに神宮競技場に馳せつけて大きな期待を以て試合開始の審笛を待つた。定刻前觀衆場に滿ち試合氣分早くも濃厚である。

◇——◇

午後二時半早大の先蹴によつて愈よ試合は開始されたが、早大意氣鋭く遮二無二攻め寄せるも帝大の後陣期する處あるものゝ如く輕く受け流し、FWも自重してかそれとも新たに主將の印綬を帶び漸くその技圓熟の境に入れるFWのエース若林を缺いたゝめに平素の調子の出ないためか、敢て馬を進めず早大やゝ優勢裡に試合は坦々と選ばれて行つた。寧ろ凡戰に近しと稱すべきである、兩軍のパスが敵に觸れないで三つ以上續くことは稀で、早大には屢次無駄な長蹴が遠く線外に或ひは敵手の足許に流れる等、帝大は例年ならば既に完成に近づいてゐるはずの、あの精巧な機械の樣に滑かな十一人の動きが無かつた。特に相手方をして奔命に疲れしむるあの正確なパスワークが殆んど見られなかつた。

この歎きは今春の名手竹腰君によつて統率せられた見事な極東大會日本代表テイームを見た後だけに一層深かつた次第である。

唯この間斷續的に示された個人的妙技が、やがて齎らさるべき波瀾に對する期待と共に觀衆の心を引づつて行つた。そして三十七分早大一點を先取して兩者の均衡が破れ、帝大の奮起するに及んで俄然試合は白熱化し、興味深い後半戰を豫想せしむるに十分な熱戰裡にハーフ・タイムとなつた。

しかしてこの表面平靜に見ゆる前半戰の終り近くに一石を投じて波瀾を招來した早大の一點は、試合開始直後より今日はFW線の中央に位置して飛燕の如く輕捷な帝大CF手島の御株を奪ひ、阿修羅の如く廣いグラウンドを我物顔に馳驅してゐた早大の至寶本田によつて先づ擧げられたものである。即ちゴール・キックを飛込んでチヤーヂし、その漏れ球がLI淺井に拾はれてゴール前に軟彈球として送られたのを本田が再び强引に奪つてブツシュしたもので、帝大によつて甚だ飽氣無く收められた得點と言へやう。

◇——◇

後半戰に入るや帝大漸く好調を示して守勢より脱して壓し氣味となり七分LI高山、斜左へ漏れ球を拾つてドリブルしゴール右前に好パスを送り、RI篠島飛込んで頭彈同點とするに及んで試合は高潮に達した。

帝大餘威を驅つてなほ壓迫を重ね九分左隅蹴の球をRH野澤强蹴するをゴール前の密集中でCF手島鮮やかにストツプし向直つてシユート、この動作正に間髪を容れず早大GKも施すに術無く見事ゴールを陷れ一點を逆にリードしたが早大屈せず、十五分LW眞山ドリブルして深く進むを帝大のRF船岡タックルせんとして成らず、球はゴール左前に轉々するをフオローしたLI淺井進出してゴール・ライン近くからよく廻し本田もまた好位置にあつて輕く右へブツシュして再び同點となり接戰に魅了された觀衆に次のゴールが何れのテイームによつてあげられるかと固唾を呑んで凝視するのだつた。

然るに後半戰に入つてより好連絡に早大を壓迫してゐた帝大の調子が此直後から崩れ始め、特にRF船岡のプレイに躊躇の色が見えこれが全線に波及する樣に思はれた。

船岡は昨シーズン中帝大のウイーク・ポイントに數へられてゐたが、この日近藤に代つて出場せる初陣の僚友林をかばひつゝ見違へる程健氣な奮鬪振を示して後顧の憂無からしめてゐたのにこの躊躇の隙を狙はれたのは或はタックルの仕損じに自信を失つたものではあるまいか。

然し早大に第二點を與へた責任は彼よりも淺井、本田を放任した他のバックメンが多く分擔すべきであつて、若しこのために船岡が自信を失つたとすれば惜みても餘りある次第である。斯くて早大が同點に漕ぎつけた時から再び兩軍その位置を顚倒し、早大のバックメンは牢固たる守備陣を布いて階調を失せる敵のFW線を拒止し、本田を中心とし輕駿高師、老巧淺井より成るインサイド・トリオは適時兩翼及後方よりの援助を受けて各自その特色あるプレイによつて敵陣を攪亂し、帝大の陣營に一抹の暗影の漂ふのを見逃すことが出來なかつた。

連年强力なFWを擁して樂戰し苦戰の試練を受くることの少い帝大のバックは遂に支へ切れずして破綻を見せた。二十二分LI淺井CF本田と併進しゴール正面よりクリーン・シユートして右隅を破つて鮮やかに得點し、これが早軍の決勝の一點となつたのである。

その後恢復を焦る帝大のために唯一の得點の機會が訪れたが不運にも物にならずして逸し去つてしまつた、即ち三十四分早大ゴール斜右四十ヤード邊で得た自由蹴をRH野澤理想的な强直球としてゴール左直前に送り、高山頭彈して右に轉ぜしめたのをRI篠島の頭彈僅かに高くバーを搖がして彈返つて絶好の機會も遂に空しく、爾後帝大側疲勞し早大は盛んに長蹴して防禦に專心し味方ゴールに亂をよせつけず終始健鬪して遂に常勝帝大を堂々と擊破した、リーグにおいて四シーズン連勝といふ稀有の快記錄を有する帝大の光輝ある球史に實に五年振りで敗北の汚點が印せられた譯である。

◇——◇

さるにてもこの戰において些の危氣も無く帝大を屠り去つた早大イレヴンの奮鬪は讃へらるべきものだつた。勝利の潮に乘つた彼等は一人殘らず遺憾無くその力量の全部を發揮し、そのバックスはたとへ主將若林を缺いたゝめにその活動力を減殺されたとはいへ、底知れぬ威力を藏して五人一體となつて厚味ある攻擊にゴールを狙ふこと、餓えたる狼の如しと畏怖さるゝ帝大前衛を緊縛し去り、一方後方の安全なるに氣を得てその前衛は天才本田の奔放なプレイを中心に後半戰の中頃より全く敵陣地を支配した。本試合の早軍の殊勳者は本田を筆頭に主將CHの杉村、RFの井出、それにLIの淺井、LFの吉澤および新人花井などがこれに續くものといふべきであらう。しかしながらこの試合をもつて現在我國の最高水準にあるものと斷言出來ないのを遺憾とする。敗れた帝大に例年の鮮やかなコンビネーション、華麗なるパスワークを缺き、若林の病床に臥した跡を埋めた高山は個人としての奮鬪はあつたが練習不足で手島、篠島と呼應してFW線を滑かに運轉するに力足らず、五人併進して敵陣に怒濤の如く迫る胸の透く樣なFWの奮戰振は早大後陣の反擊に遭つて影を潜め、またFB近藤の突然の缺場は旺んなるべき全軍の意氣を消沈せしめ、延いては終りに近づくにつれて現はれて來たバックの破綻の遠因となりFWの手島、篠島、HBの野澤、終り近くに衰へたがCH竹内、RF船岡の奮鬪も早大を好調時に押切るほどテイームをリードし得なかつた。

一方勝者早大側にも防禦においてこそ完璧に近いプレイが遂行されてゐたが、攻擊においてなほ不滿の點無しとしない。型に嵌らない奔放なパスが敵陣を攪亂したともいへやうが、一見無駄球と思はるゝ數の幾つかゞ本田の神速な出足によつて生かされたにも拘はらず、なほ卅五のゴール・キックを相手に獻じて、さほど强力とも見えなかつた敵後陣をあれ程までに壓迫しながら隅蹴僅かに三を奪つたに過ぎない。この餘りにも高價な取引に對して三省を要することと思はれる。要するに試合を通じて個人的妙技が隨所に點綴されて觀衆の目を樂ませ、得點の接近が最後まで勝者の豫想を許さず、試合の興味を倍加させたが兩軍共に百尺竿頭更に一歩を進めてテイーム・プレイの完成に努力されんことを切望する。

◇　◇

英本國及大陸においては最近ショートパス同樣に正確な長蹴による見事なビリヤード・パスが盛んに行はれて、一層スピーデイな試合が展開されつゝあるよし傳聞する。我國の蹴球試合の最高水準を示すべきこの試合にテイーム・プレイの眞髓を完全に示されなかつたのは殘念である。然しもしも帝大が來る七日の對一高戰に勝てば帝早同率となり十四日に再び兩校が決戰するはずで、敗戰に發奮した帝大はこれに備へて早くも猛烈な合宿練習に入り特有の整然たるテイーム・プレイに今度こそ早大を一蹴すると豪語してゐるからこれが對應の策を講じた强靭な早大と再び相見ゆる日こそ、二週日の研鑽に更に面目を一新したレベルのより高い試合の行はるゝことゝ期待しつゝ擱筆する(五、一二、四)

早大對東京帝大デ式蹴球戰における早大ゴールキーパー熊井君の好防

Kumai, Waseda goalkeeper, saving a goal in the Waseda-Tokyo Imperial association football game.

帝大大英斷のチーム編成に

一高を零敗せしむ

山田　午郎

東京蹴球カレヂ・リーグ戰はシーズンの終りに近づいて文大の第二部蹟落よりも大きな事件が突發してしまつた。帝大の敗戰それである。正に驚天動地の事件である。四シーズン土着かずの實に華やかな記錄を守つて斯界に君臨し本シーズンの覇權もその掌中に收められるであらうその豫想は去る三十日の對早大戰において早大の健鬪の前に叩きつぶされ一敗地に塗れてしまつた。帝大はかくて七日の對一高戰に臨んだが、病後の主將若林はこのシーズンの出場全く覺束なく對早大戰に鑑みて更に陣容を更新して相對した。往時の驍雄鈴木をLWに起用しチヤンスメイカーとしての彼の活躍に待ち最近スランプに落ちて不振に陷つてゐる竹内をLFに廻してRF船岡の力强いパートナーとして好調にある野澤をCHに据ゑたあたり大英斷のチーム編成でそこにはいはれぬ底力を祕めてゐる。

◇　◇

試合は帝大の先蹴に開始されたが帝大の好調に一高獨得の鋭氣も敵はれてしまつて一方的の試合となつてしまつた。殊にLW鈴木の快走、好制球には一高方は施すに術なくつゞけ樣に繰り出されるそのチヤンスを潰すためバックスは奔命に疲れるといふ狀態であつた。これは老巧の前に新進の力鬪も及ばざるの止むを得ない結果であるにしても、中樞機能であるHB線に考慮をせぬ一高の失敗である。このシーズン主將永地がCHの位置についた事があるのだからやはりこの試合も永地をCHに配して一軍を指揮せしめるの背水の陣を布くことが一高の執るべき最良の手段であつたやうに思ふ。勝敗といふよりも寧ろ大差を作つたといふことに關して論ずるならばこの一點が問題の中心でHB線の樞要なラインであることを實証したともいへる。その供する球も多くは味方の球ならずして相手帝大のため拂つた努力に終つてゐる。この結果は各線に連絡を欠き各線

※右ページにつづく

S5-12-15

※左ページからつづく

は横に何等の攻擊的に守備的に構成するものなくして破綻の連鎖に過ぎない慘狀を點綴してゐる。

それに對し帝大は子供をあしらふ如く攻擊に守備に遺憾のない部厚の配陣となつてゐる。このシーズン擡頭した一高は餘りアッサリ最終戰を失つた。然も對慶、早、文戰に見せたやうな潑剌味と强引さを示す機會は更になくである。

◇　◇

斯くて帝大は更新陣容を以つて復興の意氣を燃しながら一週日後の對早大戰に本シーズンの其の眞價を問ふのである。

◇　◇

第二部は成城高校が明藥に大勝を博して三勝一敗一引分で東京高校と同成績となつて共に第二位を占めたがこのシーズンこそはと非常に期待されて農大と對峙し必死となつて優勝を爭ふであらうと期待された法政は第三部に顚落の運命におかれた商大と拙戰を演じて引分け第二部の終幕戰である對明藥戰に勝つて一勝一敗で引分といふ餘りも香しからぬ記錄をのこしてしまつたのはチーム偏成の支障よりも外に大きな原因が潛んでゐる筈だ。往時は第一部に籍を置いた事を想起する要があらう。

順位		農	東	成	法	明	商	勝	得點
1	農大	×	1	3	1	1	1	4	24
2	東高	5	×	1	2	1	1	3	30
2	成高	2	4	×	2	1	4	3	25
4	法政	0	2	2	×	5	1	1	10
5	明藥	0	2	1	0	×	3	1	6
6	商大	1	2	1	1	0	×	0	5
	敗	1	1	1	1	4	4		
	分	0	1	1	3	0	1		
	失點	8	11	8	6	4	12	9	

（○印は勝△印は分▲印は敗）

◇　◇

第三部はシーズン深くなるに連れて工大、立大、國大に依つて三ツ巴に描かれた興味も七日行はれた工大對國大の結果により全く消散してしまつた。國大はこの一戰を物する事が出來れば優勝の見込立つのであつたが立大には敗れても次第に好調を加へてゐる工大に對しては全力を傾けても及ばぬ一戰となつて遂に憾みを呑む事となつた、工大は4—2で遂に勝を制し後豪正部等を擁し臥薪嘗膽の効あつて三シーズン目に漸く昇進の途が開かれたので工大にとつては本懷であらうにしても進出の機會を毎シーズン目前にして未だに惠まれぬ立大はその不運を嘆つより他にない、しかもこの工大を破りながら日齒に敗れ商船に引分けた爲めこの一戰に淡い望みをかけて成行を凝視してゐたが工大が快勝してしまつては是空である。

首位爭ひもかく結果を告げ工大が商大と交代とはなつたものゝ最下位において青山學院と東京高等商船の一戰が殘りさうであるのは青山學院が商船を破り商船が立大日齒と引分けて共にリーグの特定點が二點であり所から殘る國大對商船の一戰が國大の勝利とならば當然最下位を決定する一戰が必要となる譯である。

◇　◇

第四部は中大が七戰七勝して茲に本リーグ唯一の全勝優勝となつたのは偉とすべきに足るものがあるにしても新鋭成蹊の第二位、慈大の第三位を占めたは稱讚に値するものがある。日大、東京外語の意外な不振はどうしたことか、どうも後の烏が先になるのが目立つ1中大（七戰七勝）2成蹊（七戰六勝）3慈大（七戰五勝）4日大（七戰四勝）5外語（七戰二勝）5東齒（同上）5大正（同上）8工藝（全敗）。

東京帝大對一高ア式蹴球戰における帝大得點の刹那
A goal for the Imperials in the Tokyo Imperial-First High association football game.

中央の写真の説明 ＝ 東大早大蹴球戦に於ける東京帝大フォワードの強襲

S6-1-1

THE ASAHI SPORTS

アサヒスポーツ

The Japanese Twice-a-Month Illustrated Record of Athletics

新春各地に開催さるゝ
冬季競技諸大會の豫想
【ラグビー スキー スケート サッカー】

第九卷第一號
一月一日號
Jan. 1st.

大正十二年五月十五日第三種郵便物認可
昭和六年十二月廿一日計劃續來
朝日新聞社發行
昭和六年一月一日發行
毎月二回（一日、十五日）發行

秩父宮、同妃兩殿下の御前に

早帝蹴球の優勝爭ひ

再度相見えて雌雄を決す

千野　正人

十二月十四日神宮外苑に早帝は再び戰ふ。早大は帝、慶、文を破り東大は慶、文、一高に克ち、こゝに勝敗同率、關東の覇權を目ざして再び見ゆるのである。この日秩父宮並に同妃兩殿下の台覽を仰ぐ。熱戰苦鬪誠にシーズンの最後を飾るに相應しい大試合であつた。早大利あらず、前半不幸の一點を殘して遂に恨を呑む、未曾有の觀衆は妙技に魅され、幾度か捲起る波瀾變轉に引きずられつゝ、暮色の迫るのも知らなかつた。

△　▽　△

「何あに勝てるさ、然し」といふ樣な自信とも氣の緩みともつかぬ氣持と、また多少の不安も手傳つて、早大は一種複雜な氣分で試合に臨んだことゝ想像する。一方第一戰十一月三十日の不覺の一敗に連勝の誇を傷けられた東大には「負けるものか、斷然やる」といふ果敢な確信の下に背水の陣を布く覺悟があつた樣に見受ける。かうした精神的な力が戰況を支配する處は頗る大きい。

その作戰を見ても早大には去る三十日の第一戰に見た樣な捨身な處がなく、防禦を第一として、獨自の奇襲に本陣を陷れるといふにあり、東大は周到に布陣して眞正面から攻擊突進を第一にするといふものであつた。奇襲に對する正攻法であり、消極的に對する積極的戰法といはうか。奇襲を行ふには敵手布陣の整備しない前半出鼻より意想奇拔の突擊を試みることが多く奏効する。然るに早大の前半戰は自重に過ぎてハーフ以下後退し、東大イレヴンの巧妙なるパスワークに翻弄されて、疲勞し調子を失するのであつた。

後半の奇襲逆襲に猛威を振ひ屢次東大ゴールを脅かしながら、最期の止めを刺し得なかつたのは、前半における防戰がハーフラインを疲勞せしめて完全なるフォローをなし得なかつた點に歸する、また東大の防禦布陣がますます落ちを見せて、早大の奇襲逆擊に馴れ切つてゐたゝめでもあらう。

東大は第一戰に破れながら却て落付いた布陣をなし相變らざる合理的な正攻法は流石に多年の覇者である。今シーズン選手の大半を新にせる東大にして此餘裕あるチームプレーと試合巧者には流石に傳統の强味である。日頃の基礎練習の整備と周到さが偲ばれる、殊に去る第一戰に一敗後、チームの改造、練習、作戰に苦心努力を致し、連續覇權を維持し得たるその精進には敬意を表さねばならぬ。

△　▽　△

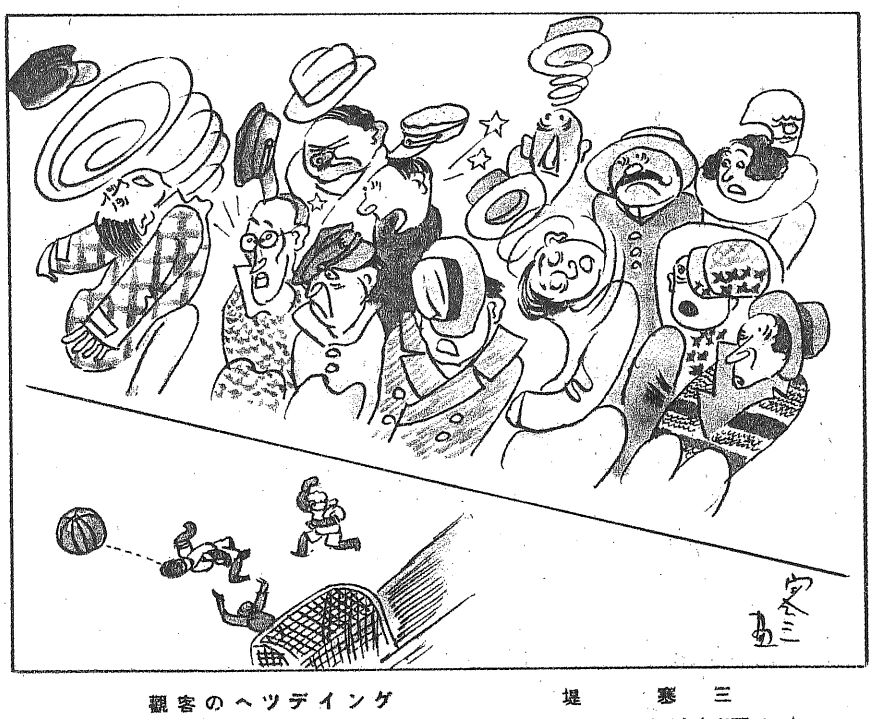
次に兩チームの布陣を少し觀察して見よう。東大竹内のフルバックは最も適切であつた。本田、高師、淺井と早大インサイドトリオの猛擊に少しの破綻も見せず、堂々と後陣を堅守してゐる、殊に後半三十分から四十分に亘る早大ライトサイドの物凄い進擊を阻止せる地味なプレイは一寸眞似手のないものである。現在の蹴球には無駄な長蹴はバックメンにも必要でない。巧緻な、しかして敏捷なアンワードプレイに對抗し得るフットワークと判斷力が肝要である。R・B船岡もこのよきパートナーを得て自信あるプレイを爲し得てゐる、後半三十二分早大C・H杉村の强シウトを下腹に止め猛然之を追つてハーフサイドに捌き出した强引さは新人に對する一服の清涼劑であつた。「ありや不死身だ」とはC・H野澤の阿修羅の如き奮戰を見て一觀衆の放つた嘆聲である。然りこれほど强引果敢底力ある人は一寸これから先にもあるまい。現代隨一ハーフ・プレイヤーである、然しC・Hとしての完成は來シーズンに之を待つべきであらう。東大の兩サイドハーフは忠實にその責務を果してゐる。その攻防に對するフォローとカバーとは早大のそれ以上であつた、蓋しこれはハーフ・フォーメーションにおいて東大に一日の長ありし所以であらう。春山、高山若林と三名手を失へる東大前線は何といつても寂寞である。殊に强力なるウイングを失へる前陣には昨年の凄味がない。五人一體の厚味ある攻擊にバックを脅かし虎狼の如く殺到する力もない、ここに早大バックの好防も然ること乍ら東大前線の凋落を痛感せずには居られない。篠島、牛島如何に老練ありとはいへ此の手不足なる前線を巧に運轉する事は至難の業である。從つて共に無理なるプレイを爲して縱橫に馳驅せる結果は前半三十分及三十六分における篠島の凡蹴、四十五分及び後半三十分における牛島の凡蹴に名殘を止めてゐる。唯決勝の一點が牛島によつて收められたのは此老練の士に對するせめての慰めとして喜び度い

之を要するに東大の勝因はフォワードの活躍よりは寧ろバックの好防てふ消極的方面に求むべきであらう。

△　▽　△

早大本田の奔放なるプレイは、常に東大後陣を攪亂し「何事かをなす」ものとして常に觀衆注視の的であつた。果して後半五分、八分及十三分における巧妙なるシウトは、假令成らざりしとは云へ、彼のみの爲し得る天才的プレイであつて。他者のなし得ざる否眞似すべからざるプレイである。好漢本田の存在は誠に城北健兒の誇でなければならぬ。本田に配するに輕駿高師、老巧淺井の兩インサイドは共に早大攻擊の中心として東大後陣の恐怖となり、奔放なるパスワークにインデイヴイヂユアル・プレイに思ふが儘に攪亂してゐた。惜むらくは此の早大攻擊の三主砲は此の日著しく不調であつた。然し此の不調の過半の責任は兩ウイングの不振とサイドハーフの後退に求むべきであらう。C・H杉村の奮鬪は目覺ましきものがあつた、昨シーズンに比し見違へる樣なプレイである。ジャムブもよい、出足もよい。强引な處もある。殊に主將としての統率ぶりは多年早大を知るものゝ齊しく稱讃を惜しまない處、またハーフマンとして東大の野澤、慶大の大崎と共に最適の素質を有する人であらう。早大後陣に井出、吉澤の兩者を有することは、今シーズン早大好調の一大原因である、殊に吉澤は新鋭にして强豪、東大の老練篠島、牛島に對し、一分のひけ目も感じなかつた。井出は定評あるもの、バックメンとしての完成に近づきつゝあるを喜ぶ、惜むらくはヘッデイングとジャムブに難がある樣に思はれる。

十二月十四日對早大蹴球戰に勝つて五シーズン連續して關東學生蹴球の覇權を握つた東京帝大
Tokyo Imperial association football team, which defeated Waseda December 14.



觀客のヘッデイング　　堤　寒三

優勝爭覇の再戰。この前に帝大五年ぶりの敗衂といふのだから、選手同士も必死だつたらうが、應援の觀客の方も必死である。從つて、頭彈一發ひねり損ふと、觀客も一齊に無念の形相で頭をひねる。滿足に帽子をかぶつてゐる者が無いのは、如何に接戰だつたかの證左ともならう。

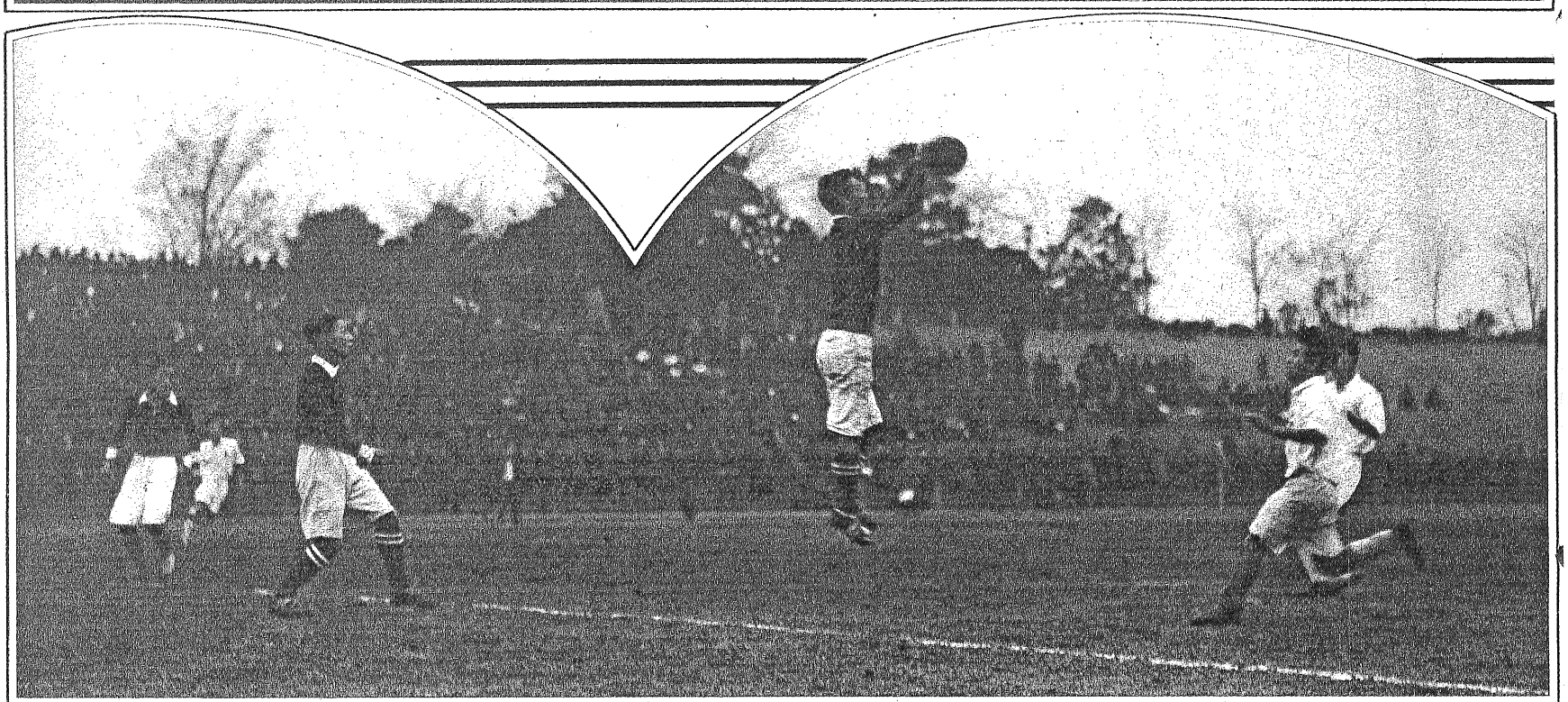
早大 3-2 東大（11月30日. 神宮競技場）

十一月三十日神宮球場で行はれた關東學生蹴球リーグ戰の早大對東京帝大戰は3對2で早大の快勝するところとなつた(上圖)帝大が激しく早大のゴールを襲うてゐるところ(下圖)早大のゴール前で兩軍が混戰を演じてゐるところ

First Waseda-Tokyo Imperial association football game, Meiji Shrine, November 30, won by Waseda 3 to 2. Top: Imperials making a fierce rush for the Waseda goal. Bottom: A battle royal in front of the Waseda goal.

東大 1－0 早大（12月14日、神宮競技場）

S6－1－1



東京帝大對早稲田大學の蹴球決勝戰は十二月十四日神宮球場で擧行、1對0の接戰で東大が關東學生蹴球の覇權を握つた（上圖）帝大三宅君のロングシュートを早大GK熊井君飛び上つてセーヴしFB工藤君がゴールをカバーしてゐる（中圖）帝大篠島君がシュートしたときCF手島君のチャージを避けるため早大の熊井君飛びあがつてノックせんとす（下圖）帝大HB線のフィードをもつてFW線進出のとき早大のFB井出君ヘッディングしてこれを防ぐ

Final Tokyo Imperial-Waseda association football game, Meiji Shrine, December 14, won by Imperials 1 to 0. Kumai, Waseda goalkeeper jumps to save a goal on a long shot by Miyake. Center: Waseda goalkeeper avoids Tejima's charge by knocking a shot by Sinoshima. Bottom: Ide, Waseda fullback, heads the ball and stops a Tokyo rush for the Waseda goal.

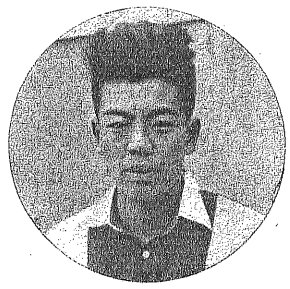
S6-1-1

京都帝大覇權を握る

華々しかつた再度の決戰
關學遂に惜敗す

今川義六

京大蹴球部主將一藤君
Ichifuji, captain of the Kyoto Imperial association football team.



關學蹴球部主將門脇君
Kadowaki, captain of the Kwansei Gakuin association football team.

決勝第一回戰

雨天だが觀衆以外に多かつた、玉井主審のホイツスルで京大先蹴京大は前半關學の猛襲に遭つて息つくひまもなきまでに壓迫されたが後半に入りて京大よく一點を先取すれば關學も返し兩軍よく攻めあつたが、兩軍遂に得點なく大接戰裡に一對一の引分けとなつた。

この試合に對する所感を一口にいへば關學の攻撃は「厚く丸く」京大のそれは「薄く光つてゐた」まづFWの動きに甚だしい相違があつた。京大FWはセンター●スリーで球をキープしてから深い縱のパスで前へ前へと進んだため多くの場合急ぎ過ぎてHBのフォローを許さず攻撃が一度潰されると容易に味方のフキードを得てゐなかつた。

關學FWは丁度この反對であつた、敵モーションの逆を突くスムースなショートパスが次から次へと滑る樣にボールを渡してゐたが多くは最後の決定的パスに行詰つてゐた。それがため京大バックスは一度パスで拔かれても必ず再びデフエンスに參加し結局防禦領域を狹めてから殆んど完全なマークでこれを潰してゐた（二回戰もこの通りであつた）。

◇　◇

次に特筆大書したいのはこの日關學HBが示した攻撃振りである我等はこの中に明かに「躍進しつつある關學蹴球の姿」を認めた、この姿こそデフエンスよりオフエンスへの轉換時において關學HBは見事に有機的且つ組織的に攻撃に參加しチヤンスをつくる點において斷然京大に優つてゐた。

これに反し京大HBは餘りに速かな味方FWの突進にフオロー出來ず剩さへFWインサイドの前へ前への單一なスタートと自身のキープ拙劣のためフキードもまた不成功の場合が多かつた。

FBの陣營もまた例に洩れず關學は幾分弱點のカバーに無理をしつゝもポヂション、キツクともにオフエンシブで十分味方FWをフキードしてゐたが京大のFBは單に守るといふだけで少しもフキードにならないキツクと攻撃的意識の萎縮とは當日京大の不振に重大な因果關係を有してゐる。

然し假に攻撃と切り離した防禦のみを考へるなれば兩チームはその得點の示す通り五分五分の健闘を示しよく奮闘してゐたが、たゞ遺憾なことは兩軍の與へた一點はともにデフエンスの不用意から齎來した大きな失策で、大試合には誠に物足らなく思はれた。

第二回戰

關學はRW赤田を失つたが昨年の岩田を起用し一回戰の好調に自信を以て戰に臨むだ。

一方京大はRW野口とLF加茂下の參加不能で止む無く今シーズン多くの試合に參加出來なかつたRH有賀、RF武村を加へ小幡をLFに下げ新進山口をRWに拔擢し背水の陣を布いて相對した。

快晴だが南風が強い。觀衆約六千人、蓋し關西蹴球界のレコードで心强く又嬉しかつた。

主審は前回の玉井氏。風下に陣した京大バックは豫想を裏切り正確な强蹴によくFWをフキードして試合は最初より一進一退、ボールはグウランドの隅々迄飛び壯快此上なし。然し均衡は案外早く破られた、即ち七分京大右側より攻めRWのセンターした球をCF—IR—LW—CFと連續四度の頭彈見事に關學ゴールを割つて一點を先取した。關學も屈せず二十五分京大を壓迫するやIL東浦の低いシユートにアハヤ得點と思はれたがGK奥野滑つたまゝよくセーヴし續いて關學二度の隅蹴に風下の京大危機に瀕したがバックメンの必死の活躍に——○京大リードのまゝ前半を終る。

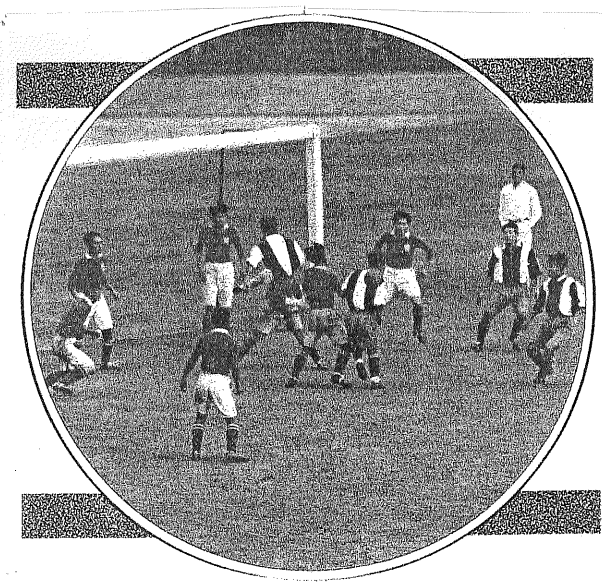
◇　◇

後半風上に陣した京大は陣形を改めCFと兩翼を思ひ切り前に出し兩インサイドはやゝ遲れHB、FBと三重の陣を布き共にロングパスで最前列の三人をフキードするの戰法に出た、これは相當効果を現し度々關學陣を攪亂し四分には關學陣からのコボレ玉に京大CH西村矢の樣なロングシユートを放つてゴールの右隅を破り、後半ますます奮起した關學の出鼻を挫き、さらでだに逆風のため思ふ樣にバックのフキードを期待出來なくなつた關學を一層の苦戰に陷れた。それでも關學のショートパスにはさすがに狂ひは見出されずスローイン等には一日の長をさへ示してよく京大陣を壓迫し戰況は依然として豫斷を許さぬものがあつたが、三十二分勝運は遂に關學を見放した。即ちそれまでも度々破綻を見せてゐた關學左側後陣はまたしても京大RWの快走に攻め込まれセーヴした關學LF門脇のGKへのバツクボールが少し弱かつたのを京大CF永野すかさずチヤージしGK丹羽狼狽ハンブルするを突込み遂に三點のひらきをつけ勝敗の數は明かとなつて了つた。

第一回戰に自信を得た關學とバックスの整備に「今度こそ」の意氣熾んな京大とは心理的にその出發點を異にしてゐた。これは京大の得點が前半、後半の始めであつたことにより更に非常な禍ひとなつて關學を苦しめ、動きは少く出足も鈍り自繩自縛、思はぬ苦戰に陷つてしまつた。

今一つ關學の敗因には、新戰法の建直しといふハンデキヤツプがある。即ち極東大會以來俄にシステムを建直したいはゞ巢立した許りの關學が思はぬ苦戰に遭遇して知らず識らずそのシステムの最も陷り易い弱點に欲り込みそのプレーに適當なスピードと變化を喪失し攻撃に少しの凄味をも示さず指導者の期待を裏切つた事は同情して餘りある事であらう。

反之、京大は大切な時に得點をリードし伸々と張り切つて思ふ存分オープンしてゐた、殊に後半風上に陣し攻撃陣容に變化を加へた事はフオローを差控へた關學中後衛の陣形に幸ひされそのインサイドは悠々球を處理して關學陣を突破する主因を成してゐたことは京大の勝因であると同時に關學の一考を煩したい點である。



關學のフオアワードが京大のゴール前にダツシユしたが京大ゴールキーパー叩いて危機を逃れる
Kyoto goal keeper blocks a ball as the Kwansei forwards rush his goal in the Kwansei Gakuin association football game.

關西學生蹴球リーグ戰の概觀

一部は京大優勝す

今川義六

波瀾を極めた今年の關西學生蹴球リーグ戰も餘すところ第二部の優勝校大阪高等醫專と第一部最下位校工業大學とが一部か二部かの所屬を決する試合のみとなつた。しかしてこれが戰跡を顧みると第二部においては所屬七チームが何れもドングリの脊比べで容易に第一位校の豫想を許さなかつたが新興の意氣旺んな大阪高醫が遂にこの榮冠を物した事は偉とすべきである。

第二部の戰績は多く大接戰が繰返されたが試合の內容は至つて貧弱で時には學生チームとして感心出來ぬ事もあり斷然今後の覺醒と精進とを促したいと思ふのである。順位は次の通りである。

1、大阪高等醫專（四勝一敗）2、京都醫大（三勝一敗一引分）3、同志社高商、和歌山高商（一勝二敗二引分）4、大阪外語（一勝三敗一引分）5、神戸高工（一勝四敗）6、大谷大學（全部棄權）

第一部

大阪工大（五戰五敗第六位）昨年の如き粗暴と野鄙の謗は招かなかつたが何故か昨年のハチ切れさうな元氣を缺きチームに中心を失つた觀が强かつた。もつともつと纏まつた練習が望ましい。唯同情される點はこのチームも神戸商大チームと同じく最近高等學校出身者を新に混へることゝなり渾然と融和した全きコンビネーションが結ばれ難いことである。

神戸商大（一勝三敗一引分第五位）メムバーに故障のあつたためとはいひながら不覺にも大阪商大に遲れを取つたこのチームは餘りに個人的プレーに走り過ぎ「一仕事して行詰るまでは味方に渡さない」といつた全くチームプレーを沒却した傾きが見受られた。この種のプレーの常として相手に大きな弱點があり、そこを此個人的强味（？）でぐんぐん突くと一見如何にも强い樣に見えるが一朝氣が拔けるとバラバラにさへなつてゐた。一團の火の樣になつて戰つてゐた往年を偲ぶ時、學校の昇格が反つて苦しい試練をもたらしたことを痛感する「先づ結合だ!!」今後一層の奮起を熱望する。

大阪商大（二勝三敗第四位）感じのよい試合振りであつた。良くまとまつた紳士的な點、せつせと日ごろの練習通りを行はむと眞面目に努力する點等前述諸チームに見られなかつた處である。今後テクニツクの基礎工事が整ひ、各プレーヤーは相當の自信が生れたら新たなる强豪として異彩を放つ日も遠くはあるまい。

關西大學（二勝二敗一引分第三位）昨年より格段の强味を示したもの、それは第一指を先づ關大に屈す可きではあるまいか、唯關大は惠まれなかつた、前衛の關將相次で倒れ强覇なる中衛必死の頑張りも前衛のキープ拙くして疲勞は遂に覇權を斷念するの止む無きに至らしめてゐた。技術的に相當洗練されてゐるこのチームは前衛闘將の健康回復と共に來年の捲土重來こそ期して待つ可きものがある。但し試合中稀れに感情に走り過ぎて常軌を逸する行爲の慎れがあつた事は今後の誠心を切望する次第である。

關西學院（四勝一敗一引分第二位）

京都帝大（五勝一引分第一位）

京大、關學兩チーム決勝戰の概況を述べるに先だつて一言せねばならぬ事は第一回戰當日兩軍の間に僅かに見受られた危險ないまは少るフアウルプレーである。これは他の試合でも度々見受けた處であるがこれの「プレー」否「暴行」が故意に行はれたものである以上我々フツトボーラーの名譽のため、かつまた關西學生蹴球の誇りを汚辱するものとして殘念至極である。

相當な技倆の持主が苟めにも他の指導的立場に在る試合において自己の道德的自尊心とチームの名譽とを忘却してかゝる行爲を敢へて爲すものありとせばそのものは蹴球の眞精神を體驗し得ざる人々で、名實ともに漸く世界の舞台に乘出さむとする今日の我が國蹴球界には全く有害の存在であらねばならぬ。

京大 3－0 關学大（12月14日．甲子園）

S6－1－1

京都帝大對關西學院の蹴球試合は十一月三十日1對1で引分けの後十二月十四日甲子園で再試合を行ひ3對0で京大勝つて關西學生界の覇權を握つた(上圖)京大のCH西村君が關學のフオアワードを巧みにかはしてドリブルせんとするところ(中左)京大のシユート左にそれて關學のRH石井君危機を脱す(中右)關學フオアワードのパスを京大のハーフがインターセプトせんとするところ(下圖)京大、關學兩チーム

Kyoto Imperial-Kwansei Gakuin association football game, Koshien, December 14, won by Kyoto 3 to 0. **Top:** Nishimura (Kyoto), dribbling past the Kwansei Gakuin forwards. **Center-Left:** Kwansei Gakuin gets out of a pinch when Kyoto Imperial shoots the ball to the left of the goal. **Center-Right:** Kyoto half intercepts ball being passed by Kwansei Gakuin forwards. **Bottom:** The two teams.

S6-1-1

將に來らんとする

全國高校蹴球大會を前に

參加各チームの力量豫想

竹腰重丸

恒例の全國高等學校蹴球大會は新春劈頭一月一日から六日間東京京都兩帝大主催の下に京都帝大グラウンドで擧行される事となつた大正十一年に第一回大會が東京において創められて以來我國蹴球界全般の興隆に伴つて毎回參加校數を增加し最初は八校に過ぎなかつたものが前回には二十三校と殆んどすべての高校がその代表を送るといつても過言でない程の發展をしてゐる。今回は前回の參加校のうち弘前、山形兩校の不出場が傳へられ多少の寂寞を感じないでもないが、參加者が一年間練習の結晶をこの大會に表はさうとしての力闘には定めし目ざましいものがあらうと思はれる。

◆

この大會存在の意義——この大會が創められたころには、蹴球は師範學校系統及び一部の中學校に限られて行はれる運動であるかに見られてをり技術的にも甚だ幼稚であつたが、高校大會が創められて以來各高校には續々と蹴球部が生れそれ等が覇權を目指しての練習は急激に技術の向上を來し今日の我蹴球界隆盛の氣運を釀し出した。

この大會に蹴球の技術的進歩に重大な貢獻をしたばかりでなく各チームが必勝を期しての堂々たる戰ひ振りには多くの者に深い感銘を與へずには措かぬ强力な迫力があり明朗潑剌たる蹴球精神がこの大會によつて養はれ見出されたと見る事が出來る。

現在においても參加チーム中の强チームは强さの點においても我國内の一流チームに伍するものではあるが、大學チームが著しくレベルを高めた今日においては、この大會は、過去に持つてゐた技術指導の使命は大學チームのリーグ戰に讓つたと觀るのが妥當であらうけれども、各チームの持つ特色——例へば豪放、精緻、鋭さ、粘り强さ、輕快、强引等——は或程度までそのチームの環境である母校の特徴を表現してゐるものであつて非常に興味の深い事實である。血や汗を流しての激しい練習の間に母校の色彩が否應なしに織込まれそれを帶びたチームが一所に集つて堂々と技を闘はす處に本大會の傳統的な生命があり存在の意義があると確信する。

◆

優勝の豫想は——由來高校大會の優勝チーム豫想は的中する事が稀である。今回も亦實力伯仲のものが多いと想像せられ覇權がどのチームに握られるかは臆斷を許さぬ處である。參加チームが多い爲に優勝するまでには四試合乃至五試合を殆ど連日に行はなければならない關係から優勝に必要な要件の一として體力が必要である。格段の差を持つ優秀チームでない限り「體力」は單に肉體的な持久力のみでなく苦痛を克服する精神力を伴ふものでなければならないことゝなるであらう。その條件に適ふものは激しい練習を積んだものでなければならぬ。更にまたこの大會には技術から見て優秀なチームがより劣つてゐるチームに敗れた例が可なり多いが多くの場合それは闘志の差から來てゐるやうである。相手の氣魄に壓倒せられては技術の洗練や戰法の巧妙さは何等の力も現はし得ないもので、十分の闘志を持つ必要がある。

◆

强チームであるためには各個人の持つ技術に適合したチーム・ワークを持つ事が必要であるが、東京地方の諸チームは洗練せられた技術を持つてゐるために巧味の點においては他地方のものにすぐれてゐると想像される。それは優秀な試合を觀る機會にも惠まれリーグ戰等で好敵手に接してゐるからであつて他地方のものは良指導者を得たものでない限りこの巧味といふ點においては東都の諸チームに一籌を輸するものと考へる。然しながら巧味と强さとは必ずしも一致するものでなく、洗練味はなくとも基礎技術に力があらば押しの强さが利いて來る。その適例は前回の廣高、前々回の六高にこれを見ることが出來やう。しかして今回もまたこの兩チームはその强味を利して健闘するものと期待することが出來やうと思ふ。

六高は昨年は水高に惜敗したが今回は昨年の經驗者を多くし例年の如く六高獨特の猛練習を積んでゐる事であらうから有望なチームの一つであらう。

廣高は歴史を背景とし地方の高校としては可なり惠まれた環境を持つてゐるからその健闘は例年の如く期待されてゐる。その實力は不明であるが歴史のある事は充實した練習によつて可なりの纒まりを得てゐる事を想像させ、且又傳統的な基礎技術の力强さは今回も保持してゐると傳へられてゐる。

◆

東京地方の諸チーム中昨年の優勝一高はカレッヂ・リーグの第一部に位し强チームに接してゐる强味はあるが果して連勝し得るであらうか、昨年の優勝はそのF・W線の活躍とC・Hの健闘に負ふ處多大であつたが、今年は兩翼F・Wに昨年程の强味なく主將であり今年C・Hとなつてゐた永地が病氣不出場を傳へられてゐるために覇權の維持は可なり困難ではなからうかと思はれるが尙且優勝候補である。

成城及び東高は一高に劣らぬ强さを持つてをり、可なり洗練されたチームといふ感じを受けるけれども廣島や六高に見る樣な押しの强さのない憾がある。然しながら成城は今年體軀すぐれた一二の選手を得て守備に强味を增しF・W内の連絡も進んだ爲に昨年に比し遙かに强味を增してゐる。東高も三年の者多く私かに期する處あるものの如く見受けられ特色ある輕快な技術は好調に乘ずれば威力ある攻擊を招來するであらう。

早高は過去七回の大會中第一回第二回および第六回の三回優勝の最も輝かしい歴史を持つチームであるが今回も早大正選手六名を擁してをり優秀な選手の數においては恐らく今回の大會參加チーム中隨一であらう。たゞ平常早高チームとしての練習を缺いてゐるために、果してどれだけの强さを表はすか疑問であるがリーグ戰終了後直にこの大會に備へてゐる由であるから可なり目醒ましい活躍をすることゝ期待することが出來る。また同チームは體力に惠まれてゐることが一つの强味で大會頭初に强チームにあたらなければ最も有望なチームであると考へられる。

◆

水高は東都の諸チームと似た色彩を持つチームで昨年は一般の豫想以上に奮闘し今年も可なり有望である。個人的に有力な選手は少いけれども全體として良く纒つて居り攻擊に可なり强味を持つて居るやうに思はれる。

法政豫科は個人技には優秀な選手があり全體として巧味はあるが氣持に弱點があり技術の劣る他の高校に壓倒され氣味であるが今回は果してどうであらうか。

新興チーム武藏は傑出した個人は少いけれども攻守に均整のとれたチームで歴史の古い强チームも對戰する場合決して樂觀を許さないであらう。又成蹊は前回初めて參加したチームであるがリーグに加盟して以來著しく强味を增し武藏と共に今回は一般の豫期以上に新進の强味を發揮する事と信ずる。

◆

八高、山口、松江、松山は古くからの參加校であり第一回から第四回までの大會には目覺しい活躍振りを示した諸校であるが時代は變轉して近年は萎微して振はなかつた。

今年の八高は技術は優れてゐないが昨年と同樣元氣よく闘ふだらう。本稿起稿中新聞紙によつて山口高校の選手制度廢止云々が傳へられたが詳細は同校卒業者の一人である私にも目下の處不明で今回は既に申込を完了してゐるが參加か否か疑問と見なければならない選手制度の可否を論ずることを避けるが自他ともに代表としては許す丈のチームが出來難いなら不參加が當然であらう。

浦和、靜岡は共に有數な選手と目すべき者はゐなくなつた樣であるが以前から持つてゐた構成的な强味によつて脆くは敗れないと思われる。

◆

其他七高、松本、二高、五高、富山等は情勢不明で豫想を許さぬがいづれにせよ參加諸チームの技術には大差ない事と信ずる。しかしてまた十二月に入つて急に强味を增すチームが多い爲に秋の央の戰跡は必ずしもこの大會における各チームの力を示すものとは考へられないものであり、またこの大會はリーグ戰や對抗試合、練習試合とは一種異る雰圍氣に包まれてゐる爲に波瀾を起し易く必ず優勝すると豫想出來るチームは全く見當らないのである。

◆

大會の性質として最後まで勝ち續くるものは唯一である事はいふまでもない。各々優勝を期して懸命に爭つてこそ初めて前に述べた本大會の存在意義はあるといふべきである。勝敗の如何に拘はらず一年間の練習はこの大會の各試合にチーム獨自の色彩をあらはす事に成功してをり過去に大會參加の經驗を持つてゐるわれわれにはこの意味において技倆すぐれたチームの試合であると否とに拘はらず各試合いづれにも深い興味と關心とを感ずる次第である。

しかしてまたこの大會の指導精神が、公明な力强さを感じさせる運動精神の發揚にあることはいふまでもない。

第六回大會が京都で行はれた際には非常な寒氣と惡天候に惱まされて十分に實力を發揮出來なかつたものがあつたやうであるが今回はそのやうな惡コンデイションとならない樣心から祈り、又一面參加者がこの大會存在の意義と指導精神とを十分に理解せられて敗れて恥なき健闘をされる樣願ふものである。

S6-1-1

蹴球技質問一束

解説　竹腰　重丸

問　(1)竹腰氏の屢次いはるゝ「パス授受の際の巧妙なる動作」とは如何なることを指しますか (2)サイドキック、インステップキックと上體（特に腕）との關係、上體及び腕を如何に用ふれば強く、方向正しきキックが出來ますか (3)體の動きを敏捷ならしむるには如何なる補助運動が效果がありますか。【水戸市松岡生】

(1)、(イ)自己の持つ球を味方にパスする際、または(ロ)味方からのパスを受ける際に相手を一方に牽制してその逆をとる巧妙な動作を意味しますが、「巧妙」といふのは相手が牽制されなければその動作を變へずそのまゝ突き切る用意のあるものを指します。(イ)の場合としては今までのところロング・パスにはあまり見受けられずショート・パスにのみ利用されてゐますが、たとへば、受けた味方に餘裕を與へるために、前方にある相手の右を拔いて出る（またはパスする）樣な斜左前に急傾斜の姿勢をとつて相手にその側を警戒させ咄嗟に體を右に捻轉する動作によつて相手の左に味方の受け易い球を送るとか、ドリブルして相手に十分近寄つた後脚を踏み替へたり球を自己の體の右前に置いて進んでゐたのを急に球が左前の位置に來る樣體を右に移すとかして相手に豫測を許さないとかが行はれます。

(ロ)の場合としては相手が直ぐ近くにゐて自己が球を得た直後タックルされる虞れのある際のみが問題ですが、それにはパスが自己の前に來る以前に一旦パスを流して球を追ふ動作を示して咄嗟に急角度に旋回するとか、パスを迎へて球に觸れやうとする時そのパスされた球の方向とは急角度をなす方向に一歩を踏み出し相手がその方向に動作を起せば球には觸れず（多くの場合球を跨いで）パスを流し相手と球との間に自分の身體を入れて進むとかゞ行はれて居ます。(イ)(ロ)共に相手が前方に居る場合激しく追はれる場合等澤山の場合が起りそれに應じて技術も澤山ありますが根本的には腰を心持ち前方に突き出した姿勢での疾走、ドリブルの練習が必要と考へます。是等の技術は可なり高級な部類に屬するもので試合のテンポが早くなれば行ひ難くなりまた行つても一人の相手は巧く外すが全體としては損をする結果を生み易く實施には工夫、熟練を要するものと信じます。

(2)、(イ)インステップ・キック(例右足)私の心掛けてゐる方法を述べれば踏切りの瞬間には上體は助走の際の前方への傾斜よりは幾分深い氣味の角度に目的の方向に傾け顎を強く頸にひきつけ胸を目的の方向に突き出し尻が後方に落ち殘らないやう多少前傾した反り身の姿勢に保ちます。また右腕は心持ち曲げて體側に輕くひきつけ左腕は目的の方向に不自然でない程度に擧げて突き出します。右脚を振るに當つては頸及び左腕に力を加へて體の安定を圖ると同時に右肘をグツト後方に引き上げて右脚を強く振るのを助けます。踏切り脚の膝を目的の方向に適度に曲げてその要領で蹴ればキック直後には身體はその方向に低く飛び出します。この型は助走の力を生かして、脚だけの力でなく身體全體の力を利用するのに都合好く、また蹴る瞬間における球の高低、遠近に對して咄嗟に調節するのに便利ですから實戰に當つて方向を正確にする目的にも適ふものと信じます。

(ロ)サイド・キック（例右足内側踝下を用ふるもの）このキックの要點は上體よりもむしろ兩脚にありますが腰のひねりを利用しますからそれを樂にするために、左腕は深く曲げて體側腹の方に強く廻し、右腕は伸ばし氣味に保ち肘で背を叩くつもりで激しく振れば強く蹴る目的に合ひます。方向を正確にするには激しく振り過ぎて體の平衡を失はぬ程度に止めることが肝要でせう。

(3) フット・ワークのためには西洋式繩跳び、咄嗟の場合の身のコナシのためにはハードルの練習といふやうなものが行はれて居ますが、現在のフットボーラーについて見れば、先づ均勢のとれた身體をつくるために上體(腕を含む)の發達をはかる運動が必要で次には、短距離疾走、體を種々の方向に屈伸する速度を早めるための體操、腰の捻轉等の如き、補助運動といふよりは寧ろ基本體操といふべきものから始めなければ、外國で行はれてゐる補助運動を眞似ても一時の間に合せに過ぎないものが多いと考へられます。

S6-1-1

1月の競技日程

蹴球の部

東西兩帝大主催第八回全國高等學校蹴球大會は一月一日から京都帝大グラウンドで擧行される外一月中には次の大會が催される。

一高OB、東京實業團蹴球協會共同主催、第一回實業團大會は一日から東京帝大グラウンドで▲大毎主催第十三回全國中等學校蹴球大會は二日から七日まで阪神沿線甲子園南グラウンドで▲東京蹴球團主催、東京朝日後援の第十三回關東中等學校蹴球大會は十日から三十一日まで東京市外上井草球場で

S6-1-15

東京帝大の連續優勝に歸す

全日本學生蹴球界の爭覇

二對一で京大惜敗す

全日本學生蹴球界のナムバーワンを決すべき第二回東西カレッヂ優勝校の爭覇試合は東都の優勝校東京帝大と關西の優勝校京都帝大との間に十二月二十八日午後二時半から阪神南甲子園運動場で玉井氏レフエリーのもとに擧行された。この日快晴無風全日本の王座を決するに申分のないコンデイツシヨンで試合も期待に反かぬ美技に終始したが結局東大は二對一で京大に勝ち再び全日本の覇權を獲得した。しかしてこの榮ある王座を目指して一年間猛練習を積みながら戰利あらず機を逸して終つた東都の雄早大、慶應、關西の猛關學、關大のプレヤースはこの試合を見て如何に感じたか、以下それ等諸君の感想を聽かう。

物足らぬ試合

早大蹴球部　**杉村　正三郎**

京大		東大
鈴木	FW	松江
内藤	FW	一藤
手島	FW	永澤野
篠島	FW	澤野
三宅	FW	加茂下
齋藤	HB	山本
野澤	HB	西村
林	HB	有賀
竹内	FB	小幡
船岡	FB	武村
阿部	GK	竹内
8	GK	19
4	CK	2
3	FK	2

自分はまだ他より批判を受け、それに對して研究善處すべき立場にあり、決して他に對して批評を加へる如き資格も無しまた實力も無いのであるが、强ひて書けとの事に自分の見たまゝ感じたまゝを赤裸々に憚憚たる文章を以て述べる事とした次第である。

◇

元來この對抗戰は東京蹴球カレッヂ・リーグの第一位と關西學生蹴球リーグの第一位との決戰で、事實上學生蹴球界否日本蹴球界のナンバーワンを決定すべき大試合であり、從つて一般ファンの人氣の中心である事は言を俟たない。

加ふるに今回の東西兩代表の顏觸れが關らずも數年前より定期戰の中絶を見て居た歴史的背景を持つ東大、京大の對立となつたために一般の期待はますます大きい物となつた。

翻つて本シーズン各リーグにおける兩軍の經緯を見るに、東大は今シーズン多大の不運に見舞はれ幾度かの危機に瀕しながら先輩の絶大なる指導激勵選手の猛烈なる發奮努力によつてチーム改造に成功し、遂に關東の金的を死守したる者、京大は雌伏五年見事宿敵關學を屠つて關西の錦標を得たる者共に良きスピード良きパスワークを持つた寧ろ攻擊のチームである從つて戰前我々は互に得點の多かゝん事を豫想したのであつた。

◇

此日南風弱く薄日射してこの球場としては珍しい絶好のコンデシヨンであつた。二時半サイレンと共にゲームは開始されたが最初の約十分間は兩軍些か堅くなつて戰況進まず、その後兩軍幾分調子付き試合は漸くスピードを加へて來た。二十四分京大のペナルテー・エリア近く東大フリーキックを得野澤君は低い剛球をゴール前に送つた、この時京大バックは積極的防禦を忘れた物か或はボールに對する判斷を誤つた物か、之を止め得ずしてC・F手島君の術中に陷つて果氣ない一點を獻じてしまつた。これに勢を得た東大は元氣に敵を壓して三十一分右C・Kからチヤンスを作り手島、篠島兩君の機敏なるプレーに點を重ねたが、京大も偉大なる反撥力を示して見事なるオフエンスに移り、數分ならずして巧みに東大バックの最大弱點を衝いて一點を回復、尙盛に攻め立てたが東大好防して得點を許さず。

◇

後半に入れば兩軍殊にH・Bインサイドの疲勞甚しくゲームはスピードを失ひ、パスに正確味無く全くの亂戰となり、後半最初の約十五分間と、最後の五分間を除いてはこの種の試合には珍しいダルゲームとなつたのは意外であつた。かくして後半互に得點無く結局東大自由蹴の一點が京大の敗因となつたことに思ひ及べば京大に取つて諦め難い處であらう。東大は此處に目出度く再び全國の覇權を獲得する事を得たが、東大F・Wは最近非常なるスランプに陷れるものゝ如く、此の日の出來は全く我々の期待を裏切つたもので、十二月七日の對一高戰、十四日の對早大決勝戰を見た眼にはまるで別人の觀あらしめた。然し反面において京大側のC・H西村君L・B小幡君、R・B武村君の健實なる活躍を忘れる事は出來ない。京大が關學を破つた勝因も恐らく彼等に負ふ處が多かつたのではないかと推察せられる。

◇

東大がインデビジュアルに優れてゐたに對し、京大は元氣一ぱいに動き、出足が常に東大に一歩を先んじてゐたことも東大の攻擊を萎縮せしめた一因であらう。次に京大の敗因として考ふべきは、負傷せる加茂下君をR・Wに起用せねばならなかつたことを指摘すると同時に、ゴール前のパスが常に型通りであつて變化に乏しく、强引さ大膽さに缺けたことが得點を一點に縮めた直接の原因だらうと愚考する。

要するに自分の期待が大き過ぎた爲か、此試合によつて何等學ぶべき處の無かつた事を甚だ遺憾に思ふものである。

帝早戰に及ばず

慶應大學蹴球部　**市橋　時三**

一度早大に敗れて、凋落の秋を思はせた東大は、關西リーグ優勝校京大と見えて完勝、再び日本のナンバーワンたる榮譽を擔ふ光榮を保持した。

對早の試合を見た我々は、如何なる好試合となるか、と期待が大きかつただけに、この凡戰を見せられて、何となく歯がゆい思ひがした。

東大は全く無理なく、樂々と京大を壓迫して勝つた。

◇

只兩帝大が代表としての、初めての對戰で有り、ありし日の高校大會のスター・プレヤーを網羅してゐるといふ以外に、興味はない樣に思はれた。京大は餘りにも退嬰的で有り、粘りにかけてゐた。

前半は多少スピーデイな所が有つたが、後半は殆んど一方的なゲームとなり、凡戰に終つた。キックオフ後暫くは、兩軍共に不調で見るべきものがなかつた。

攻擊も切れ切れで、少しも巧く組立てられてなかつた。

東大最初の得點は、二十五ヤード邊のペナルテイ・キックから生じた。强引なシュートがC・Hによつて成され、味方にふれた球が自壘を割つた。幸運なりし點で有る。

この一點のリードは今までの緊張に堅くなつてゐた東大を精神的に樂に戰はせた。コムビネーションも調つて來た樣だつた。

◇

二點目は、東大右にC・Kを得出かけたのを、C・HからL・Fへとバックパスが成され、L・Fはゴール前に殘つてゐたC・F へ、C・Fは直ちにシュートし、敵に當つてもつれた處をR・Iがきめた物で、L・Fの適時のパスを稱讃したい。

奮起した京大軍の最初の得點はC・H——L・Wへの深い送球がゴール・ライン間近くドリブルしてかへし、さらにR・Iにパス、R・Iがダイレクトにシュートして得點した物で、東大のバックは急いで自壘にバックし、却つて戻りすぎて、京大フオワードの前にフリーな餘地を大きく開けたゝめだ。

攻擊において、防禦において、東大の方がより駿足で、より効果的に動いてゐた。

◇

東大フオワードはW字型淺く、よくラインとしてそろつて進出してゐたに反して、京大は二段となり前三人は敵陣深く進出してゐた。これはやゝ退嬰的な戰法で、スピードに賴つて最後の一人が强引にきめて初めて得點出來るのだ。

京大のフオワードの配列は、W字型が深いから、前三人にパスが行つた時、後のインサイドの二人はライン外に後れて了ふ。

三人が鋭い深いパスをして敵壘にせまるか、最後の一人と一人になつた時、强引に突切るか、直接にか、兎に角シュートを試みるべきで有つたと思ふ。あの場所パスを繰返へせば、時間的にいつても敵に容易にバックされて了ふから、チヤンスは益々薄くなる。

だからF・Wがあの攻法で行くのなら前三人がもつと强氣に當るべきで有つたにも拘らず、シュートを忘れた樣な感が有つた。

◇

東大フオワードは相變らず淺く深く巧みにパスを交へ、スピーデイなプレーを續けた。巧みなパスワークに敵を眩惑して居たが、ただきめが惡かつた、兩ウイングの凡蹴も大いに考へる餘地が有る。きめが良かつたらもつと點が開いたことと思ふ。

ハーフラインは共にC・Hを中心として動いてゐる。然し總ての點においてこのラインは東大に勝味が有つた。兩C・H共個人的に動きは相當大きく、良くやつてゐたが、京大のそれは餘り個人的に偏した感が深かつた。フルバックは兩方共良く動いてゐたが、京大のサイド・ハーフが頭腦的にやや東大のそれに劣つてゐたためか、やり難かつた樣である。特に兩ウイングにノーマークで屢次球を持たれる等何んとかしなくてはならないと思ふ。

東大のそれは、足において、キックにおいて勝り、良く防禦より攻擊に轉ぜしめた。

之を要するにこの試合は、日本において最上級の試合とはいへない、動きの强さにおいて、テムポにおいて、競り方の度合において、到底帝早のそれに及ばない。

日本のナンバーワンを爭ふ試合にしては餘りに淋しい物で有つたといふ感がしみじみとする。

※ 右ページへつづく

東京、京都兩帝大の蹴球試合の前半、東京野澤君の自由蹴ゴールインして東大最初の一點を奪ふ

Nozawa of Tokyo scoring the first point of the game on a free kick in the Tokyo Imperial-Kyoto Imperial association football game.

※ 左ページからつづく

S6-1-15

京大の敗因

關學蹴球部　堺井秀雄

東大の下振と、京大の萎縮とに禍ひされて、第二回東西對抗學生蹴球リーグ決勝戰はその名に副ひ得ず二對一といふ記錄上の接戰であり、個々のプレイには幾多掬すべきものを殘しながら、兩軍とも最後までその持味を示さず、熱意を缺いた凡戰に終始してしまつたのは全く遺憾とする所であつた。しかしてこの一戰京大が得點を先んずることあらば……との期待も前半二十六分京大L・Fは小幡のトリツピングによるペナルテイエレア近くのF・Kを東大野澤の猛蹴にゴールを破つて遂に何等の破綻もみせず再び東大が覇を唱へてしまつた。

◇

今年度においてショートパスの完璧を誇る京大のF・Wも、名だたる東大F・Wの攻撃を恐れてフオローを忘れたそのH・Bに放置されて更に威力なく、兩インサイド球を得んとしての懸命の進退も他との調和を缺いてF・W線の形整備せず徒らに努力に終ること多くまた數度のチヤンスもC・F永野の逡巡に潰れ、ゴール前にお揮る餘りにも定律的な（相手バツクスの位置を考慮に入れぬ）一定不變な送球の濫用に東大F・Bをして難なくカツテイングせしめてゐた。

併し東大F・Wも遂に恐れられて期待された奇策縱横の妙技も發するまでに至らず、同シーズン多くのメムバーの變動を餘儀なくされたとはいへ、餘りにも寂しい物足りなさを吾等に與へた。復活のL・W鈴木に老巧味はあつても試合に對する熱と誠意を缺いて京大R・H有賀をして容易に名をなさしめ、L・I内藤確實性を缺いてなす所なく、僅かに篠島、手島の敏速にして強引なプレイとR・W三宅の新鋭に救はれてゐたかの感があつた。

H・B線はC・Hに野澤を据ゑて執拗、堅實なプレイは、京大F・Wをおさへるには十分であつたが、F・Wへの送球には幾多未完成の點が見受けられた中に、R・W三宅、R・I篠島、R・H林R・F竹内等が屢次時に釀し出す自由自在な送球の正確さと鮮やかさは感嘆措く能はざるものであつたにしても、それ等の多くは餘りにもミツドフイールドに勞力を費ひすぎ、最後の決定的ポイントと迄は成らなかつた憾があつた。

◇

京大H・Bの進出不足は常にその攻撃層の厚味を缺き威力を殺いでゐたのであるが、この日もH・B以下退嬰的、消極的陣形を布き、あまつさへ攻防の中樞といはれるC・H西村は何故か進出を躊躇して守備に萬全を期し、巧緻を誇る東大の攻撃網を如何にもして破壞せんとし後半に入つてから京大バツクメンの敢行する捨身のスライディング・タツクルは奏効し東大の連衡は全く失損され、得點にはならなかつたが前半二十二分をC・F手島―R・I篠島―R・W―R・I三宅と渡りR・W三宅よりの絶好の送球をC・F手島俊敏のシユートに決めたかとおもはれたが横木を僅かに外れ、また後半一分、C・F手島得意の左上隅への强蹴横木を彈いてかへつたあたりに、東大攻撃の全容の片鱗をうかゞはしたのみで終つてしまつた。C・F手島、R・I篠島の持つ正確な强シユートも强引なプレイも今少しく果敢に行はれたならば、より効果的であつたのではなからうか、餘りにも最後の寄せにかゝる事にのみ腐心しすぎる傾向があるのではないか。

◇

一方京大のバツクメンの如何にも萎縮したプレイは當日のあの東大F・Wに對しては餘りにも先入觀念に支配されすぎた隱めなものであつた。この一試合においてのみならず京大H・Bはもつと攻撃的積極的であらねばならぬとおもふ。又F・Wへの送球も多くフイードとならず、その塲のがれともみらるべき性質以上のものではなかつた。とまれ京大の敗因をおもふ時R・W加茂下の起用を誤り前半早くも十分にしてC・F永野よりの送球をシユートせんとして焦り自らつまづき倒れて試合不可能の狀態に陷つた加茂下が精神的及び實戰上に京大に與へた打撃は恐らく吾等の想像以上のものであつたらう事と、京大が與へた最初の點及び前半三十七分C・F永野―L・I―藤―L・W松江と渡るや東大G・K阿部が不用意に飛び出した時、L・W松江のシユートゆるかつたが無人のゴールラインをあはや越えんとした時、L・F船岡素早くかへつて危く蹴り出す等の勝運に惠まれなかつた京大のために革鞋の涙をおしまないと同時に今年も東大をして連續優勝の名をほしいまゝにせしめし關西學生蹴球界の奮起を促がす次第である。

勝敗の分岐點

關大蹴球部　和泉次郎

全日本學生蹴球界の總決算たるこの試合は、我々リーグ加入チームのメンバーとして絶大な期待をかけてゐた。當日はこの大試合に申し分無き日和でありグランドのコンデイシヨンも絶好であり、東西の覇者として相見えた兩チームの戰法を我々は十分に學び得るものと期待は一にこれにかゝつてゐた。

◇

然るに兩軍の戰法には共に大した相異を見ることが出來ず、その上兩帝大の對抗的氣分に壓せられたためか、極度の愼重から反つてその眞技を十分に發揮し得なかつた樣に見受けられた。故に大試合としては遺憾ながら試合そのものの興味は割合に薄く、個人的な妙技を隨所に見得た點に興味があつた樣に思はれ、チームプレーに大して見るべき點が少なかつた。然し優秀なる個人的プレーに附隨して行はれた緻密な連絡にはさすがに東西を代表するチームとうなづかれる。

此處で兩軍の勝敗の因を尋ねて（共に一は勝因を爲すは他に敗因となつてゐるが）思ふまゝを述べて見たい。

◇

先づ兩軍の陣容を見た時H・B線、特にその兩サイドの優劣が影響した點が大であつた、之も京大兩ウイングの活躍が見られなかつた爲ともいへやうが兎に角この競技の攻防の中樞をなすH・B線に優劣を生じたことはこの勝敗の分岐點をなしたものと思ふ。

次に東大F・Wはショートパス・システムを完成せる上に、たほ同樣に正確な長蹴による見事なビリヤードパスを利用せんとしてをり、あの厚味のある攻撃は京大バツクスに多大の恐怖を與へて、京大の攻撃戰は稀薄なものとなつてゐた。これに反し京大は得意のセンタースリーにて敵の防禦戰を中央につりよせ兩ウイングを利用する決定的な攻撃法を行ひ得なかつたことは、後半における幾多のチヤンスに接してそのシユーティング・レンヂに入つて躊躇逡巡した原因ともなつたのであらう。

◇

以上述べ來つた所に依れば東大に一日の長ありと思はせるが、京大バツクスが特に後半において發揮した鮮やかタツクリングが効を奏し出してからは、東大の誇りとする攻撃線の巧緻もしばしば破壞されてその連絡を失してゐた。この邊において京大E・Wに前述の連絡が効果的なものとなつてゐたならば、或は覇權は京大の手に落ちたのでは無からうか。

加茂下君の負傷は京大には大きなハンデイキヤツプであつた。君が健在であつたらこの大試合がよりスピーデイーな激烈たるものに成つたのでは無からうか。

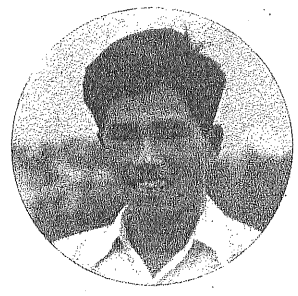
◇

試合全體を通じて見た時その重點は前半にあり、後半においては兩軍共その動きがにぶり平凡なキツクの應酬に終つた。前半東大最初の一點は實に好運　いふより外なく、之れが決勝の一點だけに京大としてはあきらめられぬ事であらう。

◇

最後に堂々たる模範的試合に健闘された兩帝大諸兄に對し未熟をも恥ぢず感想を述べたるを謝し擱筆する。

東大篠島主將談



東大の篠島主將
Shinojima, captain of the Tokyo Imperial association football team.

今シーズンは始めからチーム編成に頭を非常に惱まされました、といふのは思はぬ怪我人が出來たり、都合によつて退部した人などがありましてチームの立直しに始終弱らされました、いふまでもないことでありますが蹴球はあくまでもチーム全體が一體となつて働きかけねば如何に個人の技倆が卓越してゐても駄目ですから……從つて今シーズンの試合は例年にない苦しい戰ひを續けました、今日の對京大戰には、幸運にも私達の勝利となりましたが、全く僥倖だと思つてゐます、丁度對早大戰に幸運にして勝つたときと同じやうに、京大戰には別にこれといふ作戰を立てて臨みませんでしたが、大物關學を倒した京大ですからなかなか骨が折れるだらうとは覺悟してかかりましたが案の定非常な苦戰に陷りました、試合中は恥かしい次第ですが、ただ無我無中で一生懸命にやりました、然し私達は私達のベストを盡して戰ひ幸運にも勝つことが出來ましたから何等思ひ殘すことが有りません。

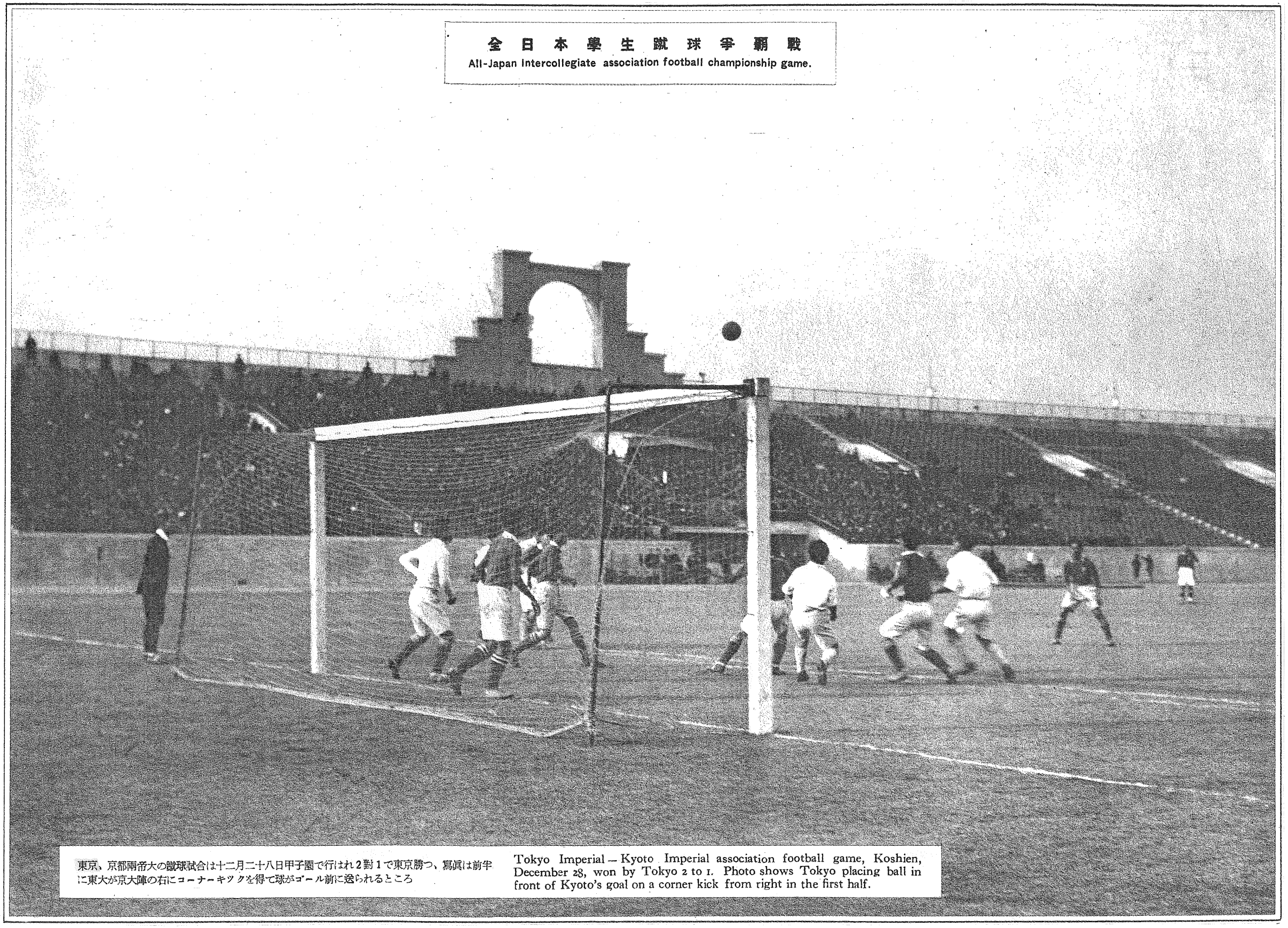
京大一藤主將談

關西學生蹴球リーグの決勝戰で關西學院と二度の激戰の後私達は遂に年來の宿望を幸にして達し得ましたが關東の覇者東大に對しては斷じて氣をゆるめず全力を擧げて戰ひました。しかし戰ひは利あらず全日本の覇權掌握を來たるべき年に待たねばならなくなりました、東大は關東における英名にそむかず實に堂々たるもので私達の學ばねばならない點を多々敎へて呉れました、東大のパスワークは私達のチームより數段上で巧みにバツクパスを適宜に使つて出て來られるのには閉口して終ひました、私達のウイングが試合中不幸にも傷ついて使はれなくなつたのでセンタースリーで東大のゴールをつく作戰でしたが前半どうもまく行かず後半になつてから漸く調子づいて來た樣な次第で、もう少し早く調子づいて呉れゝばよかつたと思つてゐます、とに角フオアワードが五人揃つて出られなかつたことが得點となる機會を逸したものと思つてゐます、然し東大のバツク竹内君はなかなかよく私達のフオアワードパスをカツトしてゐました。

京大の一藤主將
Ichifuji, captain of the Kyoto Imperial association football team.

S6-1-15

全日本學生蹴球爭覇戰
All-Japan Intercollegiate association football championship game.

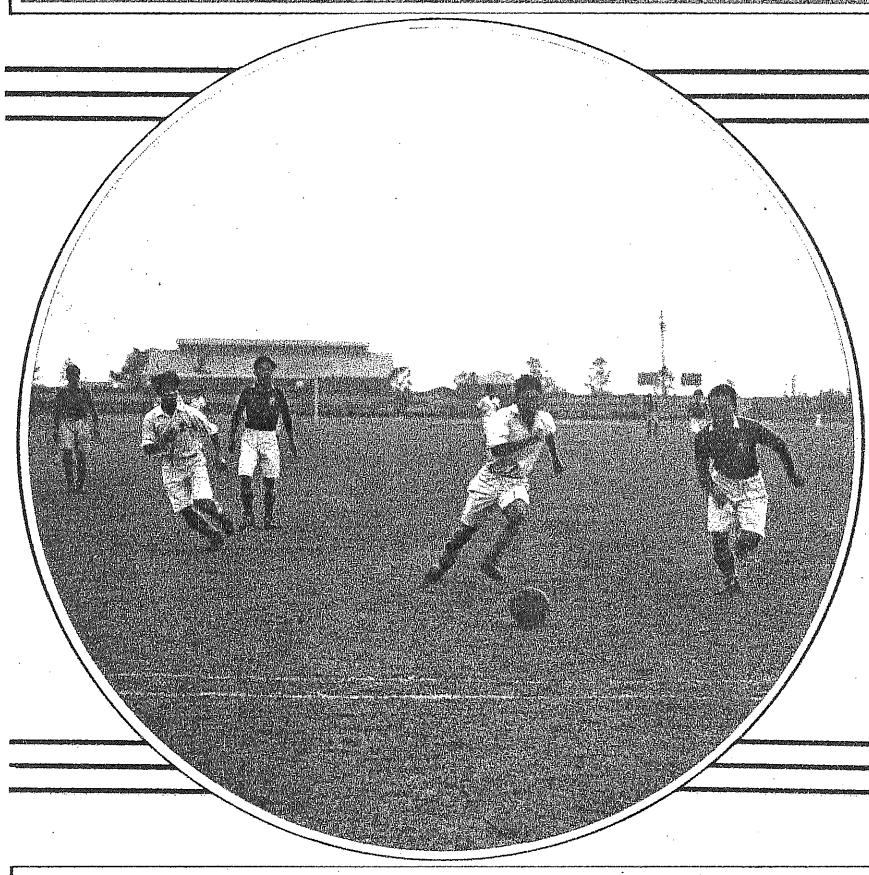


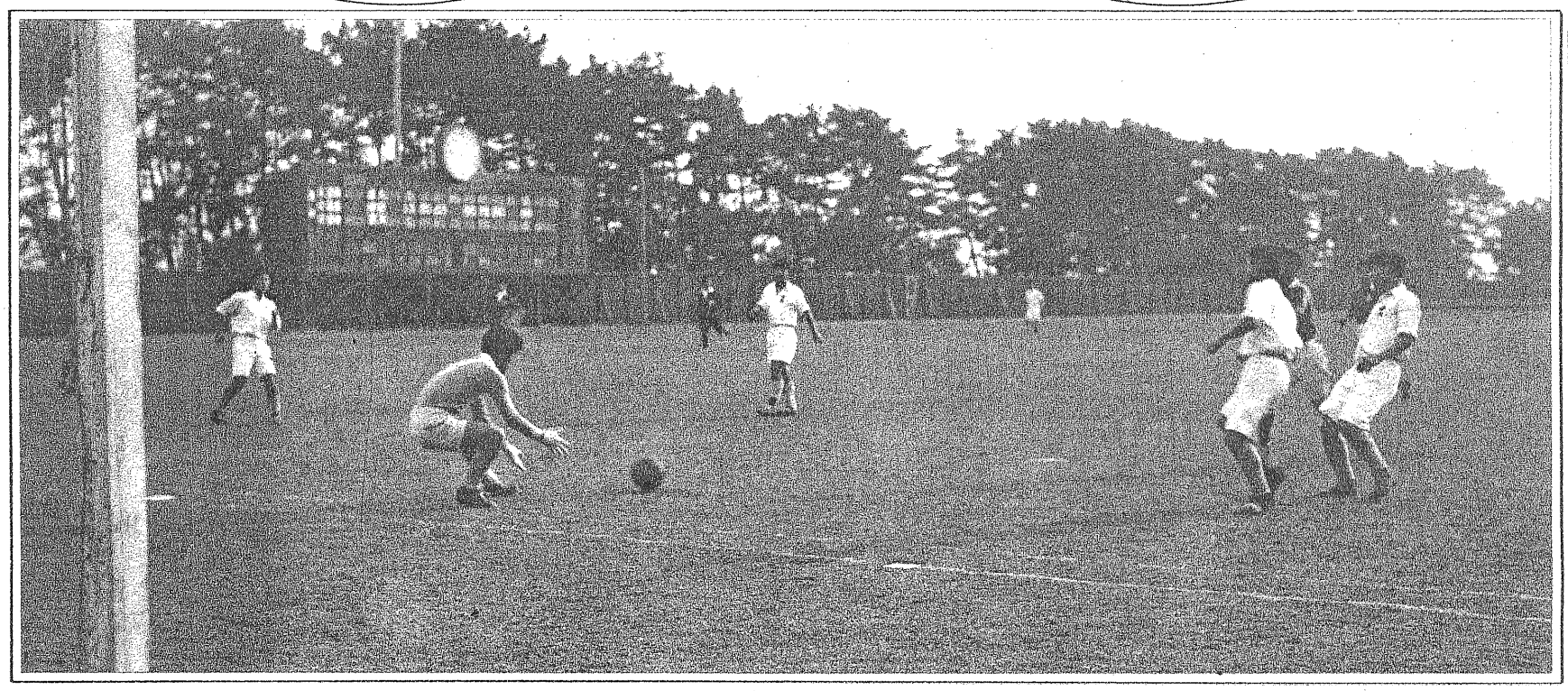
東京、京都兩帝大の蹴球試合は十二月二十八日甲子園で行はれ2對1で東京勝つ、寫眞は前半に東大が京大陣の右にコーナーキックを得て球がゴール前に送られるところ

Tokyo Imperial — Kyoto Imperial association football game, Koshien, December 28, won by Tokyo 2 to 1. Photo shows Tokyo placing ball in front of Kyoto's goal on a corner kick from right in the first half.

東大 2－1 京大（12月28日. 甲子園）

S6-1-15





東西兩帝大蹴球試合 （上圖）東大の篠島君が將に球をコントロールせんとしてゐるところ（中左）京大の松江君バックからの送球を受けてドリブルして進んだが東大の林がこれを奪還せんとしてゐるところ（中右）東大の手島君のドリブルを京大西村君が追走してゐる（下圖）京大のシユートがゴールの眞正面に飛んだため東大ゴールキーパー阿部君易々とこれを受けとめた

Tokyo Imperial-Kyoto Imperial association football game. Top : Shinojima of Tokyo about to kick. Center-Left : Hayashi of Tokyo about to take the ball away from Matsue of Kyoto dribbling it up to Tokyo's goal. Center-Right : Nishimura of Kyoto close on the heels of Tejima of Tokyo dribbling. Bottom : Tokyo goal keeper stopping with ease a ball shot by Kyoto straight at his goal.

全國高校蹴球大會優勝戰における一高のパス
First High passing in the final game of the all-Japan high school association football tournament.

第八回全國高等學校蹴球大會

一高連勝の望成らず六高優勝す

山田午郎

第八回全國高校蹴球大會は二十校の參加があつて、恒例により元旦から京洛の岡崎公園球場で開會された。第一、二日に氷雨があつたため、球場は三日の快晴も効なく最終まで不良の狀態に置かれたので、巧緻の技を滿喫し得なかつたのは遺憾であつたが、この大會にのみ見得る火花を散らす意氣と意氣の物凄い太刀打はその一進一退また一跳に強い力をこめて本大會を飾り得た。五日間を通じて番狂はせと思はれるものもあつたが結局は地力のある六高に優勝の凱歌が擧がり、一高の連覇は遂げられず閉幕となつた。

早高の敗退

本大會に輝やかしい記錄を有してゐる早高が不戰一勝で第二回戰に臨み新進武藏のために潰滅し去つたことは、廣島が二高のため敢なき最期を遂げたのと同樣に番狂はせとして見られたのも當然である。わが蹴球界に斷然王座を占めて睥睨してゐる東大を一度は破つた早大の業績はこのシーズンにおける特筆に値するそれであつた。しかも早高チームの中にはこの早大チームのメンバーとして殊勳に輝く淺井を主將として眞山、阿部がF●W線に巨砲を揃へて攻擊的內容の充實を示しH●B線には花井、F●B線には吉澤、G●K熊井と並んだ守備的內容も優りこそすれ劣るところのものではなかつたはずである。然し哀れ弱冠武藏のために一敗地に塗れ去つたのも、畢竟はその光輝ある歷史が却つて災となつたとも思はれるし、蹴球が全體的の結合をより必要とし、またこの大會は或程度まで打して一丸とした精神的の結合が技術を封ずるといふ事實を雄辯に物語つたとも見られる。武藏の有するその歷史は早高に比して餘りに生新しいものではあるが、最近の勃々たる意氣の下その熱心なる研鑽は次第に技術の向上となり實に見事な精神的の融合を得てゐたのである。早高はこれを知つてか知らずにか、また小敵と侮つてか珍しくも二對一に逆をとられてゐる、この結果を見るには多少幸運が手傳つたとしても事實の前に僞りなく敢て異とするに足らぬ。有爲轉變は世の常事である。殊に歷史に據つて勝利を容易に收め得ると思慮するものにとつては、正に一服の良劑といふべきであらう。斯かる事實が——生々しくも繰り展げられるにつけても後車の相誡むべきを强調したい。

球界の有爲轉變

二高に敗れた廣島は早高よりも有力な優勝候補であつた。從來の廣島を知る人には廣島の敗退を告げても眞僞に迷ふといふほどであつた。前半早くもL●W信夫の骨折による退場といふ不測の災害は被つたが、これ許りが敗因として數へられたかどうか。廣島が戰前描いてゐた二高の豫想は目のあたり見せつけられた二高と、その相距るあまりに開きがありはしなかつたらうか。以上の早高、廣島のそれに比すれば、一枚落ちるかも知れぬが歷史あるチームの崩壞はこれのみに止まらぬ。第一回戰における浦和、法政、靜岡もこの圈內に置かるべきものである。斯かる變轉が續々とあるほどに本大會——これを大きくして全日本蹴球界が常に向上と普遍の一路をたどりつゝあるを知るのである。第一回戰浦和に辛勝した松山、靜岡に辛勝した八高はこれもまた早高、廣島に伍する歷史あるチームであるが第二回戰に入るや前者は水戸に惜敗し後者は8—0で六高のため慘敗を喫してゐる。東京に7—0で敗れ去つた松本、一高に7—0で完敗した松江、成蹊のため3—0で潰れた五高等とゝもに群小チームと譏らるゝに至つたことは人力を以て沮むことの出來ない自然の成敗からであらうか。然し六高を見逃してはならない。地の利に憑まれず好試合に刺戟されるでもないが不斷の精進に依つて蓄へたその實力は遺憾なく發揮されてゐるではないか。六高が初めて覇業を完成するに至つたのも決して故なしとしない、精神的の偉大な融合と不斷の眞摯な練習の賜物と見て他の追隨せねばならぬ所である。

二高對東京

王者を打取つた二高は第三回戰において東京と一對一となつて本大會唯一の延長試合、然かも二回四十分に亙つて勝敗決せず、抽籤の結果は幸運の勝利を東京のため奪はれてしまつた。二高は長蛇を逸した憾みはあるが、東京の試合上手の前にはモウ一歩の開きを殘してゐる。誠に東北には珍らしい均整のとれた底力のあるチームで立派な押しと寄せを持つてはゐるが、それはゴールを陷るる所まで達してゐない。先づその一例をあげるならば前半二十六分ごろであつたらう、R●W西山のドリヴルからF●W線の定石通りの進出となつて强襲機會を作つたが、東京の崩れた守備を衝くべきに球を一時停滯せしめて遂に東京の整備した陣容の中に球をたゝき込んだことがあつたが攻擊速度を一時中斷することは決して執らぬ所のものである。

第一延長戰の際であつた。F●W線がゴール近くに出て球を抱いて惱む姿を屢次見受けたが、これは疲勞から許りでなく畢竟は試合による洗練がないためで一樣にとがむべきではないがC●F李がオフ●サイドのため好機をムザムザ潰してゐたのと共に戒心を要する問題である。H●B線もよくF●B線も殊にR●F楢岡の滿々たる鬪志は全軍を奮起せしめるには與つて効果があつたし、G●K原田の技も判斷も捨て難い所があつた。

鮮麗な水戸の技

水戸は押してよくまた寄せて、實に鮮麗な胸のすくプレイを續けながら六高の强引の前に潰れてしまつた。水戸が前半十三分の右隅蹴と二十一分L●W川原の作つたチヤンスの際、F●W線の進出がモウ一歩早かつたなら六高に先手を打つて勝因として行つたかも知れぬ。二對零といふ敗戰の結果よりも諦められぬチヤンスではなかつたらうか。後半R●W吉井が焦れ出したのは無理もないが、あの場合斯の快走と好技を生かすために冷靜を持しチヤンス●メイカーとしての職分を完全に遂行して欲しかつた。L●H千々はサイド●ハーフとして本大會に傑出した一人であり、全線これと言つて非を打つ所はないがF●W線のダッシュなき憾は後半幾多の機會の前にも取殘された事實で、後半二點の負擔はこのF●W線にモウ一段の鋭さがあつたなら決して大きなものではなかつた。

成蹊と七高

一高に敗れた成蹊高にもこの憾みがある。輕快俊敏なる全線の快プレイは不振の一高を引廻すに十分なものがあつた。殊にそのF●W線は快走と好制球を以て躍進に躍進したが、球場の不良に災されてこれをきめ得ず、C●F高山の長身と强引の球捌きは、一高C●H佐分利の體力不足に喰ひ入つてH●B線を攪亂し、好機は幾度か重なつたが前半の機會も後半十五分頃の機會も潰して終つたのは、一高F●B線の山口、近角の好いアタリと、一はゴール●ゲツターたきためと見ねばならぬ、後半二十分まで勝敗の歸するを知らしめぬ善戰も二十一分一高近角の機智に破られてしまつたのは新興チームの先取すべき機會を逸してゐた結果からで、後手に廻つては全く勝ち味はなく老巧なる一高の底力のため征服されたのは止むを得ないが惜しいことであつた。幸運な籤を引いて不戰一勝につゞき、佐賀の棄權に依つて二勝者となつた七高が、武藏のために敗退したのは當然である事はいへこの一戰に依つて得た體驗は實に高貴なものがある。C●H荒田を措いて他に出色あるプレイヤーを見出すことは出來ないが、終始難戰の中に一點を擧げて零敗をまぬがれたのは偉とするに足るものであらう。未熟な結果は噴飯に値する反則も屢次見受けられたが、將來は一層の研鑽を望んでやまぬ。要するに第三回戰に殘つた八强は七高の他殆んど互角の實力を持つてゐたが體力的には六高が光つてゐた。

不運なりし東京

成城の技術は一瞥しても當然八强いな四强の中にも殘り得べきものであるが、その纖細なる技術と體力的の不利は六高のため早くも强引の打捨りを喰つて引き下がつたのは惜しみても餘りある所であり、四强として殘つた東京もその一つであると言へる。不幸流感のためレギユラースを四名缺いて不遇に喘ぐを餘儀なくされ、不安の戰陣を進めて辛くも准決勝戰まで進み敗退した心中は察するに餘りあるものがある。殊に第三回戰の對二高戰における强迫をよくも支へて延長二回に及ばしたのは容易な業ではない。この中にはF●B田村の强剛無比の健闘、C●H木村の奮鬪は特に光つてゐたが、全線血の滲み出る樣な力闘の結果であるといへる。延長の第一回、第二回にもR●I小出のドリヴルに兩三度の好機を思はせたが、守備に全力を傾けた結果として後援つゞかず。全線切齒したがら無爲に終つてゐたのは同情に堪へないものがあつたが、幸運に殘つて六高と准決勝戰に相見えたのはそれにも增しての悲慘なものがあつた病兵川村等を繰り出すその苦衷は一般觀衆の同情も翕然として集まり次第に好調となつたが、前半三點の負擔はこの場合として過重なものとなつてゐた。後半全線に復活の意氣漲つて巧緻的のプレイを以て六高陣に强襲を重ね、五分C●F川村に依つて一點を恢復しC●H木村の巧みに進める戰陣は六高陣を遺憾なく攪亂して絕對優勢となり、好機は相當の數に上つたが僅かの所でゴールを外し遂に惜しくも敗退してしまつた。後半强

全國高校蹴球大會における一高對六高の優勝戰、一高のドリブル
First High dribbling in the their final game against Sixth High in the all-Japan high school association football tournament.

※右のページへつづく

※ 左ページからつづく

剛六高の鋭鋒を封じ得たのも一際目立つ田村あり山田捨身の奮鬪が與つてゐるしG・K佐藤は不馴れ乍らも妙技を示して前線を安きに置いたのは偉い。小池兄弟等を病床に置いて、最強陣を布いて對し得たかつたのは時の非とあきらめるより他にない。

武藏の躍進

この大會を通じて特に一般の注意を惹いたのは何と言つても武藏の飛躍と二高の進出とであらう。中にも武藏の名は誠にも輝やかしいそれであつた、ダーク・ホースとして那邊まで活躍するかの期待はかけられてゐたが、抱有する力量については多少の疑念も持たれてゐた樣であるが、第二回戰に强豪早高を打取り七高を屠つて四强として殘つた手際は、眞實武藏の有する實力のそれであつたといへる。各線とも立派な技術を有しての好連絡は一高のそれにも遜色なきものであつた、殊にF・W線兩翼の保有する快走好技は本大會を通じても一、二を爭ふそれであつた。殊に全線は輕快の中にも敢進の威力を藏してゐるあたり、將來恐るべきチームとして見ることの出來るものがある、惜しや一高のためには四對零で抑へられてはしまつたがキツクオフ直後の破綻が最後まで祟つたものと思はれる。

一高この日のあたりはまた物凄く永地のフオロウ・アツプの冴え越智、中村、北の妙技はあつたが武藏は全く壓重のプレイに終始して抱有する妙技をあらはす事なくして終つた事こそ本大會中の心外なるものであつた。これは新進の共通性である缺陷——機先を制せられた不利——と體力の消耗からであらう。C・F柴田の凄いダツシユも見せずじまひは惜しいが、この壓頭は同チームの將來にもたらすものが多からう。殊にその眞摯な態度、堅實を線として進むそのプレイと好判斷は他チームにも訓へる事が相當にあつたと信ずるものである。

最後の優勝戰

六高	磯野	山本	中野	高田	著林	原田	福安	橋本	加藤	片桐	高野	6	0	22
		FW			HB			FB		G K		C	F	G
												K	K	K
二高	中村	小川	河本	北	今井	永地	大井	山内	近藤	川口	角島	22	9	11

斯くて第一日から連戰して成城八高、水戸、東京と征勝した六高と、第二日から松江、成蹊、武藏を破つて殘つた一高との間に決勝戰は行はれたが、准決勝戰の際の一高の好調から見て球場の狀態が良好ならば覇は一高の絶對的のものとされてゐたのは當然であつた然し第四日夜から降り出した寒雨は漸く良好となつた球場を再び荒らして短蹴連絡戰法の一高にとつては實に不利な決勝戰となつた。前半L・W中村は不振でそのセンタースリーも殆んど無價値なものを放し、越智の球捌きにも威力なく無効果的のものと墮して北の快走に生むチヤンスも、小川のダツシユ乏しく短軀の河本は六高バツクスにかぶせられて自由を缺き病後の永地は前日程の凄味を失して壓迫こそすれ絶好のチヤンスは數少いものであつた。六高バツクスの健闘は勿論であるが焦つては得點機に不用のストツプで制球に手間をとつて機を逸する事も兩三度に止まらなかつた。對武藏戰にゴールの蓋あけをしたR・F近角も珍らしくミス・キツクを五、六本出すなどあつて壓迫はしても優勢に陣を進めても七分の押し試合であつても何となく不安を殘してゐるかに見られた。

一高後半の善戰

前半遂に不運の守備陣となつて一點を奪はれて漸く好調にかへつて後半二十五分、二十九分のチヤンス、十六本目の隅蹴の時、六高F・Bのミス・キツクでゴール前に空虛を生じたが越智のラツシユ一本を誤り、三十五分L・F山口の好送球を小川とつて前進し中村ゴール目蒐けて强球を放つたが、F・W線右側の進出これに伴はず四十分ころからの頻發する好機もきめ得ぬやうに飽くまで不運もつきまとつてゐた。一高は全く試合に勝つて勝負において敗れたのである。連勝の長蛇を逸した無念は思ひやらるゝものがある。これに引かへ六高はこれといふ所はないが、粒の揃つたチームで揃つた體軀と溢るゝ闘志で全軍は常に緊張してゐた。この結果と猛練習に鍛へた技はこの制覇を完成させたともいつてよからうし、球場の狀態を知つて長蹴から展開戰法に逆襲したことは見事成功したといへよう。前々回の大會に早高と決勝戰に相會して長恨を殘したそれが本回ここに達せられた譯で、堅實なる努力に對し惠まれた當然の結果といへる。

勝者に餞す

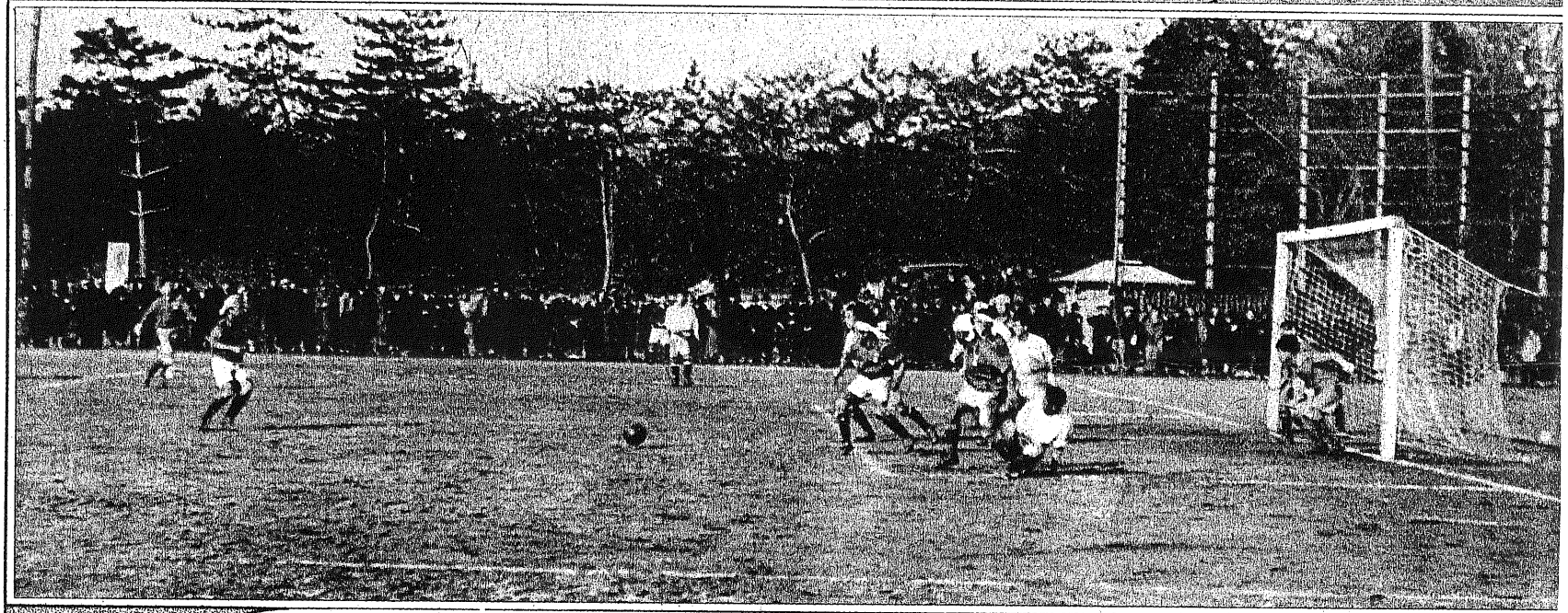
しかし勝者に餞するものがある一高のとつたフリー・キツクは九本で、その中一本だけがオフサイドに依るものであつて、他は術的反則から來たもので、これは今日の輝やかしい地位を占めた丈けに將來戒心すべきことである。なほついでに六高のため一言して置くが斯かる試合にペナルテイ・キツク三本を奪はれたことに對し今後を慎まれたいと思ふ。

なほ本大會を通覽するに八强として東部六チームが殘つたが、孤軍奮鬪した六高の優勝も皮肉にとれる。東部諸チームは大體均整のとれたチームで兄たり難く弟たり難しといふ所で、技術的にも戰法にも鮮やかさを持してゐるが凄味に乏しいのを否定することは出來ない、惠まれた地の利は常に刺戟を與へてゐるのだから眞の底力を作る猛練習を積まねば最後の榮冠は容易に得られない。技術的には六高に學ぶべきもの少なからうが他にとつて訓へを受くべきものゝ數々あつたことをこゝに述べるの要はなからう。

S 6 - 1 - 15

全國高校蹴球大會

All-Japan high school association football tournament.



東京京都兩帝大主催の全國高校蹴球大會は一月一日より五日間京都岡崎球場で擧行、六高の優勝に歸した(上圖)一高、六高の優勝戰で六高(黑)がパスして進む(中圖)一高が六高ゴール前に迫つたが六高よく守る(下圖)優勝した六高チーム

Final game of the all-Japan high school association football tournament, won by the Sixth High at Okazaki, Kyoto, January 1 to 5. **Top**: Sixth High (in black uniforms) passing as they advance through First High territory. **Center**: Sixth High putting up a fierce resistance as First High threatens their goal. **Bottom**: Victorious Sixth High.

S6-1-15

九大の高專蹴球大會

Kyushu University's intercollegiate association football tournament.

九州帝大主催の全國高專蹴球大會は十二月二十七日から三日間九大球場で擧行、廣島高師が優勝した(上圖)廣島高師對松江高校の優勝試合光景(下圖)優勝した廣島高師チーム

All-Japan intercollegiate association football tournament under the auspices of the Kyushu Imperial University, Varsity field, December 27 to 29 inclusive, won by the Hiroshima Higher Normals. **Top**: General view of the final game between the Hiroshima. Higher Normals and Matsue High. **Bottom**: Victorious Hiroshima Higher Normals.

S6-1-15

御影師範の覇業

全國中等學校蹴球大會の印象

高田正夫

華々しい歴史に復も光輝ある頁を加へて、全國中等學校蹴球の覇權は御影師範の獲得する處となつた。

大會第二日を除いた以外の日はあまり天候に惠まれなかつたので日ごろの技倆をこの晴れの舞台に思ふ存分發揮し得なかつたことは特に體力の相違をそのシステムに依つて補はんとするテイームにとつては氣の毒であつた。

この大會を通觀して痛切に感じたことは、意識してプレーしてほしいことである。それはキツクアンドラツシオンリーのプレイをしたテイームが少なくなかつたからである。例へば敵の隙にゐる他の味方に（この場合、球を受けんとする者等が先づ敵の隙へ行くといふことが先決でありかつ重大問題であるが）球を渡せば明らかに次に來る局面を有利に導くものを、その受けんとする者が詰つてをらうがをるまいがその狀態の如何にかかはらず前方へ前方へと渡し且つ渡さんとして自ら窮地に陷つてゐた事を往々見出したからである。

試みに球がフオワードのアウトサイドにあるとする、この時ゴール附近における敵のデイフエンスラインは完全に布かれてゐる、そして味方のハーフは適當に掩護の位置についてをる、かゝる場合、そのハーフに球を返すことが次の局面を有利に導くに容易であるにかゝはらずそのアウトサイドプレヤーは往々球を敵の完全なる守備陣中にあるセンターフオワード、またはインサイドフオワードに送り或は送らんとして自ら死地に陷つてゐたことがあつたのはその適切な一例である。

◇

なほ一つの問題はフイーディングのことであるが多くのバツクメンはフイードする機會が十分あるにかゝはらずたゞ單に一刻も早く味方のゴール附近より球を前へ大きく遠く蹴り出すことのみに急であつたのは、フオワードの攻撃におけるフアイナル●ラツシュの問題と共に一考を煩はし度い事柄である。

更にポジショナル●プレイについて反省を促し度いことは、十一名のプレイヤーの内にはその任務として主として攻撃に從事する者或は主として守備に參與する者とそのポジション別によつて分たれてはゐるが、その個々の任務即ち動きは決して一方的のものでなく十一名の協調したるいはゆる調和のとれる綜合的動きによつて初めてテイームの強さといふものがあらはされて來るといふことを忘れてはならないのである。即ち攻撃における味方のフオワードが球を持つた時の、フオワード相互間、ハーフおよびバツクスとの連絡ある動き、或ひは敵が攻撃移轉に出でんとする際における味方のフオワードまたはハーフおよびバツクスならびにゴールキーパーとの間の調和のとれたる追ひ方など、換言すれば攻撃は必ずバツクメンのみがするものに非ず、守備は必ずバツクメンのみがするものに非ずして攻守共に十一名のプレイヤーの有機的連絡をもつて所謂厚き層を形成して進退するといふ蹴球技における常識ともいふべき之等の事柄を等閑に附してはならない。

◇

本年度參加テイームの多くが從來のロング●パス一點張りよりもショート●パスを多く用ふる樣になつた傾向は最上のものとしての絶對正確なるロング●パスが非常に難しい問題である限り中等學校テイームがショート●パスによりその攻勢の方法を見出さんとする現はれは大いに喜ぶべき現象である。

しかし單にショート●パスのみに頼るといふことは當然避くべき問題であつて、その中にあつて敵の隙をねらつて大きなパスによつてのサイド●チエンヂ等による局面展開もまた缺く可からざることである。エネルギー消費の上から考へても主としてショート●パスを用ひその上機に應じてのロング●パスを併用するのが體力をその主たる根本とする此種競技においては中等學校テイームにとつての最善の方法であらう。

以上は大體において本年度大會の全體を通じて感じたことであつて次に大略各參加テイーム別に就て觀よう。

熊本二師、富山師範
函館師範

昨年あれ程迄に善戰した富山、熊本両師範の活躍を豫期した者にとつての期待は完全に裏切られた。殊に熊本二師は昨年度とそのメンバーに於て大差なきに得點の開くにつれプレイに愼重味を缺き更に退場を命ぜらるゝ者を出すに至つたのは遺憾至極である。富山師範はレフト●インサイドの腹痛のためフオワードが四人で主として戰はねばならなかつたのは氣の毒であつた。その上攻撃におけるバツクメンの位置惡くフオワードの活躍を著しく阻害してゐた。

富山、熊本のバツクメンはプレイに對する根本的概念からして植ゑかへねばなるまい。

函館師範は攻撃並びにその鬪志にみるべきものあるも最後のポイントにおいてあくまで强引に出でた爲め遂に自滅せねばならなかつた。函館、熊本兩師範のプレイ中奇聲を發するが如き態度は絶對に慎まねばならぬ。

堺中學、京都師範
愛知一師

本大會中一番の蹴足を有する堺中はポヂションの惡きと共に其の利用を完全に誤り同時にバツクメンの攻撃に對する概念の相違とハーフの不振の爲得點の差こそ僅少なれ、香ばしきゲームを續ける事の出來なかつたのは殘念であつた。異狀なる進歩にフアンを喜ばしたのは京都師範である。其のフオワードの得意として用ひたスルー●パスにはみるべきものがあるたゞあまりにもスルー●パスのみに頼り過ぎたことゝバツクスとの縱の連絡が十分でなかつたゝめに最後のポイントを確實にすることが出來なかつた。愛知一師は對御影戰において堂々互角の試合をしながらハーフのフイード惡きためとゴール●キーパー並びにライト●インサイドの負傷のため精神的打撃を被り遂に敗退の止むなきに至つた。

由來愛知一師は大會の劈頭に當つて年度における優勝候補と目さるゝ大敵と組みて常に善戰しながら敗北の恨みをのめるテイームであるがかゝる小事にかゝはることなく益々精進されんことを望むものである。

青山師範、廣島一中
御影師範

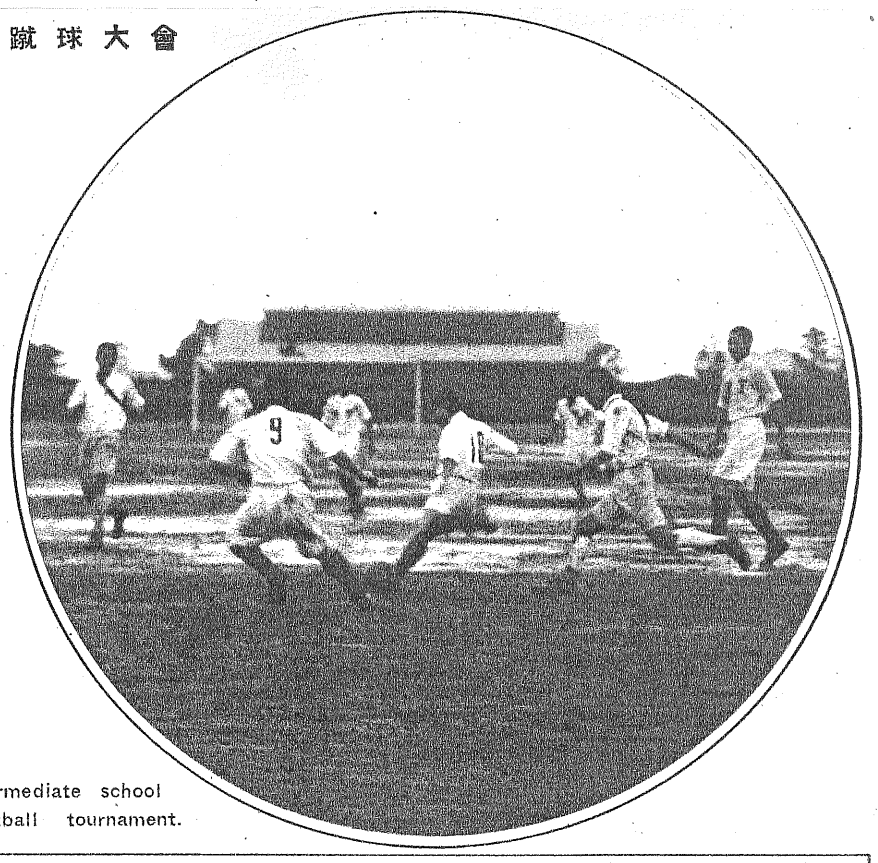
これ等の三テイームは流石我國蹴球の隆盛地に存在する丈けあつて巧妙なる試合を續けてゐた、青山師範の球の勢ひを利用してサイドに輕く當てゝサイド●キツクといはんより寧ろサイド●プツシュで輕く戰つてゐたことは疲勞の點からみても有効である。このテイームの弱點はゴール前における物足りなさおよび役立たない無用のバツク●パスの濫用である。廣島一中の敵の面前を通るよりも背後を通る有効なるパスの自在なる應用、敵の攻撃に出でんとする時のフオード或はハーフの追ひ込みとその間における融和のある動き等により善戰を續けてゐたが思はぬ天候のために遂に强引御影に敗れたことは惜しむに足る試合であつた。

運動王國御影師範は蹴球の覇權を握ることにより更にその基礎を鞏固なるものにした。

從來その得意とするアウト●サイド●フオーワードの活用の上に更にインサイド●トリヲの完成と彼等の最も尊ぶ傳統的强引、粘りと共に超弩級としての貫禄を示した。殊に對青山師範戰後半における風上に陣するとともに採れる戰ひ振りは全く强引御影そのものゝ姿であつた。今後ハーフを充實さすことが勝利を確實にするものであらう。

全國中等學校蹴球大會に優勝した御影師範
Mikage Normals, victors, in the all-Japan intermediate school association football tournament.

中等學校蹴球大會



All-Japan Intermediate school association football tournament.

大毎主催の全國中等學校蹴球大會は一月二日より五日間甲子園球場で擧行御影師範が優勝した、寫眞は何れも御影師對廣島一中の優勝戰で(上左)球の奪ひ合ひ(上右)兩軍フオアワードの混戰(下圖)御影敵ゴールを突いたが廣島のゴールキーパーよく守る

Final game between the victorious Mikage Normals and the Hiroshima First Middles in the All-Japan intermediate association football tournament, Koshien, January 2 to 6. Top-Left: Fighting for the ball. Top-Right: Forwards of the two teams mixing it. Bottom: Hiroshima goalkeeper prevents a score on a Mikage shot for his goal.

S6-2-15

十四ケ年の雌伏を經て
埼玉師範優勝す
關東中等學校蹴球戰

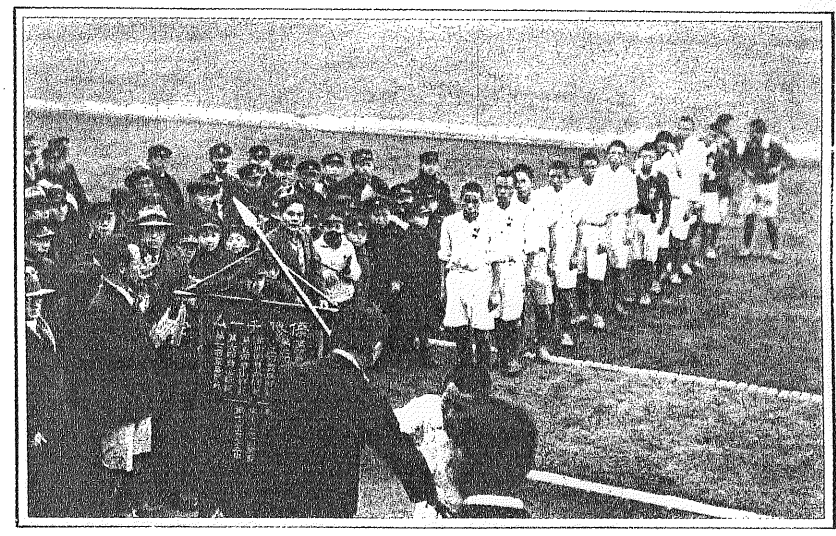
宮本能冬

極東選手權競技大會が齎した無形有形の裨益の中で燦として輝くものにサツカーの光彩がある、

去年のこの大會で五中が完成した劃期的な中學師範の分野併合の暗示もこと此處に至るまでには實に十二年の年月が費された。

然も極東大會が與へた中等界への刺戟はこの建設の火に油を注ぐの結果となつて今度の大會

※右ページへつづく



關東中等學校蹴球大會に優勝した埼玉師範が東京朝日美土路總務より優勝旗を受けるところ

Saitama Normals receiving victor's trophy at the Kwanto intermediate school football tournament.

關東中等學校蹴球大會は一月十日より東京上井草球場で開始され、優勝戰は一月三十一日埼玉師範と青山學院との間において行はれた、寫眞は埼玉師範の攻撃に對し青山がR・F吉田(義)君のヘツディングで守つてゐるところ

Aoyama Middles heading to break up an attack by the Saitama Normals in the final game of the Kwanto intermediate school association football tournament.

※ 左ページからつづく

ほど混沌たる形勢を示したことは曾て見たい所であつた。

曰く府立一商、府立八中等の新鋭や、斷然進境を持つ靜師、北海道中、埼師、青師、それに久しく顔を見せなかつた附屬中學等も一枚加はつて近來の壯觀を呈ししかも勝敗の數は全く豫斷を許さず新興と傳統の一騎打には絶大の興味がかけられてゐた。

◇——◇

所が果して勞頭靜師は附中に敗れ八中は青師を倒す等の狀態で、いよいよ波瀾重疊の感あつたが、練習不足の附中がフリーな氣持で統一された青學中に名をなさしめ、二十五日のツーゲームに不用意な戰法が祟つて水海道中に惜退のやむなきに至つたのでこゝに埼師の優勝が確實となつて戰雲漸く治つた。

今大會の跡を顧みればこれによつて敎へられる所はまことに多いものがあるといはねばならぬ。以下感想を綴つて見よう。

◇——◇

「一回戰に敗れたチームでは何れを推したらいゝんだらうね」

「靜師だらう。去年は見えなかつたが今年の躍進は目覺ましいものありといはねばならぬ」

「師範タイプといふ奴を完全に拔け切つてゐましたね」

「これが附中といふ傳統に歷されたのは地方チームの素朴さが表はれたものだと思ふ」

「附中さへ負かしてゐれば優勝したと思ふんだが……」

「此の他には府立園藝、日大二中、神師、栃師、曉星中、目白中等が一回戰で落ちたがこの中では……」

「さうですね、まあ曉星中かしら」

「同感だ、だが去年から見ると鬪志は認められたがチームの品が落ちてはゐなかつたらうか」

「神奈川、栃木は相變らず古いなあ」

「さうだ、昨春から中學界はぐつとちがつて來たからぼんやりしてゐたチームは自然取り殘されて行つたわけだね」

「それぢやあ殘されずに進んだといふのはどうです」

「左樣、靜岡等が筆頭かな、それから青山師範等も出色の方だ」

「一體師範チームといふものは由來體力を基礎にしてがつちりまとまつてゐたものだが今年の青師を見てゐるとその體力の使ひ方が拙劣だつたと思ふ。といふのは强引一點張りの去年迄のシステムから急テムボに新しいセオリーを取り入れたらしい形跡はいゝがその爲にフオーメーションにスムーズさが失はれ大男が豆粒を拾ふ樣なギゴチなさがあつた、だから一度チームのコンデイシヨンに變調を來すと目も當てられぬ」

「そんなチームは他には無かつたかしら」

「青山は特別な存在だつたと思ふ、二回戰に敗れたといふのも珍らしい事だつたらうね」

「僕はラインが平均されず、それに協調も缺けて居たと思つたが」

「それもあつたがチーム全體にスラムプから來た倦怠がみなぎつてゐたね」

「いゝ選手が居たんだがなあ」

「LI粉川、FB枝村、GK八田この位のプレーヤーは中等界には珍らしいね」

◇——◇

「附中のCH山田もいゝプレーヤーだぜ」

「あゝあれも珍らしい、あの選手は性格的なプレーをやつて居た。明るくて愉快だつた」

「府中ではFBの佐藤もいゝですよ。あの人には將來がありますね」

「それから一體が附中といふ所は昔から個人のフツトワークとスピードが强味でそれに適確な判斷力があるから地方のチーム等がボンヤリしてゐるとボールに觸れぬ中に得點されて仕舞ふ位だつたんだが今年は落ちてゐたね」

「中野と青師の八田と較べたら」

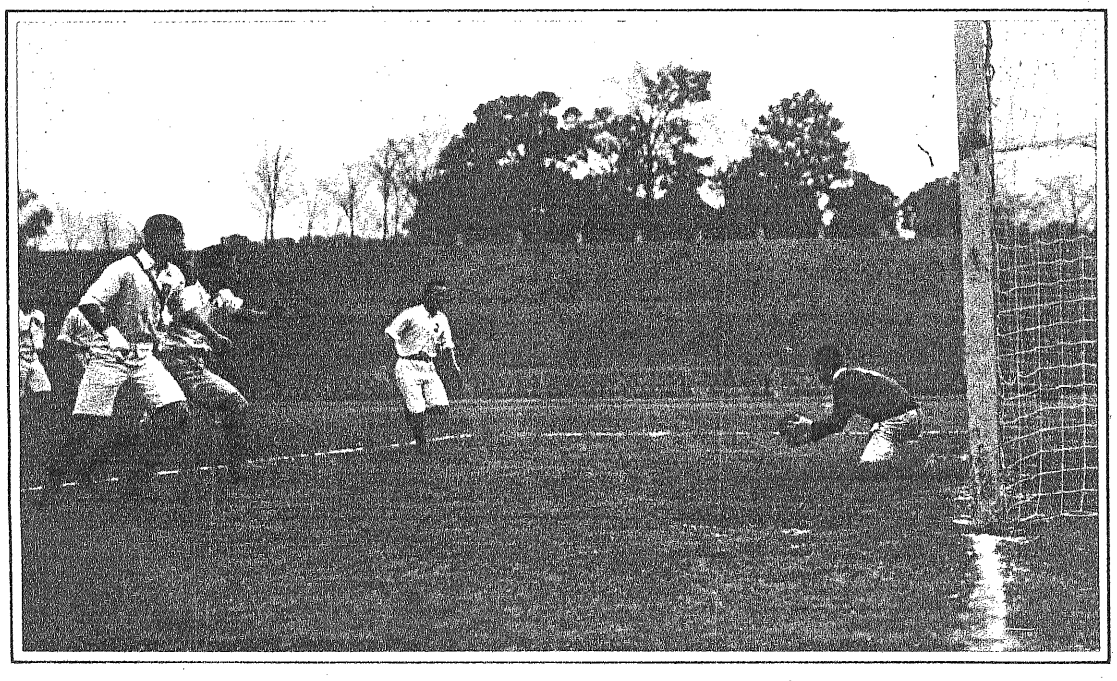
「技は八田の方が上だが全軍を統制するといふ點では中野に一歩ありといふ所か」

◇——◇

「二回戰で落ちたチームには今の青師の他に、千葉師、東亞商業、成城中、東京高等などだが此の五チームでは何うだらう」

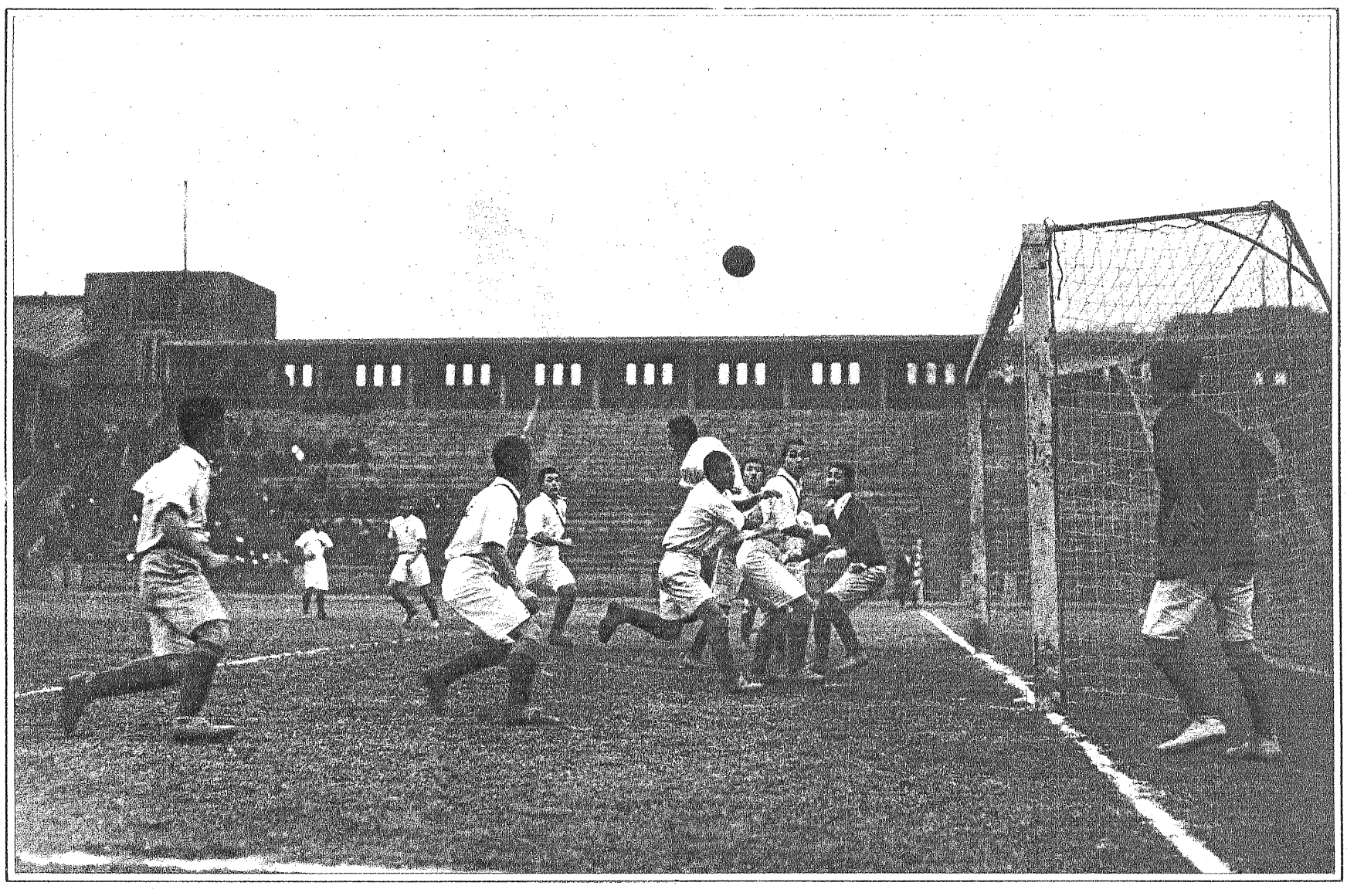
「反省の餘地あるのが成城、東亞で苦しまなければならぬのが千葉、しつかりしたコーチを要するのが浦中だが東京高等は結局あれだけのものかも知れぬと

※ 右ページへつづく



關東中等學校蹴球大會優勝戰で埼玉師範レフトインナー高橋君のシユートを青山學院ゴールキーパーがとめた場面

Aoyama Middles goal-keeper stopping a shot by the Saitama Normals in the final game of the Kwanto intermediate school football tournament.



關東中等學校蹴球大會の埼玉師範對青山學院中學の優勝戰の一場面で埼玉師フオアワードが一齊に攻擊し青山G・K叩いて危機をのがれるところ

Aoyama Middle goal-keeper gets his team out of a pinch by knocking when charged by Saitama Normal forwards in the final game of the Kwanto intermediate school association football tournament.

S6-2-15

※左ページからつづく

思ふ」

「千葉は初陣に府立園藝の首級をあげて氣をよくしたらうなあ」

「小野氏がゐられるさうですが純なチームですから今に素晴らしいものを作り出すと思ひますね」

「二回戰組に府立二中があるが眞面目なチームですよ、敗れはしたけれど實力は帝都商業の上だつたでせう。負けたのは抽籤でしたから……」

「見る機會は東京のチームより少いんだが氣分はよかつたね、川越中等も同じ立場なんだが皆愉快な連中だぜ、技の方は兎に角……」

「蹴球を始めて間も無いんだからこれ以上は望めないだらう」

「然し帝商も歴史は淺いですな」

「それは入學する人が違ふと思ふ。子供の時分から見てゐたといふだけでも大變なハンデイキヤツプだから」

◇——◇

「一商、水海道中、八中、附中と體同じレベルにあると思ふが……」

「結果からいふやうで可笑しいがこれは水海道が斷然出色だね」

「だが一番研究の跡が見えたのは一商ぢや無かつたらうか」

「ラインにも統制のとれた良さがあるにはあつたがスピードにおいて失格だ、進境を示してはゐたが」

「八中は青山師といふ大物食ひをした後で埼玉に完全に潰されたあれは恐らくかうだと思ふ。八中はその搖籃から、青師は強い、優勝チームだ、だからあれさへといふ意識が選手に浸みて居たんだらう。だから對青師のゲームは八中をベストコンデイションに置くときつと面白いゲームになると思つてゐたんだ。

ところが去年はあの泥濘だ、輕快といへばよく聞えるが一面馬力の足りないために完膚無くやられたわけさ、すると今年は青師のレギュラーに故障があつてラインに穴があつた上にあの通り申分のない乾いた芝だ、八中たるもの大いにやらずんばあるべからざる所だつたんだ」

「僕は八中が勝つたといふよりも青師自ら墓穴に進んだといひたいですね」

「さういふ見方もあるだらうがそれは新興チームに氣の毒だ、いゝ所を何處までも伸す樣にした方がいゝんだよ、それにあの試合では實力も八中の方が上だつた」

「全くあの日の青師は不振だつた」所が埼師との顔合はせとなればさつきいつた樣な氣分の張がきるで違ふ上に暮の大每豫選で四一一で青山に敗れた埼師だといふ意識が鬪志を鈍らしてゐたらしい。そこでいざ戰つて見ると存外手強いので周章てゝ陣容立直しをしたがもう遲かつた。實際試合に相手をなめるといふのは禁物だからなあ」

「でずがこのチームには全く中學生らしいいゝ所がありましたね」

◇　◇

「決勝に殘つた青學中だがこれは特徴のないチームだつたね」

「この頃の蹴球では二、三の傑出したプレーヤーの存在よりもかへつて平均されたラインを敷く方が大切だと思ふ、その意味で青學中は比較的無難だつた」

「しかしよくここまで行つたもんだね」

「抽籤のラツキーも手傳つたらうが矢張りそれを重く見度くないね」

「あれは十八日だつたか、試合の前に入浴して了つたことがあつたね」

「水戸中が棄權したので雙方諒解の上で急に成城中と二回戰をやらうといふ事になつた日だつた」

「あんな氣持はいゝね、コセコセ理窟を並べたがるこのごろにアツサリゲームをやるなんて、大陸的で如何にもフツトボーラーらしい所ぢやあ無いか」

「學生スポーツがプロフエツシヨナル化されたなんていふ人もあるが此の氣持で行けばマネキン扱ひにされることも無いだらう。蹴球の生命はそこにあるんだ」

「FWに一寸冴えが見えたが、矢張り決定的なブレーヤーが足りなかつた。いはゞ消極的な戰法なんだから落ち目になると氣の毒だつた」

「埼玉師の優勝はいろいろな意味から感慨深いものがあるんだが僕は先づ十四年の雌伏隱忍を推したい」

「それもさうだね、昭和二年に一回休んでゐるから十四年になるかなあ」

「埼玉は精勤だ、明學中が去年まで古顔の一つだつたが今年は姿を見せぬいさゝか淋しいね」

「僕は埼玉の優勝を師範チームの優勝だ、と一口にいへないものがあると思ふ。つまり今までのいはゆる師範タイプを脱して蹴球の眞ずゐに觸れて來たチーム……いひ換へればある意味では過去の中等界を清算してそのうへに基礎を置いた否少くも置かうとしたらしい努力の認められる點があると思ふんだ。過言かも知れぬが」

「然しその意味なら他にもつと優れたチームが有つたと思ひますね」

「勝敗を別にして、例へば青師や靜師等の方が着色は著しくは無かつたでせうか」

「それはあつた、あつたが埼玉によつて代表されても文句はいへないと思ふね。勿論結果から論ずることは愚だが……」

「幾分ラフな所があつた樣に思ひましたが」

「さういふ所も慥にあつた。これは審判からも注意がありさうなものだと思ふね」

「チームとしては殘念な事だらうが、レフエリーは一面指導者の立場に置かれなければならぬものだからさういふ事も必要だね」

「個々のプレーにでなくチームとして抽象的な注意は六つかしいね」

「そのためにプレーヤーを萎縮させるやうなことがあればね」

「いや、そんなのはプレーヤーの方がいけないんだ、ラフなのは何といつたつて絶對駄目だ」

「それもすこし手きびしいが結局それの方がいゝだらうね」

「だから決勝戰の埼師は生れ更つたやうなスマートさを持つてたんだよ」

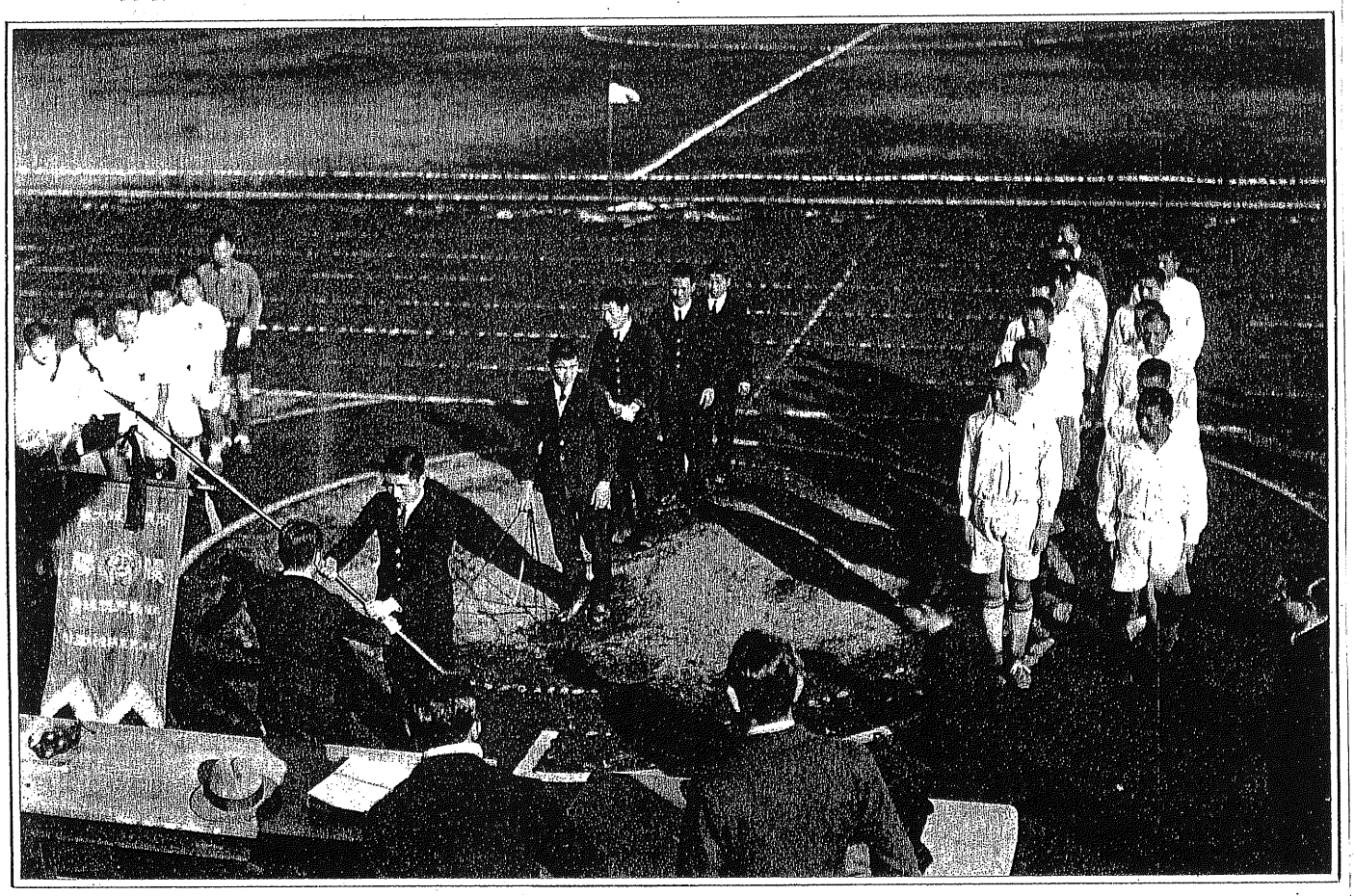
「いゝ選手もゐたね」

「あゝFBの田中か、多少驕慢なところもあつたが、あの位コントロールの正確なキツカーは少いね」

「附中に鬪志と驕氣が無く、靜師は不幸な敗北を被るし、八中は精神的な弛緩で自滅するし、水海道中は前にもいつたやうな災を招いてゐたし。その上優勝第一候補の青師がスランプを脱し切れずにあへない最後を遂げたし、あれやこれやで結極自重してゲームを捨てなかつた埼師に、優勝は惠まれた當然の歸結といつていゝだらう」。

關東中等學校蹴球大會の千葉師範對東京府立園藝學校の試合光景

Chiba Normals vs. Tokyo Gardeners at the Kwanto intermediate football tournament.



第十三回關東中等學校蹴球大會の第一日たる一月十日東京上井草球場で前回の優勝校東京府立五中の石川主將が東京朝日美土路總務へ優勝旗を返還するところ

Tokyo Fifth Middles, last year's champions, return the pennant to Mr. Mitoro of the Tokyo Asahi at the beginning of the first game of the Kwanto intermediate school association football tournament at Kamiigusa, January 10.

S6-3-1

全日本蹴球選手權大會の關學倶樂部對慶應BRB優勝戰で關學が慶應ゴール直前に猛襲し慶應懸命に防戰してゐるところ

A vigorous scramble in front of the Keio goal in the final game between Kwansei Gakuin Club and Keio B. R. B. at the all-Japan association football championships.

S6-3-1

全日本蹴球選手權大會は二月九、十、十一の三日間降雪を冒して甲子園球場で行はれ兵庫代表の關西學院倶樂部が優勝した、寫眞は關學倶對慶應BRBの優勝戰で關學フオアワードのロングパスを慶應のバックがヘッデイングで防いだところ

All-Japan association football championships, Koshien, February 9, 10 and 11. Photo: Keio back heading long pass by Kwansei forward in final game between Kwansei Gakuin Club and Keio B. R. B.

S6-3-1

泥濘の中に猛戰を演じ
關學倶樂部再度優勝す
全日本蹴球選手權競技

鈴　木　重　義

大日本蹴球協會主催第九回全日本選手權大會は、從來の例を破り、去る二月八日より十一日に亘る四日間阪神沿線甲子園南運動場に開催され

關西學院倶樂部(兵庫代表)
兩洋倶樂部(京阪代表)
名古屋蹴球團(東海代表)
慶應B•R•B(關東代表)

の參加あり、關西學院倶樂部再度優勝した。

本選手權大會の今年迄の成績は次の通りである。

第一回(大正十年)**東京蹴球團**
第二回(大正十二年)**名古屋蹴球團**
第三回(大正十三年)**アストラ蹴球團**
第四回(大正十四年)**鯉城クラブ**
第五回(大正十五年)**鯉城クラブ**
第六回(昭和二年)**神戸一中クラブ**
第七回(昭和三年)**W•M•W倶樂部**
第八回(昭和四年)**關西學院倶樂部**
第九回(昭和五年)**關西學院倶樂部**

しかして本年度大會の組合せは次表の如くであつた。

兩洋倶 } 兩洋 } 關學倶 (8—5) } 關學 (3—0)
廣陵倶(棄權) }
關學倶
名古屋蹴球團 } 慶應B•R•B } (6—3)
慶應B•R•B

慶應對名古屋

慶應は大部分現選手であるが結城、大前、島田等の宿將を除いた新進のテイームである。關東の豫選に相當の苦心を續けて來たゞけに、若いテイームと見られる反面、どこかに力强さの見られるテイームであつた。

これに對し名古屋蹴球團は純然たるクラブテイームであつて、所謂クラブテイームの特色と缺點を遺憾なく發揮して居つた。

このテイームは、名古屋高工濱松高工、八高、愛知一師先輩の混成軍であると聞くが、割に粒の揃つたテイームであつた。

名古屋蹴球團の攻擊は大體のやり方として、所謂ショートパスシステムのやり方をとり割に成功ををさめた所もあつたが、所謂クラブテイームであつて、まとまつた練習がなかつたものと見え、もう一歩といふ所で、總てをこわした點が多かつた樣に見えた。

特に中三人のフオワードが見事に聯絡し進んで居るが、これに續くハーフ•バツクの處置が時期を失し、またはおひつめられて轉換の機を失ひ、敵にボールを獻上してしまつた所も見えた。また自分の力にたより過ぎボールを持ちすぎ、徒に敵の術中に陷つた點もあつた。

◇

更に守備の點を見るに慶應のやり方は又特別のやり方であるから、この日のバツクを見て一概にはいへないが、ハーフ•バツクとフル•バツクとの聯絡及びフル•バツクの位置は悪い。少くとも最近進んで行く守備法とは反對の傾向をたどつてゐる樣に思はれる。即ち名古屋蹴球團のフル•バツクの一人は餘りに深く守り過ぎてをつた。

大體慶應は五人のフオワードは揃つて攻めないテイームで單身突進を企てるのでこれに對する策とも見られるが慶應はために何等オフサイドの懸念さへなく十分に思ふまゝに活躍してをつた。このやり方、守り方は技術の進歩せる今日取るべき方法ではないと思ふ。更に攻擊的に働く事が必要であると思ふ。

一方名古屋側のハーフ及びフル•バツクは、フオワードに對するフイードがうまく行つてゐなかつた樣に思ふ、もう少し相手方の虛をつくか、或は又進出の道を拓く樣にパスすることに努めれば一層の効果を擧げ得るだらうと思はれる。

概して名古屋テイームは粒揃ひであるのだから各個人の强さをより多く發揮さすべき方法を講ずべきであつたにも拘らず、敵を威壓する頑强さ、巧みさを十分示すべきチヤンスなく、却つて前半無理があつたのと、練習不足によるか後半において更に威力なく慶應のため壓倒されてしまつたのは遺憾に堪へない

願くば往年全國に名をなしてゐた名古屋蹴球團に再びかへす樣努力せられん事を望む。

慶應としても本試合においてグランドに慣れぬ爲か實にまづいゲームをしてをつた、特にコーナー•キツクにおいて最初の一點をとられ、次に味方のシュートに自殺的一點を與へるなど實にまづい。不注意といはねばなるまい。

然しその潜勢力の偉大さによつて堂々一點また一點と取り返して遂に完全に名古屋を壓倒したのはその力强さ、實力に稱讃を吝まないものがあつた。

關學對兩洋

兵庫代表關西學院クラブ對京阪代表兩洋クラブ戰は最初から關學に大分分があるものと思はれてゐたが、果して八對五の大スコアで關學の勝となつたがその試合の推移を見ると五對五の大熱戰を演じ、一時はその結果を豫斷出來ぬ狀態を示したものである。

關西學院クラブは關西學院現選手が主で、これに先輩後藤を配したテイームであり昨年の選手權にも優勝しまた本年の關西リーグにおいて京大と第一位を爭つたテイームで、相當底力のあるテイームである。

この試合において關學は兩洋をかなり輕く見てゐた樣に見えたために幾分の油斷が見えた、殊に後半點のひらきがあつた際など、必要以上にフル•バツクが攻擊に加はつてゐた。爲に守備が破れ兩洋のライト•ウイングの單獨的な進出のために、數點を奪回され。

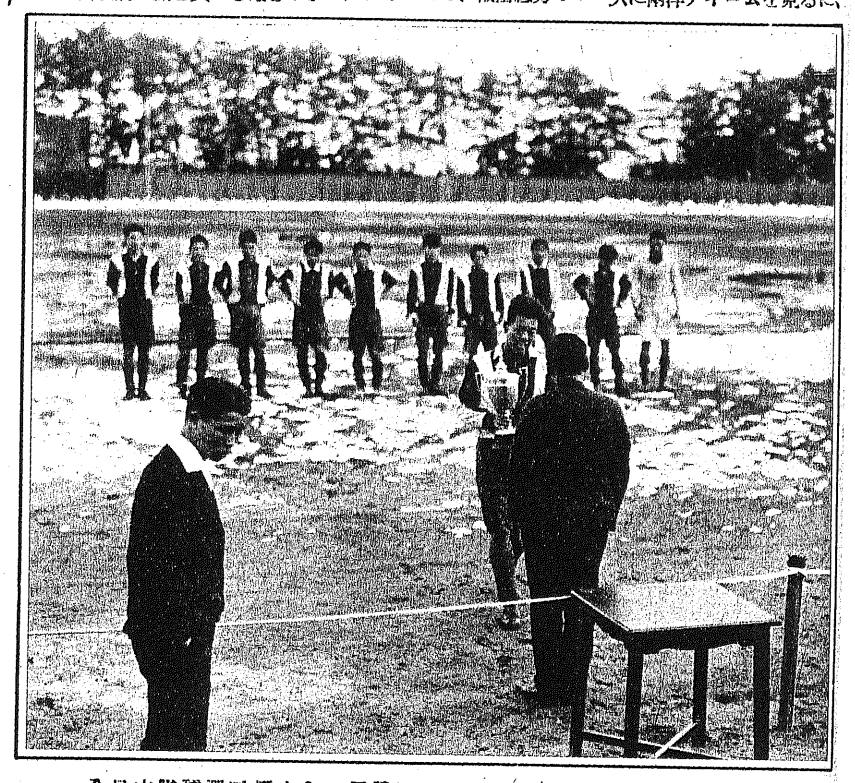
◇

兩洋は個人的技術にすぐれたテイームではあるが、システマチツクの戰法に缺けるテイームである。このインデイビデユアルに强いテイームに對し、關學の守備は餘りにも無策で開放的であり過ぎたと思ふ。

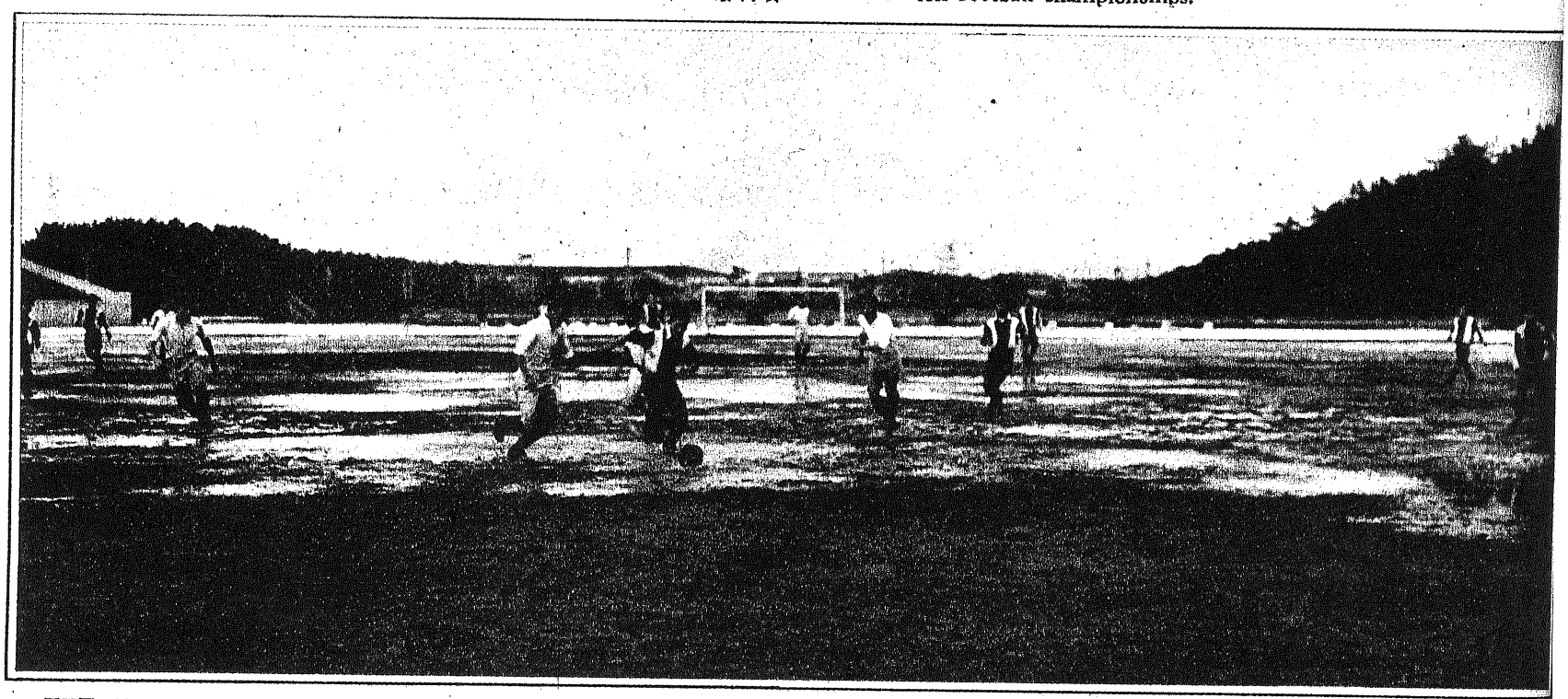
しかし關學の攻擊は比較的單一的ではあるが多年の熟練で完全に數點を物にしてゐる等敬服に價する點は少くない。

次に兩洋テイームを見るに、

※右ページへつづく



全日本蹴球選手權大會に優勝した關西學院倶樂部優勝盃を受く
Kwansei Gakuin Club receiving the victor's trophy at the all-Japan association football championships.



甲子園で行はれた全日本蹴球選手權大會優勝戰の他の場面で降雪のためドリブルを行はんとする關學もこれを奪はんとする慶應もともに苦戰してゐるところ

B. R. B. players trying to get the ball away from Kwansei Gakuin Club dribbling down the field in a flurry of snow in the final game at the all-Japan association football championships.

S6－3－1

※左ページからつづく

前述の通り個人的技術の巧者の揃つたテイームであるが、攻擊にも守備にも、まとまつたシステムのない、少くとも餘り考へてゐない樣に見える。然し關學クラブの不用意とバツクの中央線の弱點をつき個人的强さを遺憾なく發揮し猛烈なダツシユを利し數點をあげ得た點は流石である。守備上においてもかなり考慮の餘地がある。更にいへば守りに厚みがない。一度ハーフを突破されゝば、「萬事休す」といふやり方である。關學クラブのやり方は大體フオワード●ウイングを使ひそのセンターを中の三人で物にするやり方で、方法としては實に簡單の方法であるにも拘らず、兩洋は散々苦しめられて居つた。これはフル●バツクの守備もだがハーフのバツク更にたく、關學の五人に對しフル二人で對してゐる。防げやうはずがない。

◇

またコーナーキツクのノータツチで得點せられたり、フル●バツクのロングキツクを防ぎ得ずして得點せられた事はゴールキーパーとして研究の要があるであらう。

一體兩洋は個人の强さに依賴してか、餘りにボールを持ち過ぎ、折角の好機を失した事も多かつた樣に見うけられた。

兩洋に望むらくは、個人的强さを無駄に使はずに、テイームとしての一つのまとまつた力の下にその力强さを更に發揮させるやう努力して欲しい。キツクアンド、ラツシユの時代は過ぎた、攻守に一層の研究を望む。

關學對慶應

決勝戰は東西の兩雄相會することになり種々の意味において興味が湧いたが生憎と前日の雪のため、グラウンド惡く、兩軍共に十分技倆を出し得なかつたことは甚だ遺憾であつた。

この試合は前半においては五分と五分の白熱戰を演じて居つたが、結局ハーフタイム前一分フルバツクのクリアリングが關學堺井の足にはね返り、あつけない一點をとられ1－0で終つた。

◇

後半に入つて慶應は左側の强陣を巧みに關學に壓せられ勝ちであつたが、遂に二點を得點され三對零で關學が再度優勝するところとなつた。

この日の關學のメンバーを見るに對兩洋クラブの時は後藤をフル●バツクにさげて居り、中央線に一脈の弱味があつて、もしこの陣容をもつて、慶應に對する時は慶應の戰法として中央を單獨に割つて出るやり方には必ずや破綻を來すだらうと豫想せられて居つたが、この日になり後藤をハーフ●センターに出し慶應のこの策に對したのは全く當を得たものといへやう。特にグラウンドが惡く慶應獨特の戰法が威力を出さなかつたことも因由して、關學にとつてはますます利益を伴つた次第である

この泥水の中のゲームにあつて關學のとつたどちらかといへばロングパスシステムは比較的有利なやり方でありかなりの成功ををさめてをる、又フル●バツクとハーフが割合にフオワードに接近して密集的に進退した點もまた當を得たもので勝因もかなりこの點に歸せしむを得ると思はれる。

關學に對して望むところは幸にして、惡コンデイシヨンに於て非常に利益したが、單一より更に進んで諸種の方法をマスターして、あらゆる場合に適應する方法を講ぜられん事である。

◇

慶應は前半において藤岡の頭腦的プレイと市橋、松丸等の奮鬪に大分關學を苦しめてはゐたが最後のとゞめを刺すことに失敗してゐた。これは慶應の得意とする守勢より急激に攻擊に出て、あざやかな得點をするやり方がこの惡コンデイシヨンに非常に災されたることをいたむことが出來ぬ。敵のゴール前に深く進入して行つてもフオワードが揃つてゐず、ボールは思はぬところにとどまり九仞の功を一簣にかくの憾があつた。

兎に角この試合はグラウンドのよいところでやらしたかつた惡グラウンドのためゲームそのものとして餘り多く見るべきものがなく、たゞ非常に勇壯で鬪志滿々たるゲームで、選手權大會決勝として恥しからぬ大試合であつたのを何より嬉しく思ふこの試合より吾々の學ぶべき點を考へて見たい。

蹴球技は年を追うて進步して行く、と同時にそのやり方、又は、システムにはフオーメーシヨンも多種多樣に研究され、各各その團體獨特の方法をとり入れてゐる。

◇

關學クラブのとれる攻擊は、兩ウイングを軸とする戰法で、ウイングにボールを集めることに全力をあげ、然る後ウイングはドリブルなり外の方法でゴールライン眞近まで進み之をセンターし中の三人は之を何とかして物にする方法をとつて、そしてそれがかなり成功してゐる。

計畫的に攻める方法としてはこの方法以外に出でない樣に見える。然しこの方法ならば「お手のもの」の感があり、兩ウイングのパスを中の三人がうける用意、形などは「なる程」と思はれる。と思はれる。されば結局ウイングに强い選手を揃へて置くことが必要であり、また事實さうしてゐる。この點を思ふとなまなかのことを色々やるよりも一事を完成させることの大事なるをしみじみ敎へられる。

◇

次に慶應のやり方を見るとフオワード五人が、何だか別々になつてゐる樣な感がある、誰か一人前に出て居つて、これにボールを送ることに外の人はつとめ、そのボールを得れば、相手の手薄に乘じ單身突進してゴールを得るやり方如何にも英雄的な面白味を感じる。この方法はこの試合にあつてはグラウンドの惡いためにチヤンスはあつても物にならずに終つた。この點を考る時に慶應として外に途を求むべきであつたのではないかと思はれる。といつても、急にやり方を變へるわけにも行かぬから。矢張り我々は或る特殊な方法にのみたよるのは相當の考慮を要する事を痛感する。

かく考へる時我々は關學からは一つ一つのやり方の完成をはかる事が如何に大事であり有能であるかを敎へらるゝと同時に慶應よりこれ等の完成された數種のやり方を數多く持ち機に臨み變に應じ適宜の方法をとる樣努力せねばならぬ事を敎へらる

守備の方面を見るに泥濘のために形として何等見るべきものはなかつたのは甚だ遺憾に思ふが、只かゝる惡コンデイシヨンにおいては、「攻擊は最良の守備なり」の原則がよく適合する樣に感ぜられた。

◇

最後に明春萬國オリムピツク大會進出を前にしてこの大會にあらはれた技倆を熟視するときそこに幾分の物足らなさを感じない譯に行かない。斯技にたづさはる諸兄のよりよきトレーニングにより世界の檜舞台に出て恥かしからぬ成績をあげ得る樣全力を傾注して精進されんことを希望して止みません。

これも全日本蹴球選手權大會優勝戰の寫眞で關學倶が慶應右隅にコーナー●キツクを得て球が慶應のゴール前に落ちた瞬間の兩軍の奮鬪

Scrambling for a ball kicked from the right corner by the Kwansei Gakuin Club squarely in front of the Keio B. R. B. goal in the final game at the all-Japan association football championships.

S6－3－15

昭和五年度のシーズン

我蹴球界を顧みて

目だつた傾向は活動力の昂進と新進テイームの異狀な躍進

竹腰重丸

極東大會の影響如何——昭和五年度の蹴球シーズンに於る蹴球界の歩みを顧る場合多くの人々が問題とする者の一つに五年春に行はれた極東大會が今シーズンに如何なる影響を與へたかといふことがある。

此の問題は二つの方面から考察されると思ふ。その一つはそれが蹴球の興味を一般に知らしめるのに可なりの貢獻をしたゝために今シーズン蹴球をたのしむものゝ數量が增大したか、否かといふことであるが、これについては完全な統計を求め難く直接的な影響の程度は知る由もないが、東京地方においては所謂選手以外の者及び學生時代選手となつた經驗のない學校卒業者で蹴球に親しむ者の數量が著しく增大し、諸種の記錄に表はれない試合が過去數年に比して急激な歩調でその數を增して來た事とか、協會のスケヂユールに上つた諸試合に觀衆が著しく多くなりしかも純粹に蹴球競技を——自己と何等かの關係あるテイームの勝敗に關する興味以外のものを——樂しむ者が多くなつた事は今シーズンに著しかつた傾向である。

他の一面は技術上の問題である。極東大會における我テイームは前シーズン及び前々シーズンの經驗が集積せられ、また清算せられたものであつて、少くとも意識的には特別に新しいものが造り上げられたのではなかつた。

大會に於ける中華及比律賓テイームは好個の試金石で兩テイームとの試合によつて我蹴球界のもつ實力が試驗せられたわけであるが、戰績以外には夫等の試合に現はれた戰略的差異、長短に關して詳細な客觀的な批評が與へられなかつた憾みがある。

中華テイームと試合して中華の長所として吾々の感じたものは、體軀が秀で、球歴の長いことから起る個人的技術の力强さ——妙味よりも寧ろ力——およびその二、三の老練な選手の持つてゐる個々の場合の駆引好妙さであつて、根本的なシステムではなかつた。「日本テイームはコンビネーションでは中華に優る」といふ第三者の批評も、恐らくはこの間の消息をかたつたものであらうと思はれる。それゆゑに我蹴球界の最高水準に在る諸テイームが極東大會から得たものは新技術とか新しいテイーム・ワークとかではなくて、寧ろ自己の進まうとしつゝあつた發展方向に對する確信であつたといつても必ずしも過言ではなからうと思はれる。夫故我蹴球界の最高水準にある諸テイームがこの大會から受けた影響は大きいとはいへないけれども、より下級の者にとつては、十一人が一體となつて活動する事の利益、及びそれには如何なる事が强調されなければならぬかを知る機會を得、又蹴球の興味を刺戟せられた爲に蹴球の技術的理解を一般に普及させる結果を生じた事は否めないと思はれるのであつて今シーズン關東の中等學校蹴球界においては新興の諸テイームに異常な進境を示したものが多かつた事は或は茲に一つの根據を持つて居るのではなからうかと想像せられる。

◇

技術的傾向「ショートパスシステム」なるものが研究せられ始めてから既に十年近くの時日が經過した。夫が採用せられたのは疑ひもなく舊時の所謂ロングパスシステム——實は嚴密にいへば「パス」ではなくて大きく蹴つて相手の失を待つ傾向を多かれ少かれその傾向として持つてゐたものであるが——よりも遙かに合理的であり攻擊の効果を擧げる上により有効な方法であつたからであるが四、五シーズン前には二、三の有數なテイーム及び關東地方の中等學校テイームに在つては科學的研究卽ちショート・パスの研究と考へられるまでに重視せられたものであつた。最近の二、三シーズンにおいては、優秀なテイームに就てはそれがショート・パスのテイームかロング・パスのテイームかといふことで、そのテイームの戰略をいひ表はすことは出來ない樣に研究の方向が變つて來てゐるけれども、尙且現今の一流テイームの用ひるパスに就て見ればロング・パスよりもショート・パスの方が多く、又主として、使はれて居る樣である。

◇

ショートパスは舊時の所謂ロング・パスよりもテイームとしての持球力といふ點から見ても目的に適ふものであるものゝいふ迄もない事であるがこれを正確な長距離のパスに比較して得失を考へて見ると、パスの受授に際して制球が容易で凡失によつて敵手に球を渡す虞れの少ない事を認め得ると思はれる。

テイーム・ワークを組立てるにはどうしても或程度までテイームとしての持球力を保たなければならない爲に、一定の基礎技術の進歩の程度に照應して制球容易といふ事が決定的な動機となつてショート・パスを重用する時代があり得ると考へられる。

然るに短距離のパスは長距離のパスに比較して一つのパスによつて局面に變化を與へる範圍は狹小である爲に一つのパスによつて攻防兩者の活動しなければならない範圍は小さい傾向を持つためにショート・パスに慣れると往々にしてプレヤーの活動力（主として單位時間に活動し得る距離）の進歩が後れ勝ちなものである。その例としては

※右ページへつづく

S6-3-15

（種々特殊な事情もあらうが）ショート・パス・システムをその旗幟とした二、三年前頃の早大テイーム、近時の東京地方の中等學校諸テイームを擧げることが出來やう。しかして一面ショート・パスはスピードを伴はなければ行き詰り勝ちであり、また基礎技術が進歩するに從つて激烈に活動し乍ら行ふ強い長距離のパス受授に困難を感じなくなり、それが滑らかに行はれる樣になり得るために、ショート・パスに依れば制球が容易だといふ利益は、さほど重要性を持たなくなつて來、長距離のパスを可なり多く用ひてもショート・パスに依る場合と殆んど差異のない緻密なテイーム・ワークを組立てることが出來る時代が來るであらうことが想像せられる。

今シーズンの初めに當つて優劣なテイームは一層急速にロングパスをより多く用ふる傾向を強めるであらう事が豫想せられたのであるが、それは極東大會における中華テイームの行き方を眞似ようとする試みとしてばかりはなくて、前年度の最強テイームよりも一歩進出したテイームの出現の爲にまた明年の萬國大會出場に備へるためにも今シーズンに個人の持つ活動力を一般高めることが有利だと考へられたゝめである。前年度最強テイームと目せられた東大テイームは——パスに就ては長短取混ぜてはゐるが尙ショート・パスの方が多く現れてゐる——組織的な構成が甚だしく高度に進んだテイームであつたが尙且その構成の時内で研究して（例へばパス受授の際の巧妙な動作を）それ自身の強さを增すことも出來たであらう。しかしながらその程度の進歩では一段進んだと見られる段階には入り得ずそれに進むにはどうしても個人の持つ活動力を高める必要があり、また早大の如きは既に前シーズンから如何にしてスピードを增すべきかに苦心しつゝあつた由であり、また慶應が安心して優勢な戰況、對等な戰況で試合を進めるには何を措いてもH・B及びF・Bの活動力を高める必要があらうと考へられる情勢にあつたのである。

萬國大會に對する準備としては、中華テイームよりも一層優つたテイームと對戰する機會が與へられることゝ豫想せられるために、それに送られるべき我代表は極東大會における我テイームよりも一段高められた活動力を持つ個人を基礎としたテイーム・ワークを持つものでなければならぬと考へられる次第である。

其處に、個人の活動力を高める手段として一層多くロング・パスが行はれるに至るであらうといふ豫想が行はれたのであつた。

◇

この傾向は或程度まで事實として現れてゐるが、今シーズンのみでは期待した効果は十分には生れてゐないやうである。

多くのテイームでは守備者の活動力は幾許か高まりその前方への長蹴は強さとパスとしての正確さを增し、或はそれに向つての努力の跡の見えるものもあるが、パスの時機の判斷にはさほどの進歩を見出し得ないし、またF・W内においては早大テイーム以外には以前よりもロングパスが多く行はれるに至つたとは認め難いものが多い。しかして早大もC・Fに活動力の著しく強い本田君がゐた爲に「パス」となり難い球もパスとして受け取られ正確なパスに近い効果を擧げたと考へられる點が多く、全體としてロングパスを多く用ひて將來以上に進んだテイーム・ワーク卽ち一つ一つのパスにも從來より廣い範圍のメムバーが動員され全體が激しく活動しながら正確さを失はない樣なテイーム・ワークを織り出し得たものはなかつたと見るのが至當であらうと思ふ。

前シーズンのリーグ諸試合に比較して活動力の高められた事の認められたのは東大對慶應の試合における東大テイーム（全員ではないが）十一月三十日の東大對早大試合における早大H・BおよびF・Bの活動及び十二月十四日の帝早決勝戰における兩テイームの活動等にはそれを認め得ると思ふ。テイームの持つ力や精緻な聯絡に於て前年度の最强者を一段拔いたと認められるものゝ出現しなかつたことには慊らない感が深いけれども活動力の高められたものが出現する傾向を認め得るとすれば我蹴球界の今後の向上といふことに對しては必ずしも悲觀する必要はないと信ずる。

戰績に就て見るに、東京カレッヂリーグにおいては非常な混戰が現はれ全勝者は第四部の中央大學のみで第一部では東大、早大が同率となつて決勝を行ひ東大が辛うじて五年連勝の形となつたが、今シーズンの帝早兩テイームは單に戰績から見ても一勝一敗であり實力からいつても殆んど甲乙のないものであつた。しかして東大は種々な特殊事情から昨年の東大テイームよりも實力が低下したと認められる點多く構成的な强みは幾許か面影はあるが精緻さは可なり減じた樣である。東大が今シーズン幾許か弱くなつたことは同テイームに多少の關係を持つてゐる私には全く特殊な事情から來てゐると考へられるのであるが、それをこゝに詳述する必要はなからうと信ずる。

たゞリーグ全體を通じて一般に前シーズン下位にあつた諸テイーム中强みを增して上位にあつたテイームに接近又は一歩進んだ强さを持つに至つたものが可なり多くこれを要約すれば今シーズンの東京カレッヂリーグにおいては前シーズンより一段高い高峰が聳立したといふのではなくて平均化が行はれたといふべきであつてより高いものゝ出ないことは悲しむべきであるが一般的に充實する情勢は喜ぶべき傾向だといはなければならぬ。

一方關西のカレッヂリーグにおいては依然として京大關學兩テイームの壘を擦するテイームは出現しない樣であるが兩者の地位は今シーズン初めて轉倒して京大が覇權を握つた。

關學は新しい行き方を採つたために幾分か强味を減じてゐたといふ事を聞いてゐるけれども從來のまゝでは相手テイームの進歩しつゝある今日決して好結果を期待する事は出來ないと考へられるのであつて、未完成な點があつたために幾多の不滿はあるであらうけれどもその間に考へ方の進歩さへあつたならば一シーズンの犧牲は惜しむ必要がなからうと思ふ。

京大は今シーズン非常に進歩したと傳へられてをり、また東大との兩リーグ對抗試合に敗れはしたが前年よりも著しく進歩してゐる事が認められた。ただ練習試合の相手となるテイームの然らしめる處なのか個人的强みの以外の、それを組立てた組織の强みに關してはなほ且研究の餘地が多分に殘されてゐた樣である。

時代は移る——二月に行はれた選手權大會に關西學院クラブが優勝した事又一月の全國中等學校大會に御影師範が優勝した事などは歷史あるテイームの優勝であつて目新しい事ではないが徐々に起りつゝある歷史の變轉の現はれと見るべき戰績は可なり多く見出される。

高等學校大會における優勝テイーム六高を新進と見るのは妥當でなからうけれども同大會の諸試合において、古い歷史を持つテイームよりも新進と目せられるテイームが活躍をした事は多くの者の認むる處であり、關東地方の中等學校蹴球界において高師主催の大會、大每主催の全國中等學校大會豫選中等學校リーグ戰、東京蹴球團主催の關東中等學校大會等を通じて見て假令その優勝者が歷史の古い附屬中學、靑山師範、豐島師範、埼玉師範に限られてゐる事實はあるとしてもその優勝に至る過

↙ 左下へつづく

↙ 右上からつづく

程において新進の脅威を多少とも受けてをり往時の强者曉星、成城等は著しく威力を失ひ、これらに代つて湘南中學、府立八中學が勃興しつゝあることは萬人の等しく認むるところであり また多少の運不運はあつたとしても靑山學院中學が關東中等學校大會において決勝戰迄進出した記錄等は新舊テイームの地位が徐々に交代しようとして居る事を示すものではなからうか。

歷史あるテイームが一般の進歩に伴はない實事は決して喜ばしい事ではないが所謂新興テイームが數多く現はれる事は最も好ましい事だといはなければならぬ。

而して又所謂新興テイームは技術よりも體軀に强味を出す基礎を置いて居る事は一般的な傾向として認められ得ると思ふがこれは見逃す事の出來ない事柄である。

現在においては大學テイームから中等學校テイームに至る迄技術が體軀よりも重視せられて居るけれども優秀な技術が一般に普及するに從つて體軀が優越的な條件となるに至るであらうし、又現に活動力を高める事が重大な問題とならうとしつゝある際であるから此の傾向は一般的に見て可なり重要な意味を持つものであると信ずる。

S6-3-15

學窓を出づるに際して

空恐ろしい執着心

東大蹴球部
篠島 秀雄

―まだ二十二ぢやないか、もう一年のばせ延ばせ―などと命令するのはいゝ方で

―おい卒業出來るかい―と訊く奴が居るけど兎に角もうそんなことをいはれる身分かと思ふと正に感慨無量だ。

歩いて來た道は長いやうで短い。やはり好きな道だからだらうと思ふ。所謂帝大の黄金時代とかに這入つて帝大凋落かといはれる時に出るんだから何だか淋しいやうな氣もするけど三年間敎へられ勵まされて成長した自分が蹴球に對して感じる愛着は空恐ろしい位になつて了つて居る。

この罪は併し先輩竹腰さんにあると思ふ。蹴球の面白味は竹腰さんに引張り出されたやうなもんだから。

大學一年の秋の上海遠征も三年の春の極東大會も共に華かな想出かも知れぬが、三年秋のリーグ戰に早大に敗れた感慨こそ一番深い印象を刻んでくれる。三年間勝つてばかりでゐるよりも一度負けても見ようぢやないかといふわけで負けたのではない。よくまあ優勝出來たもんだと思つて居る。

この最後の年程色々な意味で多事多難だつたことはないので蹴球といつたら必ずこの年のことを思ひ出すだらうと思ふ。帝大はこれからだ。新しく研究し眞面目に練習して常に日本の蹴球界をリードして欲しい。そして早く日本も「少しの空地にも必ずゴールポストが立つて居る」やうになれればいいと思ふ。三年間無責だつた癖に蟲の好い注文ばかりするけど、來年の萬國オリムピツクには日本の蹴球チームは是非好成績を收められんことを待望して居る。

まづ體力の養成から

東大蹴球部
鈴木駿一郎

帝大に入り初めてリーグ戰に出たころの私は、唯頑張りの一手でやたらに駈け廻つてましたが、それから五年の間に、こんなに盛んになり色々の點で發達して來たことは、何といつても喜ばしいことです。殊に一個のチームとしての、その駈引や聯絡の點で、非常な進歩が見られます。

その結果、まとまつたチームとチームとの對戰となり、隙の少ない試合振りを見るやうになりました。また一方個人の技術もチームワークを念頭に置き臨機應變の變化に富んで來たことはいちじるしい進歩でせう。

けれどこゝにこの進歩から取殘された二つの大切な事柄があるやうな氣が致します。

◇

一つはプレーの形です。例へばパスする瞬間の形、受取る形などについてはあまり研究されてゐない樣に思はれます。この試合に必要な基本的な形の善惡がチームの强さを可成り支配するやうです。もう一つは、體力です。勢力の漲つてゐる俊敏な體格を養ふ方法が組織立つて行はれて居なかつたやうに思ひます。

聯絡と個人プレーとを適度に調和させて行くところに練習の要はありませうが、これからはもつと、もつとこの形と體力とに力を入れるのが一番いゝと思つて居ります。そして早大の本多君のやうな人が、どんどん出て來たら愉快だと思ひます。

いゝプレーの形と體力。そして强チームになるのには「先づ體力」と信じて居ります。

憶最後の四分に

早大蹴球部
杉村正三郎

六年間、それは長い樣にも考へられ、また短い樣にも思はれる。僕の蹴球生活の第一歩は丁度六年前の四月高等學院に入學直後であつた。

尤も中學時代、二三年ごろ稀には球を蹴つたこともあり、四五年の時ラグビーを手にしたこともあつたが、當時は蹴球といへば爪先で蹴るものだと考へてゐた程で、コーチを受けたでも無し、全くの我流で、組對抗或は學年對抗の試合を爲したに過ぎなかつた。從つて蹴球のいろはは、學院入學後初めて敎つたといへる。

◇

實の處僕の蹴球は少々畑違ひである。といふのは、中學時代には野球が大好きで、選手こそやらなかつたが野球部に關係してゐて野球より面白い競技は無いとくらゐに思つてゐた、處が中學五年の正月十日頃大毎主催の全國高專蹴球大會が甲陽中學校庭並びに甲子園野球場で開かれた時、たまたま關西に遠征して來た早大チームがチョーデン氏仕込のショートパスの威力を見事に發揮して關大、關學を退け堂々優勝したのを見て、初めて蹴球の興味が湧いて來た。

この試合が僕の見た最初の一流試合であると同時に、僕を蹴球畑へ植替へたる最大原因である。斯くして始まつた六年間の蹴球生活を省る時、その間の思

出は實に多種多樣であつて、限られたる紙面にては到底書き盡せないから、その中最も印象に深いものを二三を擧げて見る。

◇

第一嬉しかつた思ひ出としては、昭和二年八月卅一日第八回極東大會の豫選に廣島を破つて優勝し、日本代表となつたときのこと、上海の同大會で比軍を二對一で破るのを見た時のこと昨年十一月三十一日宿敵東大に對しリーグ戰開始以來最初の勝星を得た時の事等がある。

◇

第二に悔しかつた思出には大正十五年一月四日全國高校大會准決勝で廣高と顔が合ひ正規の時間に得點無く一時間四十三分といふ延長戰の新記錄を作つて敗退した時のこと、上海の極東大會で中華と對戰の際、RHをやつて散々に苦しめられた時のこと、昨年東京の大會で對中華戰に三對三の引分に終り日本が長蛇を逸したる時のことなどがある。なほこの外に最近且最大の悔しい印象が殘つてゐる。即ち昨年十二月十四日午後四時三分である。これは早帝決勝戰の後半餘す處僅かに四分といふ時の事である。得點は前半終了直前一點を取られて後半最後の五分間となつた。然し早稻田には由來最後の三十秒に得點して勝敗を決した事が少くない。此一縷の望に對して全力を擧げて攻めて居る時であつた。ジャムプの瞬間俄然兩足の痙攣をおこして終つた。時計台を見れば正に四時三分。萬事休し一縷の望も全く絶えて終つた。試合中痙攣の爲に倒れた事は夫きで一度も經驗が無かつた、夫だけ僕には殘念さが大きく感ぜられる。

愈よ四月から未完成の儘、O・Bの仲間入をする事になるが今後と雖も出來るだけの時間と努力を蹴球の爲に捧げようと考へて居る。

建設期の五年間を

慶大蹴球部
島田 晋

五年間、僕は慶應のゴールを守り續けて來た。この五年間は僕にとつても、また日本のフツトボールにとつても記憶すべき時代だ。

僕達の慶應ソツカー部にとつて、この五年間は多難なる建設の期間であつた。即ち、第一年目一九二六年度には、僕達はリーグの第二部に在り、社會的には勿論、慶應義塾體育會の一部としてさへ認められぬ微々たるクラブであつた。

第二年目に初めて慶應義塾體育會ソツカー部としての產聲を擧げた。從つて僕達の部は生れてから未だ四年にしかたつて居ない。しかも僕達はこの建設期の最初に當つて飛躍的な發展の途を歩かうとして居るといふことが出來る。

また、日本のフツトボールにとつて、この五年間は目覺しい再建の期間であつた。それ迄の日本のフツトボールは既に一應量的な進展をなし終へてゐた。必要なものは最早量ではなく、質の向上であつた。それの第一歩がこの五年間になされた。

第八回極東選手權競技一九二七年、於上海
日本對中國　1―5
第九回極東選手權大會一九三〇年、於東京
日本對中國　3―3

此の記錄は日本のフツトボールがこの短時日の間に、輝かしいテンポを以て質的な發展をなした事を示して居る。

かくの如き五年間は、其の五年間中ゴール・キーパーとして働いて居た僕に不斷の努力を必要とさせた。ともすれば僕はこの目眩しい發達のテンポに自分のプレイを適應させて行けず、それから置き去りにされさうになつた。だが、どうやら僕の選手生活もいよいよ終りらしい。

僕は慶應のカメラードに親し

い別れの挨拶を送ると共に、更に新しい發展の途へ躍進する日本のフツトボールのために僕の微力を捧げる事を約束しよう。

移して實生活へ

京都帝大蹴球部
西村 清

ボールの響、ホイツスルの音、魅せられるやうに蹴球をやり出したのは中學四年の時です。

先輩達の貴い努力と溫かい指導とに培はれて神戸一中の蹴球部も僕等の時代になつて初めて實を結び花を咲かせました。

優勝の榮冠の裏に消すことの出來ない先輩の努力のあることを忘れることは出來ません。

松山高校を經て京都帝大へ。

行く先々の先輩に導かれて易易と進むことの出來た自分を幸運な奴と思ひます

S6-3-15 ㊁

◇

創部日なほ淺い京大蹴球も漸やくその大成に向ひました今シーズン始めて關西の覇者となり一躍全國の覇者たるをねらつたのでした、が一寸したことからその金的を射はづしたことは兎に角殘念と思つてゐます、小學中學、高校、大學の長い學生生活を終へて再び還らない生活から新しい生活に移されて見て初めて自分の姿がわかるやうな氣がします。

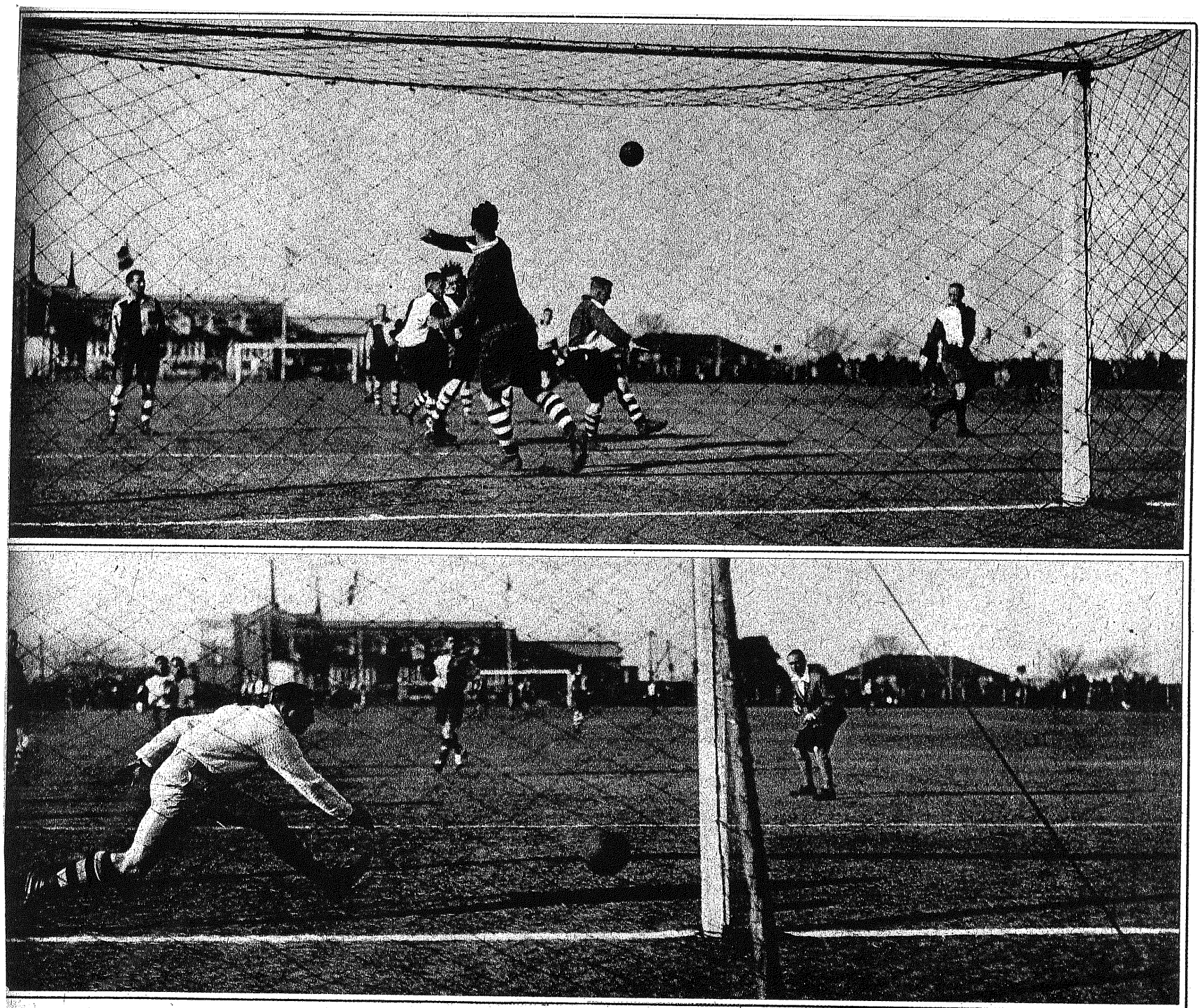
學生たるが故に多大のハンディキヤツプを與へられて甘やかされて來た過去の生活を振り返つて見るとき、一生の半端を送つた學生生活、その中の大きな部分を占める蹴球生活を回顧する時、若人の得點を享樂した華やかな頁でなくして、むしろ苦がい經驗を經た頁が强く頭に殘つてゐます。

◇

前半生がスポーツを通じての生活であり蹴球を中心としての生活でありました。今その生活から離れて新たなる生活に飛び込むに勇氣づけて與れるものは

矢張り變らざる眞面目さ、熱心さ、それを押し通す强引、頑張りでせう、學窓を去ることがO・Bを意味され、とかく元氣を失ひ勝ちなのは殘念です、しかしさうなるには餘りに僕等は若いと思ひます。

S6-4-1



横濱神戸兩外人の蹴球試合は三月十四日横濱ＹＣＡＣ球場で擧行され７對３で横濱勝つ(上圖)神戸の强襲を横濱のゴールキーパー巧みにノックする(下圖)後半、横濱得點の刹那

Foreigners' Interport Association Football, Yokohma Y. C. A. C., March 14, won by Yokohama 7 to 3. Top: Yokohama goalkeeper knocking out against a Kobe attack. Bottom: Yokohama annexing a point in the second half.

S6－4－15

始つた東京カレヂ蹴球

新ルール採用の早大農大戰を觀る

横田尙雄

蹴球東京カレヂリーグは本年度新加盟四校を承認して第五部を新たに設けこのシーズンは去る九月二十四日第三部の國大對商大、日本齒科對中大、第五部の明治學院對東京高等工藝の三試合を以てシーズンの幕は嚴かに開かれた。

早大と農大 の試合は四點以上開く事はあるまい、勿論農大は勝てるだらうと豫想する聲は聞かれなかつた。早大はメンバーが新しくなつてゐても前シーズン帝大を破つた時の主力を中心として纒つてゐるチームであり一方農大は長い間其の大黑柱の役割を演じて來た森田別府などいふ勇者を喪つてゐるので未だにチームとして滑らかな纒りが缺けてゐる。農大のキックオフで試合が開始されると早大の焦り方がはげしい、殊に主將井出君はハーフの中に割り込んで後方は横も中央も大穴を空けてゐる。ハーフはそのサイドが後から押されて進みもせず滅茶苦茶な守備ラインが布かれてゐた。農大が金君、本多君と渡つたボールで得點したのもこの穴をつかんだからであつた。早大のバックスがその位置を求めて右往左往してゐる際の中央正面の穴、一時金君がボールをストップしてゐてさへも埋められないこの穴で本多君は得點した。農大はこの得點の前後にもつと速くボールを捌いてゐたなら更に一二點は加へたかも知れない。併し早大のゴール・キーパー熊井君は前シーズンに比べて轉身が早くなりフイールドが確實となつた。長身の割に足下も危氣なくなつてゐるから農大が穴を突きまくつて駄目だつたかも知れないが。最初は早大の方が焦つてゐた。このためか

實力相違の試合

において十五分ごろまではボールが農大側、早大側といふやうに忙しく往復させられてゐた。早大が2—1とリードしてもRWの阿部君などがエラチックだつたからこの分ではと思はせてゐた。しかし農大のゴールキーパー辛島君はモーションが遲い。バウンドに對する測定も鈍く頗る調子が悪い。三對一とスコアの開くまでは農大のフルバックもハーフバックもコーナーキックを與へ乍らも進退は何等批評する所のない立派なものであつたが四十分頃から早大のフオワードを放り出してボールを追ふ事にのみ汲々として味方同士が互に妨げそして殺し合つてゐた、試合巧者で粘り屋のCH林君でさへ縱横無盡に走り廻つてチームの重心を置く所を忘れてゐた樣に見受けられた。案外脆いと山を見た早大の調子がぐんぐんよくなる一方一點又一點で負擔の重くなる農大は麻の如く亂れて縱にも横にも隣り合ふ二人の間にさへ聯絡を見出す事が出來ない狀態につき進んだ。

大抵は急激に

スコアが開いても落ちつく所はあるものだがゴールキーパー辛島君の變調は捕ふべきを叩き蹴るべきを拾ひ擒くべきボールを捕へるといふ樣に判斷の錯誤が次第に增して十一點といふ大量生産をやつた。前シーズン關西で十八對零といふ記錄があり農大それ自身が商大との試合で十一對一であつた。ゴール近くにボールが出ると直ぐゴールインで農大のフオワードは早大サイドに一人も殘らず全部ハーフと合流して守備に懸命になつてゐるといふ狀態であつた。最もスコアが大きくなる前からその傾向はあつたがそれが一層甚だしくなつて蜂の巢をつついた樣な有樣であつた。十一ゴールの半ばは辛島君の負はねばならないものと見られるが前半三十分ごろからデフエンスラインが布いてあると見られる樣な動きはなかつた。ノウ・マークで火事場に見る樣なツナガリのない交錯した激しい動きのみが目についた。

磯谷主將にも聲は出なかつたのも無理はない。蹴球に忠實な林君が忠實に走る。農大は結局守備のために疲れてたまたまボールが前方に出されても餘力ある早大バックスの前には一たまりもない後半に入つて熊井君のボールを扱つたのは四、五回に過ぎなかつたらう。

農大は前シーズン

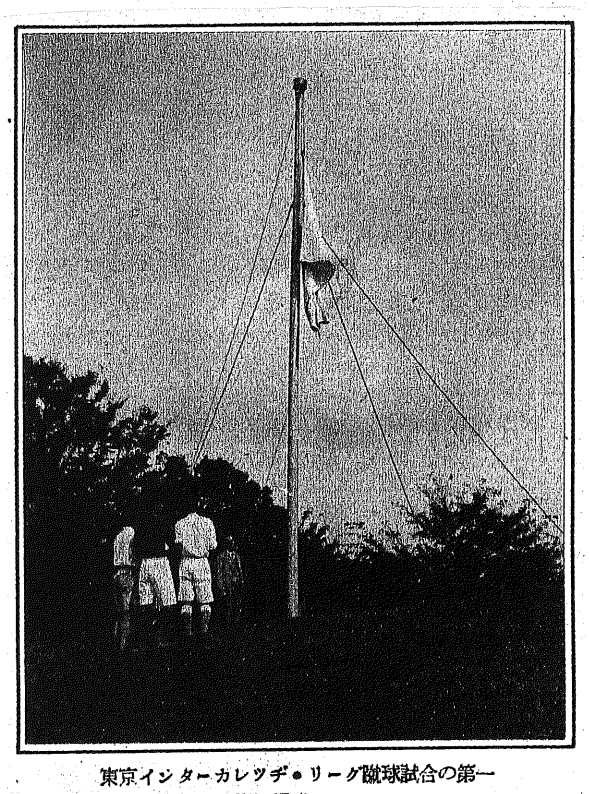
までの凄味がない。これは鬪志のないといふことでそのプレイも餘りあか拔けして農大型の殼を脫ぎ過ぎてしまつてゐる。强引がない。本多、石井、福岡君あたり友納君など著るしくこの傾向がある。短パスばかりで行く事が今日の戰法の最善至上のものではない。農大が森田時代に執つた長パスをサラリと捨てたのでないかも知れないがこの試合は短パス至上で行つた樣に見える。その訓練の中途なら一考の必要はなからうか、從來の農大型で行つたならこの試合も相當面白いものとなつたらうと思はれる。農大は大不覺の第一試合であつた。殊に熱心な集團であるだけにこの結果の前に同情に堪へないものがある。RW福岡君のセンターリングは六割の失策があつたのはLI金君の侵觸妨害プレイと共に其のフオワードの攻擊力を殺いでゐた宿將CF本多君は好位に在つてフオワードを統べる必要があらう。兎に角、農大は豫想外の敗戰を記錄してしまつたが、實力はこれ程に開いてゐないから今後の對戰においてチームウオークに注意し

往時の農大型拔風

を喚起したら相當の記錄は止め得ることであらう。この農大に對した早大の實力は認めない譯に行かないが農大のゴールキーパーのエラチックであつた事を考慮の中に入れて置かねばならない、フオワードプレイヤーの畸形兒CF淺井君でも農大方がノウマークでなかつたら到底あれだけに自由奔放同君の秘技を完全に現はし得なかつたらう。川本君にしても長谷川にしても同樣である。眞山君のセンターリングは當に入りかけたが長谷川君が十分にそのボールをこなし得ないことを忘れてはならない。宮部君のCHはその績についた。今の調子で行けば前シーズンに比して多少見劣りがしても入營中の本田君に愛着せずとも相當なハーフバックラインとなるであらう。井出君のパートナー吉澤君のポヂションは一考の要がありはしないか。初試合だからいふべき筋のものではないかも知れないが早大は近年になくバックの弱味が感じられる。これはフオワードが調子よく見えたからだらうか。

スローインの反則

に對し、ゴールキーパーの五歩以上云々の新しい規則の適用される第一の試合として前者は該當するものなく後者は熊井君のみが有效にしてゐた。なほこの試合でレフエリーのホイスルの遲れるために試合の興味を中斷してゐた。低いからプレイヤーに聞えずにプレイを續行してゐたのではないかと思はれる。



東京インターカレッヂ・リーグ蹴球試合の第一日に行はれた國旗揭揚式

Raising the national flag before the first game of the Tokyo intercollegiate association football league series.

S6-4-15

1914年の大戰以來中絶となつてゐたフランス對ドイツの蹴球試合は今年はじめてパリ郊外コロンブ競技場で擧行され、1對0でフランスの勝となつた、入場者五萬で一の空席もなくドイツ各地から態々見物應援に來たもの一萬五千と算せられる熱狂振りであつた、寫眞は二つともその試合光景である

Two photographs of first association football game between France and Germany since the Great War, which was played before a crowd of 50,000 spectators, 15,000 of whom had come from Germany, at Colombes a suburb of Paris, France winning by a score of 1 to 0.

S6-11-1

王座を狙はれる東大

東京カレヂ蹴球における對明大及び農大の兩試合を觀て

志谷　芳郎

來る年も來る年も

スポーツを誇る早慶明が蹴球では東大の後塵を拜してゐるなんて、餘りお目出度過ぎる話ぢやないか。東大にしても何時も王座に安閑と坐つてゐるより、時には强敵と取つ組んで『腰の强さよ脚の强さよ』位の腕くらべがし度くなるだらう。

戒愼一年氣の毒な明大や、二年から上つて初陣ホヤホヤの農大――尤も此のゲームでは拙戰辛勝、王座の片脚を搔つ拂はれた――相手の試合で、東大の眞價を知らうなんて些か無謀な話だが、豫想は當らない所に却つて興味のある場合もある。

東大は矢つ張り强い、然し百%の强味はない。攻防駈引凡て合理的の一語に盡きる、正眼に構へてヂリヂリ攻め寄せるあたり相變らずガツチリしてゐるが布陣の糸目が前年より脆弱で、網の目が大きい。

氷の樣な冷い理性

と火の樣に燃える鬪志が、チーム全體に流れてゐる、傳統の力である。勝てるといふ自信タツプリな所が、小面憎い程、羨しい、が併し之以上の强敵が現れてこつ酷くやつつけられたら何んなものだらう、傳統の頑張りも焦燥となる、正眼の構へも大分タヂタヂとなる可能性が見えて來た。東大としては、これまで幸福にもこんな經驗もないし、一般ファンとしては殘念ながら斯うした亂戰波瀾を見てゐない。然し今シーズンあたりヒヨンな事になりさうな氣がする。殊に對農大戰より見て此の豫感がヒシヒシと當りさうだ。

今年の東大は小氣味よく纏つてはゐるが、從來の樣な凄味と力に缺けてゐる、或は曰ふ『スケールが小さくて若い』と。その通りだ、實際あのF・Wではハーフのパスが餘つ程巧妙でない限り、潰される怖れがある。對明大戰の猛烈なタツクルや對農大戰のマークでは大分動き難さうだつた。

パスもシユートも

バツクカバーも滑らかで正確ではあるが、それは敎へこまれたまゝの方程式で、自覺して本能的に動いてゐる所までは達してゐない。少くとも分解された因數を自力で纏めるには、それだけの經驗少い分子が多い。

竹內、野澤、手島の大くて巧妙なリレーを破ることは却々容易でなく、高山、內藤の切札――尤もこれは今後の話だが――を潰すことも至難だが、不安な網の目が所々にある樣な氣がする。

對明對農の二ゲームを通じて六、七十のシユートを見せてゐるが、その成功率は頗る微々たるものだ、大體東大の攻め寄せは滑らかで早いといふが、變化に乏しく恐ろしい所がない、合理的の一點張りである、シユーテイングレンヂを極度に狹めて正確に繰返しシユートするの一手だ。從つて相手方ハーフの後退も、バツクの判斷も或る程度までつくはずだ。唯ショートパスに眩惑されないで果敢なタツクルで一つ一つの網目を破ることが必要だ、大きくタツチにクリヤリングして陣容を樹て直すことだ、農大は此の點で確に成功してゐた。

東大の防禦陣

については、その要領を批評し得ない、といふのは之まで餘り危機に迫つたゲームを見てゐないから。然し左サイドからゴール前にかけては、網目の少し粗い處がある。

東大は攻擊のチームである。またそれで從來は無難だつたのである。從つて實戰上デフエンスの經驗は極めて少い、最後の一線を襲はれると案外脆い點がある。キーパーの代々目覺ましくないのも斯うした幸か不幸かに因由してゐるんぢやないか。

F・Bは攻擊的積極的な半面は十分體得されてゐるが、一度ゴール前を襲はれるや、ポヂシヨンも判斷も大分見劣りする、從つて極少數のピンチが容易に物にされてるぢやないか。今年は大分バツクが搔き廻されさうに豫想する人がある。

H・Bの兩側は忠實に攻防各ラインに與つてゐるが、定石のコースを動いてるだけで、それ以上を求め得まい、得點のチヤンスも大分此處から逃してゐる。デフエンスの野澤は折紙つきだ、攻擊に對しての動きやポヂシヨンは少し大きかである。フオワードへのパスはハーフ線として未完成で少し心細い樣だ。これはと感嘆出來る樣なフオワードが出來るか何うか疑問である。

F・Wでは內藤のノーストツプシウトが見物だ相な。高山のスピードは、現在の東大チームとは未だシツクリ合致してゐないと思ふ。圓熟手島の球捌きを定める兩インサイドに人がないことは、往年の東大フオワードを知るものに、秋風落莫の感じだ、內藤の恢復と强氣を希ふ。

上記の東大に對し

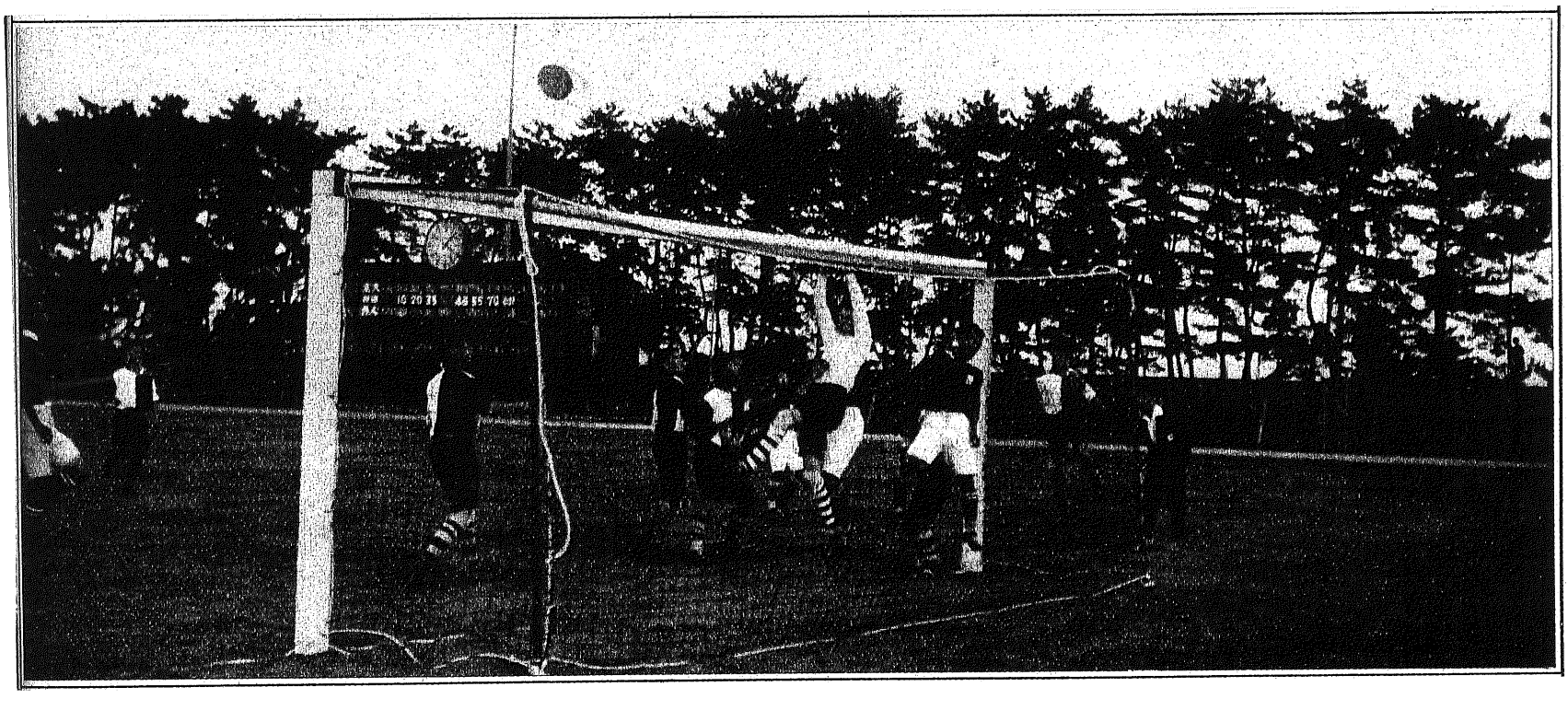
早慶の對戰が興味百%だ、對農大の拙戰だけで早慶が好い氣になつたら、それこそ早計である。屹度立直る、冷い情熱のコーチ竹腰のゐることを看過してはならぬ。恐らく早慶何れにして眞正面から太刀打したら、ヒラリとかはされて期待に反した結果にならう。往年慶大の採つた猛烈な縱パスにドリブルを交へる奇策か、サイドチエンヂなんかで後陣攪亂が比較的成功するであらう。或は又昨年早大の採つたキツクアンドランに依りゴール前にF・Wを一線に揃へて行くか猛烈なチヤーヂを試みるか、勿論奇策のみで勝敗の鍵が攝めるものではない。

早大バツクには東大も相當攻めあぐむだらうし、慶大のバツクは破り得ても、その代償に數點を奪はれるであらう。

以上、東大の敗北を別に希うてる譯ではないが、榮枯盛衰世の慣ひ覇權は天下の廻り持ちになつた方が、蹴球界として刺激にもなり波瀾もあつて面白いはずだ、面白い丈の無責任ぢやなく、そこに進步の一新生面が見出されるだらう。

（注）小見出しは本文を兼ねている

S6-11-15



十一月三日甲子園で行はれた京都帝大對神戸外人の蹴球戰光景

Association football, Kyoto Imperial vs. Kobe Foreigners, Koshien, November 3.

S6-11-1

關西カレッヂ蹴球聯盟第一部の第一ゲームで京都帝大對關西大學の試合は十月十八日甲子園運動場で擧行され京大の充實した陣容に對するに關大復活振り目覺ましく大きな期待裡に試合は進められたが結果は案外にも15對1といふ大差で京大の勝となつた(上圖)關大の奈良君が京大中野君のドリブルを喰ひ止めんとしてゐるところ(下圖)京大(黑)が見事にジヤンプして關大(白)を避けながら鮮かなヘツディング・パスをしてゐるところ

Kyoto Imperial-Kwansi U association football game, Koshien, October 18, won by Kyoto 15 to 1. Top: Nara (Kansai U) trying to stop Nakano, dribbling. Bottom: A Kyoto player (in black uniform) jumping and making a fine heading pass.

S6-11-25

東大、京城師、明大豫科が優勝する迄

【概評】深山靜夫、加納克亮

ロボット式蹴球を排除せよ

連勝の關學敗れ覇權は東大ＬＢの手に

斯道愛好者に更生的蹶起を促す

熱に乏しい試合

明治神宮體育大會と兼ね開かれた第一回地方對抗蹴球競技會も豫想通り關東代表東大Ｌ・Ｂテイームの優勝を以て無事終了したことは本大會の趣旨として芽出度い限りである。

然しながら本大會を通觀して何となく物足らないもののあつた事は何人もいなめないところであつたらうと思ふ。蓋し第一回、第二回とこの明治神宮體育大會が回を重ねるに從つて他の凡ての競技はそのレコードに技術に向上進歩を見せて盛大となりつつあるとき蹴球競技のみ獨りその質に於て低下の傾向あることは心あるものの等しく遺憾に堪へぬところである。

その理由は種々あることゝ想像される。即ち關東の如きはリーグ戰の最中にあつて各カレヂ・テイームがその主力をリーグ戰に注ぎ從つて本大會には僅にＯ・Ｂ連か第二選手を出場させるに過ぎ無いこと。又地方テイームにおいては經費の關係上十分のテイーム編成不可能等のことが内容不充實の最大原因と想像される。然し吾々が本大會を通觀してゐて何等感銘され印象される樣な好試合の展開されないのはこの外に原因するものがあるのではないだらうか、試みに觀て來たゲームを回想してその原因を探究して見ようゝ

北陸對中國

北陸・中國對抗戰は先年に比し北陸數段の進歩は認めらるゝも中國とはなほ相當の懸隔あつて最初中國精神的に動搖してる間に一點を先取して得點の上に對等の戰ひを爲したるに過ぎず中國が平靜に復りグラウンドに馴れるに從つて徒らに中國の蹂躙にまかせるのほか無くワンサイドゲームの味氣ないものに終つてしまつた。たゞ中國代表のＦ・Ｗラインが朝鮮一流の進出振を見せて、吾々内地チームに或る教訓を與へたことがうれしかつた。

關東對關西

關東代表東大Ｌ・Ｂ對關西代表關西學院戰こそ本大會を飾る一戰であつてこの一戰に優勝し得たテイームが結局最後の優勝を獲得し得る事は萬人の想像するところであつた。しかも關西は前二回連續學聯の强テイーム關東は現在蹴球界の王者を以て任ずる東大にあつて第二軍とはいへ第一軍に劣らぬ强者たゞ練習不足のハンデイキヤツプが幾分關西側に有利に批評されて居た樣である。然し幸運にスタートせる關東は關西の猛襲に堪へて、遂に覇權への第一歩をものしたのである。關西の敗戰は技倆においてゞ無く運と精神とにおいて關東の軍門に降るの餘儀たきに至つたものである。

蓋し第一戰に强敵關東軍に向はねばならなかつたことが前回の優勝を保持せんとする消極的受動的精神作用となつて大事の場合に凡失となつて現はれかつ二度の失策による失點は全體の焦燥となつて敵の術中に陷つた感あるに反し關東軍としては「敗れて悔なき戰を交へん」たゞこれだけの輕い氣持に戰ひ得る上に最初の思ひがけ無き一點がますます士氣を鼓舞して、ありつたけの力をグラウンド一杯に展開し得たところに勝敗の數は決したのである。が關西軍をしてかく第一試合に敗退せしめた事は本大會をますます無味なものとして終つた感が强かつた。關西としても諦められたかつたことと思ふ。今後は當事者において適當の方法一例へば庭球において行はれつゝあるシードする方法の如き一を以て斯かる缺點を除去して欲しい。

東海對北海

東海對北海の一戰は氣の毒ながら拙戰の一字よりなからう。蓋し東海軍がティーム編成に困難し急遽のピックアップテイームであつてティームプレーの最後のものたる各自の連絡に全然缺け各自勝手のプレーより出來なかつた點は往年の覇者たりし東海軍にとつて殘念の至りである、たゞ北海軍が蹴球競技に日たほ淺きに良く最後まで健闘した點を多とする。

蹴球に優勝した東京帝大ＬＢチーム
Tokyo Imperial team, victors in association football.

准決勝に入る

次いで准決勝戰における中國代表對東海代表の一戰はいふべきほどのことも無く、豫想通り中國代表勝つて決勝戰に出場る資格を得たのは順當であるが關東代表對東北代表の一戰は關東代表辛勝したとはいへ全然前日の面影もなく文字通りの辛勝であつたことはその原因何邊に存するか、精神的缺陷か？自覺たき技術に偏したロボットプレーにはあらざりしか？

前日關西軍との對戰はほゞ同じ戰法を以て授けられたる策戰通り運用し得案外の好成績を擧げたるも此の一戰、戰略に未熟の敵の進退全く自己の豫想通り來ないがため授けられたる祕策も用ふるの時なく徒らに敵の拙戰に引きづられて萬人の驚きとなつたのではあるまいか。之れは單に此の一戰のみならず現在一般に陷れる弊害ではないだらうか機に臨んで變ずるだけの氣力と技を養ふことは眞のスポーツたる蹴球發達のために一考されたいことゝ思ふ。

關東中國の決勝

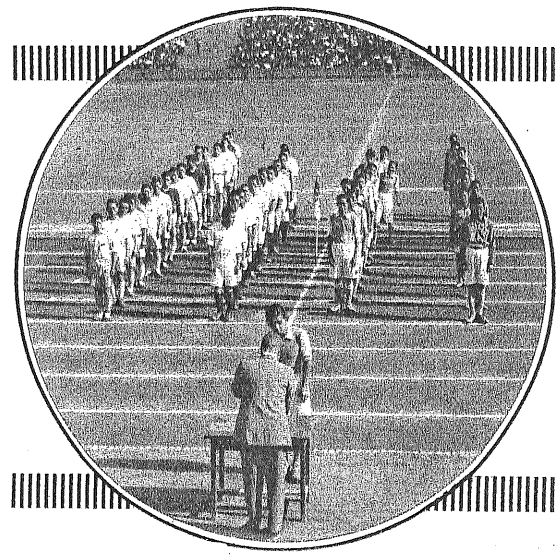
決勝戰は精神的におされ氣味だつた中國代表はバックの缺點を暴露して最後の一戰に潰滅してしまつたといふ外あるまい、技倆にスコアー程の差があつたわけでは無いがキーパーの凡失バックマンのボーンヘツドは全體の闘志を喪失してこの大敗を餘儀なくせしめたのである、然し最後迄でよく敵をおびやかしたあのＦ・Ｗ線のスピーデイーな進出は今後吾々の大いに研究を要する一事であらう。

ロボット式試合？

以上が試合全體の概觀であつて之れといつていふべきほどのことも無かつた、たゞ第一回當時の本體育大會における蹴球に對する一般觀覽者の評は異口同音に思はざる男性的な愉快なスポーツであると叫んで場の四圍は人を以て埋り日暮れて夕べの月山の端に表はるゝも尙去らず今からは想像も及ばぬほどの人氣を博したのである、然るに日移りてあらゆる競技に對する一般的理解の普及した今日往時の半分の興味をも感じさせないのは何と情無い事ではあるまいか。

その原因は前述した參加テームの充實味なき事にも求め得られやう。また東都において次ぎ次ぎに行はれるカレッヂリーグの好試合に人氣を奪はれたといふ人もあらう。然し吾々第一回當時よりの變遷を觀た者よりいはしむれば現代の人々は凡てを餘りに科學的に分解しすぎてスポーツの第一義たるべき意氣を失ひ第二義的たる技術にこだはり過ぎる傾向はあるまいかと思ふのである、從つて極端にいへば試合が覇氣ある人間の試合では無く技術のみを會得して精神を失つた、所謂ロボットの蹴り合ひに過ぎないのでは無いか。

吾々は生きた人間である。されば生きた人間の意氣と意氣の競り合ひにおいて初めて眞にスポーツの三昧にひたり得るのであるロボット製造は人情味少き特殊の人々の道樂に過ぎない。



蹴球競技の優勝盃返還式
Returning the association football trophy.

レフエリーの責務

ところで現在の試合が自然とロボット的傾向を帶びて來るに至つた責任はレフエリーにもその一部は在るのではあるまいか。こんなことをいふと若い人人は現代的でないとおこられるかも知らぬ。が今回の大會においてその感じを大變深くさせられたのである。

成る程レフエリーはよくあらゆるルールを解釋せられ小さな反則をもあの瞬間的プレーに於てよく發見せられる點は吾々の如き古物と違つて感服の外は無いが、餘りに神經質であつて且つ眞に反則を罰する性質に多少もとりはしないかと疑はれる點が多々あつた樣である。

例せば戰ひが味方陣において接戰を續けられ漸くにしてＦ・Ｗ線にボールの出た時味方のインナーが對のボールを追つて將に蹴んとした瞬間相手方のＨ・Ｂ之を追つて味方のＦ・Ｗに身體を當てに來た、然し味方はその時既によくボールをウィングに出して正に逆襲に轉ずべき絶好のチヤンスに會した時ホイツスルは鳴つた。味方はフリーキックを獲たがこの時この審判は果して適宜の處置といひ得るだらうか、反則を罰する本旨はその反則によつて味方が不利を蒙ることを救ふかまたはその反則が危險に類しこれを匡正するにあるのではあるまいか、しかるにこの場合の如き味方はフリーキックによつて却て逆襲の好機を失しかつこの時のプレーは決して危險に類するものでは無いのである。互にスピーデイーにプレーして味方を有利に導くためには最後の一歩を如何にして敵に先んずるかにあつてこのためにこそ最後の一歩に全精力を注がなくではならぬそのためには時に力餘つて身體と身體と衝突することもあらうがお互がボールに對してプレーする時何等の危險は生じない譯ではあるまいか。

果して機宜の處置か？

また或時ボールが自已をオーバーしつゝあるそのまゝにすれば敵の自由にまかせる外ない然し一歩足を擧げれば完全にボールに屆くとみて足を擧げてボールをとつたその時相手方がこれに頭を差出したレフエリーは危險と認めてか反則を宣した。全く差し擧げた足が顔に當つたら危險かも知れないがその時の狀態を今少し考へられたいと思ふ蓋し一方がジヤンプしてヘツディングせんとする時ジヤンプしてゆくことは後者に最初から敵を威嚇する意あつて罰せらるべき十分の要素あるも前述の如き場合においては寧ろそんなボー

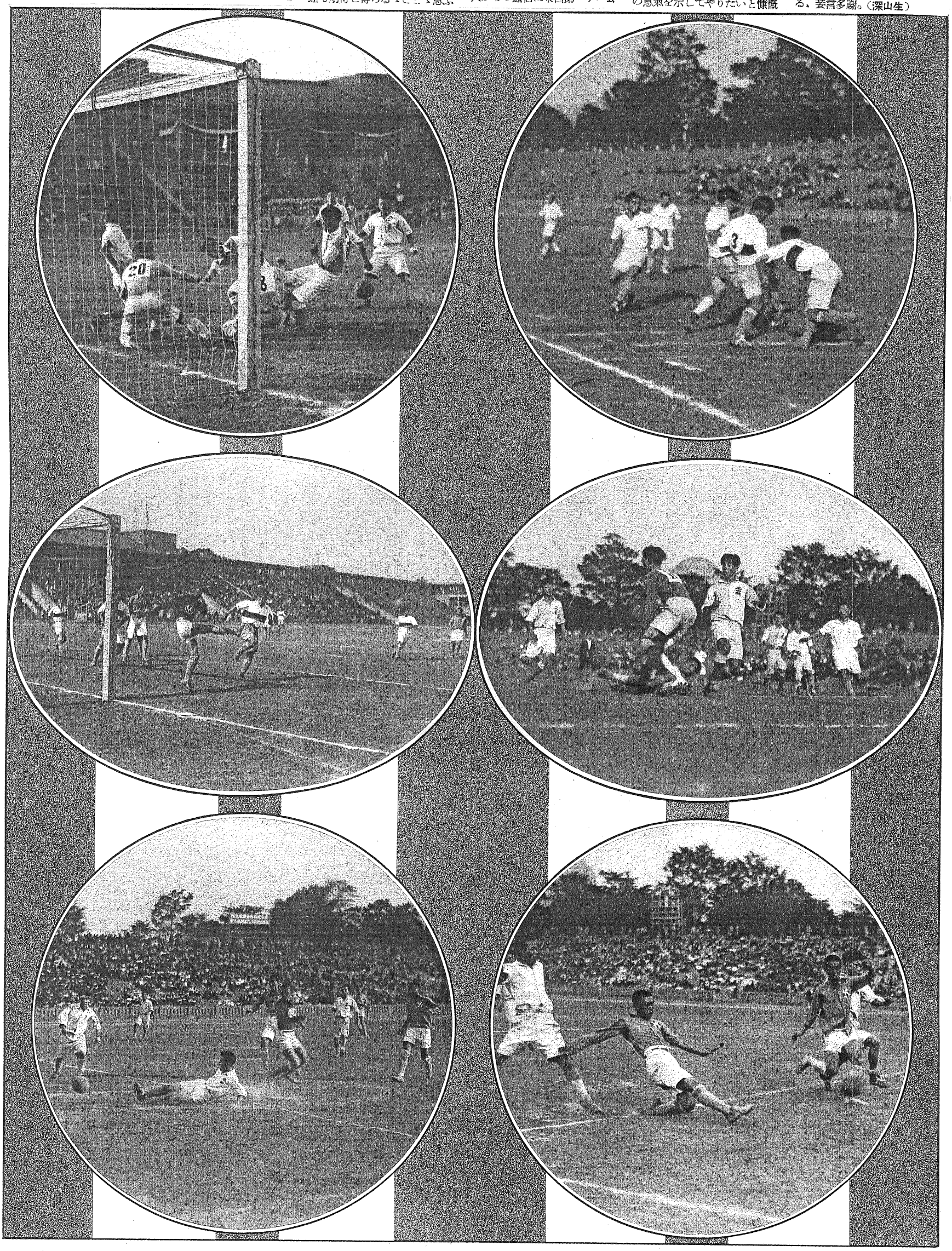
※ 右ページへつづく

※左ページからつづく

ルに頭を出す方が間違つてゐるのではあるまいか、若しこれが何處までも罰せらるゝものとすれば互に相手に近きボールは相手の自由に任じて之れを傍觀するの外無く成程プレーは頗る安全できれいかも知れないが全く其處には意氣も熱もないロボット試合と化するのではあるまいか、今回の大會に於てかゝる反則のために意氣を失して試合を投げた態のものもあつた樣に見受けられた。今少し其場合の實情を參酌して判斷を下されるなら試合により以上の熱と生氣を與へ研められたる技術と相待つて眞にスポーツらしい蹴球の發達も期待し得らるゝことゝ思ふのである。

蹶起を祈る

前年度東西カレッヂ・リーグ覇者の對抗決勝戰を觀たる一友人からの通信に東西第一チームの決勝といふ呼聲に病軀をスタンドに運んで觀戰したるも餘りに覇氣なく憊氣滿々として他の競技に對して恥しい感じがした今一度グラウンドに立つて往時の意氣を示してやりたいと慷慨してあつたが今日本大會を觀るに當つて同樣の感深く敢て若人の奮起を希ふ次第である吾が老婆心を他山の石ともして今後に處して頂ければ幸甚の至りである。妄言多謝。（深山生）



蹴球（上左）東京帝大ＬＢ對關西學院（上右）名古屋蹴球團對函館蹴球團（中左）興文中學對名古屋蹴球團の准決勝（中右）東京帝大ＬＢ對二高倶樂部の准決勝（下圖）東京帝大ＬＢ對興文中學の優勝戰と優勝した東京帝大ＬＢチーム

Association Football. Top-Left : Tokyo Imperial U vs. Kansei Gakuin. Top-Right : Nagoya vs. Hakodate. Center-Left : Kobun Middle vs. Nagoya in semi-final game. Center-Right : Tokyo Imperial U vs. Second High in semi-final game. Bottom : Final game between Tokyo Imperial U and Kobun Middle and victorious Tokyo Imperial U.

S6-11-15

雨に災された慶明蹴球試合

明大好機を悉く逸して敗る

鈴木重義

期待を裏切る凡戰

慶應は今シーズンにおいて一高に五對一のスコアを以て一勝してをり本日の對明大戰は第二回目の試合である。本年の慶應は新進を加へ近年にないまとまりのあるチームで、本シーズンの最も有力なる優勝候補と目されてゐたが、先日の對一高戰の時を見るに、點の開きほど左程に實力の差があつたらうか、幾分の疑惑をいだかれてをつたので、今日のこの試合は、早慶戰、帝慶戰を前にして慶應の力の底を看破りたい試合であつた

明大はすでに一高、早大、帝大に對戰しをりすでに實力の大體は知られ、十分な目安となり得るので、この意味よりしてかなりの興味を持つてゐた。だが不幸雨の爲に亂戰といふか凡戰といふかを續け又復その實力を知ることを得ずに終つた。

慶應はこゝ數年來、レフト・インサイド・フオワードとして活躍し續けて來た松丸主將を、レフト・ハーフに下げ、これをうめるに長谷川を以てし、ライト・ウイングに駒崎を配してゐる點一寸意外であつた。積極的に出る慶應としてはこれを以つて、新味を加へ、更に攻撃に出る戰法に出たのかとも考へられるが、然し實際には左程效果を收めたと思はれる點は見出されなかつた樣である。

戰法を誤つた明大

明大は今シーズンの今までの試合に奥谷主將は、フオワード線に出てをつたが、今日は、なれた、ハーフ・センターをしてゐたのは、對早、帝兩試合の苦闘に感じての配陣であらうが、これは比較的成功したやうであるが、後半自らフオワードに出で更に積極的に出んとしたが、これはあの場合どうかと思ふ。大體コンビネーションを第一とする蹴球において、ゲーム中そのポヂションを動かして有效にゲームを展開さすのは、その練習が完全に行はれてゐるか或は又プレーヤーが完全なる、個人的强さを持つた場合にのみ效果をおさめ得ると愚考されるので明大が、ゲーム中その選手の位置を變へたのは失敗であり同時に又そのやり方が明大今シーズンの失敗ではないかと思はれる

更に明大のチームを忌憚なく評せといはるれば、明大はあの個人的の强さを以てして、どちらかといへばショートパスシステムに近い現在行つてゐるあの戰法では非常に不利であると考へた。今の明治、殊にこの雨の試合に、明大として取るべき策としては、むしろ徹底的にグランドを一杯に使ひ、右左に大きくボールを出し、ロングパス・システム乃至洗練されたキック・アンド・ラッシュ・フオーム的方法を極端に使つて、フオワードを遺憾なく猛進せしむべきが賢明だつたらうと思はれる。殊に慶應のフル・バック及びハーフ・バックが、かなり一方にかたよつた守備陣を布いてゐたから、さうすることによつてかなりの效果があつたらうと思はれた。そうすれば、フオワードのセンター及び兩ウイングがより活躍出來たらう。この三人は、ゲームに加はらずにたゞボールを待つたこと度々であつたからこの方法がこれを生かすたゞ一つの道であつたのではなからうと思はれる。

悉く逸機した明大

この三人を徒らに待たして居つたのは明治として實にまづいやり方であつたと思ふ。この感はとくに前半に多かつたこの時慶應はこの三人をフル・バックと一人のハーフとで完全に閉ぢ込み、他の二人のハーフ・バックは明大のフオワードとバックとの間に入り、明大のバックが漸く防ぎ出す球を完全に奪取的またはカットして、明大三人のフオワードには一指もつけさせず明大をして全く袋の鼠として居つた。この時明大のバックとしては大きく途中でシュート・パス的に移行しない方がよかつた、また前に出た三人のフオーワードは、あの袋の鼠然たる時三人が形通り殘つてゐることは十分考慮さるべきであらう。

なほ明大の各メンバーの動きにはかなりの無駄のあることが氣がつく、その必然の結果であらう、ゴール前に於おける最後の力、攻撃において「ゴールを決める力」「ゴールシュートの力」守備において、「果斷のクリヤリングの力」に缺けてゐたやうに思ふ。

これは攻撃において中央戰で無駄に力を勞するか或は徒らに時間を費してゴールを全く守られてしまうかいづれの場合かが重大なる因をなしてゐた樣に思はれる。

この試合におけるいはゆる「チヤンス」は勿論慶應に多くあつたが、明大は零敗に終る程明大に「チヤンス」がなかつたか甚だ疑問に思ふ。一ゲーム中何回か來る「チヤンス」を全部のがした失敗は大きい。更に明大はその守備に餘りにも消極的でかたより過ぎたきらひがあつた、ために味方がお互にその活躍力を制せられ、ために二點までも自分のゴールに蹴込んで、完全に自滅してしまつた。これは一面慶應フオーワードが非常に前進してこれがために明大守備はかなり不利な破目に陷つたとはいへ、これは主として守備に中心のないことに基因しはしないかと思はれた、要するに明大は一昨年その片鱗を見せてゐたその元氣を力强く出して欲しかつたそれが技の洗練と相俟つて明大を强くする原動力ではなからうか。

老巧な慶應

慶應はこの試合において見る限りにおいては、その評判が眞實とすれば非常に接戰だつたと思ふ。前半の三點は兎も角として、後半の明大の自殺的二點を除けばたゞ一點をおさめ得たに過ぎない。然し慶應は市橋の第二點目を除き他は殆んど、ロング・ショットで得點してをり、降雨泥濘の時の試合に處する常道を行き得點した點、老巧と評せられやうが慶應選手の一人がどこからかひよつこり舞台に飛び出して活躍を始めゴールを得たといふ感じのする得點であつて、當然得べくして得たといふ感じのする胸のすくやうな得點を見られなかつたことを殘念に思ふ。これは一面また泥濘の爲思ふにまかせぬのがその主因であらうと考へてはゐるが、ビッグ・スリーの慶應としてこの點が欲しかつた。

また慶應の攻撃は本年度において非常に變化を見せるであらうと豫期されてゐたがこの試合においてはそれほどの變化はなく市橋、藤岡の英雄的プレーを基準としての攻撃法がうかがはれた。その守備も明大の攻撃の然らしめる所とはいへ、かなり片面的で明大がその片面をつけばかなり面白くゲームが展開したかもしれなかつたらうと思ふ試合は大體において慶應が優勢であり數回の「チヤンス」があつたにもかゝはらず明大の防備非常によろしきを得たとはいへ、ミス・シュートやその他の理由のため得點し得ざるところ依然慶應は眠れる獅子として恐るべきか、その力は二十二日の早慶戰、二十七日の慶帝戰を待つて問ふことゝしよう。

慶明蹴球試合の明大ゴール前の混戰

An exciting moment in front of Meiji's goal in the Keio-Meiji association football game.

東京カレヂ蹴球觀戰記

帝大は一高を、慶大は農大を、農大は明大を破り、早大一高戰は遂に引分となる

横田尚雄

熱を缺いた帝大一高戰

帝　大は農大と惡戰して辛くも二對一のスコアで勝利を握り、十餘日を經て一高と對戰した。帝大は農大とのゲームをシーズン後半の對戰に亢奮劑としたであらう。シーズン深くなるに從つて其の整備と强力を誇る帝大が一高に對して如何に試合をリードして行くかを一般は待望した、然るに前半三十分までの試合は一進一退といへば灼熱した試合を豫想させるであらうがさに非ず、日ごろの練習に僅か敵愾心を加へて見たといふ程度の熱もハリもない全く無味乾燥の一進一退で從來も見せた內輪同士の小競り合式の極度に亢奮し切れない兄弟喧嘩の樣な試合であつた。

これは從來もさう見えたといふ先入主許りがこの試合を斯く見せたとは思はれない。大事な勝敗を賭けた試合とはうなづけない三十一分を過ぎてから帝大は漸く得點し始めたがこれまでは如何にしてチーム●ウオークを整へるか、如何にして合理的に攻め且つ守るかの練習位の試合にしか見えなかつた。

× × ×

一高は帝大として餘りに知り過ぎて扱ひ難いんだらうか。漸く回復して顏を見せた內藤君は元氣はないが、快技の一端を示し帝大のフオアワーヅに生氣を呼んだが藤岡君は相變らずボールを弄んで時機を逸してゐた。中村君も次第に凄味を見せて來てる一方高山君も試合慣れしてボールのコントロールはよくなつてゐる。CF手島君はますます鋭くなつてゐるが藤岡君の今日の狀態では不足らしいところが見える。野澤君が思ふ型に動けない林君と新人木村君を叱咤激勵してゐたがあの位のところで滿足しなければならない二人の經驗ではなからうか。田村君の健在は帝大の强味でもあらうが試合には若い。この點は新人のため恕すべきではあるが力で行くことばかりでなく淸新なテクニツクで行くべきだらうと思ふ。竹內、阿部の兩君は宿將として立派にそのつとめを果してゐる。一高は大內君の奮鬪を賞讃せねばならない。小川、沖、稻川、小野田の諸君の小技は鮮麗だが押しがきかない。北君は不振で前シーズンの巧味であつたタツチプレイの妙味を缺き何となく熱の乏しいのはスランプに墜ちてゐるからだらうか。GK川島君は定評のある人だけに依然その深味あるプレイで帝大の得點を阻んだ。一高は華麗な技に生きるチームとなつたのは身體的の條件が然らしめるところのものであらうが、意氣に生きた當時は偲ぶべくもない。

白熱の慶農試合

帝　大を苦戰に陷れた農大は慶大との一戰で六對二と開いたスコアを殘した、然し農大の健鬪は華々しいものがあつた。對帝大戰に自力を知つた農大は鋭氣を漲らして慶大戰に臨んだので結果は差を作つたが試合は頭初から白熱化した、淒い農大の意氣は慶大を壓迫してまづ理想的に得點して慶應の出鼻を挫いてしまつた。農大が更に一點を稼いでゐたらと思ふ樣な試合であつたが慶大の老巧なフオアワーヅは焦らなかつた。殊に主將の松丸君がHBとなつてハーフ●ラインを警備させフルバツク●ラインにも安心を與へてゐるので早く調子を出すために市橋君を中心に變化あるプレイを見せて試合を進めて行つた。

× × ×

流　石は慶大チームと思はせる好戰振りで老巧の妙味を發揮してゐた。農大は脊負つた一點が重くなつたか退路を求める樣なプレイに落ちて行つた。ハーフバツク●ラインが特に濃厚で、ボールのある所に走つては搔き回しボールを取るには取つたが刹那を糊塗する樣な不利な試合に終始する樣になつた。貴重な一點を死守せんとしての結果が斯の樣に現はれたものと見られる。これからは全く慶大の試合、一時危ない試合はしたが遂に勝利を收めてしまつた。然し慶大はのびのびした往時の奔放なプレイを見せず細かな所で仕事したさうな氣配が見えてゐる。いぢけてるとでもいふのだらうか何となく窮屈な壓へられてる樣な所がある。藤岡君は上達してるが、吉本君は前シーズンの威力を失してゐる。

對農大最終戰に明大零敗を喫す

明　大と農大は四戰四敗を記錄して運命をこの一戰にかけ最終戰として對立した。農大は連敗の中にも善戰し明大は對一高戰を除いては思ふやう叩かれてゐる試合を經て來てゐる。勝味といへば戰前誰も異口同音に農大とし明大がといひ放つた人はなかつたが相當接戰して明大無念の涙を呑むものと思はれてゐた。農大は攻擊不振の過去に鑑みてその充實を期して臨めば明大も奧谷主將が前線に出て得點されても得點するといふ意氣のほどを示して應戰したが無殘——徹頭徹尾農大のため蹂躙されて七對〇で最終戰を喪つてしまつた。

× × ×

然　しすべての點からこれを見るならば、明大に勝味のないゲームであつた。チーム●ウオークは勿論、パス●ウオークもゼロ、コントロールなく徒らに相手とボールを追ひ廻すといふ拙劣な試合振りであつた。ストツプするボールは彈かれて農大側に出るといふ有樣であつた誰かゞ囁いた樣に農大には友納君の色がよく證明する樣に練習の跡が瞭々とうかゞはれ明大のコントロールのない樣に明大の練習は不足であつた。と。これは適評であると思ふ。明大は氣の毒な程人材に乏しいことをその陣容の上に示してゐる。然し練習の不足はなかつたか。農大の石に嚙りついてもといふ意氣が農大を凌ぐものであつたらうか。明大の不幸は前シーズンに止まらずこのシーズンまでも祟つて來た。これに引かへて農大は本多君、上田君が漸く本格的のプレイを見せる樣になつてこのシーズンの終幕は物足りないものがあるだらう。

早大一高2對2の引分となる

早　大はこのシーズン先づ覇權掌握といふ意氣込みで威風四隣を壓するといふ狀態で對農大戰よりは對明大戰と次第にその威力を示して來てゐるから前シーズン二對一で敗れた一高ではあつたが苦もなく押し却けるであらうと思ふと意外一點を一高のため先取され二對一とリードしたが二對二の引分けとなつた。一高は飽くまで早大の進路を遮らうとしてゐる。前シーズンは二對一で勝つたために、早大の優勝を奪ひ去り、本シーズンも頓挫せしめるやうなことにしてしまつた。

× × ×

早　大は守備の完璧を誇つてゐてもそのフオアワーヅが得點能力に乏しい。このゲームはその一端を示したに過ぎない拙いものであつた上にその完璧のデフエンス●ラインの缺點も示したやうなものであつた。一高は終始壓せられながらも常に機會をうかがつてゐたその機會を立派に捉へてしまつた。早大が壓迫を續けてゐたために生じた隙をよく捉へたのは幸運も手傳つてゐたらうが壓されてゐた中にもポヂシヨンを守つてゐたフオアワーヅの賢明さを賞するより他にない。早大は不覺なゲームとしたがW●Fが效かないでは止むを得ないと思はれる。

慶應健鬪して早大を破る

華々しさから堅實味への轉換

慶應バツクとハーフの快技

乘富丈夫

十一月二十二日雲低く、薄日影げる神宮競技場のメーンスタンドは全く觀衆に覆はれた。早慶ファンにとつて見逃すことの出來ないこの一戰、又關東の蹴球界に君臨するビツグスリーの前哨戰として早慶戰は壯烈なる接戰を展開した。ゲームは開始後十分早の得點壓迫に始まり、慶二十五分の奪還に白熱化し、シーソーの激戰をつゞけて、タイムアツプ六分前の早バツクの連失による思はぬ得點に勝敗を決して四對三にて慶應が見事優勝した。輝かしくも年來の宿敵早稻田を破つて、優勝のトロフイーは數年振りで慶應の手にわたされた。

攻勢と守勢

慶應近來の進境と、早の充實とは勝敗の數を豫斷するを許さなかつた。接戰は期待したがらも、慶應の好調を賞する前に、早大の悲しきスランプを思つて、些か期待を裏切られた感を以つてゲームの進行を眺めた。早大のシーズン初頭の好調を知るものは私かに再び慶應と戰はしめよと考へたことであらう。唯このゲームによつて判斷するならば早大は敗るべくして敗れ、慶應は壓倒しつゝ勝つたといへやう、氣力と出足と策戰とに於て慶應は優に早大を壓するに足る勢であつた。慶の厚い防禦線と捨身なプレーに對して、攻擊的な早大のホワーヅは全く威力を地に墮してゐた感が深い。充實したハーフを主勢力として防陣に完璧を誇る慶應はその實力を十分に發揮し得た。

先づ兩軍の特色を概觀するならば、早大は攻勢のチームであり、慶應は守勢のチームであるだらう。

漢然たる早の攻擊

早大はフルを前進せしめてハーフの線をかためて攻擊に全勢力を集中した感がある。試合を通じてハーフより以上にフルから攻擊戰への好送球が多く見られた事はその戰法を如實に物語つてゐるのではなからうか。之に比して慶應はセンタハーフ大崎を又はレフトハーフ松丸を後退せしめて後陣を堅固ならしめて、早大の攻擊を全く無力ならしめて、逆襲後に好機を把んだことは得點の上にもよくあらはれてゐた。早大の攻擊はやゝ漢然たるものであつたにひき比べて慶の防禦は計畫的であり實效的であつたことはこの試合における唯一の對比であつたであらう。

ゴール前における早大のショートパスは悉く閉塞されてゐた。有利な轉換への企圖すらも見受けられず、結局慶應ハーフの有利なる長蹴となり好送球となつて、早大の後陣は疾風のすぐるが如く搔きみだされてゐた。そしてハーフは一人の强引なプレーをさへさゝへ切れなくつて、井出、熊井の好防に辛くも危機を脫した有樣であつた。

ハーフのバツクは中ぶらりんで何等防禦のピンチをつかむ事が出來なかつた事は益々慶應の攻擊を有利ならしめて、凡失につぐに凡失をもつてして、遂には未完成の型のまゝでゴールを許すに至つた場合の多かつた事は大いに早大の反省に俟つものありと思はれた。

守勢に偏した慶應

攻擊を以つて防禦に代へるかそれとも堅固不拔の守備より好機に投ずべきか之は各チームの情勢によつてきめらるべきであつたとしても、少くも攻勢には可成の犧牲と間隙とを敵にあたふるとは言ひ得るであらう。强靭にして迅速なるハーフの活躍が攻勢を維持する爲めには必須の條件であらねばならない。果して攻勢を目論んだ早大のハーフは强かつたか。將又迅速な動きを示したか。

早大と對比して誇り得るハーフをもつ慶應は守勢に偏して、ハーフをして十二分の戰ひをなさしめず、ホワーヅの獨力による得點に安んじた遣方に對しては更に考慮すべき點はなからうか。

傳統的戰法の相違

早大の得點はスピードによる長送球の賜物であつた。シュートパスによらずして迅速な攻擊をとつた時に案外慶應の不拔の後陣ももろかつた。それはゴール前の密集防禦は却つて、連絡を破つて、特にゴールキーパをブラインドにさへ切つたことから易々とゴールを許す結果となつた。慶應の得點は遲疑する早大のバツクをついて、果敢にきめたことが多い。結果より見てかゝる得點の機會は早慶何れを多とすることは出來ない。そこに兩軍の攻擊法のひらきが見られる。その適否はともあれ慶應はハーフなしに攻擊を完成し之に反して早大はハーフの助力にまつ所多かつた事は恐らく傳統的な戰法の相違であらう。

慶應のハーフは實に好調を示して居たに拘らずまた早大の出足、氣力のみぢめさを知れるに拘らず常に守勢を固執してゐたのは觀るものをして歎かしむるに足る事であつた。攻勢に轉換して早大の陣地に殺到するならば、恐らくはより以上のひらきを見せ得たかも知れない。宛も自から接戰を擇んだかの如き策戰は或は拙戰ではなからうか、若し早のバツクにして、凡失をくりかへすことなしに好調を示

※右ページへつづく

※左のページからつづく

したならば或は反對の結果に導き得たのではなからうかと思はれた。これを要するに戰法としてチームの原則的な型を見る時と策戰的な考へ方とは相手のコンデイションや四圍の情況によつて變換されねばならない性質のものである。相手その他の條件に對する認識が迅速でかつ十分でない憾はビツグチームの間にも見られる事柄である。

堅實味への轉換

スランプ、壓迫、あせり、凡失を以て敗れた早大の後陣は敗れたりと雖もその實力は十分に認められその健闘には敬意を表するものである。最後の致命的な一點はたしかにミスである。それは井出の處理すべき飛球であつたかも知れたかつたが少くも井出はチヤージする市橋をチエツクして熊井の活動に自由を與へてやらねばならなかつたのではなからうか、この一點を境界として早大の逆襲は元氣一杯であつたが淺井の最後の一秒まで早稻田は戰はうといつた絶叫も唯涙ぐましいものであつた。慶應のハーフ及バツクの好聯絡と强引さと好蹴とはこのゲームを通じての收穫であらう。

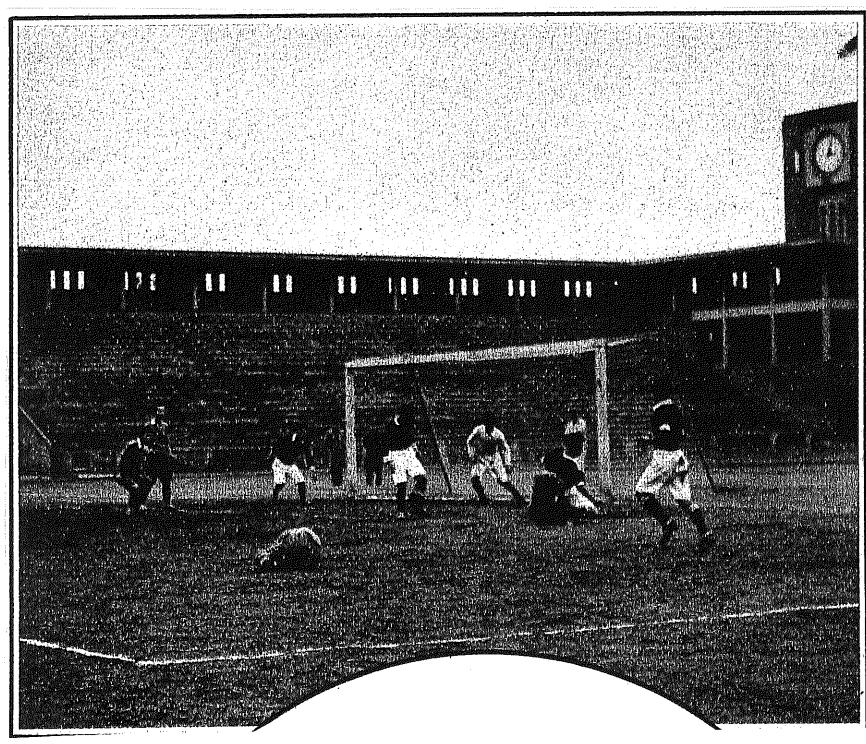
守勢の大崎、攻撃の松丸、岩波はリーグ有數のものであらう。市橋はさることながら藤岡の機宜なる進退、右近の强引さは早大の後陣をして心膽を寒かすに足る。キーパー綱纜も進境を見せて、塚越のあたりも目覺しかつた。

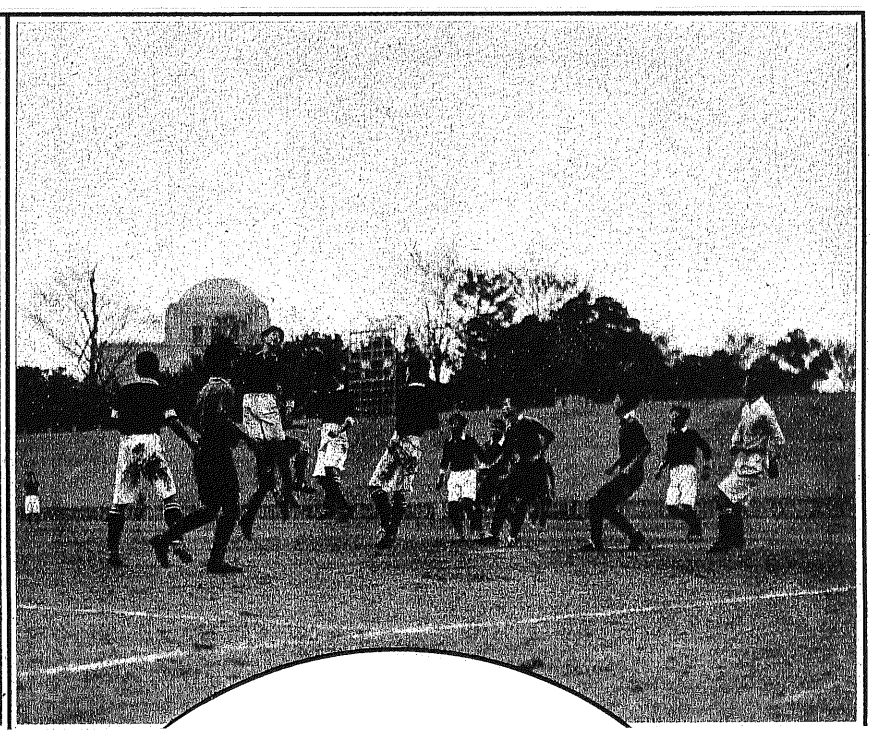
然し兩軍を通じて兩インナーのブレに見るべきもの少く、攻撃線の不整は常に得點に到る所を未完成のまゝ放棄したことは大いに考慮せらるべきであらう。

華々しさから堅實味への轉換——駄蹴より健蹴への進境を顯著に示して、この早慶蹴球戰はリーグ第一部の覇を賭して行はれることは蹴球界の最も慶賀すべき事柄である。

十一月二十二日神宮競技場で行はれた早大對慶應の蹴球試合の寫眞で二つとも早大ゴール前における激戰のところ

Two views of the Waseda-Keio association football game, Meiji Shrine, November 22, won by Keio, 4 to 3.





S6-12-1

← S 6.12.15

東大3-1早大（12月5日、神宮競技場）

東京帝大對早稲田大學の蹴球試合は十二月五日神宮競技場で行はれ3對1で東大が勝つた(上圖)前半早大が右コーナー・キックの直後フオアワードが猛襲し東大は田村君ヘッディングで逃がる(下左)後半東大のフオアワードが強襲してゐるところ(下右)後半東大内藤君のショットを早大のGK熊井君クリヤーした瞬間

Tokyo Imperial-Waseda association football game, Meiji Shrine, December 5, won by Imperial 3 to 1. Top: Tamura (Imperial) heads the ball out of danger in a forward rush by Waseda just after a kick from the right corner in the first half. Bottom-Left: Thrilling rush by Imperial forwards in the second half. Bottom-Right: Kumai (Waseda goal keeper) stopping a shot by Naito.

東大 4－1 慶大（11月29日. 神宮競技場）

S6－12－15

東京帝大對應慶大學の蹴球試合は十一月二十九日神宮競技場で行はれ4對1で東大が勝つた（上左）東大林君の長蹴を慶應藤岡君がヘッディングで逃がれたところ（上右）慶應ゴール近くへ寄つて東大の高山君が中央へ送球したところ（下圖）東大野澤君のショットを慶應のGK蓮瀬君が好捕する

Tokyo Imperial-Keio association football game, Meiji Shrine, November 29, won by Imperial 4 to 1. **Top-Left:** Fujioka (Keio) heading a long kick by Hayashi. **Top-Right:** Takayama (Imperial) advances the ball to the middle of the field near the Keio goal. **Bottom:** Keio goal keeper blocks a shot by Nozawa.

S6-12-15

東西學生カレヂ蹴球に東大と關學優勝す

慶應の雄圖空しく東大に敗る

優れたプレイで巧みに試合を進めた東大
L・W藤岡をバツクに下げた慶應の誤算

高師　康夫

優勝への興味

帝か慶か、東京學生蹴球リーグ第一部の優勝への興味は十一月二十九日の帝慶の一戰にかかつてゐた前日降雨のためにグラウンドは滑り勝ちで各選手の苦心がありありと見える。

双方士つかず、慶應はこれまで四戰四勝、得點二十一點、卽ち一試合得點五點强、失點六點卽ち一試合一點半、ゴールゲツターとしてはCF市橋が四試合を通じて六點、卽ち總得點の二十八パーセント、LWの藤岡が五點で二十四パーセント、RIの吉本が三點で十四パーセントを示し、一方帝大は早大とまだ戰はないが三戰の間に十九點をあげ、失點は僅かに二點、卽ち一試合六點强の得點率を示し、FW中ではCF牛島の五點二十六パーセントとLI藤岡の四點二十一パーセントの兩君を中心に、出場者何れもよく得點してゐる。

慶大　吉長市津右松大岩藤塚纐谷
　　本川橋村近丸崎波岡越纐
　　F W　H B　F B　G K
　　中内手和高木野林竹田阿
東大　村藤島田山村津　内村部

慶應はFB岩崎の不慮の負傷から重大な支障を來し新人津村をRIに起用してLWとして又ゴールゲツターとして今日までの四戰に活躍してゐた藤岡をLFに下げた、攻擊精神にみちみちた藤岡の後退は、慶應としては已むを得ないことであつたかも知れないが徹頭徹尾攻勢に出なければならぬ慶應としては攻擊力を弱めることから來る缺陷は必勝を期するものゝ策戰としては稍心もとない感があつた、併しこれに對して帝大も同樣にLIとして活躍し來つた藤岡（これは慶應の藤岡の兄）を退けて內藤を入れ同君の器用な技を活用すべく陣容を定めた。

慶大一點を先取

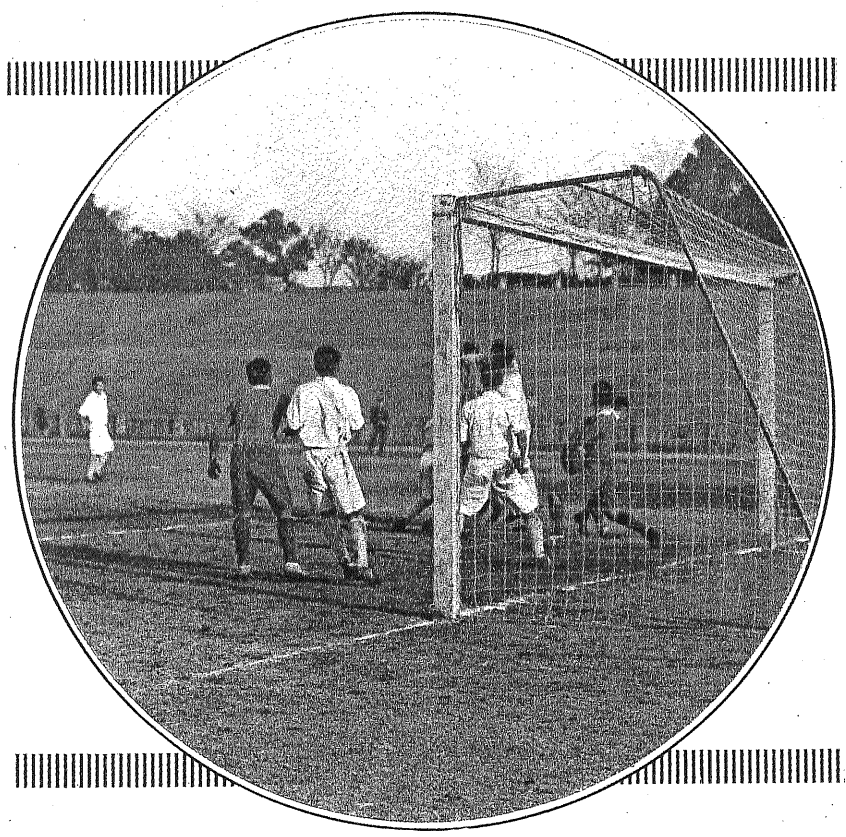
試合は午後二時半、帝大のキツクオフで開始されたその球はセンターサークルを出ない中に慶のCH大崎のために奪はれて慶應の進出となる慶は豫想以上の素早い出足をもつてゐる、帝大もこれに劣らずよく飛び込んで互に球の潰し合ひである、グラウンドが滑るのでこまかい技は兎角くづれて兩軍とも圓滑な氣をひく樣な聯絡は見られない帝大はGKに脆弱味を藏して一抹の不安がある、しかしHB線はよく左右の聯絡を持ち、FBとのバツクパスも過ぎると思ふ程にまで使ひながら、巧に慶應の鋭鋒をさける、五分程たつたとき慶のLH松丸はスローインにフアウルした、同君としては短軀を補ふための策ではあらうが右足を動かしたのはよくなかつた、むしろ右足はしつかり地につけて左足を自由に扱ふことにおいてより以上の效果がありはしないかと思はれた、既に十分試合は一進一退をつゞけてゐたが、突然スタンドはどよめいた、手島の强引なドリブルだ、パスすると見せながら引つかけて拔いて左よりからゴール直前に拔け出た、このときGK纐纈は手から先に手島の足もとに飛び込んだ、潰したと思つた次の瞬間ボールはふわつと浮いてフオローしたLI內藤のヘツデイングとなつた、アウト、慶應は助かつた、さうして逆襲、CKである、RW右近絕好の球をゴール右ポスト際に落す、GK阿部ジヤンプ、意外、空を突く、球は轉々としてゴールに入りスタンドは湧きかへつた。

東大力闘して同點

慶大氣をよくして頗る好調、しきりに帝大を引きまはすが、HB線のハーフライン前後約三十㍍の間の動作に不足があつて帝大を押し切るまでに至らない帝大バツクメンは、浮いた球、足もとの球を巧に引つかけて蹴つて、器用な足先のわざに若い慶FWを一瞬の差で押へる。二十分をすぎるころから帝大右翼が鋭鋒を現はして來る、二十二分、二十三分の帝大右CKは慶LF藤岡の果敢なヘツドに免れたが、二十四分RW高山の好パスはLI內藤、CF手島と渡つて手島足元の球を一廻轉しながら得意の地を這ふ速球に見事な得點、同點だ、この直後の慶應の强氣の攻擊は策戰としては至上のもので意氣の點でも見るべきものがあつたが帝大必死の防禦にあつて遂に空しくなつた、しかも帝大は更に機をうかゞひ洩れ球を帝大手島一氣に直進して慶應FB藤岡とせり合ひペナルテイライン邊で同時に倒れながら飛び出したGK纐纈の逆をついて例の速球、バツタリと倒れた纐纈の左手に球がピツタリとつく、快技だ。以後一進一退スローインの際における慶應のマークはがつちりして學ぶべき多くの點を示す。慶應やや進出した時にハーフタイム。

東大後の三點

ハーフタイムの五分間に兩軍の位置は一轉した、二分帝大はLWからのロングパスをRW高山取つてCF手島に送れば手島大きく足を開いたまゝ滑つて大崎のダツシュを一瞬の差で避けて得點、その後グラウンドに馴れた兩軍は前半に勝る好戰、慶GK纐纈しばしば美技を示して危機を救ふ。十七分慶市橋はよくゴール正面に押し出して强蹴したがキーパーの正面をつきはねかへつて眼前三尺に轉々したが市橋不覺にも倒れたまゝ起きず、あたらこの好機をバツクメンの掃蕩にまかす、二十二分ゴ



東京帝大對慶應大學蹴球試合の慶應ゴール前の混戰
A scramble in front of the Ke'o goal in the Ke'o-Tokyo Imperial game.

※ 右ページへつづく

S6-12-15

※左ページからつづく

ール正面三十伍に球を得た帝大CH野澤、一度球を押出して得意の强蹴は一線をひいてGK纐纈の手を下すひまもなくネットに入る、この時CH手島のチャーヂ早すぎてオフサイドの判定が下つて空し、この頃から慶のFWは次第にキックが不正確になり、聯絡がなく、絶望を思はせる三十五分慶應はLF藤岡をLWに出し松丸、吉本が一段下る、果然慶應は强氣に出で、FB線もハーフラインを遙かに越えて帝大を壓迫し强襲また强襲四十一分市橋、藤岡の好聯絡に進み、藤岡のチャーヂとなり、GK阿部辛くも止め、ゴールライン外へ投げ出して逃れる。直後帝大は逆襲して壘前にチャンスを得、バウンドする球を手島追へばGK纐纈誤つて倒れその隙をねらつた手島のシュート輕く、GK手をのべて彈けば球はふわりとRW高山の前へ出でそのシュートはカバーした塚越等の間を縫つて、ゴール右隅に入る、續いて四十四分、帝大は右CKからの球が壘前で混戰となるのをCF手島素早强蹴して四對一遂にタイムアツプとなる。

前回早大を擊破して覇權への大きな望みを抱いてゐた慶應は遂に帝大のため無殘にも蹂りんし去られた、グラウンドの泥濘はモーションの早いプレーヤーに取つては絶對的に有利となり少數選手の縱横の活躍を許した後半の高山のタッチに沿つての快走、CF手島の瞬間的好プレイと、RWへの決定的な好送球、アウトせぬバツクメンの前送球、勝つた帝大の美技のみが眼に殘る。之に對して慶應は力と頼む市橋は、前半野澤との數回の衝突から身體を痛めたが、意氣沮喪し、しばしば絶望的體勢を示してFW全體の指揮に事缺き、徒にGK阿部の意を安んぜしむる所となつたのは頗る遺憾であつた、唯、CH大崎が亂軍の間にあつて、低聲に叱咤して味方を鼓舞してゐたのは戰ふものゝ悲壯な意氣を傳へてゐた結果論にはなるがLWだつた藤岡を下げた事は、後半三十五分以後の戰跡に徵しても大なる誤算で、慶應のために深く惜まれる。

全體を通じて帝大は個人プレイに慶を壓し、機に應じて處置を誤らず、巧に試合を進め、幸運にも惠まれてこの大勝を得た慶應は個々の場合、即ちスローイン、ゴールキック、コーナーキック等の餘裕ある場合には よく好位を保つて訓練のよさを示してゐたが、選手の若さとその基礎技術の差は臨機の處置を缺き、加ふるにこれを補ふべき意氣に不足があつたためにこの結果を招來した。

由來學生蹴球は意氣であり、熱である。これを失つてはその試合價値は半減する。

更に一言するならば、當日の審判の三氏の間に連絡を缺き、主審がしばしばゴール後の非公式のゴールスマンに諮問してゐる所を見、或は、明らかに反則を見てゐるはずの審線が旗を振ることを躊躇するなどのあつたことは、選手間にハンド類似の行爲の多かつたことと共に遺憾であつた。

關西カレッヂ蹴球聯盟戰の覇權を獲得した關西學院チーム
Kwansei Gakuin association football team, champions of the Kansai intercollegiate association football league.

不撓の東大六度覇權を握る

掉尾の對早大戰に東大3——1で勝つ

全く鬪志を缺いた第三位の早大

島田　巽

リーグ掉尾の一戰

十二月五日東京蹴球カレッヂリーグの最終の一戰である帝早戰は好晴に惠まれて午後二時半より神宮競技場で行はれた。十一月二十九日の慶應との一戰に快勝して今シーズンもまた敗戰の味を知らずに四戰四勝して來た帝大と對一高戰に不覺にも引分となり更に慶應に敗れて二勝一敗一引分の戰績を持つ早大との對立は兩者間の覇權爭ひでもなく、既に早大のランキングにおける第三位が確定してゐるため、興味は果して帝大が六シーズン連續して蹴球界の王座を保ち得るか否かの一點にかゝつてゐた。

早慶戰の際の早大の實力から見て早大が帝大を破ることは豫想し得なかつたが昨シーズンの如く完全に豫想を裏切つて帝大を擊破したこともあり、毎シーズン帝大にとつて苦手の一戰であるために第三者には「もしや」といふ氣持が宿つてゐた。

けれども帝大は依然として强く慶應を最後の五分間で潰滅せしめたやうにこの日も早大に手痛い最後の一擊を與へてこのシーズンも遂に全勝の記錄を鮮かに殘した。

過去五シーズン連勝といふ傳統の重荷を負つた今年の帝大テイームに老成の色が見えはしまいかと思つた我々はかへつて早慶兩テイーム以上の新鮮さがみなぎつてゐたことを看取して驚かされたのであつた。戰術においてよりむしろその試合の進行振りに潑剌とした力のあつたことそして傳統の榮譽を護らうとするより、むしろ積極的に優勝への途を歩いたやうに思へる。

熱のない早大

この日はグラウンド・コンデイシヨン好く、唯可成り强い西北風が青年館側のゴールへまともに吹きつけ前半早大がこの風上に陣した。メムバーは兩軍共對慶應戰の通りである、ゲーム全體を通觀するとき興味は後半に至つてやつと生じ、前半の四十五分は之が帝大優勝の一歩前の戰ひかと思はれる程の熱のないゲームであつた。そして早大は戰はずして既に決定して居るリーグの第三位たる戰績に氣をくさらせてしまつて最早このゲームを得て、今シーズンの不振を補はんとするスピリットを捨てゝしまつたのではないかとさへ疑はざるを得なかつた。FWラインのタイムリーなエラーやGK熊井君の最初に許した一點のエラー或はバツクメンが味方の攻擊集中の際に凡失を行つて帝大FWの逆襲に遭ふなどは焦燥の結果よりも、この氣のない試合振りのために現れた缺陷であつたと考へられる。早大FWが、敵のペナルティエリア附近における好機に出足の遲いため、または惡ポジシヨンのために犯す凡失、その際の早大デイフエンス・ラインが洩れ球の處理を誤る等の過失は常に帝大FWの逆襲を受ける原因を作つて居た。

帝大FWのかういふ場合の逆襲には、全く優いスピードが見られて一度逆襲に移れば必ず味方のエリアから敵のゴールラインにまで五人がそろつて殺到する、この際の帝大兩ウイングの活躍、殊に高山君の持つスピードと强引さは賞讃に値するが、なほそれ以上にデイフエンス側にあつてよく球を敵のハーフバツクから奪ひ、攻擊の機會を作り出すCF手島君の努力と、その活動範圍の廣汎さは賞讃に値するものである。

活氣を帶びた後半

早大FW殊に前半の淺井君の如き、徒に機會の來るのを待つて、自ら機會を作り出さうとしないプレイ振りを飽足らなく感じた。早大FWはもつと球に執着を持つべきだ。簡單に球をあきらめる結果は、常に帝大バツク・メンに自由な活躍を許し、帝大FWの鋭い攻擊に苦しんでゐる味方のバツク・メンを一層奔命に疲らしめる結果を生んでゐた。

前半風上にありながら風を利用し得なかつた早大は後半に至つて見違へる程の活氣を呈し後半五分完全な機會をLI川本君のミス・シュートに潰したときからチーム全體の動きにスピードと同時に獨自の强引さが現れて遂に二十一分RW阿部君からのセンターリングを淺井君獨自のシュートに鮮にスコアーして一對一の同點となつてから以後三十八分再び帝大のリードとなるまで早大の各ラインは實に元氣に戰ひ殊にバツク・メンは好く送球しFWまた球について前半の不振を補つたが、何故この玉碎的な試合振りを最初から敢行しなかつたかと早大のため惜まれる。

兩軍の技巧

ゲームを通じてテクニツクはさすがに帝大がすぐれてゐた。殊に早大のヘツデイングの拙さは早慶戰の際にも非常に不利であつたがこのゲームに於ても常に帝大に球をとられ、またせり合つて效果なきため徒に敵がヘツデイングするのを見送つて拔かれるなど醜態であつた。また疑問だつたのは早大のスロウインで、從來スロウインに獨特の戰法を有し、しばしばゲームを有利に展開出來た早大がこのゲームでは實にあまりにも無雜作であつたことだ。スロウインの研究は割合に重大な問題ではないだらうか。最後に六度覇權を獲得した帝大軍の健鬪を祝福すると共に、この王座を目指し乍ら敗れ去つた慶大、早大の來シーズンにおける甦生を祈らう。

東大3 (1—0 / 2—1) 1早大

六大學蹴球成績
（×印分）

	帝	慶	早	一	農	明	勝
帝		1	1	1	1	1	5
慶	0		1	1	1	1	4
早	0	0		×	1	1	2
一	0	0	×		1	1	2
農	0	0	0	0		1	1
明	0	0	0	0	0		0
分	0	0	1	1	0	0	
敗	0	1	2	2	4	5	

覇權は再び京大から關學へ

攻擊を得意とする兩雄の興味ある對戰

京大掉尾の迫擊も關學の好守に阻まる

杉村　正三郎

京大陣容の重點

關西蹴球界の第一位を決定すべき京都帝大對關西學院戰に審判した目からこの試合につき何か書く樣にとの注文を受けたが夏以來殆んど試合を見る機會を得なかつたのでこの大試合を審判するにあたつては自分の注意力を總て各瞬間、瞬間のプレーにのみ傾倒してをりこの試合を批判的の眼を以て見るなどの餘裕は更になかつたのだから單に試合の經過を顧み、自分の受けた印象を書きつけて見ることにする。

京大は昨年積年の宿望を達して關西の覇權を掌握し餘勢をかつて東西對抗に臨んだが惜しくも長蛇を逸して以來その大黑柱として自他共に許したCHとして縱横無盡に活躍した西村主將を學窓から送らねばならなかつたことは多士儕々の京大と雖も本年度の陣容編成上に非常な苦痛を感じたことは想像にかたくない、これが對策として攻擊は最善の守備なりといふ鐵則に準據して、老練なるFWメンとして知られた一藤、永野兩君をHB線に下げて陣形を整へシーズンに入つては試合毎に壓倒的の勝利を獲得してゐた。

關學と京大の攻守

他方關學にあつても前年度FBとして常に味方をして後顧の憂なからしめ主將として奮鬪した門脇君を失ひそのバツクスに非常な缺陷を生じたのであるが然し攻擊の最前線には何等の變動を來たさなかつたため攻擊力は前年に比しますます强大となり守備の不安をある程度まで減殺し得て今シーズンこれまた無人の境を行くが如き好成績を示してゐたのである、かくして十一月二十九日この兩者は甲子園原頭に雌雄を決せんとした、攻擊は兩軍のともに得意とするところ如何に敵の鋭鋒をさけんとするか、これが我々の興味の中心であつた、今シーズン兩軍の成績を顧るに餘りにも壓倒的であつたが、こゝに注目に値する現象を認めた即ち京大にあつては實力において隔段の差がありながら殆んど例外なしに敵に一點を讓つてゐる事實である、これは明らかに守備構成の未完成を暴露し守備的結合の不足を暗示するに足るものと斷じ得べく關學にあつては對關大戰に餘り香しからぬ成績を殘しHB線に難なしとはいひ得ない、從つてこの兩者の對戰は攻勢に自信を有する兩軍の實力伯仲である以上HB線が如何に防戰するかその退退の可否巧拙がこのゲームを直接左右するのではあるまいかといふのが我々戰前の豫想であつた。

出足好調の京大

この日天候狀態は全く甲子園

※右ページへつづく

※ 左ページからつづく

S6-12-15

としては稀に見る無風の晴天であつたが、ただ殘念なことは前日の雨に禍されてスタンド寄り中央部邊は甚だしく濕潤にて選手の活動を非常にさまたげたことはこの晴れの試合に臨む兩軍のために全く同情に堪へない次第であつた、さて試合は京大北側を選び關學のキック・オフに開始された。京大は出足頗る好調で關學ウオーミングアツプ不足と見え敵に機先を制せられ全く自陣に防戰これ努むるの苦戰を嘗めそのバツクスは俄然混亂に陷り往々にしてゴール前の防禦に連絡を缺き、敵のマークを失してゐた。

七分、十一分再度京大の得點は明かにこれを裏書するものであつて關學バツクスが徒らにゴール直前に歸るに急いで相手方FWのマークを忘却してゐるのではないかとさへ考へられた。

特に十一分澤野君が右CKをなした際のバツクス殊に右側は各自のマークを全く放棄して前方に蹴り出され完全にフリーな位置にあるLW松江君に快蹴されて二點のリードを許すなど相當の痛手を受けた。

試合本格に入る

兎に角開始後約十七、八分間京大のFW及びHBはFBの長蹴援護のもとに好連絡を持しその攻撃的興味を十分に發揮し關學をして窮地に陷れたに反し關學バツクスはフ井ードの正確さなくFWは球の處置に窮して球は自陣を右往左往するの脅威を感じてゐた、二十分ごろに至つて關學FWは初めて平調に歸れるものの如くそのフツトワークパスワークは俄然正規あるものとなつた、二十一分、CF東浦RW赤田、LW島とスピーデイーなパスを見せて京大ゴール前に進み、LW島の强蹴、CF東浦LI西邑の機宜のゴールチヤーヂなどと相俟つて一點を還すに及んで關學はチームとしてのコンビネーションを喚び起し試合は一進一退の互角に立ち直つて勝敗の歸趨は全く逆睹し難くなつた。

こゝにおいて關學HBは漸く積極的となりいよいよ兩軍HB線の活躍は本格的となつたが、濕潤のため踏切り不良で出足は依然として一般に悪かつた。

二十九分關學は京大バツクの聯絡に厚味なきすきに乘じてLW島CF東浦と渡り東浦の機敏なシュートに同點とすれば關學益調子づき三十二分RW赤田稍低目の中央送球を呈せば京大FBのカバー遲く島簡單にゴールを得て三對二關學逆に一點をリードして前半を終る。

勢ひを得た關學

後半に入れば勢に乘つた關學一氣に攻め寄り二分後LI西邑のスルーパスをLW島受けむしろインポツシブルレシーヂとおぼしき角度より斜に得意のシュートを放てばGK奥野虚をつかれて抗しかねゴールカバーのRF小幡も稍逆氣味となり、ゴール前一尺のところで蹴返さんとしたが髣勢くづれ、反つて自滅の一點を獻じて終つた、あの場合バツクの心理狀態として思はず足を伸ばしたのだらうがFBとしては寧ろ球を見送つてゴールアウトせしめた方が得策ではなかつたか、あのやうな狀況は試合中屢次起ることである、FBサイドハーフは特に戒心を要し沈着にして敏速な判斷をなさねばならぬところと思ふ。

悲壯な京大の追擊

かくして京大は二點のリードをとられそのFWに甚だしき焦燥の色が見出したゝめ折角バツクより好條件のパスを受けても焦燥と逡巡のためこれを適當に處置することが出來なくなり關學バツクをして徒らに名をなさしめ前半とは反對に關學HBは積極的、京大HBは消極的となり概して關學優勢裡に試合を進めたが二十分を過ぎるころ兩軍漸く疲勞して戰況進まず三十分に至り京大元氣を恢復し屢次スパートして關學ゴールを脅かしたがFW、HBのシュート不正確にして決らず、或はオフサイドに絶好のチヤンスを逸するなど全く不運をかこつたがなほも良く最後まで悲壯の奮闘を續けてタイムアツプ直前LI伊藤のショツトはGK丹羽を過たしめゴール右隅を破つて四對三と追擊したが、時間盡き京大は無念に涙を呑んで退いた、かくて關學は幸運なる勝利を得名譽ある關西の覇權を獲得した、關學の戰勝を祝すると同時に最後の瞬間まで健闘した京大に對して滿腔の敬意を拂ふものである。

關學 4 (3—2, 1—1) 3 京大

京大		關學
松江	FW	島
伊藤	FW	西邑
中野	FW	東浦
澤野	FW	堺井
山口	FW	赤田
高木	HB	川西
永野	HB	三井
一藤	HB	石崎
小幡	FB	河部
武村	FB	伊藤
奥野	GK	丹羽

13	GK	31
9	CK	4
4	FK	5

關西カレツヂ蹴球を顧て

餘りにも淋しかつた今季の諸試合

順位は關學、京大、關大、大商大、工大

森　　糺

關西カレツヂ蹴球リーグ戰第一部の試合は十一月二十九日の關學京大戰を以つて本シーズンの幕を閉ぢた、今シーズンに對する私の感想は唯「餘りにも物淋しかつた」の一言につきる。

記錄上にもまた事實上にも接戰と目すべきものは ?—0 で關學の勝となつた關學—關大戰と優勝戰で關學が京大を破つた 4—3 の二試合を擧げ得る他、何れの試合も十點以上の得點の差を示し、又それに相應しいダルゲームに終始したのは何んといつても物足りない。

今年の關學チーム

本シーズンの覇權奪還に成功した關學チームはシーズン當初神宮球場における全日本地方對抗選手權大會において東大LBに破られ關西のフアンをして痛く失望せしめ次いで十一月七日の對關大戰において京大に大敗してゐる關大チームに對し2—0の大接戰を演じ祕に前途を危まれたが、それから後はとんとん調子を回復し病氣のRW赤田RF安部も出場する、人選難のRHはもとのRF川西を入れFW線は昨年通りの會心のメンバーとなりHBもFBも一段の確實味を加へ大阪商大を17—0で破つた邊りから關學亢進の聲が聞かれた。

優勝戰における關學の得點は全部が島、赤田の兩ウイングの働によるもので兩ウイングとCF東浦をウンと前へ出した深いW形の攻擊陣は關學として從來から取つてゐるロングパス・システムの戰法で京大HBサイドの不出來に乘じ猪突的の攻擊が京大GKのタイムリーな失策を伴ひ非常に效果的であつた、反對側のインナーから或はHBから大きくウングへ出すロングパスは正確なコントロールを持つて兩ウイングの快足と相應じ京大後陣の惑亂に成功したとはいへ壇野を中心とした昔日のセンタースリーの見事なコンビネーションを見出し得なかつたのは物足らなかつた、HBは力一杯の奮闘によくフイードに努めたがFBの守備に相當不確實な所を見せ、忌憚なくいはしむれば關學は昨年通りの關學であり弱くもなつて居らないが決してより新しい研究を積んだより完成したチームとなつたとも稱し得まい。

第二位京大チーム

京大が昨年度において連續數年關西の王座を占めた關學を破り餘勢を驅つて關東の覇者東大を死地に追込んだ目覺ましい戰跡は前衛センタースリーの巧緻なパスウワークで敵の第一防禦陣を破り適時に兩ウイングを驅使する方法いはゝばショートパスを基とする長短パスの併用により相當效果的に記錄されてゐた、勝負上では東大に敗れたが試合上ではむしろ得點の機會を四人のFWを以つて勝者以上に持つたものであつた、然るに本年の京大はHB線の充實を計りCF永野、LI一藤を下げてその跡を新人中野、伊藤を以つて埋めるの策に出た、兩新人はそのシュートの强さと自由さにおいてむしろ前人を凌ぐものがあり決して弱い選手ではないが、細い動きとパスウワークに未だしで昨年本チームが見せた見事なセンタースリーのコンビネーションは何れの試合にも見ることが出來なかつた、特に優勝戰においてはHB兩サイドよりのパスが極めて悪く中央の押不足は兩ウイングがマークされてゐなくされてゐた。戰法の誤りか運用する力の不足か、それとも餘りにたどたどしかつた優勝戰の働きはスランプの爲か、不運のつき纏つた後衛の致命的のミスは問はずとするも、眞に拙戰と評し得よう。

第三位の關大

第三位を得た關大こそ不思議なチームで春以來しばしば關大强しの風評を傳へられてをつたが最初の試合である十月十八日の對京大戰に15—1 の大敗を喫してフアンをして失望せしめた誠に慘澹たる戰で京大CF中野一人に十點近い得點を許した、中野は今日の處京大式の戰法には未熟な新人であり且極めて動きの足りないプレーヤーで寧ろ御し易い選手であるはずであるのに彼の强引一點張りのプレーと猛烈なシュートに眩惑され相當經驗ある關大CH並に兩FBは何等彼を封ずる策に出でず彼のなすが儘にまかしてゐるかに見えたのはどうしたものであらうか。

關大はかゝる無力なチームでないことは對關學戰において示した2—0の接戰振りでも判る通り互角の勢を以つて熱戰に終始した、たゞHB線の位置が餘りに防禦的消極的でFWに對するフオローに缺けてをつたためFWは非常に深いW字形を取りHBよりの球は例外なく兩インナーのみに有效にパスし得るに過ぎず、インナーが球を持つた時のFW三人の位置は餘りに前方にあるためその球は有效に使ひ得なかつた場合が多く見受けられた、從つて全FW線の一齊的突進、スピードに本づく壓力のある攻擊を加へ得なかつたのが敗因ではなからうか。

この日の關學FWはRWに堺井、RIに新井武井を用ひたが關大懸命の防禦に得意のウイングを封ぜられ、且右側攻擊線の不振に僅に二點をスコアーし得たに過ぎなかつた、關大はその戰跡の示す通り關學、京大に一籌を輸するは止むを得ぬ所で各メンバーの有する個人的力を如何に有機的に結合するかを更に研究せらるゝならば來シーズンの活躍を期待し得よう。

大阪商大と工大

大阪商大は關學、京大、關大の三チームに何れも十點以上の差をもつて敗けてゐるが忌憚の無い所このチームはプレーヤーに惠まれて居らないCH田邊一人の奮闘も報いられる所の無かつたのも是非も無い、チームの氣品において意氣において必ずしも足らずとはせぬが、技倆の未熟を如何にせんである。

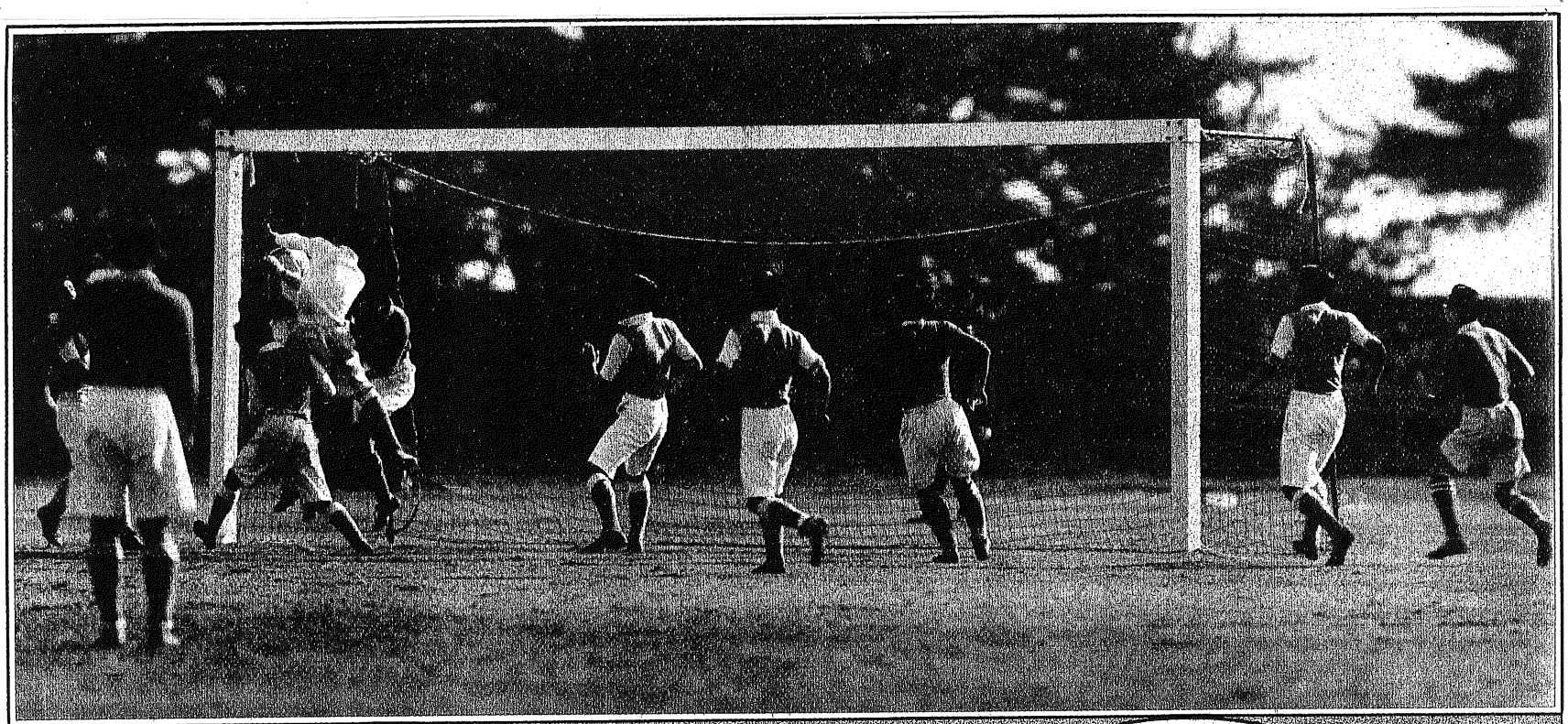
最後に大阪工大はシーズン開始前全部の試合を、神戸商大は對關學、對商大の二試合を棄權した、兩校共專門學校より昇格し特に工大は來年度から大阪帝大に編入される等目下過渡期にあるためやむを得ない事情があつた事とは思ふが、關西蹴球界のため、かつ學生聯盟のため殘念なことである。

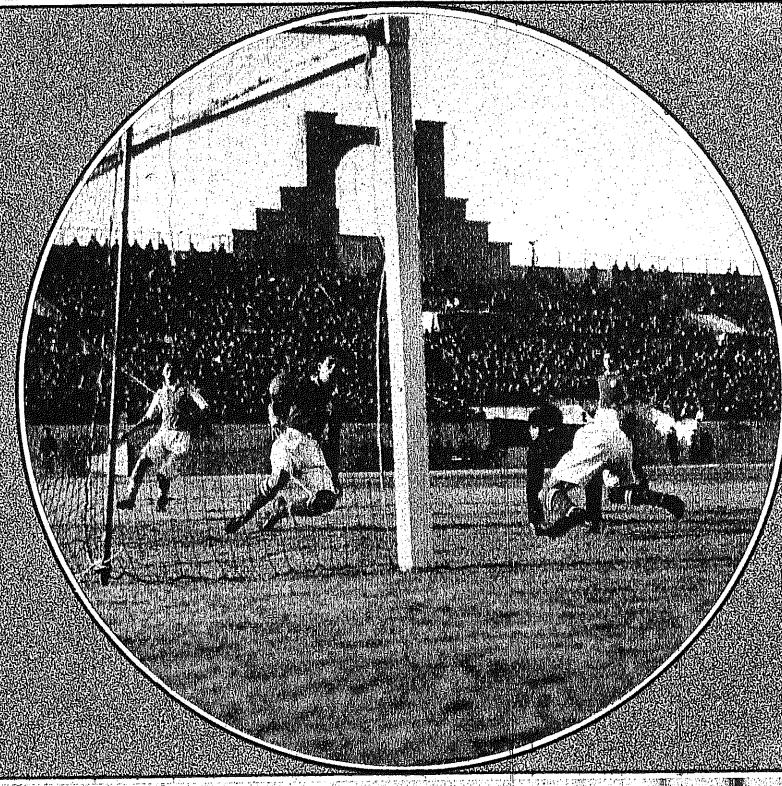
素より本リーグ所屬のチームは學校チームであり、スポーツオンリーの生活をして居る譯では無い以上學校を原因とする諸種の故障は不可避的に起つて來るかもしれない、從つてこれ等の棄權に對しチーム自體を責むるのは或は酷であるかも知れぬしかし原因の如何を問はず結果として相手チームの豫定を狂はせ、リーグ戰全體の圓滿なる進行を害し、試合に對する興味を損じ延いて蹴球技の普及發達に至大の影響を及ぼす如きは遺憾である、特に試合當日に至り棄權を申出づるが如きは相手チーム或は役員或は觀衆に迷惑を與へること甚だしい、スポーツ道德の上よりいふもまた蹴球技の對する關西學生聯盟の指導的地位よりいふも切に反省を促したい。

本年度成績

	關學	京大	關大	大商大	神大	工大	勝	敗
關學							五	0
京大	0						四	1
關大	0	0					三	2
大商大	0	0	0				二	3
神大	0	0	0	0			一	4
工大	0	0	0	0	0		〇	5

S6 - 12 - 15





關西學院對京都帝大の蹴球試合は十一月二十九日甲子園で行はれ4對3で關學が勝つた(上圖)前半京大のフオアワードが猛襲してゐるところ(中左)後半京大のゴールキーパーが球を叩き返したところ(中右)後半關學島君の送球を京大小幡君が蹴り返さんとして自陣へゴール・インしたところ(下圖)後半關學の石井君が敵ゴールに球をキツクせんとするところ

Kansei Gakuin-Kyoto Imperial association football game, Koshien, November 29, won by Kansei Gakuin, 4 to 3. **Top**: Imperial forwards running the ball down the field in the first half. **Center-Left**: Imperial goal keeper knocking the ball away from his goal in the second half. **Center-Right**: Obata (Imperials) sends the ball into his own goal in trying to return a kick from Shima (Gakuin) in the second half. **Bottom**: Ishii (Gakuin) about to kick the ball into the goal in the second half.